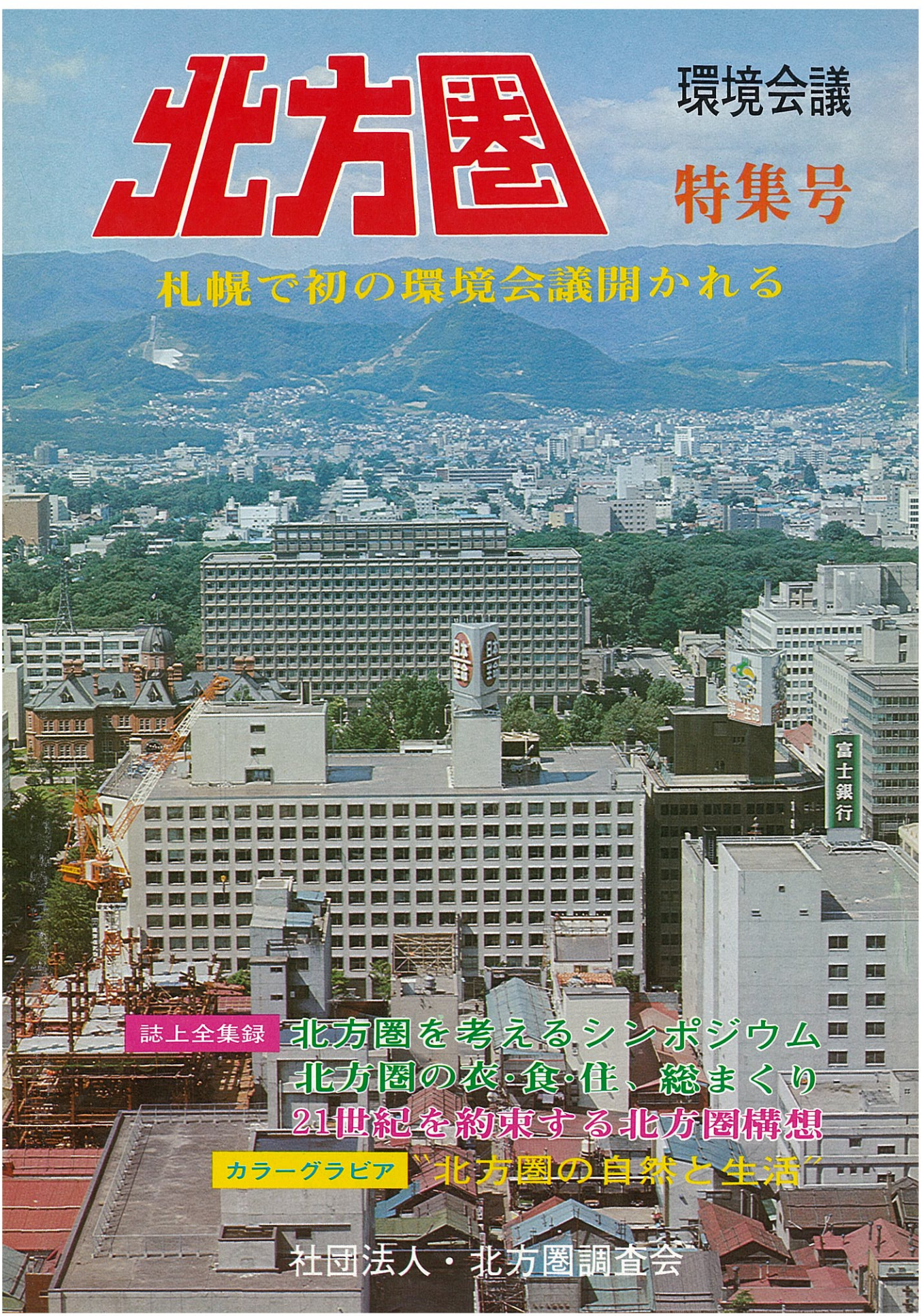
# 北方圏

環境会議

特集号

## 札幌で初の環境会議開かれる

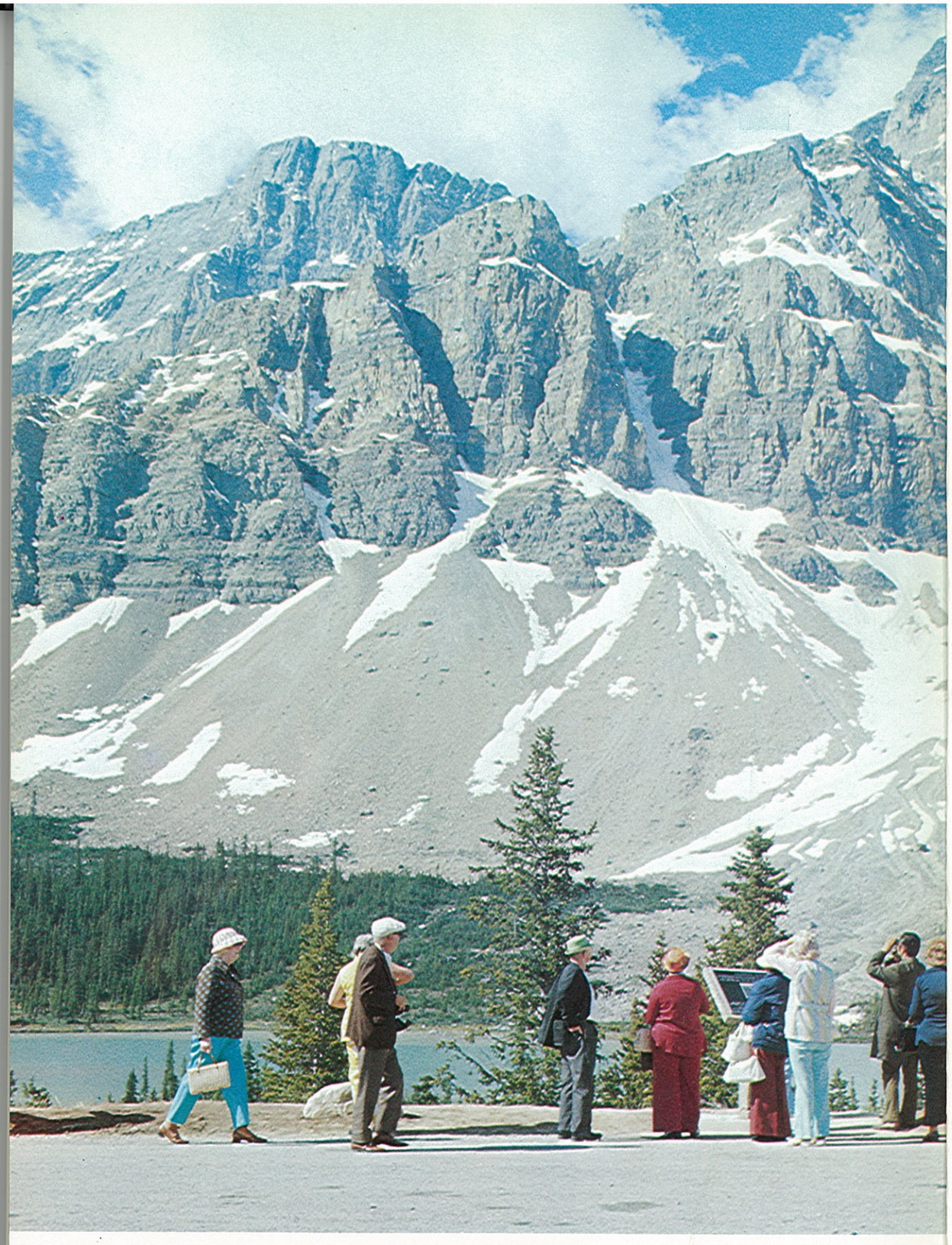



誌上全集録

北方圏を考えるシンポジウム
北方圏の衣・食・住、総まくり
21世紀を約束する北方圏構想

カラーグラビア "北方圏の自然と生活"

社団法人・北方圏調査会



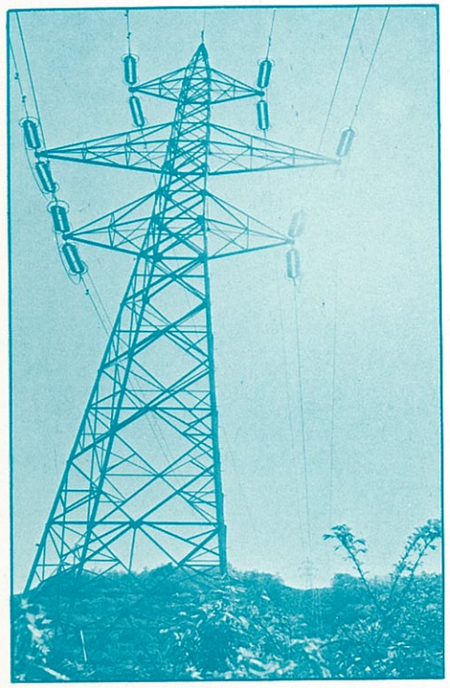
## 北方圏の自然と生活

自然美のすばらしいカナディアン・ロッキー。どこもアメリカ人など観光客で大にぎわいだった


北方圏

みなさまとともに電力の長期安定を考える

# 道内に張りめぐらされた高圧線。真っすぐのばすと、バンコクまで届きます。



道内に張りめぐらされた高圧線。真っすぐのばすと、バンコクまで届きます。

野山を走る高圧線。正しくは送電線と呼びますが、その長さは約6,500km。なんと、札幌からタイの首都バンコクまでの距離にあたります。




僻地の多い北海道。広い割に電力需要が少ないために、一軒あたりの送電線の長さも、本州などに比べて2倍以上もかかっています。ですから、その設備費や保守管理費が、本州に比べ2倍かかるわけです。

毎日を不安なく暮すため、電力の長期安定がどうしても必要です。このようなハンディキャップを、どう克服していくか、みなさまとともに考えてまいりたいと思います。

北海道電力




バンフにはヒッチハイクやバイクの若者があふれていた




ジャスパーのカナダ国鉄CNRの駅前



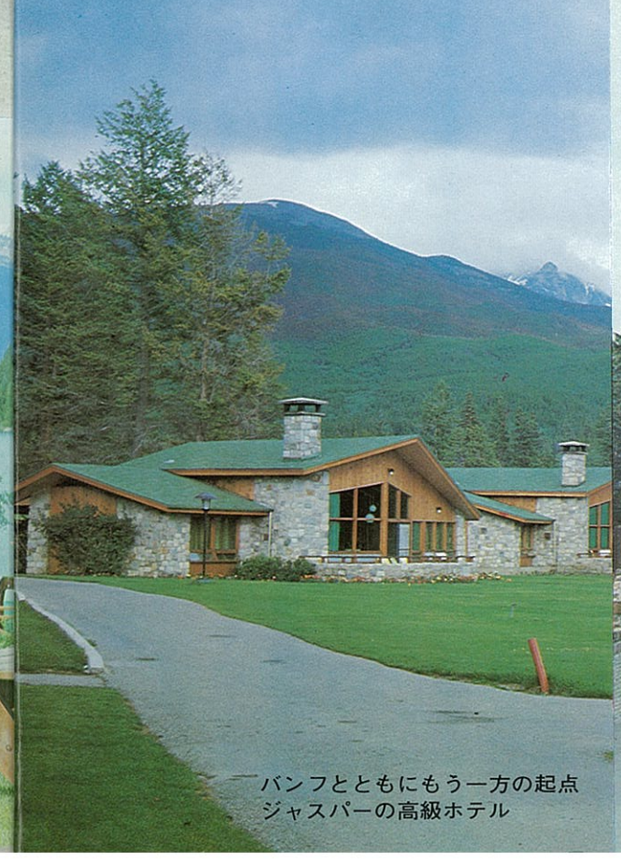
コロンビア氷原で雪上車に乗り込む観光客



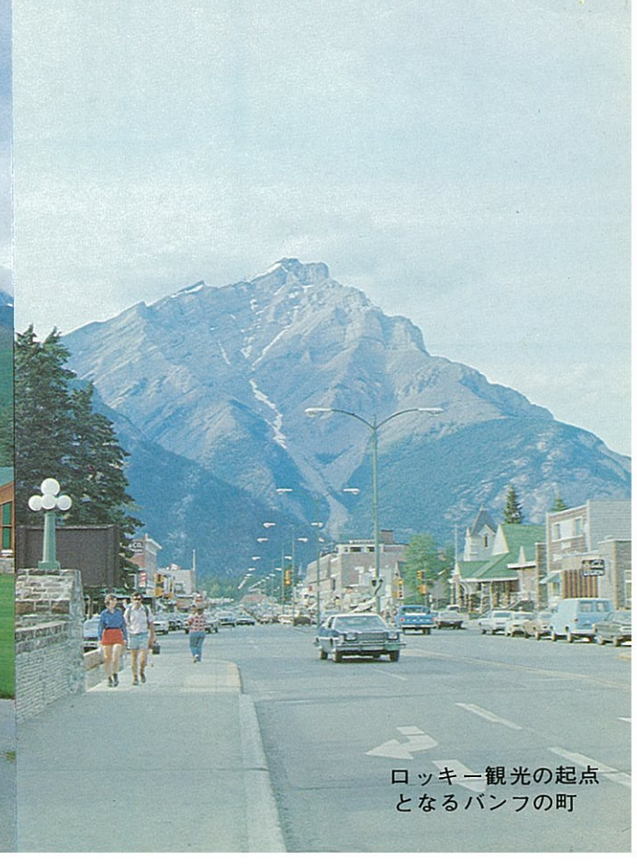
エメラルド色の水をたたえたペイトー湖



ジャスパーでガイドの説明を聞くアメリカ人観光客



バンフとともにもう一方の起点ジャスパーの高級ホテル



ロッキー観光の起点となるバンフの町



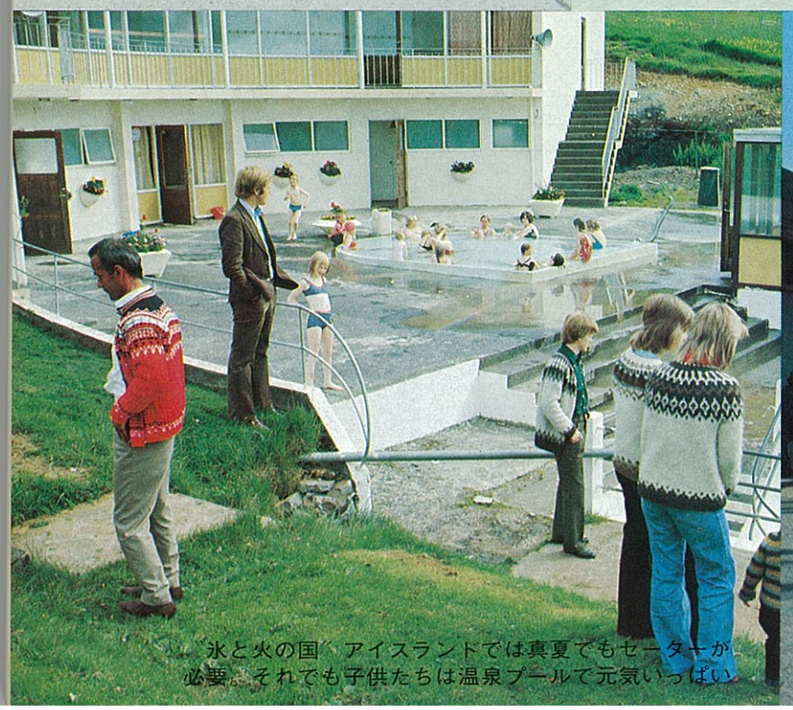
出店が並ぶオタワのコンフェデレーション広場



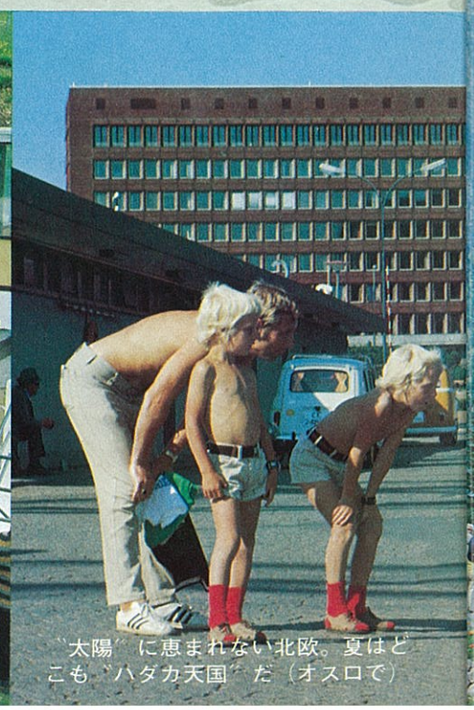
公園で日光浴をするポートランドの市民



絵のような風景の中で絵の個展



氷と火の国アイスランドでは真夏でもセーターが必要。それでも子供たちは温泉プールで元気いっぱい



太陽に恵まれない北欧。夏はどこもハダカ天国だ（オスロで）



ロッキーの宝石といわれるレーク・ルイーズ



ポートランドのバラ園




レーク・ルイーズに建つホテル。サンス風の美しいホテル




開拓時代を再現するお祭り
にぎわうバンクーバー市



オタワ国会議事堂前で繰り広げられる衛兵交替



市民も色とりどりのコスチュームを楽しむ



ポートランド市のビル街につくられた水浴び場。子供たちでいっぱいだ

# 北方圏環境会議に想う

北海道知事
北方圏調査会会長
堂垣内尚弘



わが国の国際交流は、近年ますます拡大し、活発化しています。北海道でもこの国際化時代に対応するため、第三期総合開発計画の中で、国際的な視野のもとに、本道の開発の促進と道民生活の向上を目ざし、北方圏諸国との交流を積極的に推進しています。

今年はその一環として、類似した自然環境の北方圏諸国と共通する環境上のさまざまな問題について、意見や情報を交換し、さらに相互の理解を深めるため「北方圏環境会議」を九月十七日から三日間にわたって、札幌で開催することになりました。

北海道は気候風土の面においても、また開発の進度という面から考えても、本州とは異なった多くの側面を持っています。一方、北方圏諸国は豊富な天然資源と広大な未開発地をかかえた地域であり、積雪寒冷の克服、環境と開発との調和問題など、本道と共通する多くの環境問題をかかえています。

一九七二年六月、スウェーデンのストックホルムで開かれた「国連人間環境会議」は、人類が初めて世界的な視野で環境保全問題と取り組んだ画期的なものでしたが、類似する気候風土のもとに、共通の問題をかかえた地域による個別的、地域的な会議の必要性に対する認識も高まっています。

このような観点から、北方圏諸国の自治体首長が一堂に集まり、環境上の諸問題について討議することは大きな意義があると確信し、環境会議の開催を決意したわけです。また、この会議の開催を機会に、北方圏諸国の実情を紹介、認識と理解を深め、親善交流の輪をさらに—をサブテーマとし、ホワイト・サークルにメーンテーマを、グリーン・サークルにサブテーマを展示し、遊びの広場をイエロー・サークルとし、おのおのの特徴を活かしたものを考えています。

写真やスライドやおどりやファッションなど視覚に訴えるもの、ナレーションや音楽など耳で聞くものなどで、心にふれ、肌に感じるような展示を企画し、いま実行委員会を中心に、努力を続けております。

また在外大、公使館、各国友好協会などの協力で歌や民族舞踊や民族芸能によるナショナルデーも予定されるなど、北方圏の国々の生活と環境が、見る人にいきいきと伝わってくるような盛大で、楽しく、活気あふれたものになると思います。

この環境会議および生活環境展の開催を契機に、よりよい環境の創造を目ざした道民運動が展開されることを期待するとともに、北方圏交流の拠点としての本道の地位を確固たるものにしていきたいと考えていますので、広く道民の環境会議、生活環境展へご協力をお願いする次第です。

広げていくため、広く道民の参加を得た「北方圏生活環境展」も開催することにしています。

この生活環境展は九月十四日から二十九日まで札幌市・東月寒の道立産業共進会場で開かれます。

メーンテーマの「北方圏—輝く未来へ」を中心に——より豊かな自然の中で——より豊かな心をもって——より豊かな生活のため



サーキット族はヨーロッパでも、ストックホルムからオスロまで若者たちがかけつけている



シアトルの港に近いパイク・プレースマーケット



"資源の宝庫"シベリアは"自然の宝庫" 早朝バイカル湖から飲み水をくみ上げる老人



オタワの歩行者天国、スパークイ通り。街路樹も見事だ

# 環境会議 特集号




第一部　札幌で開かれる初の環境会議
北方圏環境会議に想う……堂垣内尚弘……9
豊かな北方圏の英知を集めて
くらしに活かす北国の風土〈四つのテーマで〉
参加州、市の素顔……12
三年間の交流活動もみごとに開花……14
21世紀を約束する北方圏構想　スタッフ座談会……22
第二部　北方圏を考えるシンポジウム
自然を活かし自然に生きるモラル……高桑栄松……28
中央依存から脱却せよ……梅棹忠夫……51
私たちの北方圏　豊かな生活のために
自然環境論の立場から……樋口敬二……17
文化人類学の立場から……黒田信一郎……35
南北対比の立場から……中野美代子……59
司会……関　清秀……63
寒さとおしゃれ……石津謙介……58
寒さにまけない栄養学……黒島晨汎……68
暖かい冬のすまい……飯田勝幸……78
北国の自然とレジャー……千家哲麿……80
司会……斎藤恒行……86
豊かな自然の中で
開発と自然の接点……芳賀良一……89
緑の街づくり……横山光雄……96
水と産業……富山和子……99
司会……天間征……103
第三部　北方圏の風土とくらし
育てようニューモード……中村乃武夫……109
ドライフラワーの色調を……長屋美代……116
お料理も技術交流で……上田篤……119
親しみやすいロシア料理……上野栄……120
寒地住宅、機能性、経済性を学ぼう……122
冬でも人の集まる空間を……124
居間中心に北海道らしさ……129
北方圏のスポーツ、競技より自然と対話……130
死者蘇る？薬用植物……132
無数の珍獣や海獣……134
運動の中で思案する北欧人……135
座談会　新しい伝統へ貴重な自然を生かし
私の一番好きなアラスカ……綾　東良三……136
雄大で魅力あふれるカナダ……島本融……138
ラップランドの旅……高倉新一郎……142
北・東欧の自然と生活—みたまま……沢田誠一……145
森と湖の国・北欧……松坂有祐……146


グラビアのページ


《カラー》北方圏の自然と生活……1
（カメラ・島田康弘）
ソ連の自然と農村……53
（カメラ・横川寛二）
オホーツクのオットセイ……111
（カメラ・佐藤正）




（イラスト・岡本竜紀）

# 英知集めて

## 初の環境会議

## 5カ国18地域から参加



初の国際会議を迎える札幌市。
会場になる札幌パークホテル





# 豊かな北方圏

HOPPOKEN'74

## 17日から札幌で

北海道の最も美しい季節、九月。秋空のすがすがしい札幌に北半球の主要国の地域代表が続々集まって来る。道の主催で開かれる初の国際会議、北方圏環境会議が開かれるのだ。

道の招請に応えて参加するのは、アメリカがアラスカ州、ワシントン州、オレゴン州、アイダホ州、モンタナ州、北ダコタ州、ミネソタ州、ウィスコンシン州の八州。カナダはブリティッシュ・コロンビア州、アルバータ州、サスカチワン州、マニトバ州、オンタリオ州、ノバスコシア州、ニューブランズウィック州の七州でそれぞれの州代表が姿を見せる。それに北欧三国、スウェーデンのストック・ホルム市、ノルウェーのオスロ市、フィンランドのヘルシンキ市の三市長もゲストとして出席、全部で夫人を含めて五十六人。日本側を含め、百五十人からなる国際会議。一地方自治体が単独で実現させる前例のない会議だが、関係諸国の関心は高く、一九七二年の冬季オリンピックに続いて〝サッポロ〟の名は、再び、海外に飛ぶ。

会議場は札幌パークホテル。十七日の開会式では、あいさつに立つ主催者の堂垣内知事が気候風土が似ている北方圏諸国の相互理解の必要性を強調する。会議の成果にも自信ありげだ。

北方圏環境会議は、類似した自然環境に住む人たちが住みよい生活環境をつくるため、その持てる高度な技術と豊かな経験、それに英知を集めて話し合う。

寒冷という厳しい自然条件と闘いながら寒地住宅、暖房方式、除雪など社会生活環境の改善にどんな手を打っているか。各地域代表が永い伝統のもとで築きあげた技術や新しく開発した技術、さらには生活のチエなどが、たっぷり発表される。また、各国が直面している自然保護の問題も具体例が報告され、環境と開発の調和問題についても活発な意見が交換される。

会議場に流れる日、英両国語の同時通訳。十八、十九の両日にわたる円卓会議では、真剣な意見交換が続く。世界環境会議で見られたような複雑な地域エゴもなく、情報、意見の交流はスムーズに行われる。とくに、百年の歴史しかない北海道にとっては学ぶべき点が多く、収穫ははかりしれないほど大きい。

会議の中から生まれた共通の確認事項と合意。北海道宣言が会議を締めくくる。

北海道の第三期総合開発計画に盛られた北方圏構想は、道内の各都市でもそれぞれの立場で交流が進められており、着々と成果をあげている。道民の目も日本の中の北海道から北方圏の中での北海道へと広がっていく。北方圏環境会議は、北方圏交流のひとつのエポックを画することは間違いない。〝北方圏発展時代〟への幕開けでもある。

# くらしに活かす北国の風土

## 百五十人の円卓会議

〝くらしに活かす北国の風土〟――北海道の呼びかけで、九月十七日から三日間、札幌で開催される国際会議、北方圏環境会議のサブタイトルだ。寒冷地の国同士がかかえる共通のテーマへの関心は日増しに高まり、道が招請状を送った、北米各州、カナダ七州、北欧三国の首都など合計十九地域からは相つぎ〝参加OK〟の返答が寄せられている。

参加者は、これら招請自治体の首長と夫人、随員各一人など。参加国の駐日大使、総領事、領事、名誉領事および国内の関係者で合計五十六人。このほか日本側はオブザーバーの東北、北陸各県知事、北方圏環境会議推進会議のメンバー、道内市町村長など百五十人にのぼる予定だ。

環境会議のテーマとして、道は①人間居住の環境問題②自然の保護・保全問題③環境と開発の調和問題④環境問題に対する情報活動、の四つを掲げている。

しかし、公害などの狭い意味での環境問題ばかりではなく、美しい自然と豊かな生活を築き上げるための幅広い問題を取り上げることにしている。

## 具体的な例レポート

第一テーマの「人間居住の環境問題」では、厳しい自然条件下における社会生活環境の現状や改善対策が話し合われ、具体的には寒冷地住宅のあり方、暖房方式、除雪対策、上下水道やゴミ処理の公衆衛生問題、さらには交通運輸システムから公園緑地や区画整理など都市工学や都市政策上の広範な問題についてアプローチすることになる。

第二テーマの「自然の保護・保全問題」では、自然の恒久的保護と復元が中心。森林、湿原、野生動植物など各国が直面している問題について現状と対策が報告され、将来の方向について意見が交換される。

第三テーマは「環境と開発の調和問題」。資源の生産や輸送、利用など開発に伴う環境変化が議題となり、当然、大気汚染、水質汚濁などの公害問題も含まれてくる。このテーマは道内でもさまざまなところで問題化しており、先進国がどのような対策を講じているか、道民の関心も高い。

第四テーマは「環境問題に対する情報活動」で、研究体制、広報活動、情報交換体制などが討議され、研究者の相互派遣など具体案の実現も期待される。

会議では、各代表がそれぞれの地域の特徴的なテーマを選び、具体例に基づいたレポートを発表することになっている。これまでのところ、相手方に対しては「四つのテーマの中で関心の深いものについて発表してほしい」としか伝えていないため、テーマが偏る心配もあり、調整を急いでいる。一応の事務局素案をつくって、各地域の意向を打診、内容が決まったら事前に発表レポートを送ってもらうことにしている。

## 注目される道の姿勢

問題はホスト役の道知事の発表レポートだが、基本原則として四つのテーマを網らした内容にすることが決まり、ほぼ原案が出来上った。レポート発表の持ち時間は、外国代表が一地域につき二十分なのに対し、道知事は主催者ということで二倍の四十分。内容のいかんによっては、ホスト役の真価が問われるわけで、テーマの重点を何に置くか、具体的な





報告例をどこに求めるか――など、さまざまな面から環境問題に対する道の基本姿勢が出席者の注視を浴びそうだ。

会議は分科会方式はとらず、全体会議とし、使用国語は日本語、英語の二ヵ国語を予定している。

## 各国とも専門家派遣

これまでに知事自らが出席すると言ってきたのは、アメリカのモンタナ、北ダコタ、ワシントンの三州。オレゴン州のトム・マッコール知事は、「この会議は全世界にかかわる重要なテーマを持つものであり、今後のよりよき世界を目指す勧告が生まれてくると確信する」と、期待感にあれれたメッセージを寄せている。

このほか米国では、州知事補佐官を派遣する州が目立ち、北海道と交流面では最も実績のあるアラスカ州は、前経済開発局次長で、ごく最近、パイプライン委員長に就任したジョン・R・ワーナー氏を送り込んでくる。

カナダでは、環境問題担当の責任者が多い。アルバータ州は環境大臣、ブリティッシュ・コロンビア州は土地森林水資源大臣、マニトバ州は鉱山資源環境大臣を派遣する。またニュー・ブランズウィック州は漁業、環境大臣、オンタリオ、ノバ・スコチア州、サスカチワン州は各環境大臣が、それぞれ出席する予定になっている。

北欧関係は、ヘルシンキ市とオスロ市長、ストックホルム市は中央行政庁委員長。

## 「貴重な会議」と重要視

モンタナ州知事のトマス・L・ジャッジ氏は「われわれは、ぜひこの会議に参加したい。米モンタナ州と北海道の類似性、州の人間環境の分野でわれわれがなし遂げた成果――これらのことによって、今度の会議に大きく寄与できると確信する」またヘルシンキ市長のT・アウラ氏は「この会議が取り組む環境問題は、大変重要で注目すべきテーマである。最近ヨーロッパの各種会議でも、これらの諸問題が論議され、またその重要性は、より人間的な都市計画をつくろうという作業の中で明りょうに認識されつつある」というメッセージを、それぞれ寄せている。

# 北方圏生活環境展も

9月14日から29日まで

―北方圏―輝く未来へ

北方圏環境会議と密接な関係をもち、会議を盛りあげる意味で開かれる北方圏生活環境展は、会議開催に先立って九月十四日から二十九日まで、札幌市月寒・北海道立産業共進会場に、花々しく幕をあける。

参加国との交流を基本に、その友好と親善を目指し、北方圏の人間環境の調和を強調するとともに、道民に対し環境会議を理解してもらおうというのがネライ。

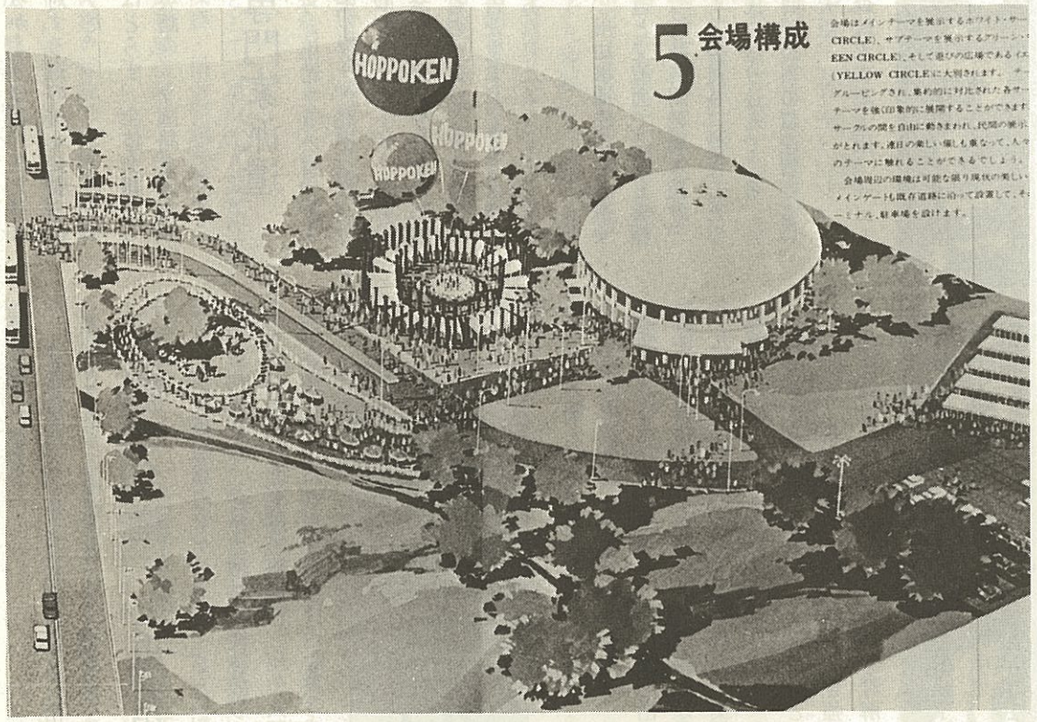
会場はメーンテーマ館のホワイトサークル、サブテーマ館（より豊かな自然の中で、より豊かな生活のために）のグリーンサークル、そしてあそびの広場のイエローサークルの三つの構成からなっている。以下、館内を案内しよう。

### 〔ホワイトサークル〕

各国国旗のひるがえる会場、ローカル色豊かなコスチュームを着たコンパニオンが案内してくれる。入口の左右には北国の自然を写真パネルで展開し、北方圏へのアプローチを高める。

一番先に目に飛びこむのはアラスカ産の「まぼろしのトナカイ」そして北国の民族衣装、大きなホッキョクグマの毛皮等々が展示

# アラスカの氷河（5トン）を空輸




北方圏生活環境展の会場構成

されている。なかでも圧巻は「アラスカの氷」である。二階から見おろす白いベールの空間に氷が光っている。重量五トン、体重五～七立方メートルの大きなもの。アラスカで八月二十五日採取、アンカレッジから羽田まで空輸、特別仕立てで、札幌に到着したばかりである。

さらに北国の古い楽器、古いロシアのバイオリン、銀色のトランペットなど。また、各国の地下から掘出された鉱石、原石その他の資源が展示され、先住民族が使った道具類もある。その他体長九・七メートル、尾びれの幅二・四メートルのクジラのはく製も珍らしい。

このほか公害をテーマとした、世界のグラフィックデザイナーによるポスター展のコンテストNo.1をはじめ、三十四点が展示される。

## 〔グリーンサークル〕

トド松二百五十本が青く澄んだ空にそびえ立っている。バイキングがその昔城を築いた土地の風景である。

中央広場は緑の芝生を敷きつめ、そのまん中にシラカバの丸太を素材にしたオブジェがシンボリックに立っている。

## 〔イエローサークル〕

ミニSLが煙をはいて走る。その隣りに身長五メートルもあるヌー坊が愛敬をふりまく。ほかに子供のための、あそびがいっぱいだ。





# 三年間の交流活動 みごと開花

# 経済、文化、スポーツ三

「これからは北の時代だ」――道や北方圏調査会が三年前から声高らかにうたい上げてきた北方圏交流は、いま見事な花を咲かせようとしている。経済、文化、学術とあらゆる部門での交流は日一日と積み重なり九月十七日からは、北方圏十五の代表が札幌につどい、初の国際環境会議を開くにいたった。この成果をステップに交流の輪はさらに大きく広がろうとしている。北方圏交流のあしたは明るくバラ色に輝いている。

〝北方圏〟という言葉が、道内で使われるようになってから、もう七、八年にもなるが、公式に使われるようになったのは三年前の昭和四十六年四月。第三期北海道総合開発計画がスタートしたときからである。同計画には「北海道は地理的にも北方圏に近く、気候、風土も似ている。この有利性を活かして北方圏の開発に必要な技術や資材の輸出拠点となり、また豊富な北方圏の資源を利用する工業基地、さらに文化交流の拠点とする」とうたわれ、北海道が北方圏諸国との交流の核になることが強調された。ばく然とした感じで使われてきた北方圏という言葉が、初めて道の長期計画に登場、いわばはっきり認知された形となった。

## まず北方圏調査会スタート

三期計画へのデビューと足並みを合わせるかのように、毎日新聞は四十五年夏から、いち早く「北海道の明るいあしたは北方圏諸国との交流の拠点になることだ」と主唱、その交流のための調査研究、友好親善、経済、文化交流促進のための機関を設立する準備を進めていた。この試みには外務省、開発庁はじめ道、道内市町村、有力企業、団体も心から賛同、四十六年四月には、社団法人としての北方圏調査会が生まれた。会長には同年初当選した堂垣内尚弘・道知事、副会長には渡辺善一郎・毎日新聞北海道代表取締役が選ばれた。

三期計画で認知された北方圏交流は四十六年から目立った動きを始めた。まず、北方圏調査会はスタートと同時に、北方圏諸国の事情や国際情勢の動きをよく道民に知ってもらうための時局講演会を毎月開催、九月十六日からは、第一回の経済文化視察団をソ連シベリア・極東地方へ派遣した。この視察団は本間道商工部次長が団長になり道議会議員、市町村幹部職員、企業経営者ら十七人が参加、ナホトカ、ハバロフスク、イルクーツク、ブラーツクなどのシベリア極東主要都市をめぐり、現地の代表者らと交流を深めるとともに見聞を広めた。

## アンカレジで北海道物産展

北海道と距離的に近いシベリア・極東との交流もさることながら、アメリカ最北の州、アラスカとの交流は、同じ自由主義経済の国同士ということで、経済交流を中心に以前から活発だった。それが、北方圏交流の掛声にのっていっそうにぎやかになった。昭和四十五年九月六日には、那須正信・道副知事（現、道信用保証協会理事長）を団長にした経済視察団がアラスカを訪れており、ここで話し合われた成果が、翌四十六年九月二十二日、アンカレジで初の北海道物産展という形で実っ

た。道の単独物産展としては初の海外展で、北海道特産のスキー、ゴムぐつ、海産物などが会場を飾り大いに人気を集めた。このあと、アラスカ州側からは答礼の意味もこめて、アンダーソン州商業会議所会頭を団長にした経済貿易使節団十三人が北海道を訪れ、今後の経済交流促進を約束し合った。

さらに、翌四十七年九月、堂垣内知事を団長にした北海道経済文化視察団四十一人が、アラスカを訪れたときは、同商業会議所も心から歓迎、北海道商工会議所連合会との姉妹会議所への縁結びの意向のあることをほのめかし、翌四十八年四月には、これが実り、全国でも珍しい両所間に姉妹会議所のちぎりが結ばれた。この調印には、道商連側から木村円吉・道商連副会頭(当時)と佐藤健二・札商副会頭がアラスカへ出かけ、温かい歓迎の中で〝親類づきあい〟の確認がなされた。

## 堂垣内知事が環境会議提唱

これで、アラスカ州と北海道との関係は、四十三年六月に結ばれた千歳市とアンカレジ、同年三月の帯広市とセワードの各姉妹都市とともに、地方自治体と経済団体を合わせた太いパイプでつながった。このほか、道内企業や水産団体は独自にアラスカ経済との交流を重ね、現地に出先機関を設けたり、アラスカパルプのような現地法人の工場も建てている。

四十七年になると道の北方圏構想の具体化計画が走り出す。五月には道庁内、開発調整部内に北方圏調査室が誕生、都道府県としては異色の機構として注目を浴びるとともに、北方圏交流に意欲を燃やす道の窓口としての存在価値を内外に示した。

堂垣内知事は、この年秋自ら団長になり、道内の経済、文化、スポーツ界の代表四十一人をよりすぐり三週間にわたり、カナダ、アメリカをめぐった。副団長に杉本栄一・道議会議長(当時)山口正直・砂川市長、佐藤貢・道物産振興会会長、浜森政雄・道漁連会長(故人)田上義也・道国際文化協会会長、佐藤健二・札商副会頭という豪華な幹部の顔ぶれのほか各界代表がズラリと顔をそろえた。アメリカはアラスカ州が中心で、あとは初めてカナダのバンクーバー、エドモントン、トロント、モントリオール、オタワの主要都市をめぐった。

ここで、堂垣内知事は「四十九年の秋、札幌で同じような寒冷地にあり、同じ悩みをかかえた北国同士が生活環境について話し合おうではないか」と、いわゆる北方圏環境会議の開催を呼びかけた。これに対し、カナダの各州代表、アラスカ州知事は「非常に有意義な呼びかけだ。ぜひ参加するよう検討したい」と賛意を示した。

カナダ、アラスカから帰った堂垣内知事は十一月十五日、板垣武四札幌市長とともにソ連ロシア共和国閣僚会議の招きで訪ソした。モスクワ、レニングラード、ハバロフスクなどの主要都市を回った知事は、ここでも北方圏環境会議の開催を提唱した。各地の賛意の好反応を得た知事はいよいよ環境会議の準備にとりかかり、四十九年度予算に開催費を計上、経済団体の協力も得てこの会議開催にこぎつけた。

## ソ連極東とスポーツ交流も

北方圏環境会議は、北方圏交流の最初のでっかい成果だが、この三年間の交流から生まれた成果も随所に顔を出してきた。

ソ連との交流はスポーツという国境を越えた分野でまず開花。ソ連極東地方のスポーツ選手と北海道の選手が毎年、交代で双方の地区を会場に親善交流を目的としたスポーツ大会を開こうというもので、第一回は四十八年二月三日、北海道を会場に開かれた。ソ連側からはスキー、スケートの代表選手五十一人が参加、北海道側も選り抜きのメンバーで対戦、会場も札幌、小樽、苫小牧、岩見沢、富良野と各市にまたがり、各地でなごやかな交歓風景も描いた。

北海道でウインタースポーツの熱戦を戦わせたら、すぐその年の八月、ソ連側から「夏の大会は私たちの地へどうぞ」とハバロフスク州スポーツ委員会の名で招待があり、北海





道側から陸上競技と柔道の選手団五十一人が訪ソした。陸上競技はなかなかソ連が強かったが、柔道はさすがに北海道側に軍配があがり、ソ連側も「今後大いに見習いたい」と対抗意欲も燃やした。

この第三回のスポーツ大会は今度は北海道が夏の会場となり、八月十日から札幌円山競技場で、陸上競技を中心に行った。第四回の冬の大会はソ連行きとなろうが、これでこのスポーツ交流もすっかり定着してしまった感じだ。

## カナダとは経済、文化交流

ソ連はスポーツだが、カナダとは経済、文化の混合交流。カナダといっても伸び盛りのアルバータ州。四十七年九月、堂垣内知事ら経済文化視察団がカナダを訪れたとき、当初のお目当ては太平洋沿岸のブリティッシュ・コロンビア州との交流だった。ところが、ちょうど訪加したときは州知事の選挙で新知事が誕生、新しい交流の約束がかわせなかった。

その代わり、お隣のアルバータ州では「ようこそ北海道」とばかり大歓迎、経済、文化両面での交流が約束された。この結果、四十八年には、北海道から婦人団体代表がアルバータ州都のエドモントン市を訪れ、日本舞踊や生花、茶道を披露、さらには北海道物産展も開いた。これに対し、アルバータ側は今年九月、札幌でアルバータ展を開くし、道内の酪農青年グループを引き受けたり、積極的に北海道側のアプローチを受けている。ここにも毎年定期的な新しい交流のキズナがきっちりと結ばれた。

## 道内市町村も積極的に交流

交流は道ばかりではない。市町村も積極的に交流のアーチをかけている。

最も積極的なのは函館市。四十七年六月、〝函館市民の船〟を企画、一般から参加者を募集、矢野康・函館市長が団長となり二百八十九人の市民がナホトカ、ハバロフスクを親善訪問した。市民ぐるみで、これだけの人が大挙して外国を訪れたのはむろん初めて。函館市は翌四十八年八月、今度は船ではなく〝函館市民ジェット〟と名づけ、ジェットを飛ばした。百三十人の市民が参加、空からハバロフスクを訪れ、再度の交流の花を咲かせた。

ソ連に近い国際貿易港、函館のみごとな意気込みだが、沿岸貿易に意欲を燃やす小樽市も負けていない。四十八年八月、函館より一年おそかったが〝小樽市民の船〟を仕立て百三十人の市民がナホトカを訪れ、三班に分かれ、ハバロフスク、イルクーツク、モスクワなどを訪問した。小樽市は四十一年にナホトカと姉妹都市を結び、日ソ交流には以前から意欲的で、四十三年からは定期的に両市の代表三人ずつを交換派遣している。

## 交換学生や、交換民宿なども

姉妹都市交流となると札幌市とアメリカ・オレゴン州ポートランド市との緊密な交流ぶりをはずすわけにはいかない。両市間の姉妹都市調印はもう十五年前の三十四年。むろん道内では一番古い縁結び。この間、両市の市長はじめ市職員代表、商工会議所代表など各界の相互交流は続いているし、交換学生、交換民宿など一般市民レベルまでへも浸透している。

このほかの姉妹都市交流も活発で、特に千歳市とアラスカ州アンカレジ、釧路市とカナダ・ブリティッシュ・コロンビア州バーナビー市、旭川市とソ連サハリン州ユジノサハリンスク間などでは両市間の代表派遣が行われている。

## 〝市民ジェット〟の輪広がる

今年は〝市民ジェット〟ばやり。交流の輪も代表者による使節団、視察団から市民ぐるみへいっきに広がっているわけだ。それも、若者たちへしぼられてきたのも大きな特徴。これからの北海道を背おって立つ青年たちに、少しでも北方圏諸国の実情をナマの目で見てもらうと同時に、お互いに仲よしの手を取り合おうというもので、若者たちも大喜びだし、

派遣の主催団体も大張切りだ。

今年のトップを切って出かけた青年グループは、道がアメリカへ飛ばした〝北海道青年ジェット〟で、八月九日から一ヵ月の日程で、二十～三十歳の若者、百三十人が出かけた。続いて九月二十日からは、帯広市が主催して百二十人の市民が北欧へ飛ぶ。帯広市初の〝市民ジェット〟で、一年前に一般市民から公募、特に三十歳以下の若者には参加費の四〇％を市が助成した。出かける前の一年間にマチづくりをはじめ〝見どころ〟の勉強もすませており、単なる物見遊山に終わらせない意気込みだ。

青年会議所北海道地区協議会も十一月一日から十三日間の日程で〝北方圏青年ジェット〟で北欧へアーチをかける。道内各地区の青年会議所が窓口になり、一人二十五万三千円、しかもローンという格安の参加料で若者を募集、百三十人を集め出かける。デンマーク、スウェーデン、ノルウェー、フィンランドなど北欧各地をめぐり、現地では同じJC仲間とも交歓する。これも、出かける前に北方圏の勉強をするし、旅行中も専門講師からのセミナーが組まれている。主催者側は「北方圏交流といったって一部の代表者の交流ではまったく意味がない。一般の人たち、特に働く若者たちが出かけるところに意義があると思うので、これから毎年続けたい」といっている。

このほか、昨年も北欧へ出かけた松坂科学文化振興財団の北方圏旅行は今年、カナダ、アメリカへ出かける。参加者は三十人。

さらに、羅臼町の漁業者二十人がカナダ、アラスカへ出かけるし、道主催の婦人団体代表派遣もカナダ、アメリカへ十四人送り込まれるなど、市民ぐるみの北方圏交流は目白押しだ。

## 研究、調査のアプローチも

研究、調査機関の北方圏アプローチも急速に熱を帯びている。

北方圏調査会が、開発庁、道の委託を受け、道内主要十都市の協力を得て四十七年から始めた〝北海道と北方圏諸国との交流促進に関する諸調査〟は、そのテーマのユニークさに加え、現時点でわが国でとらえられる最新の情報を満載していることで、この分野のレポートでは最大のものという評価だ。

初年度の調査は、北海道とソ連シベリア極東地域との経済交流調査で、シベリア資源開発の現況、今後の問題点をはじめ、日ソ貿易の展望を克明にまとめている。

この報告書に基づき、北方圏諸国との交流促道に対し「サハリンの天然ガスを北海道へパイプラインで導入するプロジェクトを積極的に推進すべきだ」「北海道とソ連はじめ北方圏諸国との貿易を促進させるため北海道貿易公社（仮称）のような組織をつくるべきだ」という二つの提案を行い注目された。

二年目の四十八年度は「北海道とソ連シベリア極東地域との科学技術に関する調査」で、ソ連の新都市計画、都市環境、学園都市、医療施設など寒地における生活環境のあり方をまとめている。

三年目の四十九年度は「北海道とカナダ、アメリカとの交流に関する調査」で、いま各分野の専門家の手で進められている。

これらのレポートはいずれも、書籍としてまとめ発刊されているが、アメリカ国会図書館はじめソ連関係機関からも注文が殺到、多大な評価を受けている。

## 特異なジャガイモ技術交流

また、北方圏調査会が八月に行った北海道とソ連とのジャガイモの技術交流は、ともに特産品で生活に密着したテーマだけに大きな関心を呼んだ。日本一と自慢の道産ジャガイモをシベリアに植えると同時に、ソ連のタンパク質分たっぷりのジャガイモを北海道に持ってきて、品種改良のサンプルにしようという試み。道側から村山大記北大名誉教授を団長に四人の農業技術者が、八月十一日から十日間モスクワ、レニングラード、ハバロフスク、ユジノサハリンスクを訪れ、ソ連の大がかりなジャガイモの生産状況を視察した。





このあと、ソ連側からも五人の代表が北海道を訪れることになっており、異色の技術交流が繰り広げられる。しかも、これをきっかけに、ジャガイモばかりでなく、野菜、果実などの技術交流も行おうという話も出ており、交流の輪はさらに広がりそうだ。

研究機関の交流で忘れられないのは、カナダの首都オタワにあるカナダ国立研究所（NRC）との交流。NRCは寒地研究に関しては世界最大、最高ということで有名な研究機関で、北海道立寒地建築研究所や開発庁、技術者、北大の研究者らが、こぞって訪れている。北海道に帰ってきても、研究者らはレポートを交換し合っている。だいたい常時、北海道からの研究者が五、六人ぐらいは世話になっているともいわれる。

## 「国立寒地研究所」も実現へ

雪や氷の研究では世界のトップレベルの北大の低温科学研究所は昔から、北方圏、グリーンランド、アラスカ北部など〝寒い所〟へ出かけているが、この種の最近の大がかりな研究で知られているのはツンドラ（永久凍土）調査。四十八年八月、木下誠一教授が団長となり、ソ連シベリアの大地をおおうツンドラのナゾを解くため、三週間の日程でシベリアを回った。これは第一次調査で、引き続き第二次、第三次の調査も行われる。

寒地に関する研究、調査はまだまだ未知の点が多い。このため、今度の北方圏環境会議でも研究調査資料、情報の交換の促進が話し合われることになろうが、知事の諮問機関の北海道科学技術審議会は今年三月三十日に、北方圏を総合研究するための〝国立寒地研究所〟を設立すべきだという答申をしている。

この答申によると「寒地研究所は北方地域における生活と自然、社会、経済的環境について目的指向型ないし問題解決型の総合研究を目的とし、国際的規模の機関をナショナル・プロジェクトとして設置する必要がある」と述べている。この寒地研究所は、道内の各都市も大乗り気で、すでに旭川市などはこの誘致、設立に積極的に動いている。

## 天然ガス導入は道独自で

経済面の交流も無視出来ない。なかでも、北海道で大きな関心を呼んでいるのはソ連サハリン州の天然ガスを北海道にパイプラインで持ってくるプロジェクトを実現させることで、四十八年八月には北海道天然ガス導入促進委員会も設けられた。

日ソ経済協力によるシベリア開発は、チュメニの石油、ヤクートの天然ガス、南ヤクートの石炭、沿海州のパルプ工場、森林開発、さらにサハリンの大陸だな開発と多くのプロジェクトが話題になり、すでに一部のプロジェクトは〝ゴー〟サインも出た。サハリンからの天然ガス導入は、これらナショナル・プロジェクトとは別に、北海道独自のプロジェクトを推進しているところに大きな特徴がある。これが実現すると、年間二十億立方㍍の天然ガスが北海道に導入され、民生、農業面で利用されることになる。

サハリンの大陸棚に豊富に埋蔵されていると予想される石油と天然ガスの探鉱プロジェクトも日ソ間で基本的な了解点に到達し、これにアメリカのガルフオイル社が一枚加わって始められることになっている。

このプロジェクトは、ナショナル・ベースでの話合いだが、サハリンから天然ガスの導入を計画している北海道にとっては、探鉱の成果が、直接響いてくるので現在の埋蔵量だけでは、ソ連側としてもコンスタントに年間二〇億立方㍍を輸出することに若干の懸念があると思われる。大陸棚に大量の埋蔵量が発見されれば、天然ガスのローカル・プロジェクトをプッシュすることになろう。このエネルギー・パイプは、北海道の新しい開発に貢献するのはむろんだが、同時にソ連との新しい親善のパイプになることは間違いない。北方圏交流は多くの地道な努力の積重ねが必要といわれる。その意味では、このパイプラインの果たす役割は限りなく大きく、それだけに多くの期待も集まっている。

# 参加州、市の素顔

北方圏環境会議には五ヵ国から十八の州知事や市長がやってくる。アメリカ、カナダ、北欧三国のお客さんたち。いずれも高緯度に位置し、冬は厳しい北風に見舞われる地域の人たち。といっても、道民にとっては全く珍しい地域からのお客さんばかり。



ストックホルムのショッピングセンター

カナダ、アメリカのアラスカ州などは地図を開けばすぐわかるが、初めて聞くような地域からやってくる人もいる。そこで、参加州、市の素顔をレポートしてみた。

（ソ連は会議には参加しないが、生活環境展には協力するので合わせて紹介する）

## アメリカ

### ◇アラスカ州◇

アメリカの総面積の約五分の一を占める米最大の州。これに対して、人口はわずか三十万人足らず。一平方㌔当たりの人口密度は、ニューヨーク州が三百七十八人なのに対して〇・五人というからいかに希薄かがうかがえる。州内くまなく見たことのある人はゼロとさえいわれる。東南アラスカではフィヨルドを形成、その周辺の山の多くは氷河を持ち、景観は実にすばらしい。気候は太平洋岸は一般に温和。しかし、内陸部は大陸性の気候の影響で冬季の平均気温は氷点下二〇度と厳しい。主要産業は林業と水産。産業面でも北海道とのつながりは深い。空の玄関、アンカレジは千歳市と、セワードは帯広市とそれぞれ姉妹都市の関係にある。

### ◇アイダホ州◇

ロッキー山脈北部に位置する。州都は中西部のポイジ。州全体の人口は五十八万人で、六〇年代に金銀採鉱で発展した。気温は全般に緯度が高いわりに低くなく、ポイジは平均一〇・四度、一月は氷点下二・九度。産業の中心は農業で、主要作物はジャガイモ、サトウダイコン、リンゴなど。州の大半が未開。想像を絶する二千万エーカーもの森や湖、川は、ハンターや釣人の天国となっている。中部の南寄りにあるサンバレーは最高のスキー場として国際的に有名。

### ◇ミネソタ州◇

ミシシッピ川の最上流部に位置し、北はカナダ、東はスペリオル湖に接している。人口は約三百四十万人。州都はセント・ポール。気候は大陸性で、冬寒く、夏は暑い。ミネアポリスの月平均気温は冬氷点下一一度、夏二三度。積雪期間は六十―百二十日で、南部と北部の寒暖の差が激しい。州の重要産業は農業と酪農業。州民の大半が北ヨーロッパ系で、本国でも酪農を行っていたこともあり、全米第三位の酪農州。南東部のミネアポリスとセント・ポールが文化と教育の中心地。

### ◇モンタナ州◇

北はカナダと境を接し、アイダホ、ノース・ダコタの諸州に囲まれている。毛皮産地として開けた州で、人口は六十七万人。州都はヘレナ。州は東西に長く、その中央寄りをロッキー山脈が南北に縦貫、西部と東部を分けている。気候は内陸地のため冬は寒風が強く、夏は暑い。主要産業は農業。乾地農法、かんがい農業が発達している。主産物は大麦、ウモロコシなどの飼料作物。酪農も盛んで、羊毛の年産はテキサスに次いで第二位。ミズーリ川流域のフォート・ペック・ダム（世界最大）の建設で、新しい工業も興りつつある。

### ◇北ダコタ州◇

カナダ国境にある農業州。人口は六十三万人で、州都はビスマーク。位置と気候の関係で開拓がもっとも遅れた。この州の広大な草原に最初に住みついたのはインディアン。いまでも、州の大部分はアメリカで最も素朴なたたずまいを残している。農業収入の三六％が小麦、三三％が畜産、三一％が他作物。農家の一戸当たりの平均耕作物は二百七十㌶で、北海道では想像もつかない広い面積。西部台地の亜炭、北西部ウィリストン盆地の石油の埋蔵量は一兆㌧といわれ、開発が期待されている。

### ◇オレゴン州◇

太平洋岸に位置し、人口は百七十六万人。州都はセーレムだが、最大都市は札幌市と姉妹都市のポートランド市。フッド火山など秀峰を含んだカスケード山脈が南北に走り、州を対照的な東部と西部に分けている。気候はポートランドで年平均一二・六度、一月は四・二度。年降雨量が多い。自然環境は雄大、かつ変化に富み、米州一の林業を誇る。製材、製紙業を合わせれば全米用材の約二〇％を産し、第二次世界大戦前は日本にも盛んに輸出された。毎年オレゴンを訪れる観光客が人口を上回るのも自然美のゆえ。なかでもポートランドは気候温暖で〝バラの都市〟として有名。札幌にもポートランド・バラ園がある。

### ◇ワシントン州◇

大西洋岸のほぼ中央に位置し、人口二百八十五万人。州都はオリンピア。州の五五％が森林で占められているので〝常緑の州〟の別名がある。海岸寄りは南北に走る二本の山脈とその低地帯からなっている。年雨量が千㍉を超すので針葉樹林におおわれている。気候は海洋性でおだやか。シアトルの月平均気温は一番暑い七月が一七・六度。よくひらけ、人口密度も高く、果物、野菜などの園芸農業が盛ん。しかし、中心産業はなんといっても林業。森林関係の仕事にたずさわっている人は地域の全人口の三分の二以上。

### ◇ウィスコンシン州◇

五大湖の西に位置する。ミシガン、ミネソタ、イリノイ各州に境を接し、人口は三百九十五万人。州都はマディソン。気候は大陸的で、冬季の月平均気温は南部で氷点下四度、北部は同一〇度以下。ところが、夏は大部分の地域が二〇度を超える。アメリカの酪農の

代表的な州で、ビールの生産でも有名。農産物は飼料としてのトウモロコシ、牧草が首位。これに次いでジャガイモ、小麦、テンサイが多い。ミルウォーキーは自動車工業、製鉄、機械工業などの近代的工業も興っている。百本の約一・八倍。首都はエドモントンで、人口四十三万五千人。もうひとつの都市、カルガリーは三十八万五千人で、この両都市で州人口の半分を占める。州の大部分は三千メートル級の山脈が連なるカナディアン・ロッキーが展開、素晴らしい山岳風景をつくっている。産業面の発展もめざましい。内陸では石炭の生産が全カナダの五分の一、石油は七〇%を占める。農牧は盛んだが、既耕地の二倍以上の可耕未耕地がある北海道とは、最近特に緊密な間柄で、昨年エドモントンで北海道展を開いたのに続き、今年は札幌でアルバータ展を開く。

## カナダ



緑にあふれるエドモントン市

**◇アルバータ州◇**

カナダ西部、プレーリー三州の西端の州。総面積はカナダ全体の約六・六%を占め、日

**◇ブリティッシュ・コロンビア州◇**

カナダ最南端の州。首都はビクトリアだが、都市としてはバンクーバーの方が栄えており、人口四十三万四千人、周辺人口を含めると百万人を超える。他州と同様、多数民族の混成で風俗、習慣、文化、宗教は多岐にわたっているが、古くから英国人系が圧倒的多数を占めている。海岸地方は温暖多雨、内陸は海岸山脈とロッキー山脈にはさまれ、しばしば天候が急変する。天然資源の第一は森林で、モミやスギが密林をなしている。太平洋に大陸ダナがあってサケ、ヒラメ、タラ、ニシンの好漁場。最近は油田の開発も進んでいる。カナダきっての親日州。北海道からの移住者も多い。

**◇サスカチワン州◇**

カナダ中西部の州。一九〇五年に州となった。面積六十五万平方キロ、人口九十三万人。首都はレジャイナ。北部は湖沼地帯、南西部はロッキー山脈東側のゆるやかな斜面、その中間に平たんで肥えたプレーリー平原が展開し、サスカチワン川が西から東に流れている。気候はきわめて大陸性で、冬は氷点下三〇度以下になることも珍しくないが、夏は比較的温暖。十九世紀後半までは野牛の群がる原野にすぎなかったが、大陸横断鉄道の開通とともに開発が進み、急激に人口が増加した。小麦収穫高はカナダ諸州中第一位で、全国の半分以上を占める。

**◇マニトバ州◇**

カナダ中央部の州。サスカチワン、アルバータ両州とともに小麦の主産地。人口九十三万人で、首都はウィニペグ。地形上、森林地帯、農業地帯、不毛の地、丘陵地、湖岸地帯の五区に分かれている。小麦のほか穀物、テ





ンサイ、かん詰用野菜、酪農などが取り入れられている。州の南西部からの石油の産出が注目されている。



トロント郊外園芸学校の公園

**◇オンタリオ州◇**

五大湖中四大湖に面するカナダ第二の大州。面積百万平方キロ強、人口七百万人でカナダ第一。産業、経済、文化の中心地で、人口の九〇%をイギリス系が占める。北部高原地帯は原始林が広がり、地下には無限の鉱物資源をもっている。第二の農業州でもあり工業地帯としても、カナダの心臓部。首都オタワもこの州にあり、州都トロントはリトル・ニューヨークといわれている。

**◇ノバ・スコシア州◇**

州名は新スコットランドを意味するラテン語といわれ、北アメリカのなかで最初に白人がたどりついたところ（一四九七年ジョン・カボット）である。その後イギリスがフランスを破ってノバスコシアと名づけた。なだらかな丘陵地帯と森林に覆われ、気候も北極海からの寒流の影響をうけて、比較的に寒い。面積五万五千平方キロ、人口七十六万人。

石炭の埋蔵量はアルバータ州を除いてカナダ最大の埋蔵量をもち、漁業でもBC州と並ぶ漁獲量を誇っている。リンゴの生産地として世界的に有名である。

**◇ニュー・ブランズウィック州◇**

スコットランドとほぼ同じくらい七万二千平方キロ、人口六十万人の小さな州だが、古くからカナダ第一級の知識人を多く出している。一八〇〇年設立されたニュー・ブランウィック大学は有名。

大部分低い丘陵地帯で無数の湖と河川に恵まれている。肥沃な土地が多く、ジャガイモの大生産地である。温暖な気候で避暑客が多い。州都はフレデリクトン、人口約二万人。

## 北欧

**◇ヘルシンキ市◇**

フィンランドの首都。人口五十一万人というから、札幌市のちょうど半分。スカンジナビア半島の東端を占め、東はソ連、北はノルウエーに接している。陸地の七一%が森林で、その間に六万余りの湖沼（周囲二百メートル以上）が散在する。気候は北部は冬の寒さが厳しく、南部は比較的温暖。ヘルシンキはフインランド湾に面し、三方を海に囲まれたマチ。市内にはロシア統治時代をしのばせる古い建物と近代建築が混在しているが、ゆったりとした空間の中に、一つの調和を作り出している。

**◇オスロ市◇**

〝フィヨルドの国〟として知られるノルウエーの首都で、人口は四十八万人。スキー発祥の地として知られる。スカンジナビア半島の西側に位置し、北は北極海、西は大西洋に面する。東はスウェーデン、フインランド、ソ連と接し、南はスカーゲラック海峡を隔ててデンマークに対する。地勢は国土の七二%が山地で、平野は少ない。気候は海岸地方は緯度が高い割に温和で、夏冬ともしのぎよい

**道内都市と北方圏諸国との姉妹都市関係**

（ソ連サハリン州は友好都市）

| 姉妹都市名 | | 締結日 |
|---|---|---|
| 帯広 | （米・オレゴン州） | 1959年11月17日 |
| 釧路 | （ソ・サハリン州） | 1968 8 6 |
| 北見 | （ソ連沿海州） | 1966 9 11 |
| 網走 | （米・アラスカ州） | 1965 9 9 |
| 苫小牧 | （米・ワシントン州） | 1968 3 27 |
| 稚内 | （ソ・サハリン州） | 1972 8 13 |
| 千歳 | （ソ・サハリン州） | 1972 9 8 |
| 名寄 | （米・オレゴン州） | 1968 6 20 |
| 留萌 | （カナダ・オンタリオ州） | 1969 8 1 |
| 丹 | （ソ連邦） | 1972 7 5 |
| 北見 | （米・オレゴン州） | 1968 6 10 |

**その他の地域との姉妹都市**

| | | |
|---|---|---|
| 札幌 | （西ドイツ） | 1972年 8月28日 |
| 別見内 | （米・イリノイ州） | 1962 10 11 |
| 安越 | （英・ワイト島） | 1966 4 8 |
| 紋北 | （米・ニュージャージー州） | 1969 6 12 |
| 稚内 | （フィンランド） | 1973 3 20 |
| 倶知 | （米・ピンカス） | 1968 6 10 |
| 蘭遠 | （オーストリア） | 1968 10 14 |
| 軽 | （ブラジル） | 1972 10 18 |

が、内陸は寒暑の差が厳しい。市の北西にあるホルメンコーレン山では、世界的に有名なスキー・ジャンプ大会が行われるが、これはオスロで一番人気のある年中行事。ノルウェーは劇作家のイプセンを生んでいる。

**◇ストックホルム市◇**

スウェーデンの首都。メーラレン湖に浮かぶ大小二十余りの島々と、バルト海の一部を含む広大な〝水の都〟で、人口は七十四万人。市の中心は、王宮や大教会など歴史的な建物の多い小島区域だが、もっともにぎやかなのはその北部にあるノールマルム地区。中央行政諸官庁をはじめ金融機関、大会社がひしめき、ノーベル賞授賞式で知られるコンサート・ホールもある。ストックホルムは北緯四〇度近くにある。稚内が同四五度だから、かなり北に位置するわけ。プロテスタントの福音ルーテル派（国教）が九五％を占める。演劇、映画の水準は高く、国立劇場が多い。

**◇ハバロフスク州◇**

ソ連邦極東地域の表玄関。政治、経済、文化、国防など、すべての面で拠点となっている。この地方は石炭、鉄鉱石の産出が多く、第二次世界大戦後、急速に発展した鉱工業地区のコムソモリスク・ナ・アムーレとともにソ連邦の新シベリア開発計画の中心地でもある。ハバロフスク市は人口四十六万二千人。アムール川右岸に沿って碁盤の目のように広がり、白い石造りの建物が多いため〝白い都市〟とも呼ばれる。この建物の白とアムール川の青、そして街路樹の緑が美しく調和している。主な産業は機械製作、サハリン島産原油の精製、木材加工などで、アムール川、ウスリー川による木材の運搬集積もよく知られている。市の郊外に雑木林に囲まれた日本人墓地があり、抑留されて死亡した同胞が眠っている。

## ソ連

**◇沿海地方◇**

ソビエト連邦東部の沿海地方は日本の沿岸貿易の糸口となる〝大陸の玄関〟である。沿海地方の人口は百八十万人で農村人口に比べて圧倒的に都市人口が多い。ナホトカはピョートル大帝湾にのぞむ天然の良港。日本から船でソビエトへ行く場合、ナホトカで下船し、列車でハバロフスクへ向かうのが若い人たちの人気を集めている。第二次世界大戦中にアメリカからの軍需物資陸揚げの必要から、急に港として設備が整い、一九四七年以降、日本人送還の乗船港となった。ナホトカは小樽とは姉妹都市の関係にある。





**◇アムール州◇**

シベリア南東部と中国の東北地方の国境に沿って東流するアムール川の中流流域。州の南東部を占めるゼヤ・ブレヤ平原は極東地方最大の農牧地帯で小麦、カラス麦、雑穀、米、畜産物の宝庫。それでもまだ全面積の一・五％しか開墾されていない。石炭、金の採掘もみられ、重工業地帯（いわゆる極東コンビナートの一部をなす）も建設されつつある。州全体の人口は八十二万五千人で一平方㌔当たり二・三人という広大さ。州の半分以上は森林で、いまのところ未開発。北部ではトナカイの飼育も行われている。

**◇イルクーツク州◇**

ソ連の全面積の五分の一以上を占める東シベリアの中心地。シベリアの美しさを集結したような神秘の湖、バイカル湖を有す。そこから流れるアンガカ川河畔の州都、イルクーツク市は人口四十七万三千人。シベリア最古の都市で、多数の移民で構成されている。前世紀からの建築が数多く残っているほかレーニン通り、マルクス通り、中央公園と緑に包まれた通りや広場があって観光にはこと欠かない。金産地として有名なこの市は、重機械製作工場や大規模な自動車組立て、製茶、毛皮加工などの多くの工場を有する工業都市に変容しつつある。

**◇サハリン州◇**

北海道とは宗谷海峡をへだててわずか四十五㌔。明治二年以来樺太と呼ばれたなじみの深い島。南北に九百五十㌔、東西に百五十㌔、人口六十三万三千人で政庁所在地のユジノサハリンスク（旧豊原）は人口十一万七千人の都市。冬はシベリア高気圧の影響できわめて寒いが、夏はやや温順。山地・台地の一部は豊かな針葉樹林によっておおわれている。石油、天然ガス、石炭、パルプなど豊富な資源に恵まれ、特に石油、ガスは最近七年間で二倍の増産。水産も重要な産業のひとつでニシン、タラ、マス、カレイと豊富。

**◇チタ州◇**

シベリア鉄道がインゴダ川を渡った地域で東シベリアの一部。州の人口は百十六万人でロシア人が大半。北氷洋の寒気が流れ込む厳しい大陸性気候の土地。州都チタは人口十二万人。イルクーツクの東方九百㌔、ヤブロノイ山脈南西の山ろくで鉄道車両、皮革、肉かん詰工場などがある。市は一六五三年コザックの要さいとして建設され、一八二五年以降、流刑地となった。日本人墓地もあり、かつて墓参団が出向いたこともある。

**◇ヤクート自治共和国◇**

ロシア共和国に属する自治共和国で人口は二十四万人。北はラプチェフ海と東シベリア海に面したツンドラ地帯で、酷寒の地。この土地に住むヤクート人はかつて蒙古族によって北に追いやられ、次第に遊牧民的生活をするようになった。現在でも狩猟、漁労、牧畜で生活を支え、彼らのとる毛皮は〝シベリアの毛皮〟として世界中で珍重されている。ソビエトのなかで最も開発が遅れていたが、最近は発電、林業、鉱業と開発が進み、近代工業が芽生えている。天然ガスと原料炭を共同で開発し、日本へどんと持ってこようという期待の土地。

**◇ブリヤート自治共和国◇**

バイカル湖付近に住む主にブリヤート族の共和国で、人口八十二万六千人。首都はウラン・ウデ。大陸性気候で冬はしばしば氷点下五〇度にも下がる。地下資源は豊富で金、石英、カスミ石、宝石類を産し、石材を多量に出す。ウラン・ウデには大規模なガラス工場があるほか皮革、油脂、魚加工、木材加工が盛ん。馬の放牧やバイカル湖岸の乳牛飼育は牧歌的。現在では農業の大半は集約化され、工業生産が経済の七〇％以上を占め、文盲も一掃された。

# 21世紀を約束する北方圏構想

## 調査会スタッフ座談会
## リサーチ・センターが急務

北方圏環境会議――。それは北海道が初めて経験する国際会議である。〝北方圏〟という言葉そのものは最近定着してきたが、北方圏構想については道民のあいだにまだ認識を欠くうらみがある。そこで、国際会議を前に、北方圏構想の経過、将来展望につき、話し合ってみた。

北方圏調査会副会長（毎日新聞北海道代表）渡辺善一郎
北方圏調査会参与（毎日新聞経済課長）宮嶋勲
北方圏調査会参与（毎日新聞報道部課長）森直樹
司会　北方圏調査会事務局長　山中文夫

**山中**　きょうは北方圏をどのように位置づけするか、北方圏構想とは一体どんなものなのかについて考えてみたい。われわれが北方圏を考えるシンポジウムなどをやり、道内外の学者や評論家、文化人などの意見を聞いてみたが、明確にしきれなかった点が多かった。というのも、北方圏構想そのものが新しい発想だし、あらかじめ、北方圏とはこんなものだといった定義づけをして始めたものでないだけに、道民に、まだ理解していただけない点があると思います。そこできょうは内輪だけで、われわれが北方圏構想をどう考えてきたのか、その背景や経過、それからわれわれの考え方、そういったことについて話し合ってみたい。

**森**　もともと北方圏構想は北海道の三期道総合開発計画、それ以前の堂垣内知事が道開発事務次官当時、二十年後の北海道のビジョンづくりをした。その中に北方圏構想が初めて飛び出したんです。その当時はシベリア、アラスカ、カナダなどの木材や石炭といった資源を持ってくるという経済先行型の構想だった。シベリア、アラスカから木材等を輸入するという経済的な交流、いわば資源収奪（開発―輸入）型の交流というのがネライでスタートした。そして三期計画には天然ガス、石油開発といったもので、きちっと位置づけられた。ところが、その後環境問題はじめもろもろの問題がおこり、毎日新聞で北方圏調査会を設立したことにより、単に経済面だけでなく、スポーツを含めた文化とか技術とかいった幅の広いものに発展していった。とくにここ二、三年、テンポが非常に早くなった。そうした質的な変化があるんですよ。

**山中**　経過的にみればたしかにそうだ。質的な変化というより、経済だけだったものに文化とか技術などのものをくっつけて幅広い構想にしたのだ。

**森**　私が昭和四十五年那須副知事パーティーに加わってアラスカに行った時などはっきり経済使節団だ。それが四十七年堂垣内知事





を団長とするミッションが、カナダ、アラスカに行ったときには、経済文化視察団といって文化という文字がくっついている。それは、そうしなければならない客観情勢の変化があったと思う。特に北方圏調査会が経済的以外のものを導入してきたことなどにも関係があったと思う。

## 北海道の行政に必要なのだ

**宮嶋**　三期計画の根底にあるものは、戦後特に三十年ころから日本経済は高度成長経済が始まり、東海道メガロポリスを中心とした産業や人口の集中が急速におきてくる。その中で北海道の開発はどうあらねばならないか、という命題が出された。結局は人口をふやそうとか、産業をふやそうといったことになったのであるが、日本の国の政策は必ずしも北海道に向いていなくて、東海道メガロポリスを中心とした高度成長が行われた。このため北海道は過疎現象がおきて人口の流出が続いていった。産業も思うようについて来ないし、道民一人当たりの所得も全国水準より低い。こういう中で〝明るい北海道のあしたはどうあるべきか〟ということが考えられたとき、北海道がその地理的条件を十分に活かすためにはどうしたらよいか、という考えが出され北方圏構想の基本的なものの一つになった。日本列島の北の先端にある北海道、しかもソ連のシベリアはすぐ隣だし、アラスカ、カナダとも近い。こうした立地条件をフルに活かした展望はないか。これが北方圏構想の足がかりとなった。北海道の未来はどうあるべきか、それには地理的条件、気象的条件を十分に活かしたものでなければならないとして、三期計画などに盛られ、また有識者が賛同するポイントになったと思う。この点が理解されなければ何のために北海道が北方圏構想や環境会議に一生懸命になって取り組んでいるのかがわからない。私は北海道自身にモンロー主義的な考え方があってよいと思う。北海道は十分それだけの力を持っているし、海外との交流でも地理的な優位性がある。結局、北方圏構想は日本の経済政策、政治政策のカジとりのなかから、新しい方向を見出そうとして北海道の行政サイドから出てきたものが北方圏構想であると思う。


渡辺善一郎副会長

**渡辺**　世界の動きをみると、二十世紀はあと二十四、五年しかない。この新しい二十一世紀の世界の方向づけがわれわれの前に出てきている。この方向づけのなかで一番大きなものは、もはや第三次大戦はないということですよ。核戦争は考えられないということです。いま全世界的には先進国と発展途上国とがあり、局地的な紛争はあるが、世界を破局に導くような世界大戦はほとんど考えられない。こう考えるとき世界はどういう方向に進んでいくのか、人口はどんどんふえる、開発はしなければならぬ、と同時に公害がおきる、自然保護問題がおきる、そうしたポリューションの問題、人間生活に人類発展がもたらす悪影響と生活をどう調和させるかという大きな問題が世界の共通したテーマとして取り上げられてきている。

## 日本列島が直面している問題

こうした背景を考えたとき、日本のような島国、それも資源のない国がどうするかということになれば、当然資源を求めるという欲求が、でてくることは否めないことだと思う。資源を輸入し、製品として生産し、それを輸出することが資源小国日本の宿命といえる。そのテンポが早まるか、遅れるか、その緩急の度合いは別としても、やはり世界の方向のなかで考えた場合、どうしてもわれわれが目を覆うことのできない現実の要請がある。その中でどうするか。例えば資源的に見た場合

今まで開発された南方とは別にほとんど未開発の北方というか、北方圏に目が向けられてきつつあることは方向として否定できない。それと新しい要素をどう調和させて、北の資源や文化を発展させていくかという問題があると思う。北方圏構想は単に北海道ばかりでなく日本全体が好むと好まざるとにかかわらず直面しつつある問題である。特に北海道は生活実態として日本列島の北に位置しており、地理的、気候的、風土的な事情から北方圏構想を打ち出し、北方圏のビジョンをもち、これにいろいろの角度から新しく、生活と開発をどう調和させていくかという大きな問題に取り組んでいかねばならない。言葉はあたらないかもしれないが、テストケースのようなものだと思う。

**宮嶋**　そこで圏という言葉が出てきたと思うんだけど、圏という以上はエリアがある。単に北方という言葉では響きが弱いし、もっと広がりをもつためには、北方圏といった方がよいのではないか。圏というからにはどこからどこまでかという線引きの問題がおこってくると思うのです。それでシンポジウムで名古屋大学の樋口教授の話もあったし、道は道として一応のものを決めている。また札幌市でも北大の辻井助教授にたのんで地図をつくったりしています。それを総合したものでしょうが、それは何も市街化区域と調整区域のように明確に区別するものではないと思うんですよ。

## 学者間のエリアに大きな相違

**山中**　北方圏のエリアについては、学者のあいだでも、その専門の分野々々でかなりの相違があるんですよ。だから一応どんな考え方があるか、どんな分け方があるかを参考のため述べてみると……。

第一が緯度による方法です。例えば北緯四五度をとると、北海道は宗谷から以北、中国のチチハル、モンゴルのウランバートルといったところ、アメリカ大陸ではポートランド、モントリオールというところだが、ヨーロッパでは南フランス、北イタリア、クリミヤ半島付近を通る。これではどうも困る。特に北海道はわずかに稚内がはいるだけで大部分が圏外になる。そこで四〇度まで下げると、アジアでは北京、張家口、アメリカではニューヨーク、シカゴ、ヨーロッパではローマ、ナポリ、マドリード、リスボンといった線になる。これはどうみても北方圏ではない。したがって緯度で考えることは適当ではない。


宮　嶋　　勲氏

すると温度である。北大の小川博三教授の指標によると一月の平均気温氷点下一〇度線をあげれば、アジアでは中国の東北地方を西に南下しタクラマカン盆地からカスピ海を経て、ヨーロッパロシアを北上する。アメリカ大陸ではアラスカの太平洋海岸の奥をほぼ海岸線に沿って南下し、五大湖地方の中央を貫いてセントローレンス川河口に出て、これから北上してグリーンランド南岸に伸びる。北海道の場合は中央の山岳地帯や道央、道北の大部分が氷点下一〇度に含まれ、さらに氷点下五度にすると道南の一部を除いて北海道はすっぽりはいってしまう。だが、寒さは気温だけではなく、風や湿度に大きく関係するのでこの点は考慮しなければならない。温度の指標としてこのほか積算寒度や農耕指数もある。また暖房指数といって暖房を必要とする日数の積算もある。北海道では九度以下を暖房必要温度としている。また最高温度が零度以下になった日の真冬日というのもある。

農耕指数はババロフスク、ハルビン、モスクワ、帯広、旭川、網走、稚内、ワルシャワとほぼ等しいが、暖房指数は一番寒いハバロフスクから一番暖かいワルシャワまで斜めに並んでいる。一方、札幌、函館、ボストン、新





潟、東京はこの順序で農耕指数がふえ、暖房指数が減っていっている。このほか植生による分け方や動物の生態区域なんかでも分けることは可能である。そうしたいくつかの指標を重ねあわせて、タブったものを引き出してくれば一応北方圏のエリアといったものは浮かびあがってくるのだが、都市計画の線引きではないのだから、どこからどこまでと明確な線を引くことはできないし、またその必要もないのじゃないか。

## 〝北に住んでいる〟心の問題だ

**渡辺**　私は北方圏はどこからどこまでというような考え方は全くナンセンスだと思う。北方圏はそこに住んでいる人、長い歴史や伝統もあるし、そこに住んでいる者は、それが北か南か、いわれなくても十分知っている。北方圏というものは地理的に線の引けないものである。緯度とか、寒さとか、雪とかそんなもので北方圏を位置づけるのはそもそも北方圏構想と相反するもので後ろ向きの見方だと思う。そもそも圏は定義がないから圏なんだ。もちろん広い意味では気候的な条件もある。生活環境、住民意識など自分たちが北に生活しているという意識があれば、それは当然北方圏なんだ。

ヨーロッパで、北に住んでいると意識しているのは北欧三国、それにソ連、ドイツもはいる。デンマークもそうだ。デンマークなどは北の意識を持っている。ノース、ノルドに対するたくさんの生活や歴史上の遺産をもっており、その生活の仕方のなかに北が大きく影響している。アジアでいえば、特に日本では北海道、東北地方の北の方もはいるだろう。それに北朝鮮、中国の東北地方、モンゴルなど、それにアラスカ、カナダ、アメリカの北方なんかももちろんそうだ。大体大きな国では国の内部でもはっきりしたものはない。したがって細かい地理的その他の理由で線引きしないことに北方圏のよさがあるんだ。北の意識ということになると日本人の意識のなかにもあるんだ。だから北方圏というものは国で分けたり、地域で分けるのではなく、人間の心の中にあるもの、人々の生活意識の中に北に志向するものがあればそれが北方圏なんだ。そこで話を元に戻すと、開発の問題でも開発意識だけではやっていけないことはここ数年強くいわれ、新しい要素が加わり、幅が広くなっているんだ。このことは北海道は北にあるから当然考えねばならぬが、日本のなかでも北方圏の問題をあらゆる角度から将来は取り組まねばならぬことだと思うんだ。


森　　直　樹氏

**森**　北方圏構想の発想の原点と変質というものを考えねばならないと思う。北方圏構想ははじめからなんとなくわかったような、わからないようなものから始まって、それが途中で質的に変化した。もともと北方圏構想は政治的なものが優先した。裏日本各地が沿岸貿易などで日本海時代なんかを打ち出した。北海道でも後進性から抜け出すなんらかのビジョンが必要だということから〝いいものがあった〟というのでつくりだしていった。帯広や旭川なんかでも、市長がバラ色の夢づくりに使っていた。だが官優先で走っているばかりで肉づけもなんにもなかった。そんなとき、北方圏調査会が設立されて、やっと民間ベースでものを考える時代をつくってやったというのだと思う。もともと官優先でつくられたものを北方圏調査会で肉づけした。開発の夢づくりという発想ばかりではついてこない。そこで文化的な面も取り入れて組立て直したという質的な変化がそこにある。それから今渡辺副会長がいわれた世界的なスケールからみた必要性というものもできたと思うんです。

**宮嶋**　道内各都市で例えば千歳とアンカレジ、小樽とナホトカ、留萌とウランウデ

といった姉妹都市なども個々バラバラだったのが、これできゅっと締まってきた。新しい未来へのまとめ方、こういう方向で進めば新しい未来のビジョンがあるということがわかってきた。

## 調査会ができ国際的な構想に

**森**　本来インタナショナルであるべき北方圏が、それまでは極めてナショナルどころかローカルなものがあった。ところが、調査会ができ、それが中心になっていろんなことをやり、今回の環境会議が開かれることによって、やっとインタナショナルなものになった。環境会議以前は官優先のものであったものが北方圏調査会が組み立てたものがやっと活きてきて、インタナショナルなものになった。本来性が埋没していたのが芽を出し、ほんとうの姿に立ちかえったわけで、そうした質的変化を理解し、その構想を肉づけすることによって北方圏構想が浮彫りにされたというところではなかろうか。

**宮嶋**　アラスカ、カナダなどを回ってみても州の代表などもこの構想に大きな反応を示した。今まで南と北という意識で考えていただけで、同じ気候、風土をもっている国々が連帯的意識でものを考えることが少なかった。いわれてみると、なるほどそのとおりだ。堂垣内知事がカナダで北方圏環境会議の開催について一席ぶつと、それは大変おもしろい、いいアイデアだ、これで新しい方向づけができるのではないか、情報の交換や人の交流といった面で進めていけるのではないかということで即座に賛成だった。このようにそれぞれの国にも、そういった国際的な意識があったのである。それに手をさし伸べ、やりましょう、参加しましょうとなってきたことは、大変意義のあることだと思う。

**森**　従来友好都市、姉妹都市といったものは、ただヘッド（市長や団体の長）が行ってきただけなんですよ。それが次第に一般の人々の交流がはじまることによって実のあるものが生まれてきたということですよ。特に今回北方圏調査会がジャガイモ・ミッションをソ連に送りこんだことなど、北方圏交流が地についてきたことを物語るものだと思う。

また従来あったイデオロギーの問題は希薄になってきている。革新都市はソビエトと姉妹関係を結ぶ。保守系市長の市はアラスカやカナダなど自由圏に目を向ける。そんな考え方が一時はたしかにあったが、そんなタテの関係だけでなくなった。集約して一本になってみれば何のことはないのだ。


山中事務局長

**渡辺**　イデオロギーの問題もだが、もう一つグローバルな視点から二十一世紀の世界を展望したとき、新しいビジョンとして北方圏構想が浮かびあがってくるのだと思う。古いナショナリズム、十九―二十世紀前半にあったそれはもう希薄になってきている。もちろん部分的には、まだ発展が遅れている国、歴史上の対立、もっと現実的に国境を接している国と国とのあいだにナショナリズムがあることは否定しないが、同時に新しいナショナリズムもできなければならぬ。その上にインタナショナリズム、新しいインタナショナリズムが、この北方圏構想の基盤の一つとして育っていかなければならない。古いナショナリズム、インタナショナリズムが変質してきている。それはなぜかというと、前にもいったとおり、世界を覆っている大戦争の危機から抜け出してきつつあるということだ。それに資源問題もあるだろう。

## 相互補完、互恵の精神が第一

**山中**　最近各国とも資源ナショナリズムが非常に強くなっている。資源をもっている国は、今までそれが収奪されてきた、将来も収奪されるであろうというところから、そうした発想が資源ナショナリズムの根底にあると思う。だが、そうではないんだ。われわれは友好と親善のなかから相互補完の意味で経済的交流をやるんだ。それは互恵の精神である。こうした考え方が、われわれ北方圏調査会をつくった一つのネライでもあったわけだ。

**渡辺**　新しい意味のインタナショナリズム、あるいはスーパー・インタナショナリズムといったものだ。一つの国の利益、あるいは特定のグループの利益をはかるというのではなく、その地域の住民の生活がよくなるという大きな目標をもったものが北方圏構想なのだ。だから北海道だけでなく全日本的な問題として考えなければならない。北海道がその先鞭をつけるということだ。

**森**　それが非常に先進的なものの考え方として受け入れられたわけです。従来の日本経済の南方志向型、資源収奪型のものの考え方、そんな論理構造ではもう通用しない。世界各国から非難をうける。だから、ここに新しい考え方を組み立て、資産収奪型から転換し、お互いの利益ということを前提としたものでなければなりませんよ、といったものを、たえず提言の形としてもっている、そんなものだと思う。

**渡辺**　二十一世紀の世界を展望した場合、新しいビジョンとして、北方圏構想が浮かびあがってくるんだ。北方圏構想はこんどの環境会議で国際的にはスタートするわけだ。この構想は大変イキの長いもので長期的なものだ。したがって、この構想を推進するにあたってこれを阻むいろいろなもの、国際間の事態の変化もあるだろう、その他もろもろの要素がたくさん出てくるに相違ない。しかし、その一つ一つの現象だけをとりあげ、そのむずかしさ、支障、困難さというものを過大評価し、この構想の推進がにぶってはならない。個々の現象にばかり捉われていると、大局的な方向とか見通しをあやまる。それは今までの歴史が教えてくれている。だから細かい点やむずかしさは、それを現実の問題として取り組んで、どこに解決策があるか―、あとで考えてみれば大した支障ではないんだ。

新しい試みをやる場合必ず抵抗がある。その抵抗は時間的にみれば大して長い時間ではないんだ。例えば飛行機に乗っていて、気流の悪いところを通るとき、シート・ベルトをつけるようにとのアナウンスがある。飛行機が揺れるときは非常に長く感じるのだが、実際にはかってみると二十秒か三十秒のものなんですよ。それが五分も十分も続くものではない。いわんや一時間も二時間も気流の悪いなかを飛んでいるわけではない。その瞬間々々は長く感じるものなんだ。そういう意味で北方圏構想を進めていくうえで、そういう悪気流があることを理解してというか、肚の底においていなければならんと思う。それと北方圏構想は、これは超党派のものだし、イデオロギーを超えたものである。そして新興宗教のようなものでは決してない。

## 模索段階をどう組立てるか

**森**　こんどの環境会議は四十七年のストックホルムの世界環境会議に出席した外務省の新田事務官がこの構想をもってやってきた。環境会議そのものを日本でやるべきだが、それには緑が残り、自然が豊かな北海道でやるべきというものをもってきた。それを道と話し合って堂垣内会長（知事）のところにもっていって提言した。たまたま知事はカナダ、アラスカに行くので、北方圏だけの会議にしたらどうかということになり、いわば〝見切り発車〟のような形でスタートさせた。そのあと北方圏調査会で具体的な組立てなどをし、提言もし道を引っぱっていくといった格好で、どうやらここまでやってきたわけです。だから初めてこんど環境会議をやることによって具体的なものになり、定着し、次の問題点つまり開発とか資源、もう一つちがった問題にやっと踏みこんできた。その段階において、今回のシンポジウムが開かれたわけだが北方圏自体、まだ定着していないから、みんなバラバラの発言をした。それはあたり前のこと

なんですよ。人それぞれに模索している段階と思うんですよ。だからこれをどうやって組み立てていくかというのが現段階の問題なんです。将来の問題については文化面、文化的な問題点の追求なんかが必要になってくる。従って寒地総合研究所とか北方圏総合研究所といったものをつくることによって新たなものの考え方を組み立てていく。それが大切なことだ。五十嵐旭川市長なんか研究機関の統合を前から主張している。北方圏構想といったものが学者を含め知識階級に理解されつつあるし、この機会をつかまえて、そういった対応策を考えることが絶対に必要だと思う。

**渡辺**　私が北方圏環境会議の第一回の打合せのとき、リサーチ・センターをつくれということを提案したのがそのことなんだ。将来構想として実現し得る目標として考えておかねばならない。

**森**　こんどのシンポジウムにせよ、従来の研究は京大の人文科学研究所を中心とするところでも東西比較論ばかりであって、残念ながら南北の比較論はないんですよ。横でなく、タテの比較論。日本文明の特色である南方志向のモンスーン型の体質ではないものをもっている—いやもたせられている北海道としては南北比較論がどうしても必要なんですよ。それをはじめて手がける機関が必要になってきていると思う。そんなものが出来てはじめてインタナショナルな確固たるものになるのだと思う。国がやらずつくり、それを国立に昇格すればいいんだ。・センターがまず必要だ。小規模なものでもよいからまずつくる。そして横との連携をとりながらやっていくのです。これは国連大学誘致なんかより、よっぽどいいと思いますよ。北海道の知事として北海道の将来を考えるとき、当然なすべきことだと思う。

## 小規模でもよい、まずつくる

**渡辺**　それはね、日本自体が明治から百年のあいだに近代化にかけ足でやってきたのだし、その点が西欧先進国と違ったところなんで、だから大きなつまずきにぶつかったんだ。日本人の思考のなかに、考え方のなかにある意識の変革、新しい時代に対応してものを考えるべきですよ。その具体的なもののひとつが北方圏構想であり、北方圏についてのリサーチ

**山中**　方法論としてはその方が早いだろう。国がやるのを待ってたんではいつになるかわからない。むしろ知事が会長なんだから、まずつくることを考えるべきだ。

**森**　道にも寒地建築研究所があり総合経済研究所でも、北方圏について研究している人がいる。バラバラで無駄なことをしている。大学関係でもみんなダブった研究をしている。そうした機関を統合する方法だってある。今あるものを集約するやり方、京大の人文科学研究所では社会科学ばかりでなく自然科学の面からもいろんな問題を手がけていますよ。そういったものがやっぱり必要ですよ。道開発局、通産局など出先の機関でもいろいろ研究しているが、その研究がブランチのままで終わって集約的に出てこない。総合性がないんですよ。全く惜しいと思いますよ。

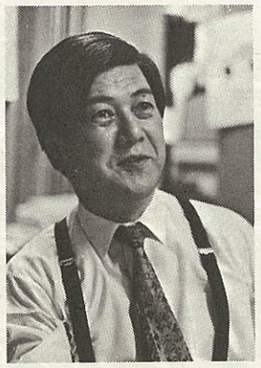
**渡辺**　まだまだいろんな問題がある。都市づくりの問題、上下水道の問題、住宅の問題、もちろんそれには費用もかかるし、経済的なものもあるけど、冬には十分な暖房で快適な生活が営める模範的な家づくりがあってよいと思う。北海道はそんな新しい構想が実験的にできる可能性をもっている。

**森**　北海道は歴史風土的に新しいものがはいりやすいんですよ。

**渡辺**　そうした地域的特性や優位性はどんどん伸ばしていくべきだと思う。







# 中央依存から脱却せよ

京都大学教授　梅棹忠夫

北海道は緯度、気象条件からみて確かに日本列島の北方に位置している。しかし、温帯地域の中の北国であって、そう大きな違いがあるものではない。ましてや、世界的な大きな目で北海道をながめた場合、その生活環境や文化に異質なものがあるとは思えない。やはり北海道はすべての点で本州の延長に過ぎない。明治政府が北海道を北欧と同じように独自の生活や文化を持つ農業国にしようと試みた〝ケプロン構想〟が失敗した例でもわかるように、北海道を〝日本〟という強い個性から切り離そうとする過去の実験は、すべて挫折している。

北海道が北方に位置している地理的な条件からみて、他の北方圏諸国と違う点といえば、産業とか文化というものが同緯度に沿って進んでいく、いわばヨコの関係であるのに、北海道の場合は南から産業や文化が浸透し、北の終着駅が北海道だったというタテの関係である。このように歴史的な推移から、他の北方圏諸国とちがい、北海道が〝日本〟という画一されたワクの中にはめ込まれるまでには、多くの人間のチエと努力があったことは事実だ。北海道経済史、特に農業の中で〝北の稲〟が北海道のすみずみにまで根を張ったことが、北海道の日本での位置づけを決定的にした。

北海道の衣、食、住を例に取り上げても技術的には多少の工夫はこらされていると思うが、北海道に住む人たちの生活様式が本州の人たちと異なる点は何一つ見当たらない。むしろ、北海道は寒さと雪を〝売物〟にしているキライがある。

北海道がこうしたニセモノのカラーを強調するよりは、この辺で北海道に住んでいる人、これから住もうとする人の発想の転換が必要になってくるだろう。それは北海道以外はすべて外国と考えることだ。もっとわかりやすく言えば〝州政府〟あるいは〝北海道政府〟をつくり、政治、経済とも一国として独立の機能と力を持つことだ。

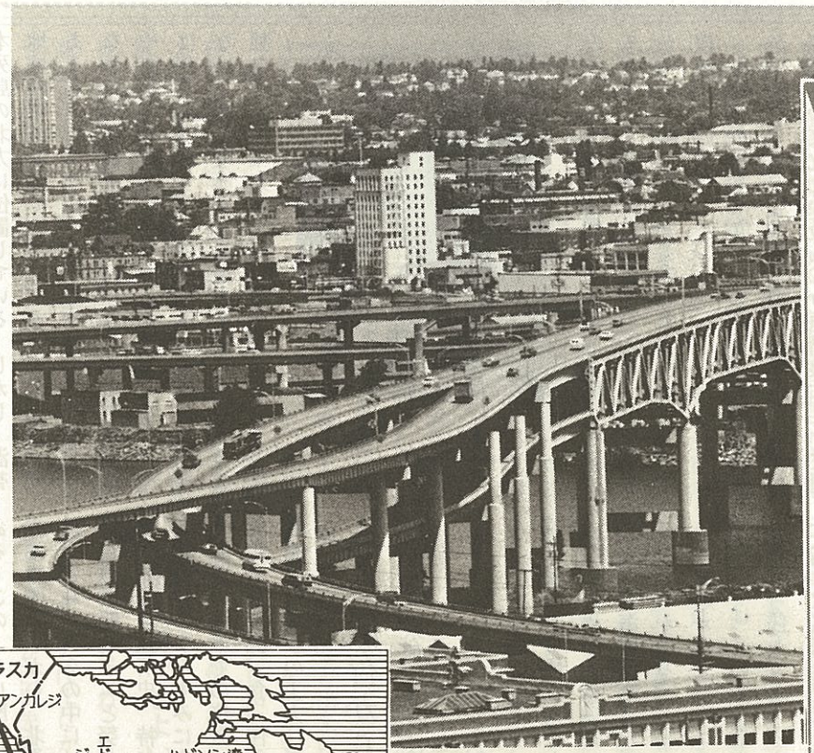
北海道に独自性がないというのは、北海道が東京をセンターとする本州の植民地であることにほかならない。北海道が本州から分離し独立する力を持つのでなければ、独自性という言葉は単なる外見的なカラーにすぎない。北海道が日本の中での〝異質性〟を強調すればするほど〝同質性〟が浮彫りにされてくる。

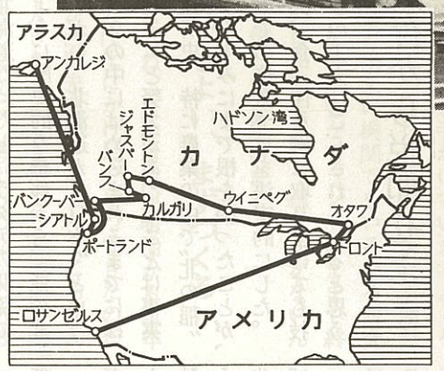
北海道が本当の意味の独自性を持つためには、やはり東京に目を向けたセンター依存型の政治体制から脱却しなければならない。つまり、外国、特に北米、カナダ、ヨーロッパの一部にみられる〝多中心国家〟の理念を持つことだ。とりあえず北海道が国の支配力をはねつけ、一つの非常に大きな県、または州になることだ。これが〝世界の中の北海道〟を鮮明に打ち出す唯一の近道といえる。

北海道が「北方圏構想」を進める上で最も大切なことは、北方圏諸国のリーダーとなる力を蓄え、北方圏独自の生活とは何か、文化とは何かを自分のチエと努力で見つけ出し、他の国々に教えてやることだ。それでこそ世界に目を向けた北海道の役割が果たせることになる。北方圏環境会議もその意味で「北方圏構想」を広め、伸ばすステップ台になるだろう。(談)

# カナダ、北米の環境保全

**ポートランド市の中心を流れるウイラメット川。〝この川を取り戻そう〟が合言葉となった**






**境破壊の悩みは、どこでも深刻だった。広大な大自然に抱かれたアラスカ、カナダでも開発からいかに空気と水と緑を守るか、州政府も住民も真剣に取り組んでいた。記者（毎日新聞北海道報道部、島田康弘記者）は、道の呼びかけで九月十七日から開かれる北方圏環境会議を前に北米のアラスカ州、ワシントン州、オレゴン州、カナダのブリティッシュ・コロンビア州、アルバータ州、オンタリオ州などの北方地域を七月中旬から二十日にわたって回ってきたが、やはりそこには環境保全対策の先進地域として見るべきものが多い。**

**もちろん、地域開発優先、環境保全至上主義と姿勢はさまざまだが、少なくとも州政府も住民も、この問題から目をそらすという態度は見られなかった。むしろ、州政府の大胆な発想の転換と住民一人々々の生活環境を守るという確固とした意識をいたるところで強く印象づけられた。**

**以下はその報告である。**

## 各地の対策を現地ルポ





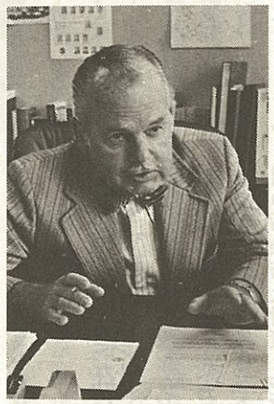
# オレゴン州のクリーン作戦

まず最初に、失われた環境を取り戻すため全米で最もユニークなキャンペーンを展開した北米・オレゴン州の場合を報告しよう。

カナダとの国境線に近く、太平洋岸に面したオレゴン州。札幌市との姉妹都市、ポートランド市がある州と言った方がわかりいいかも知れない。

真夏の太陽の下に広がるオレゴン州は、水とグリーンがまぶしいばかりに輝いていた。ポートランド市内の都市公園はもちろん、すぐ郊外から続くいくつかの国立、州立公園は、実に美しく整備され、大自然の息吹きの中で人々はピクニックやキャンプ、水泳を楽しんでいた。もちろん、公園面積は日本とケタ違い。日本の行楽地のように人波で埋まるという息苦しい風景は見られない。南隣のカリフォルニアに強い対抗意識を持つオレゴニアンたちは、開発され尽くしたカリフォルニアをあわれむように〝この自然はおれたちの誇りだ〟と言う。トム・マッコール州知事などは「オレゴンを旅行してもいい。だが、ここに住まずに帰れ」と公言してはばからないほどだ。

ゴミのない公園。実はこれもただ黙ってい



**オレゴン州環境局のケスラー・キャノン局長**

て保たれているわけではない。そこにはひとつの発想の転換があった。

## まずゴミ防止を立法化

一九六七年の夏のある日、一人の男が海岸を散歩していた。あたり一面に散らばっている空ビンや空カンを見て、彼は「捨てる者が損をする仕組みにすればゴミ公害を防げるのではないか」と考えた。ビールやジュース、コーラを買う時、ビン代を余計に払わせ、空ビンを返せばその分を払い戻すというシステムである。これは一九七一年、州議会で立法化された。アメリカ人は金にこまかいという特質にうまく合致したせいか、以来オレゴンから空ビンが一掃されたという。

州環境局を訪れたとき、このアイデアを提供した市民に会いたいと申し出たところ、ケスラー・キャノン局長は「彼は二カ月前、ガンで死んだ」と、残念そうに首をすくめた。空ビンは環境保全対策のささやかな例にすぎない。しかし、この話は州政府と住民の環境問題に対する姿勢をうかがえるという意味で非常に興味深かった。

マッコール州知事は、一九六六年の知事選に〝キープ・オレゴン・グリーン〟（オレゴンの緑を保とう）〝キープ・オレゴン・ビューティフル〟（オレゴンの美しさを保とう）という環境保全のキャッチフレーズを掲げて戦った異色の知事である。とくに彼が力を入れたのは、アメリカ西海岸有数の大河であるウイラメット川の浄化作戦。もともと彼は、テレビのニュース解説者で、当時から〝ウイラメットを呼び戻そう〟というキャンペーンを展開、知事に当選してからも彼の〝目玉事業〟となった。

## 最高に厳しい環境基準

ウイラメット川は、オレゴンの大動脈。流域には二十市、州の人口の七〇％に当たる百五十万人が住んでいる。また、人口約四十万人のポートランド市はこの川の両岸に発展した港町で、いわばオレゴニアンにとっては〝母なる川〟。これが流域の工業化が進むにつれ、工場排水による汚染がひどくなり、州環境局の話では約五十年前に行った世論調査ですで

に住民の四八％が汚染反対の意向を示していたという。しかし、工場側は一向に排水処理の対策は講ぜず、川は荒れる一方。ついには、魚も姿を消し、一切の水遊びも禁止されるまでに事態は悪化した。

州政府が汚染対策に乗り出し、全州にわたる水質基準法を設けたのは十年ほど前の一九六七年。流域住民は、四十年以上も汚れた川のそばで生活し、公害の被害をいやというほど受けてきたわけだ。それだけにいったん環境保全に着手すると、やり方は徹底しており、オレゴン州が設けた環境基準は、全米でも最も厳しい内容となった。そして州政府は一九六七年以来、汚水防止対策に二十九億ドルもの巨額の予算を注ぎ込んだという。

「流域にはパルプ、製紙、アルミなど約五十の工場があるが、我々はすべての工場に廃棄物処理施設の設置を義務づけた。水質は五日ごとにチェックし、違反者には一日五百ドル以下の罰金、さらには営業停止も命じてきた。その結果、ウイラメットにきれいな水がよみがえり、泳げる場所もでてきた」とK・キャノン州政府環境局長は胸を張る。特に協力的な工場に対しては〝オレゴン・カップ〟を贈って表彰、製品にカップのレッテルを印刷して販売してもよい――などキメ細かい奨励制度も設けた。日本的感覚から言えば、お役所の表彰や製品へのマーク刷り込みがどの程度効果があるのか疑問に思われるが、B・J・セイモア広報部長の説明によると、実際に製品の販売に影響してくるという。

マッコール州知事はこう言う。

「オレゴニアンはみごとなデモンストレーションをやってくれた。ウイラメット川の成功は世界的に有名になったが、これは住民の努力なしには達成できなかったろう」。いかにもジャーナリズム出身の政治家らしい表現だが、確かにオレゴン州が全米各地に先がけて実行した環境保全対策は、大きな評価を受けているように思われる。

## 住民の要望に企業協力

九月の北方圏環境会議には、残念ながらトム・マッコール知事は出席できず、代わりにキャノン環境局長がやって来る。彼は「会議ではウイラメット川の汚染防止対策と空ビン法を中心としたゴミ処理対策について話すつもりだ」と語っていたが、これらの環境保全対策が成功した大きな要素として住民の強い要望と企業の協力をしきりに強調していた。

水質については、現在は一九六七年に設けられた第二次基準に基づいて規制を行っているが、州政府は一九七七年をメドに第三次基準を設ける準備を進めている。そこには汚染を少しでもゼロに近づけようという固い決意が見られた。また、ウイラメット川を中心とした土地利用計画の作成にも着手している。まだ基本構想を練っている段階で、青写真は出来ていなかったが、これには工業化地域も含まれるということで、どういう形で環境保全との調和を求めていくのか注目される。州環境局としては、今後手つかずに残されている騒音問題と取り組みたい意向だが、キャノン局長は冗談まじりに「とにかく日本製のバイクが問題だ」と語っていた。オレゴンでも若者たちは、マフラーを外して突っ走っているらしく、その数は十万台とも二十万台ともいわれ、州環境局でもよく分からないのが実態。「規制基準は、みんなと話し合って決めていきたい」とキャノン局長は、ここでも住民との一体化を強調していた。

ところで、一般住民は州政府の仕事に満足しているのかどうか。「D・E・Q（オレゴン州環境局）は、みごとな仕事をした」と評価する一方で「やはり監視が必要だ」というグループもある。彼等の意見もここで合わせて紹介しておこう。

## 学生にも監視グループ

「トム・マッコール（オレゴン州知事）の業績？別に彼はたいした仕事はしていないさ。ただタイミングのいい時期に知事になっただけだ」

米国オレゴン州ポートランド市の港町に近い古ぼけたビルの一室。環境保全運動を進めている「オレゴン学生公共問題調査委員会」（OSPIRG）のリーダーの一人が言った。

札幌出身で、ポートランド州立大学に留学している御手洗昭治君の紹介で訪れたのが、オレゴン州内十五の大学の学生で組織しているグループ。消費者運動の教祖、ラルフ・ネーダーの旗の下に集まった若者たちである。

「環境保全対策は州政府だけにまかせておいてはだめだ。我々のように常に監視している者がいないと、すぐ手を抜こうとする」。行政と企業のゆ着。そのくされ縁から生ずるナマぬるい公害対策。これにメスを入れようと意気盛んな活動を続けている。「我々を支配しているのは、地位でも金でもない。正義である」と彼らは言うのだ。

彼らと会見する前、オレゴン州環境局、ポートランド市、それにポートランド在住の幾人かの日本人に取材した限りでは、オレゴン州は相当前向きの姿勢で環境問題と取り組んでいる印象を受けた。オレゴンの大動脈、ウイラメット川の浄化作戦をひっさげて登場したトム・マッコール州知事は、ジャーナリズム出身らしい鋭敏な感覚で次々と環境保全対策を打ち出し全米的に注目されてきた。だが、学生たちに言わせると、たまたま環境問題が大きくクローズアップされてきた時期に知事になったのと、オレゴンが南隣のカリフォルニアに比べ四十年も開発が遅れていたため、環境保全対策がやりやすかっただけだという評価になる。「環境が開発のため破壊されてしまったカリフォルニアだったら彼が行っても何もできやしなかったに違いない」と手厳しい。その裏には、環境保全対策では全米に知られたオレゴンといえども、州政府や企業に対する公害チェック機構は必要だし、我々がそれになっている――という強い自負が感じられた。



環境基準をよく守った工場に贈られるオレゴン・カップ

インタビューに応じたのは、事務局長格の若い弁護士。聞くと委員会は学生代表から選ばれた五人の理事によって運営されているが、弁護士二人をはじめ生物学、化学などの専門家十人を雇って仕事をしているという。会員の数は数百人と、ばく然とした返事しかかえってこなかったが「全学生の九〇％は、我々の運動を支持している」と胸を張る。年間の活動費は二千万円程度。会員が納める会費が中心財源のようだ。

「オレゴンは、森林資源の豊かな農業国である。いまは一％しか都市化されていないが、これから先、十年から十五年の間には工業化が進み、環境破壊がひどくなるという危機感を持っている。だから我々は自然を守るために立ち上がったのだ」

州環境局が市民の立場からきちんと仕事をやっているかどうか目を光らせ、企業に調査員を派遣することもしばしば。例えば、木材会社へ行って許可以上の木を切っていないかどうか調べる。だが、やはり企業側は非協力的でなかなかデータを出したがらないという。

「だから我々がいつも勝つとは限らない。しかし、我々には一般市民に公表するという武器があるので、我々の存在は無視できなくなっている」

「我々は、調査に基づいて州政府に改善の要請をする。政府側はたいてい耳を貸してくれるが、知事殿はときどきいやなやつらだと顔をしかめている」

最後に若い弁護士君は、ニヤリと笑った。オレゴン学生委員会が誕生したのは四年前、全米では最初だった。それが、ここを発火点にいまでは同じような組織が二十の州に広がっている。

# 石油ブームにわくアルバータ州

カナダ・アルバータ州の州都、エドモントン市。ちょうど、開拓時代を再現して楽しむ年一回の祭り〝クロンダイク・デー〟のさなか。七月下旬、十日間にわたって男も女も子供も一世紀前のコスチュームを着飾り、パラソルを手にさまざま行事に出かけて行く。オールド・ファッションのお巡りさんもいれば、西部劇に出てくる酒場のおねえちゃんもいる。取材のため、州政府のオフィスに行ってみて驚いた。広報部長のサローム女史はもちろん、女子職員のほとんどが派手な帽子に色とりどりの祭りの衣装のまま仕事をしているのだ。いかにも祭りをエンジョイしている満足げな市民の表情を見ていると、過去をなつかしんでいるのではなく、まさに七四年夏の今が、アルバータの開拓時代なのだということがよくわかる。「アルバータは若い国です」とサローム女史は言う。

確かにエドモントン市で始まった巨大なビルの建築ラッシュを見ただけで発展しようとするアルバータのエネルギーが十分に感じ取れる。泊まった〝エドモントン・プラザホテル〟も宿泊部分が完成したばかりで、地下の商店街は突貫工事中だった。こうしたビルは市内のいたる所で見受けられる。また、住宅地も郊外に目ざましい勢いで伸びていた。ジャスパー国立公園から約五時間、バスに揺られてエドモントン市に入ったわけだが、途中、見たものは、農地でうなるブルドーザーと日本の建て売り住宅そっくりの住宅団地、それに建設中の石油スタンド、自動車販売会社などであった。旧市内とも言える古くからある住宅地が、よく整備された芝生とこんもり茂った緑の木々に囲まれているのとは対照的に郊外の住宅地は、砂ぼこりが舞い立つではないかと思われるくらい殺風景な環境。道路舗装が追いつかないまま、宅地造成が先行しているところが随所に見られた。

## 次々発見される新油田

急テンポで発展するエドモントン市。それは油田開発を中心とした〝オイル・ラッシュ〟にわいているアルバータ州の象徴といえる。

カナダ随一のエネルギー州、これがアルバータの素顔である。元来は農業国だが、現在急ピッチでエネルギー資源を背景とした工業化の道を歩んでおり、経済的にも変ぼうぶりは著しい。アルバータがどれくらいのエネルギー資源を持っているのか。資源小国の日本から見ればため息しか出ないような数字が並ぶ。

アルバータの原油開発は、第二次大戦前から行われているが、現在のような大規模な開発が始まったのは、大戦後の一九四七年にレダック油田が発見されてからである。これはアルバータを世界の一大石油産出国にのし上げた。その後も続々と新油田が発見され、現在確認されている原油埋蔵量は七十四億バレルに及んでいる。これはカナダ全体の八八%に当たる。また天然ガスの推定埋蔵量は四百五十七兆立方フィートに達し、これもカナダの全埋蔵量の七八%を占めている。これは北米のどの地域をも上回る埋蔵量で、このほかに北東部のアサバスカ川に沿って七千億バレルというとほうもない原油を含んだオイルサンド（砂岩層）地帯がある。現在の技術水準をもってすれば、三千四百億バレルの採油が可能といわれ、これだけでアラスカ州ノース・スロープ油田の四十倍もあるというから驚く。

石油の年間産出量は四億一千六百万バレル（一九七一年）天然ガスは二・四兆立方フィート（同）だが、五本の主要パイプラインでアルバータから中部カナダ、西海岸、それにアメリカに送られている。半分がアメリカ向けだが、アメリカはもとより世界全体のエネルギーに対する需要が増大している折、アルバータの占める重要性は今後ますます高まることは間違いない。州政府が目指しているのも、無限といえるエネルギー資源を背景とした工業基地化であり、二次産業を育成することによって、州の経済基盤を拡大しようともくろんでいる。そういう意味から日本の市場、資本、技術などにアルバータは大きな関心を抱いているように見えた。八月末から九月上旬にかけて、アルバータとしては初めての海外物産展を北海道で開いたのもそうした関心の現れといえる。

街を案内してくれた日系の伊藤国太郎さん（カナダ運輸省勤務）の話によると、昨年、世界中を揺るがした石油ショックもアルバータをニヤリとさせ、州の財政は豊かになる一方。

州議会は金の使い道を真剣に考慮中だそうだ。また、州立アルバータ大学も、新しい学部、研究所が立ち並び、州のお役人が「この大学は、どうも無秩序に拡大しすぎたきらいがある」というほどのいわば〝石油大学〟。日本の学者が教授になったところ、ほかにスタッフがおらず「お前もこい」「あいつもだ」と結局、日本からの呼寄せ学者で占められた学科もあるという。

## 開発反対の声もなし

「開発に反対？さあ、州内ではそんな声はないですね」——いろいろな人に聞いてみたが、返ってくる返事は開発一辺倒。

急ピッチな経済開発でアルバータは深刻な労働力不足。もちろん失業率はカナダ最低。逆に労働人口に占める女子の割合は三一%と高い。それにケタ外れの広大な国土。資源のない狭いところで、優秀な頭脳が過当競争を強いられる日本と比べることは、どだい無理な話だが、景気のいいうちは、だれも内部から開発に反対しないのではないかとつい思ったりした。

最後に州会議事堂に行って環境問題の最高責任者、ウイリアム・J・ユーコー環境相に会って聞いたら、彼はこう胸を張った。

「アルバータは、これから開発を進める新しい国だ。だから他の先進地域がかかえている環境問題に対し、あらかじめ十分な対策を立てることができる。われわれは環境保全のためあらゆる手を打ったと信じている」

## 環境相と一問一答

ユーコー環境相は、北方圏環境会議にアルバータ代表として出席するが、一九七二年、スウェーデンの首都、ストックホルムで開かれた第一回国連人間環境会議にもカナダ代表団の一員として参加している。また、八月十九日からルーマニアの首都、ブカレストで開かれた国連世界人口会議にも出た。そして、九月には北海道へ。記者は、約一時間にわたってユーコー環境相に北方圏環境会議の持つ意義、アルバータ代表として報告するレポートの内容、アルバータが行っている環境保全対策と問題点などについてインタビューしたが、同大臣は北方圏環境会議は「グッド・タイミングである」と強調し、この会議に大きな意義があると語った。以下はその一問一答である。

# 開発計画は環境を考慮して

――北方圏環境会議という初めての試みにどんな意義があると考えるか。

今、北方圏諸国の代表が集まって環境会議を開くことは、時期的に非常にタイミングがよい。昨年来の石油ショックを契機にエネルギー問題に対する関心が世界的に高まっているからだ。もともと地球の北方地域は、南方にくらべ、環境保全の面でさまざまな問題点をかかえている。エネルギーの消費にしても、使用量は南部より圧倒的に多いし、その結果として大気中に放出されたガスの及ぼす影響は当然大きくなる。地下資源の開発にしても、南と北を対比した場合、同じことが言えるだろう。そうした意味で私は北方圏環境会議の開催に大きな意義を見出している。

――アルバータという地域代表として見た場合はどうか。



アルバータ州環境相の
ウィリアム・J・ユーコー氏

興味ある会議だ。なぜなら若い国であるアルバータは、現在、急ピッチで工業化への道を歩んでいる。そのなかで我々が全力を注いでいるのは、やはり経済開発と環境保全との問題だからだ。

――会議ではどんな内容のレポートを発表するのか。

地理、人口、産業などまずアルバータの現状を紹介する。また、住居、暖房、下水処理、雪量、緑化運動など人間の生活環境にも触れたい。さらに都市の過密対策を含めた土地利用計画も報告したいと考える。中心はやはり環境保全対策だが、我々がやっているものは独特でユニークなものだと信じている。その意味からも会議に貢献できると思う。

――アルバータの特色をあげるとどんな点か。

第一にエネルギー州だということだ。石油、天然ガス、石炭の確認埋蔵量は、北米のどの地域よりも上回っている。第二にロッキー山脈以東のカナダの大部分の水源がここにある。そして第三に地形的にみて、山や農地はもちろん、砂漠から氷河まで地球における代表的なものすべてが網らされている。こうした背景のもとで、アルバータは近年工業化に力を入れているわけだが、すでに開発が終わった地域と違って、我々は開発計画に環境を考慮した政策を導入できるのが強味だし、それがアルバータの特色にもなっている。だから開発に関しては十分な対策がとられているので、開発一辺倒ということはない。

## 保全に三つの基本原則

――環境保全に対する基本方針があるのか。

我々は三つの基本原則①人間と動物の安全を保障する②資源開発に当たってはもっとも経済効果のあがる方法をとる③開発が他に悪影響を与えない――を常に法律、政策、開発計画に盛り込んでいる。

――具体例をあげてほしい。

我々は最近土地改善に関する法律を制定した。パイプライン、水道敷設など土地の現状を変える計画はすべてこの法律の対象となり、環境保全の面から厳しいチェックを受ける。石炭などは、今まで掘りっ放しだったが、今度は掘ったあと、完全に元の状態に復元しなければならない。復元の予算措置を伴わない開発計画は認可されない。またアルバータのオイルサンドに含まれる石油の埋蔵量はサウジアラビアの石油より多いが、この開発にも膨大な土地が関連してくる。これも元の状態にもどすような綿密な対策が講じられている。土地ばかりでなく、我々は大気、水、汚物など環境保全のための多くの法律をつくって、厳しい規制を行っている。北海道の会議では、こうした我々の政策を詳しく報告したいと考えている。お互いの情報交換が、さらによい生活環境をつくると私は信じている。

最後にユーコー環境相は、北海道民に伝えてほしいと言ってこう付け加えた。

「個人としても環境会議に出席できることを光栄に思っている」。





# アラスカの石油パイプ実現まで

アラスカでは、ちょうど北極圏の石油を輸送するパイプラインの建設が始まったばかりだった。ラスト・フロンティアと言われるアラスカ、日本の四倍もある広大な国土。ここで一本のパイプラインをめぐって開発か自然保護かで真剣な論議が繰り広げられたことは北海道にいる我々にとっても、きわめて重い意味を持つ。アラスカ州政府パイプライン委員会のジョン・R・ウェーナー委員長とのインタビューを中心に建設に踏み切ったアラスカの表情を報告しよう。

自然保護の声を押し切り、パイプライン建設がついに動き出した背景には、昨年来の石油危機があった。「パイプライン建設によって多少の影響は出るかもしれない。しかし、それ以上にオイルは必要なのだ」という開発側の〝切札〟が、自然保護の声をかき消してしまったのだ。もちろん、これは建設を進める側のアラスカ州政府が、どさくさにまぎれて見切り発車した結果ではない。自然保護団体から出された建設中止を求める訴訟に対し、ことし一月、連邦裁判所は建設してもよいという判決を示し、連邦政府も承認したうえで工事が始まったのだ。だから形のうえでは国民的合意が成り立ったとも言える。

## 保全へ自信と説得力

「ここまでこぎつけるまでに我々は環境保全のために出来るだけの手を打った」と州政府も企業も強調する。あれもやった、これもやった、だから環境破壊の心配はない――という強い自信は、それなりに説得力を持っているのが印象的だった。少なくとも、よく日本の行政や企業に見られるような逃げの姿勢はないと言っていい。

北極圏のノース・スロープにあるプルドー湾で推定埋蔵量二百～三百億バレルという大油田が発見されたのは一九六八年、ちょうど十年前だった。そして翌年には早くもアラスカ湾のバルディーズ港まで直径四十八インチ、千二百キロメートルのパイプラインを敷設、一九八〇年に一日二百万バレルを輸送する計画が石油会社から発表されている。

四月には、このプロジェクトに使うパイプが三つの日本商社に発注されるなど、パイプライン建設計画は、急ピッチに実現に向かうかに見えた。

しかし、事態は急変した。全米的な組織を持つ自然保護団体が自然保護を旗じるしにパイプライン建設反対の運動を始めたのだ。アラスカの国土の七〇％は森林やステップ地帯。野生動物の天国で、クマやオオジカをはじめ野牛、野生のヤギと種類も非常に豊富である。

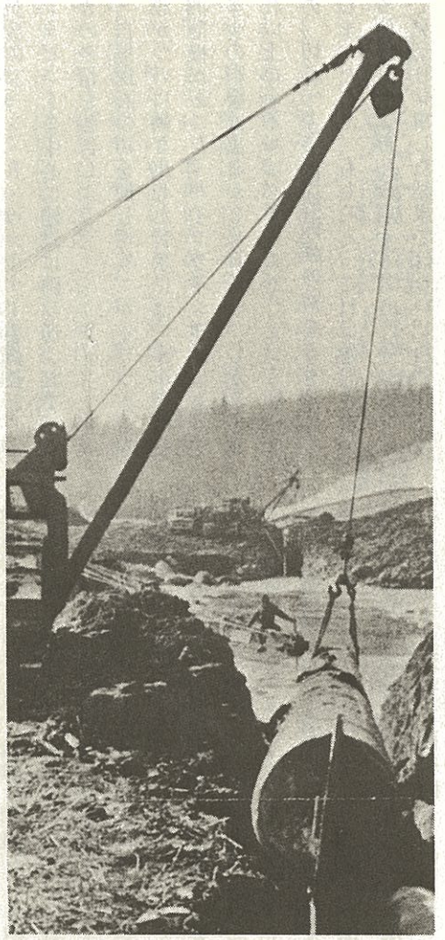
「アラスカを東西真っ二つに分けるようなパイプラインの建設はとんでもない計画だ。野生動物の移動をしゃ断することになって生態学上問題がある。また、アラスカは温度が急激に変化する。パイプが破裂し、環境を汚染する恐れが多分にある」というのが主な反対理由。これは訴訟問題にまで発展し、一九

七〇年四月、地方裁判所は建設の停止命令を出し、さらに上級裁判所にまで持ち込まれていた。

アラスカは米国の中では四十九番目の州で、これからようやく開発を始めようという後進地。ところが、先発の米本土では産業の急速な発展で公害が大きな政治、社会問題としてのしかかり、開発優先の考え方に強い反省が求められていた。そんな転換期に登場したパイプライン計画は、たちまちのうちに米全土をうねっていた自然保護の大波につかまってしまった。開発か自然保護かというテーマの〝モルモット〟にされてしまったわけだが、この間の事情は、やはり日本の中の後進地、北海道と非常によく似かよっている。ついに建設が中止になった大雪山縦貫道路、そして日本最後の工業基地としてその去就が注目されている苫小牧東部工業基地。いずれもアラスカのパイプラインと共通したパターンが感じられる。

アラスカ州政府の中には「アラスカの実情を知らない本土の連中が何を言うか」というような感情的な反発がなかったわけではない。しかし「自然保護派を納得させるだけの対策を立てよう」という厳しい道を選んだ。その研究にはアラスカ大学とアラスカ・メソジスト大学が参加した。予想される障害について、あらゆる方面から対策を研究したという。計画に対する公聴会は、一九六九年にフェアバンクスで行われたが、もう一度、追加して行われた。

ことし四月二十九日、正式に工事が始まった日、地元紙はこう伝えた。「諸君、ついにパイプライン工事は始まった、という歴史的な言葉は聞かれなかった――それだけ、パイプラインを生むまでの陣痛が激しかったということだろう。


パイプラインの敷設も盛んに行われている（アルバータで）

## 各分野を学者が調査

工事中の環境保全にどんな対策が講じられているか、一例をあげてみよう。工事の第一段階で最も精力を注いでいるのは、遺跡の保存だった。パイプラインの建設予定地にそった遺跡の調査は、一九七〇年と七一年の夏、アラスカ大学人類学科の主任教授、ジョン・P・クック博士の指導の下で終わっているが、道路工事開始に先立ち、遺跡保全のための発掘が四月十九日から約十日間にわたってアラスカ大学の考古学者十一人の手によって行われた。

また、州と連邦政府が認可の際につけた条件が建設工事中完全に守られているかどうかを監視する仕事が、アラスカ大学とアラスカ・メソジスト大学の学者たちに依頼されているという。

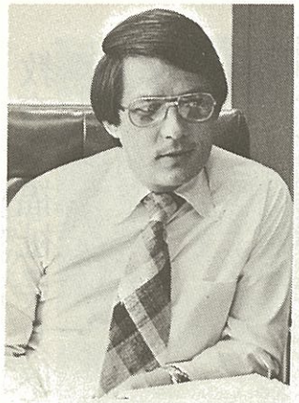
アラスカ大学は、プルドー湾からホーガン丘まで、メソジスト大学はホーガン丘からベルディーズ港までそれぞれ分担区域を決め、監視に責任を持つという仕組み。両大学は、考古学者、人類学者を動員して監視チーム編成の真っ最中だった。これは遺跡保存という一分野の例にすぎない。野生動物の保護、パイプの破損対策や地震対策など、他の面でもこうした学者との協力体制が組まれているという。

ウェーナー委員長の「史上、我々ほど徹底して環境保全対策と取り組んだ例はない」と語った言葉は、自信に満ちていた。





# 経済的発展、環境保全は両立


アラスカ州パイプライン委員長のジョン・R・ウェーナー氏

アラスカ州政府を代表して北方圏環境会議に出席するのは、パイプライン委員会のジョン・R・ウェーナー委員長。アラスカのパイプライン計画は一度、自然保護団体の反対という〝洗礼〟を受けているだけに、それをどんな姿勢や考え方で乗り越えてきたのか――北海道としても非常に関心のあるところだ。そこでウェーナー委員長にインタビューを申し込み、開発と自然保護との調和、地域開発などを中心に聞いてみた。指定されたアンカレジの州政府事務所を訪れてみると、わずか三十一歳という若さにびっくり。改めてアラスカの若さを見せつけられた。私学の名門、シアトル大学で会計学を専攻、軍隊時代、青森県の米軍三沢基地に三年間勤務した経験もあり、北海道も訪れたことがあるという。環境会議には、大きな関心を示し「形式にこだわらず各国代表とフランクに話し合ってみたい。環境問題だけでなく、国の発展と土地利用計画や労働力との関係などについても他国の実情を知りたい」と語っていた。

――裁判所の判決も出て、いよいよパイプライン建設工事に着手したそうですが、現時点でどんな感想を持っているか。

北極圏のノース・スロープ油田からアラスカ湾のベルディーズ港までパイプラインを敷設する計画は、アラスカ州にとっては、歴史的な事業であり、また誇りでもある。この事業には連邦政府は全く関与しておらず、アラスカ州政府独自の計画だ。昨年、石油危機が全世界を覆った時、どうしてもオイルが必要だと痛感した。多くの人がガソリン不足の脅威をハダで感じたに違いない。そういう点からも、我々は石油を輸送しなければならない。

――パイプライン委員会は、どんな仕事をするのか。

パイプライン委員会設置の法案が州議会を通り、我々が動き出したのは六月中旬である。州政府と企業との間に立って調整作業を行うのが委員会の仕事で、三人のメンバーが知事から任命されている。工事そのものの監督は別の組織があって我々は行わない。

――訴訟問題で工事のスケジュールが相当遅れたが、完成のメドをいつに置いているのか。また、建設費は最終的にどれくらいになるのか。

現地の工事は五月初旬から始まっている。現在、パイプライン敷設のための工事用道路の建設を行っているが、我々は一九七七年の完成を目ざしている。現段階で建設費を推定することは難しいが、おそらく四十億から五十億ドルはかかるのではないか。

## 教育や福祉にも役立つ

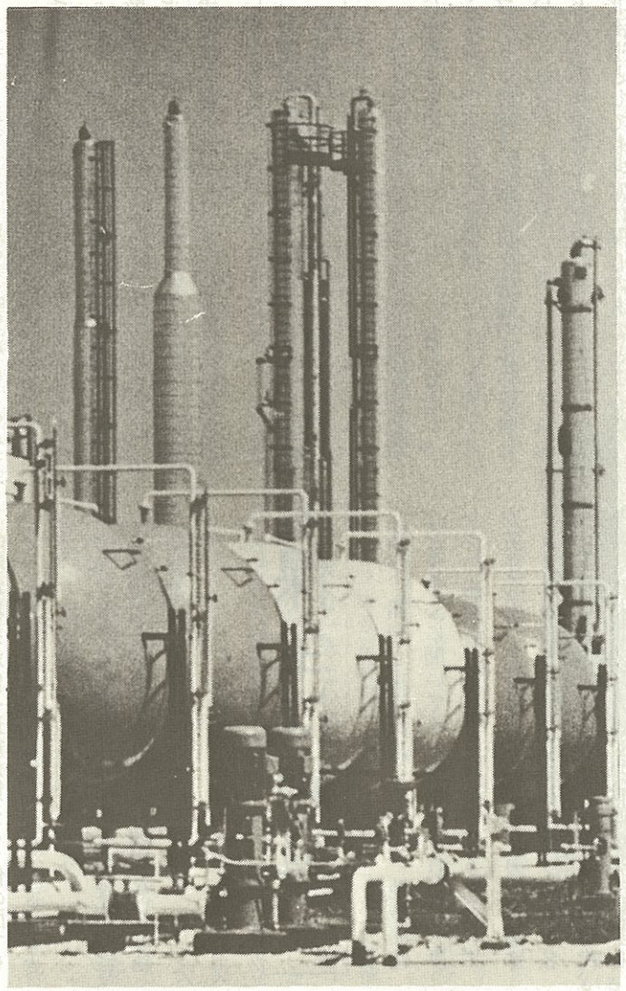
――州政府としてパイプライン建設にどんなメリットを期待しているのか。

建設費は州政府が先行投資するわけだが、一九八〇年からは利益がどんどん上がってくる。今のところ年間十億ドル州政府に入ってくる計算だ。長い目で見た場合、油田開発がアラスカの地域開発に貢献すると確信している。

規模は小さいだろうが工業化も進むだろうし、教育や社会福祉の面でもよい結果をもたらすと思う。また、建設工事に関してもアラスカ人を優先的に雇う方針をとっている。オイル輸送が始まったら産油の一二・五%はアラスカが受け取るが、残りはカリフォルニアの市場に出されることになるだろう。今のところ特に日本との提携は考えていない。ただ油田から本管に結ぶ枝管は別にして、本管は日本製のパイプを使用することになると思う。

――パイプライン委員長として環境保全問題をどうとらえているのか。基本的な考え方を聞かせてほしい。

自然保護団体の反対で着工がストップしていたが、こうした事業を進める際、必ず障害というものがつきもので、影響を皆無にするということは不可能だ。我々は環境への影響を最小限に食い止めるため最大限の努力を払い、科学的にも対策を研究した。そうしたうえで建設を始めるのだからこの点はわかってほしいと思う。特に問題になった野生動物や魚の保護対策には、アラスカ大学の参加を得て史上例のないほど徹底した研究を行った。工事前に膨大なエネルギーと金を注ぎ込んだわけだが、我々は自然保護対策には自信を持っている。また、遺跡の保存については、アラスカ大学とメソジスト大学にそれぞれ受持ち区域を割り当て、工事の監視を続けてもらうことにしている。このほかにも工事中の下水やゴミ処理の問題、輸送途中の油もれとか、油が海に流出するなどの心配もあるが、我々はそれぞれ十分な研究を行い、対策を立てたつもりだ。自然保護団体は、今後もいろいろ言ってくるかもしれないが、私は経済的発展と環境保全は両立すると考えているし、そのための努力も真剣に行ってきたつもりだ。

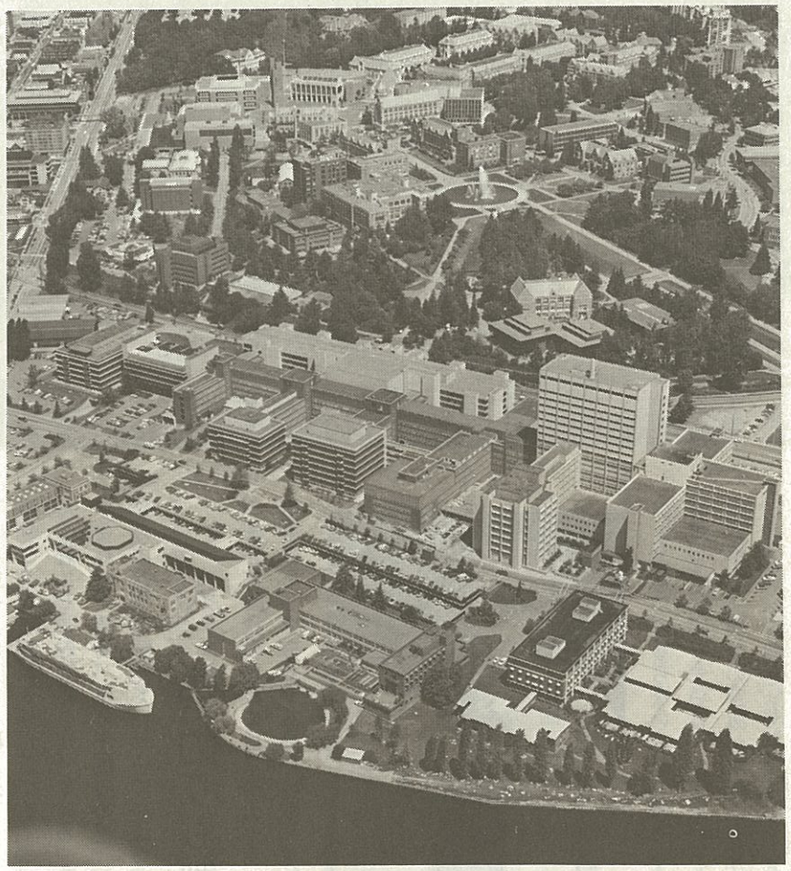


液体ガスの貯蔵施設の建設も進んでいる（アルバータ州で）





# 環境保全と国民性　みんな密接に



実によく整備されたワシントン大学。湖に面した中央の丸い人工池にマスノスケが帰ってくる

## サーモン、日本人は取り過ぎ

カナダ、米国を回ってみて、非常に強く感じたことは、環境問題はその国の国民性と密接に連動しているということだった。みんなの中の自分、社会生活の中での個人の義務、それをどう考えるかによって大きな差が出て来るように思える。最後に釣りや観光などのレジャーを通じて印象深かったいくつかの点を述べてみたい。

おだやかな入江と湖、それに静かに流れる河川。北米ワシントン州のシアトルは、水に囲まれた美しい都市である。ピュージェット湾やワシントン湖には、ヨットや小型ボートがいっぱい。鮮やかな色彩を水面に映して走り回っていた。釣りも盛んで、サケ料理が名物。人々は水とは切り離せない生活を送っている。

ここのワシントン大学水産センターにローレン・R・ドナルドソン名誉教授を訪れた。サケ・マスのふ化を研究している〝魚博士〟で、北海道とも縁の深い人。

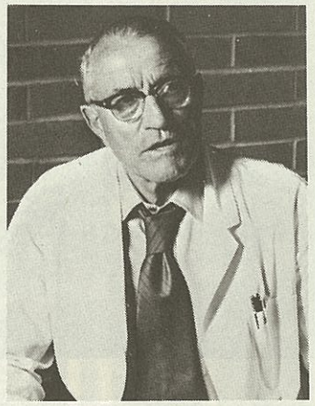
日本海に新しい魚資源を育てたいという道水産部の要請にこたえて、四十三年から毎年、キングサーモン（マスノスケ）の稚魚を七十万

匹も送り続けている。これらの稚魚は余市川から放流されているが、今春初めて日本海の回遊魚の中からシアトル生まれらしいキングサーモン二匹が捕獲された。普通、マスノスケが生まれ故郷の川に帰ってくるのは放流してから四、五年あと。「いよいよ、今年こそ余市川に戻ってくるのではないかと北海道側は色めき立っていますよ」と伝えると「わしのキングサーモンは、必ず戻ってくるさ」と自信たっぷりの表情。ワシントン大学の構内に千平方メートル足らずの人工池があり、湖から海へと続いているが、毎年、産卵期になると、数千匹の〝彼の子供〟が戻ってくるという。

「昨年は五千四百匹帰ってきた。一九七〇年は三千匹だったから年々増えている。北海道も大丈夫だよ」とドナルドソン名誉教授は判を押した。

気のいいじいさんという感じの教授は、それからサケの資源保護をめぐって延々と熱弁をふるい始めた。

「日本はサケを取り過ぎる。アメリカ人は二匹しかとらない時に日本人は四匹もとる。これでは、いくらふ化事業をやっても、魚は増えるどころかいなくなってしまう」というのだ。一組の親から生まれる卵の数、成長途中の死亡率、アラスカのようなフレッシュ・ウオーターの場合、公害で川や海が汚れた場合―学者らしく教授は捕獲の限界を数字を使って繰り返し説明した。こうはっきりしたデータを並べられると、取り過ぎるやつが悪いということがはっきりしてくる。「アメリカ人は厳しくこの限界を守っている。魚がいなくなれば、結局、自分が困るのだ。日本人はこのことを理解していないのではないか」



ワシントン大学のローレン・R・ドナルドソン名誉教授

## 一人三匹、釣りも制限

確かに教授の言葉には説得力があった。ふ化事業をしているからいくら取ってもいいということにはならない。アメリカでは、釣りも厳しく制限している。ライセンスが必要な州が多く、サケの宝庫・アラスカ州ですら、一人一日三匹まで。しかも個々にカードがあって、釣った場所や魚の種類、大きさなどを細かくチェックされる。ワシントン州でも一日の制限は三匹、オレゴン州に行くと二匹に抑えられる。シアトルのサーモン・ダービーにはよく参加するという釣り好きの貞広正さん（三菱商事シアトル支店）も「それは中には、四匹も五匹も釣るやつはいるだろうが、大体においてアメリカ人は、この制限をよく守っている」という。

しかし、日本人観光客が押し寄せ、ブーム状態にあるアラスカのアンカレジで日航支店の職員からこんな話を聞いた。

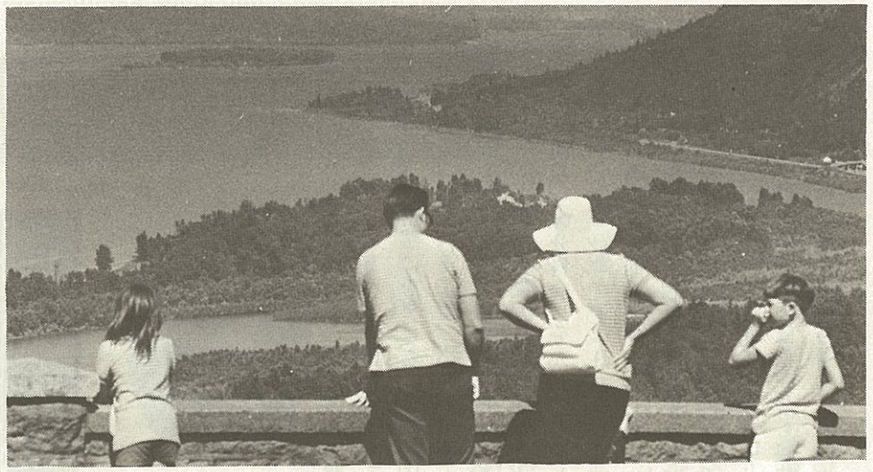
「レジャーも大型化して釣りを目的に来る観光客も増えてきました。ところが、あまり規則を守らない。アラスカまで来たのに三匹くらいでやめられるかという感覚が強いのでしょうね。現地ではいろいろ苦情が出ているようです」

## 自然の景観に手かけず

二千メートルから三千メートルクラスの山が、これでもか、これでもかと迫ってくるカナディアン・ロッキー。バンフからジャスパーに抜ける有名な山岳高速道路、コロンビア・アイスフィールド・ハイウエーを観光バスに揺られ、延々九時間かかって横断した。カナディアン・ロッキーのケタ外れの雄大さ、美しさは言葉では説明のしようもない。延々とマイクに向かってしゃべり続けていた運転手君の話によると「諸国に宝物を配達中だったワシが、ロッキー上空で突風にあい、思わず宝物の大半を落としてしまったため、ため息しか出ないようなこの大自然が生まれたのだ」という。







コロンビア川を中心によく整備されたオレゴン州の州立公園

いずこも同じ、観光バスガイドには伝説がつきものだが、自然もこれだけスケールが大きくなってくると、伝説が真実味をおびてくるから不思議だ。

バスは定員四十人で満員。大半がアメリカから来た年配のカップルだったが、日本人が五人も乗っていたのはちょっと意外だった。

シアトルで開かれた国際放射線影響学会の帰りだという京都のお医者さんが二人。そのうちの一人が言った。「食べ物なんかは、日本に住んでいる幸せをつくづく感じるんですが、公園だけは日本とえらい格差がありますね」

日本と比べてあれもいい、これもいいとは言いたくないが、公園に関する限りはうらやましいほど、それぞれの目的に応じて自然保護や整備が行きとどいているのは確かだ。カナディアン・ロッキーは、国立公園地帯で動物の保護区にもなっている。ハイウエーのすぐそばでクマを見つけてバスが急停車、アメリカ人観光客が総立ちでカメラのシャッターを切るという騒ぎが二度もあったし、シカや野生のヤギも時々見かけた。

また、人工的なものはほとんど見かけず、できるだけ自然の景観に手を加えないという配慮も徹底していた。ハイウエーの最大の見せ場であるアサバスカ氷河付近も、道路沿いに売店と駐車場を兼ねたレストランが一軒、氷河に近い展望台にも雪上車の乗車券売場兼売店が一軒あるだけ。レストランでは、観光客がおとなしく列をつくって気長に順番を待っていた。もちろん、ロッキー観光の基点になっているバンフやジャスパーの街には、宿泊施設やレジャー施設が実によく完備されている。ピンは一泊七十ドルもする高級リゾートホテルから、キリはヒッチハイクをしている若者用のロッジまでよりどりみどり。人々はそれぞれのフトコロ具合に応じて観光旅行を楽しんでいるわけだ。

一年半前からカナダ観光旅行の準備を進めてきたというあるアメリカ人夫妻は「こんどは二年後に日本へ行くつもりだ」と言っていた。アメリカ人の生活の中で占めるレジャーの比率は、想像以上に大きい。極端にいえば、この夫婦は日本旅行をするために、これからの二年間働くわけだ。

## レジャーに金かける

ポートランド市に住んでいる札幌市の交換職員、佐藤宣男さんが「とにかく、こっちの人はレジャーに金を注ぎ込むのには驚く。一般市民の食生活は実に質素だし、おやじが酒を飲んでオダをあげることもまずない。それがレジャーとなると、五千ドルもするキャンピングカーは買う、ボートは買うといった具合で、日本とは生活のパターンがまるで違う感じだ」とお国柄を説明してくれた。

こうした考え方の違いが、都市公園の整備や自然保護の思想と無関係ではないようだ。

# 人間環境学

## 自然を生かし、自然に生きる
## ――これがモラル



高桑栄松氏

森と湖、緑と大陽、豊かな天然資源――北欧、カナダ、北米、アラスカ、ソ連などのノルデイック・カントリーは自然と人間が一体になって未来を創造しているように見える。しかし、一昨年、ストックホルムで開かれた国連人間環境会議で〝かけがえのない地球〟への表として出席した高桑栄松北大医学部長から北欧やカナダ、北米などの大学、研究機関が人間環境学とどう取り組んでいるかを聞いてみた。

会議は最初四つの分科会に分かれて討論し、そのあと七つのブロックでグループ・ワーキングをした。環境と人間とのかかわり合いについて幅広い角度から討論したが、結論的にいえば世界はまだ人間環境学の学問的な体系化が出来ていない。ようやく方向を見出しかけた段階ということだ。例えば私が最も興味深かった〝学者の姿勢〟というテーマについてもそれが言える。

環境科学という幅広い分野に責任ある指摘なり、サゼッションをする学者の役割はますます重要になるが、果たして学者はスペシャリストがいいのか、ゼネラリストがいいのか。スペシャリストは水なり、空気なり、緑なり、特定の分野に詳しいが、経済や政治、国際関係には疎いというケースがある。ゼネラリストは何にでも幅広い知識があり、相関関係まで掌握しているにしても、公害物質の科学的分析ができないといったように、なかなかオールマイティとはいかない。

こうしたあい路が教育現場や公害対策などにもあらわれ、総合的なカルテを見出し得ない原因になっているのは事実で、各国の学者とも「環境学のエキスパートを育てるにはどうすべきか」という点に苦慮している。

私の考えではまずスペシャリストであるべきで、専門的な知識を積み上げたうえで、関連した分野を幅広く吸収し、ある時点でゼネラリストになるべきである。そうした積重ねがやがてディシジョンメーカー（決定者）となって問題を処理する。そういった意味で学問の世界も各分野にまたがるスペシャリストいわば国際的な視点を持つべきだと思う。

会議後に各地の環境問題研究の実際を視察したが、ストックホルムにある都市及び地域計画研究所は非常にユニークな機関だ。

ノルウェー、フィンランド、スウェーデンデンマークなど五カ国で金を出しあって一九六八年七月に設立した。将来の都市づくりや地域計画といった大きなプロジェクトを定めるのに一国だけでは経済的、人材的にも十分なものが出来ないと、気候風土の似た国が共同で発案したもので、研究生は一カ国十人ずつ。三学期制で二学期までストックホルムで学習し、あとの一学期は持回りで各国で実習するという形式だが、こうしたやり方にノルディック・カントリーの英知を見た思いがした。

ウィーンで健康に関する国立共同研究所、パリの第七大学環境学科なども視察したが、理論的には進んでいるようだ。しかし各専門家の協力体制は必ずしもうまくいってはいないという印象だった。

また、アメリカではマサチューセッツ州立大学の健康科学部、ウィスコンシン大学の環境科学研究所、イギリスではウォーターロー大学の環境科学科なども訪れた。これらはいずれも四、五年前から設立されたもので、学問的な分野では環境学といったものへのアプローチが日本より数段進んでいるということがはっきり言えよう。

ただ遅ればせながら日本でも北大の大学院に環境科学研究所（仮称）を設立する機運が盛り上がっている。これは学部別の大学院という従来の考え方から大きく飛躍して、あらゆる学部から環境問題に取り組むエキスパートを養成する目的でつくられた資源や人口計画、公害、産業、自然保護などを長期的に研究する画期的な機関といえる。

このパターンはウィスコンシン大の環境科学研究所がすでに実践していて、各分野の教授によって構成された委員会が修了者の決定や博士号の授与を決める。

この構想は文部省や道の理解もあるので近年中には実現するのだろうが、重要なことは将来にわたっての人間環境学は単なる公害対策というワクに縛られないということだ。人類の生存のために未来はどうあるべきかをみつめ直すための学問であり、いずれは人口問題と真正面から取り組まなければ環境問題の位置づけは出来ないと思う。

世界的にみて、一九五、六〇年代はそれぞれの国が国立公園の指定や保護でもって環境保全を唱えた時代、七〇年代は地球全体に広がって〝失ってはならないもの〟を考える時代になった。そういう認識の度合いという点では学問と同様、ヨーロッパの環境意識は高い。

例えば、私はコペンハーゲンのあるシェラン島を車で南北に縦断したが、平たんな島のいたるところに人工の森林があった。いっときの危機感であわてて森を作ろうと思っても出来るものではない。急激に工業化した日本がヨーロッパに追いつけ、追い越せとスピードアップしている間に、彼らは試行錯誤しながらも徐々に〝守るべき自然〟をとらえてきたのだと思う。

その過程で、ヨーロッパの都市の市民は自分の周りの木や動植物に〝友達意識〟を育ててきた。北欧の都市の一軒家にはどこの家にも庭が広々とあって季節の草花が競い合っているし、スイスの団地では出窓に植木や花のハチが見事に並んでいる。自然は生活の一部になり切っているという感じだ。イデオロギーや危機意識からの押しつけでは絶対にない。

そういう認識の根底にあるもの、それは完全な個人主義だと思う。公衆のモラルというが、実は自分のモラルから出発しているのだ。自分が生きるために、自分がうるおうために、自分の生活を守るために、他人の権利も尊重する。日本人は個人的な意識より集団のイデオロギーが先行する。自然に対する認識でさえ「全体の利益のため」だ。日本はまだ未熟児で、西欧文化の歴史に学ぶところが多い。

**高桑　栄松**　昭和十六年北大医学部卒。二十九年から二年間、アメリカ・ピッツバーグ大の大学院（公衆衛生学）三十二年北大教授、四十五年から同医学部長。チェコ、ユーゴ、アメリカなど各国を訪れ、主として産業医学、予防医学を視察。オーストリア産業医学会の名誉教授。著書に「新しい環境衛生」などがある。

**国際環境教育会議**　六月四日から七日までデンマークのコペンハーゲンの郊外、ルングステッドで開かれた。ＯＥＣＤ（ヨーロッパ経済協力機構）がスポンサーとなって世界の一流学者、教育関係者を招いてグループ・ワーキングや全体討論を行うもので、昨年に続いて二回目。十五カ国から四十一人の学者、九カ国から専門家二十八人、ユネスコ、ＷＨＯ（世界保健機構）など十の機関から十八人の合計八十七人が参加。日本からは高桑教授と高松京大工学部教授の二人が出席した。

# 見て来たソ連の農村

モスクワ、レニングラード、ミンスクを回り、まず目についたのは力強い高層住宅の建設譜。大きなクレーンをすえ、工場から次々とトラックで運ばれてくるコンクリートの家屋部品を上へ上へと十数階に積み重ねている。いわゆる組立て式で部品は一部屋の壁が単位。それぞれ規格があり、必要に応じてこれらを組み合わせるが、地震がないせいか鉄筋、鉄骨組みはみられず、数むねの工事を同時に進め、かなりのスピードだ。特に郊外地区での建設はすさまじい。いずれも厳格な都市計画の中でアパート群に学校、生活物資販売所、文化、休養施設などを配置し、それ自体生活機能を持った団地となっている。

また、ソ連は国じゅうに美しい緑があふれている。街、団地は必ず林を抱え、道路は市内、市外を問わず延々と並木が続き、ソフホーズ、コルホーズの村は樹木の間に埋まっている。歩道も三列、四列の並木で車道から厳密に区別され、その中を舗装の通路が走っている。これだと無謀運転の車が突っ込んできてもまず木で止まり、はねられる恐れはないだろう。木と木は三メートル程度の密植で、日本のようにポツン、ポツンといったものはなく、また枝は伸びるにまかせ、葉が頭とすれすれになるほど。

人々はその緑のトンネルの中を出勤、あるいは家庭へと急ぎ、夕暮れにはいたるところに設けられたベンチに腰を下し、友人や恋人と語り合い、自由な時間を過ごしている。

しかし、木は放置してあるのでもなさそうだ。都心の人通りが激しく、一列しか街路樹のないところは木の根元にマス代わりに鉄製のスノコをおいてあるが、その大きさは二メートル四方もあり、歩行者に踏み固められないようにするとともに雨水の浸透、空気の補給をよくしている。

街路樹の植栽も急ピッチ。独ソ戦で街が完全に破壊されたミンスクは現在人口百万を突破し、戦前の四倍になっているが、植樹数は三百万本といい、もう二十年もすれば素晴らしい緑の街になるだろう。さらにいま、市をめぐる幅五十キロの環状線建設を計画中で、これが完成すると市民一人あたりの緑地面積は三十平方メートルになるという。

一貫した都市づくりと緑づくり―社会体制の違いは別として力強さ、遠大さを感じさせる。

しかし、あわただしい膨張途上の市やその周辺の動きをよそに農村はやはりのどかで人情がこまやか。緑におおわれた静かなたたずまいの中に丸太組み、特有の窓飾りをつけた家もみられ、ロシアの伝統が息づいている。おりあってモスクワ郊外セルプホフ市のボルシェビーク・ソフホーズを訪れることができた。農地四千三百ヘクタール、年間二百万プルードの生産をあげる模範農場だが、キュウリの出来栄えをほめると〝食べてみろ〟という。昼食後の果物にモモがでた。直径四センから五センと小柄で、日本のと形が違う物珍しさから口にし〝甘い〟といったら帰りにごっそりとくれ、処理に困った。草木は北海道のに実によく似ている。畑の道路端でその野花をみていたら〝愛する〟〝愛さない〟と一枚々々花びらをちぎりながら〝あんたは運がいい〟と笑顔をつくり、握手の大きな手をだした。七、八歳の男の子に札幌市のバッジをやったら五分もたったころようやく探しあてたといった表情で、小さいけれどきれいなバッジを持ってきてエリにつけてくれた。

会う人は全部親切で、人なつこかった。

そして〝ニチェボー〟で万事を表現するくったくなさ。果てしない大地から生まれてきた気質かも知れない。

北方圏調査会・事務局次長

**横川寛二**





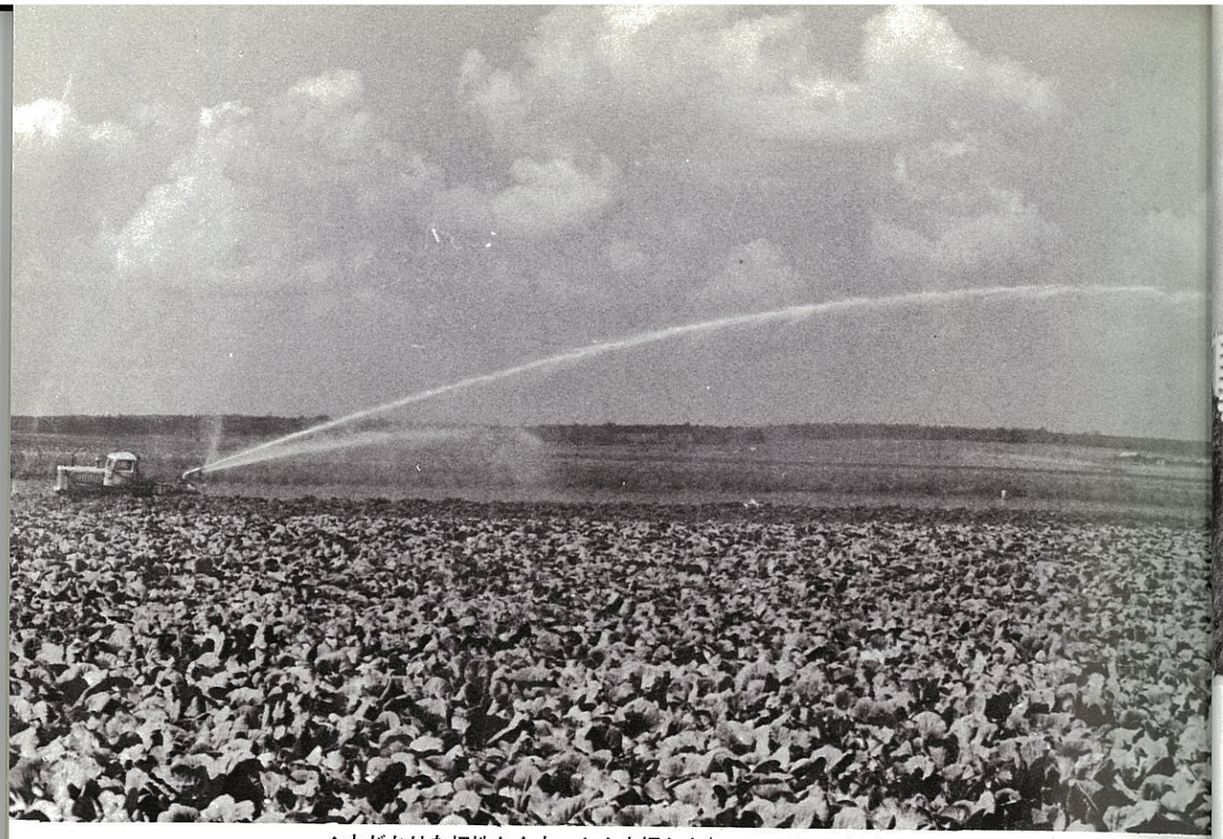
土曜、日曜日となれば青少年はサイクリングで郊外へと鋭気を養う（モスクワ郊外で）

## 緑がいっぱいのソ連の農村

シラカバやドロヤナギの林、草も北海道とほとんど変わらず「いまモスクワにいるのだ」といったような違和感はまったくない。変わっているのはソ連の自然のとてつもない大きさだ。走っても走っても、切れない道路、沿線の林。空からの眺めは大樹海の中にソフホーズ、コルホーズの畑が点在しているにすぎないが、その一つの畑が千から二千ヘクタールもある。だから国全体を合わせると農地面積は二億五千万ヘクタールにもなる。うらやましい大地の国である。

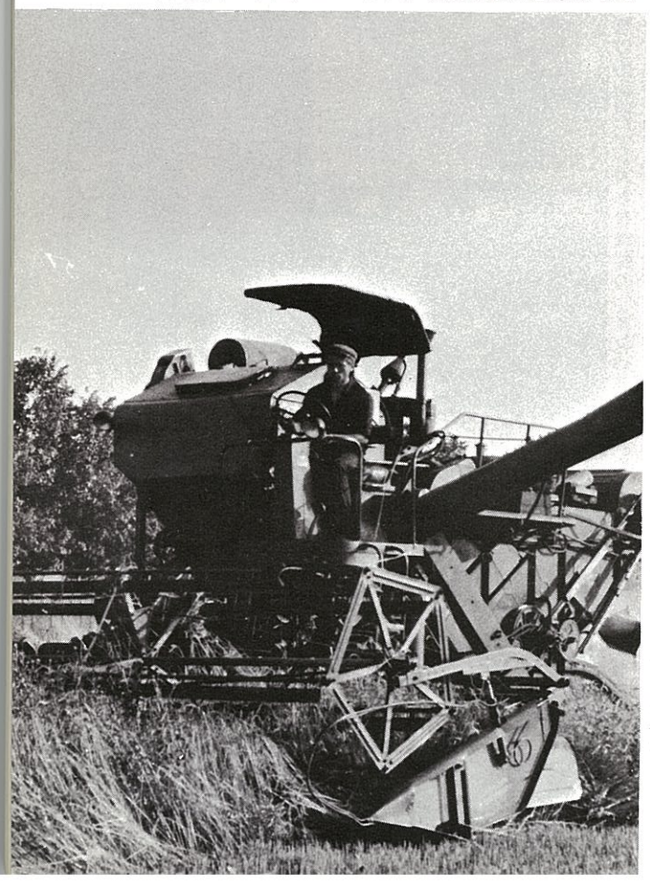
北方圏調査会が提唱した北海道とソ連との農業技術交流の第一陣として訪ソした村山大記団長（北大名誉教授）塩田弘行氏（ホクレン技術顧問）池川義雄氏（生産者代表）横川寛二氏（北方圏調査会事務局次長）ら一行四人は、モスクワ、レニングラード、ミンスクなど、じゃがいもの研究機関や施設、ソフホーズなどを訪問、ソ連技術者と交流を深めた。特にロシア共和国のじゃがいも研究所は、日本人が初めて視察した研究機関であった。以下は視察団の目に映ったソ連の自然と農村の姿である。

（カメラ・横川寛二）



▲大がかりな畑地かん水。かん水幅七十㍍、ソフホーズの畑では随所でこうした機械が動いている（モスクワ郊外で）

▼小麦畑では大型コンバインが収穫作業に懸命だった



▶生育中のイモ（晩生）を抜き取り、まずまずの出来で満悦のソフホーズ所長





▲急ピッチで進められる高層住宅の建設（モスクワ郊外）

▼いずこも変わらぬ農村ののどかな風景（ミンスク郊外のソフホーズ農家）



# 祝 北方圏環境会議 開催

（順不同）

北海道知事
堂垣内尚弘

札幌市長
板垣武四

旭川市長
五十嵐広三

小樽市長
稲垣祐

室蘭市長
長谷川正治

函館市長
矢野康

江別市長
山田利雄

美唄市長
沢田孝史

滝川市長
吉岡清栄

帯広市長
田本憲吾

清水町長
矢地広三

福島町長
深山久三郎

網走市長
佐藤忠吉

松前町長
坂本富雄



▲夕方になると街角には自家菜園から収穫したスイカ売りが姿を見せる。客をみて売込み活発（モスクワ・コムソモルスカヤ駅近くで）



▶伸び放題の街路樹にも大きな鉄製のマスを配置し、こまかな気を使っている

◀街路樹の下部には全部虫がはい上がらないよう薬剤が塗ってある（ミンスク市）

# 北方圏を考えるシンポジウム

「自然環境論の立場から」　名古屋大教授　樋口敬二氏
「文化人類学の立場から」　帯広畜産大助教授　黒田信一郎氏
「南北対比の立場から」　北大助教授　中野美代子氏
司会　北大教授　関清秀氏

## I　私たちの北方圏

**北海道は今まで、日本列島の一番北にある島として、長いあいだ本州志向型を続けてきた。……だが、このへんで、じっくり考えなおす必要があるのではあるまいか。北海道を従来のように南と北の関係としてばかりでなく、東と西の関係で捉えてみてはどうだろう。北海道が北方圏構想を打ち出し、今秋九月、北方圏環境会議を開くのも、こうした発想にほかならない。北方圏調査会は、北海道が主催して初めて開く国際会議を実り多きものにするため北海道、札幌市、函館市、帯広市、北方圏生活環境展実行委員会と共催で、七月十二日から四回、道内三都市で〝北方圏を考えるシンポジオム〟を催し、環境会議と同一テーマにつき、道内外の一流講師と参加者と討議し、あすの北海道の進むべき道を考えてみた。**

### その意義と内容

関　清秀（司会）



関　清秀氏

これからシンポジウムに入ります。北方圏とはなにかということですが、私たちはきわめて常識的に北方圏という言葉を使っております。最近、秋の北方圏環境会議を控えて、かなりにぎやかに北方圏という言葉が出てきております。しかし、その内容は、実はかなりぼく然としているところがあるわけです。

暗黙のうちには了解の一致があるようですが、突きつめて考えてみるとどうもはっきりしない。特に北方圏の下限というか、南限があまり明確でないような気がします。それで、必要に応じ、つまり目的に応じて北方圏に関してそれぞれの定義が下されている。例えば、当北方圏調査会の北方圏に関する定義を見ると、アジア、ヨーロッパ、アメリカ大陸の北方地方と非常に大きな表現で、いわゆるノーザンリジョン、これが北方圏だ。この中で、一応北緯四〇度以北、シベリア極東、カナダ、アラスカ、これを主要対象とする。その他、東ヨーロッパ、北ヨーロッパも含む、こういう説明がついている。それからアジアの場合には、北緯四〇度以北の中国東北地方、モンゴルのほか、『将来国交が回復すれば…』北朝鮮も考えられる。こういったような幅広い内容が与えられている。地理的な限定で言うと、北緯四五度以北―ただし、アジアの場合は北緯四〇度。時間的に考えると、この地理的、自然的な限定が変更することもあり得る。これは、政治的に国交が回復すればという表現ですが、あるいはまた、経済上の必要が生じてくるとさらに拡大した地域との交流も行われることになるわけです。また文化的、社会的に交流が拡大していくということもあり得ると考えられる。次にもう一つの北方圏の定義ですが、札幌市が最近、北方圏地図というものを作った。これを見ると、自然的な条件、気象にしても、各条件ごとに―例えば気温、降雪、降雨、あるいは動植物の分布、こういったようなそれぞれの条件ごとに地図を作って、その何枚かの地図を重ね合わせ重複した地域、これを北方圏というふうに規定している。その地域を具体的に申しますと、まず北海道、アメリカ合衆国北部、ノルウェー、スウェーデン、ソ連の北半、モンゴルの一部。こういうふうにして、札幌市の場合には、目的は北方圏の諸都市と交流をはかって、北方的、近代的な都市づくりをしたい、こういうことでございます。このように、なんらかの圏、特定の圏を定める場合に、圏を確定する方法はいろいろなやり方があるわけです。開発計画や政策を立てる場合に、その対象地域を決めなければならないわけですが、行政的に、あるいは自然的な条件に限られた地域の中にとどまっているわけにいかなくなってきている。例えば、三期計画で申しますと、広域生活圏、国の計画では広域市町村圏、中核都市圏というように、さまざまの圏域の設定が行われているわけです。こういうような線を引くことで自体が目的ではありませんで、その地域の中でどういう事業活動を行うかという内容が問題になるわけです。私は社会学を専攻しておりますが、社会学の立場から申しますと、そういう地域を定める、圏を確定するということは、それが地域内で社会連帯の意識が強く作用している、つまり、その地域内で共同体の意識があるということ、これこそ真の意味での社会でありまして、北方圏がそこに至るまではまだ時間がかかるかと思いますが、やがて北方圏も各種の交流を通じて、一つの共同体的な意識、社会連帯の意識が生まれるというところに大きな目標があるのではないかと考えられる。さて、シンポジウムのテーマは「私たちの北方圏」ということでございます。講師の先生方にはそれぞれのご専門の立場から「私の北方圏」ということでお話し頂くわけでございます。先生方のお話を聞いて、私たちの北方圏に対する概念、その内容をさらに豊かにしていきたい。そしてこのシンポジウムを実りあるものにして頂きたいと思います。

**関　清秀**　大正六年青森県生まれ。昭和十五年東大文学部卒。昭和十六年から企画院経済安定本部。昭和二十二年北大法文学部助教授。同三十年米国ノースカロライナ大学社会科学研究所客員研究員。同四十年北大文学部教授。道開発審議会特別委員、同総合開発委員会、同都市審議会各委員。著書に三十九年〈都市の青少年〉四十一年〈都市の家族〉。





## 札幌の技術活かそう

樋口敬二

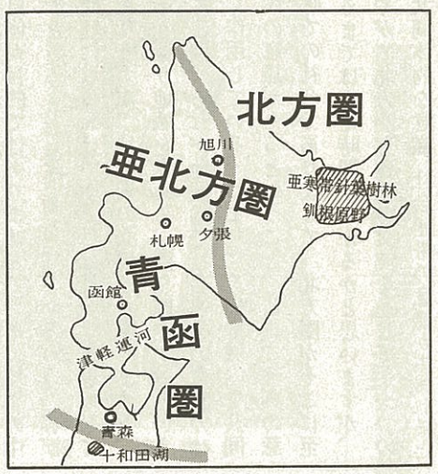
私、数年前まで二十年ばかり札幌に住んでおりまして、いわば北方圏を下から見上げる感じで暮らしていたわけです。北方圏という言葉を聞いたうえでは、北方圏の中心部というかシベリアとかアラスカという場所は、はっきりとイメージがつかめる。昨年、シベリアのヤクーツクに行ったんですが、圏というのはいつでもそうですが、本圏の方はっきりしているが、端の方ははっきりしていない。私もシベリアに旅行して、夏の時期にナホ



樋口敬二氏

トカから汽車でハバロフスクへ行く時、その景観がちょうど石狩平野を走っているような感じがする。その場合に気をつけなければいけないのは、旅行者であるということ、もう一つはナショナリズムというか愛北海道というものがあるので、ひいき目に見るということがあって、〝同じだ、同じだ〟と思ってしまう傾向がある。そういう意味で、北海道は北方圏の一部であるような感覚を持った。

一昨年の暮れに、国立民族学博物館長になられた梅棹忠男さんと対談することがありましたが、その時、北方圏の話が出た。北海道は北方圏だ、シベリアあたりと同じだと言ったら「とんでもない。北海道は北方圏ではない」。というのは、一見似ているようにみえるが、一番違うのは大陸でないということ。大陸の厳しさがない。いくら言ってもここは島国である。梅棹さん自身、蒙古とかああいうところで暮らされたからだと思いますが、大陸のもつ自然の厳しさというものが北海道にはない。北海道は温和な島国である。それを北海道は北方圏の一部だと思ったら間違いだというお話だった。またその時、話題になったのは、北方圏という言葉を国際的な論理で使うのか、国内的な論理で使うのかはっきり分けなければいけないということ。北方圏の定義のしかたというのは、ある意味では政治的と申しますか、国内的論理で使う場合、中央から金をたくさん持ってこようとか、そういうために使う場合の北方圏というものと、外国と付き合っていこうという場合の北方圏の定義のしかたというのは、必ずしも一致しないのではないか。やはり、なんらかの形で、なになにの立場からの北方圏を定義するということにしておかないと困る。




## 北海道は「亜北方圏」

そんなわけで、私は自然環境論の立場からの北方圏ということを考えてみたいと思います。

大阪市大の吉良竜夫さん。この方は生態分布をグローバルな立場からやっている有名な人なんですが、この方が地球上の気候生態図を作っている。これの分け方というのは気温と降水量—気温が低いか、高いか、乾燥しているか、湿っているかということで分けている。これをみると、はっきりしていることは、一番北にツンドラ—寒帯がある。その次に亜寒帯—針葉樹林、北海道はなにかというと、この分類でいうと冷温帯の落葉広葉樹林という形になっている。私たちが北方圏を考える場合、なにをよりどころにしたらいいかという時、気候生態図で言う亜寒帯の針葉樹林帯、これをもって北方圏と定義すればいいのではないか。それでいくと、北海道は根釧原野からオホーツク海に面した極く一部が亜寒帯針葉樹林であり、その他の大部分は冷温帯の落葉広葉樹林帯ということができる。従ってはっきりした結論は、北海道を一体として考えるのは無理だ。北海道を区分するということです。自然環境論の立場からいくと、北海道全部を北方圏と考えるのはまずい。あえて入れるとすれば〝亜北方圏〟—北方圏まがいで





ある。北方圏とまではいかないということをはっきり認識する必要があるのではないか。京都に研究所をもつコミュニケーションデザイン誌、これは加藤秀俊さんが所長をやっているのですが、今年の五月に、「日本一九八〇年」というレポートを書いた。一九八〇年へ向けての日本の予測というか、自然、科学など全部を含めた本です。その中で地域論というのが出ていまして、国立民族学博物館の石毛さん、佐々木さん、京大教授の米山さんの三人が書いている。この中でおもしろいと思ったのは、やはり北海道二分論です。旭川と夕張を結んだラインでわけて、北の方を北海圏—地域開発を考えていくうえでどうしたらよいかという地域としての取扱いです。その次に、十和田湖以北と北海道の南を合わせて青函圏としている。

この人たちの論点というのは、ある意味では変わっているのですが、津軽海峡を海とみていない。日本列島で、太平洋側と日本海側を結ぶ運河というのはこれ一つだ。だから津軽運河とみている。この両岸に工業地帯が発達する苫東開発とか、青森県のむつ小河原開発とかがあり、良港が点在している。ということで、彼らの一九八〇年に向けての地域論は青函論なんです。東北地方の北部を北海道に吸引するという形のものを亜北方圏と考えてよいのではないか。

従って大陸的な厳しい北方圏のほかに、青森県と北海道南部を合わせて亜北方圏、そしてそれは本州との継ぎとしてあるという考え方なんです。なぜ私が、そのように思ったかといいますと、昨年久しぶりに札幌へ来て「札幌はどうですか」と聞かれた。その時私は「札幌はごく普通の都市になりましたね」と答えました。私が札幌に来たのは終戦間もなくですが、その当時、札幌は日本で一番いい都市だった。というのは、都市計画で道が広いということ。京都に家があるので、冬京都に帰ると寒くてしようがない。あっちはコタツ文化で、手をあたためるだけですから。その点北海道は、冬もあたたかく、夏は涼しい。生活温度が一定のところで暮らしているわけです。だから北海道は一番よかった。しかし、仙台とか名古屋でも新しい大きな道をつくるようになった。これを私は全国の都市が札幌化したと表現しております。しかも石油ストーブが普及して、本州でもコタツ文化から脱却し、部屋の中を全部あたたかくしている。つまり北海道と本州との冬の差がそう大きくなくなってきた。さらにクーラーが普及することによって、夏の生活条件もかなりよくなる。そういう点から考えると、むしろ札幌は目立たなくなってきた。いわば札幌が追いつかれたわけです。札幌がなぜ大きな都市計画ができたかというと、北海道が持っていた一つの原始的な自然、そういう自然状態があったために、実験都市の機能を果たすことができた。本州の町というのは、それぞれ城下町とかいろんな形で進んでおりまして、新しい実験都市ということはできなかった。それに対して北海道は、新しい都市であり、実験都市としてきれいな、広い道路をつくることができた。それであったが故に、北海道が先進性を持ちえたのだと思う。そのパターンを他の本州の都市が真似たのである。

## 〝資源節約〟の住宅を

それともうひとつ寒さということである。北海道の寒さはコタツでは耐えられない。ストーブがどうしても必要である。最近は石油ストーブになってきたが、各自がいろいろ研究して暖をとっている。それが本州に還元していった。そして札幌の果たした日本の新しい都市が自然性と寒さを克服した技術を本州に送りこんだ。それは逆説的にいうと、北海道が本モノの北方圏でなく、亜北方圏であるから、北海道が開発した技術を本州に持っていくことができた。だから北海道は、単に他国との交流のつなぎになるというだけでなく、そういう機能を国内的な論理にも使わなくてはいけない。かつて、北海道が果たしてきた先進性というものをもう一回、これからの時代にどう取り入れるか、それがなかったら、亜北

方圏というものの意味がなくなって、北海道の一部—旭川、帯広以東—つまり北東部だけに北方圏が残る。これから新しい時代に向かって札幌、帯広、旭川それぞれの都市を中心にして考えると都市の性格の違いというものが、もう一回日本全体に影響をもち得るかということが一つの課題であろうと思う。だから、北方圏というものを国際論理で使って、北海道は北方圏なんだという形で外国の人を呼ぶのも一つの方法、環境会議を開くことも大事なことです。しかしそれだけでない。いま一つ大きなことは、そこで得られた技術を日本全体に向かって、なんらかの形のリーダーシップをとるべきではないか。それには何があるかということを考えてみると、まず札幌が、かつて先進性をもちえた要素は何かというと、その一つは自然性というか処女地における実験性、それともう一つは寒さですが—だがそのなかで大きく抜けているものがある。それは住居の問題です。

北海道の住居は本州の延長であった。かつて暖房は北方圏的な技術を使っていたが、住んでいる家は板で作ったペラペラのものです。私の恩師中谷宇吉郎先生が書かれた「寒い国」という本がございますが、その中で、日本人がカラフトで木をチョコチョコと組み立てたような家を建てているのをみて、ロシア人が「日本人というのはおかしな国民だ。自分の家と同じぐらいひと冬にマキをたく」と笑っていたという話があります。当時の写真をみても、屋根のところまでマキを積んでいる。ロシア人はすでに丸太小屋の家に住んでいたらしいですね。中谷先生の本では、満州の白系ロシア人の生活がスケッチなんかも入れて紹介していますが、日本の開拓民というのは貧弱な家に住んでいたそうです。ところが、白系ロシア人の家に行くと、丸太を順々に組んだあたたかい家に住んでいる。先生の表現をもってすれば、それは長い間暮らしていた北方の人たちの生活の知恵の集積として、そういう住宅ができたと言っておられる。昨年、ヤクーツクで田舎の見学旅行に行った時、ちょうど家を建てていたんですが、昔と同じように、丸太に三角の溝を入れて組んでいる。その間にコケを入れ、乾燥させ、それが断熱材になる。本当に昔のとおりの建て方をしている。上田篤さんの「日本人の住い」に、日本の家は壁が薄い、ヨーロッパなんかは非常に壁が厚い。それが日本とヨーロッパの住宅設計の基本的な違いだということが書いてある。私が結婚して間もなく住んでいたのは大学村—当時はシベリア村と言ってたくらい寒い家だった。外側に板が張ってあって、内側に簡単なものが張ってあり、カベがスースーする。家の中のクギの頭に霜がつく、そういう家でさえ住んでいるわけです。

これからの日本で、一番大きな課題は省エネルギー、省資源です。石油だって、昨年は切り抜けたにしても、これが来なくなったら、一体どうなるのか。私びっくりしたのは、札幌で炭小屋のある家があまりない。みんな石油文化に完全に切りかえているんですね。そういうことを考えると、省エネルギー、省資源で一番厳しい条件が要求されるのは北海道、北方圏ではないかと思う。大陸の特徴はなにかというと乾いた感じ。名古屋から飛行機できて、一番さわやかに感ずるのは乾燥です。それでもなお、北海道は多湿な面を含んでいる。夏のシベリアへ行った人はよくわかると思いますが、ものすごく透明で、太陽の輝きが全く違う。その乾燥たるや大変なものです。

八月にヤクーツクに行ったら本当に暑い。先ほども日光浴をよくするという話が出ましたが、日本で日光浴をなかなかする気にならない。肌寒いからですね。向こうの場合は乾燥しているから、裸になって日射を受ければ暖かい。上田さん





の本にあるとおり、日本の住居の大敵は湿気であるということなんです。

一時期、黒田清隆がロシア人を連れてきて丸太小屋を作った例がいくつかあります。シベリアの内陸の人たちは、丸太を組んでいってそのすき間に永久凍土のコケを詰める。乾燥しているから、乾いてシックイみたいになって断熱材になり、外からの湿気を防いだが、日本の場合は湿気ているので、丸太小屋を作って、そこに入れたコケが腐り出した。そのために丸太が全部腐ってきて小屋自体ダメになった。それで、丸太小屋はダメである。夏の間は不愉快でとても住めない。そこで丸太小屋を禁止というか開発を中止した。一時は、丸太小屋を建てたらお金を貸してやるというところまで、黒田清隆は考えていたのですが、その挫折感のまま、現在もペラペラの家に住んでいる。北方圏の技術は、そのまま北海道に定着するというのではなく、亜北方圏というか、湿った北方圏的な生活の両方にマッチするような、しかも厳しい自然の中でエネルギーを節約し、資源を節約していけるような住宅、都市計画が本当に必要だと思う。将来何年間かにわたって日本の志向というのは、あらゆる意味で省エネルギーにしなければ、しようがないと思っている。私が考えている北方圏というのは、繰り返して申しますが、北海道を一つに考えないで二分する。北方圏は外側にあって、片方は亜北方圏である。北方圏に見合うような技術を開発して、それを亜北方圏を通じて日本全体に活かすというのが、私の考えている北方圏ということでございます。

## 知と心を回復する場

**樋口　敬二**　昭和二年生まれ。同二十七年北大理学部卒。同大学理学部研究奨学生。氷雪物理学研究。同三十一年北大理学部講師。同三十六年北大理学部助教授。同四十一年名古屋大学理学部教授。同大学水圏科学研究所。著書に四十八年〈地球からの発想〉（日本エッセイストクラブ、日本気象学会、日本氷雪学会各賞受賞）

我々日本人というのは、南方志向性が強く、潜在意識の中にすでに南方を志向している。これは北海道開拓の歴史をみても、入植した人々が長い年月、高温多湿、モンスーン性の気候の中で培われてきた生活様式、伝統的な価値志向、そういうものから脱却できずに、北海道の自然環境という厳しい現実に突き当たって随分苦労したという話は、いまでも残っています。日本文化、あるいは日本人というものを考えてみると、我々の中に抜きさしならない一つの価値の志向性—偏見と言ってもいいが…、そういうものがあるように思う。日本人だけでなく、日本の文化を研究している文化人類学者、あるいは日本の社会、文化を研究している日本民族学者の中に、そういう考え方が根強くあると思われる。

それが証拠に柳田国男先生の学説の根幹をなすものは、稲作であり、米をつくる定着した村が、日本の社会と文化の原点とされている。これに対し、岡正雄さんのように日本文化の古い層を北と関連づけてみると、これはもう破門されてしまう。学問の世界でもそうである。最近は北へ志向する者が、例えば石田英一郎、江上波夫先生のように次第に北に目を向けた者もでていますが……。ところで私は、モンゴルやギリヤークを研究していたが、ある時友人たちが「お前はあんまり



黒田信一郎氏

北をやると、飯の食いあげになるぞ。悪いことをいわぬから南をやれ、東南アジアに目を向けろ」といわれ、そんなことからビルマに行って、亜熱帯を研究したのでした。しかし、これからの時代は、北を考える必要がある。未来を考え、世界の中の北海道、あるいは北方圏というものを、今までとは違った、高いレベルを北方圏というイメージとして持つ必要がある。樋口先生の論では、北海道は〝亜北方圏〟ぐらいにしか入らないと言われましたが、私はそうは思わない。社会を作り上げている人間、文化、伝統的な価値から考えると、やはり北海道は完全に北方圏に入るのではないか。北海道の歴史は近代から始まっている。古代や中世のドロドロとしたものはない。だから札幌の持つ先進性、北海道の風土の持つ先進性、これをどういうふうに文化人類学者が活かしていけるかを考えてみたい。

## 人類の原点は北方

ヒトが人になった原点、つまり人間らしくなったのは北方ということを抜きにしては考えられない。人間になるまでの橋渡しとして、一番最初に出たのはオーストラロピテクス（**注1**）という南方のサルであった。次に出てくるのはピテカントロプス（**注2**）です。サルのようではあるが、やや人間に近づいたものというイメージを持っている。この連中は、暑い赤道直下の熱帯、あるいはそれに近い低緯度地帯にしか住んでいなかった。アフリカのほとんどの地域と、ヨーロッパではスペインを通って南イングランド、あるいはライン川の西側ぐらいに伸びている。さらにエジプト、パレスチナ、メソポタミアを通ってインドの北部まで広がっている。このような人間になる前のサルに近い人間たちは、どういう土地の利用の仕方をしていたかというと、アフリカのサバンナなどまばらな疎林、ユーラシアではスウェーデンの森や林で、自然に出来たものを食べていればよかったから、道具も作らないしモノを考えないで済んだ。では、人間が人類の歴史の中でヒトらしい人間になったのはいつかと言うと、大体石器時代の後期になってからです。フランスを中心とする西南ヨーロッパからは当時の遺跡がいっぱい出ている。これは、自然として人間を見た場合はネアンデルタールの時代であり、石器の製造やそのタイプということから見るとムステリアンに属する。どうやら人間らしいこのムステリアン文化（**注3**）を担ったネアンデルタールを見ると二つある。ライン川の西の連中は当時、ムステリアン文化の中心で、最も先進的であった。ところが、そこからはずれた辺境の地にやや違ったタイプのムステリアン文化が生まれた。どう違ったかと言うと、それ以前の石器製作技術の中では石の核（コア）をポンと叩いて両方をはがす剝片石器を作り出すことを知らなかった。ところが、辺境の地―ウラル山脈の南、ヨーロッパの北の山岳に広がるステップに住んでいたネアンデルタールはこの剝片石器を大量に作っていた。しかもこの中に、スクレーパーと呼ばれる動物の毛皮をはいだり、なめしたりする石器が随分まじっている。このことは彼らが毛皮や肉を利用していたことの証拠になるわけです。

ネアンデルタール人は、人間の前とされていたが、最近の考古学の知識では、どうもそうではないらしい。火を使うことを知っていただけでなく、石灰岩をくり抜いて獣脂のランプを使っていた。夜になると火を点すということをやっていた。真に人間らしい人間に移る先端を切った人たち―それまでぬくぬく暮らしていた暑い地方を捨て、ヒンヤリした風の中に北をみつめて、初めて人間はモノを考えたり、生身の裸のままでは自然環境の中で生きていけないことを悟った。そこからホモサピエンスの特徴といわれるオーリナシアン文化（**注4**）が生まれた。モノを考え、モノを作り出すということは、既成の、レールを敷かれてしまってその上を走っているだけでは出てきそうにない。「恋心」という歌がありますが、これは岸洋子が最初に歌った。この歌は切捨て論議なんです。絶望的に〝恋なんて何になるの〟と切り捨てている。冒険





しよう、探求しようという心がみられない。ところが、越路吹雪は〝恋だけは…〟とそれを拾い上げている。つまり、いつも時代の先端を切り開いていく発想法は、レールを敷かれた、伝統的な思考様式からは決して出ないのです。いつもローカルなもの、辺境のもの、初めは「なんだお前ら、何をやっている。バカではないか」というふうにみられる、そんなところから出てくる。つまり日本のなかから北海道を見る、あるいは世界を見た場合、北方圏のイメージは一つの異端、あるいは勇気、これからどうなるかわからないものに忍耐力、実践力を要求される大きな実験じゃないかと考えられるのです。

シベリアは寒い、寒いと言いますが、われわれには防寒着があり、電気や熱エネルギーを利用できる。ところが、そんなものが全くない三万年も四万年も前の旧石器時代の末期に、ネアンデルタール人が北へ北へとシベリアに入っているのです。この頃は地質的に言うと、氷河が後退していく時期で、後退していく氷河のあとに、ウラル山脈を越えて、南の方から人間がどんどん追っかけて行った。その中から、さらに探求心にあふれ、好奇心をもった勇気ある人々が北米大陸に渡って行った。つまり、いま我々が北方圏と呼んでいる地域に住んでいる先住民族は、もう三万年も前に素手で、厳しい条件の中に自ら滑り込ませるのに成功したわけです。シベリアでは、後期旧石器時代の遺跡が豊かにあり、発掘もされています。つまり、ツンドラ地帯と森林地帯の境をなすところは、大型動物にしろ、小型動物にしろ、そんなものが豊富にいたのです。そこは、原始人たちにとってよい猟場であり、彼らに衣、食、住のすべてを提供してくれるところだったのです。だから、そこから豊富な遺跡が発掘されるのです。

## 情緒豊かマルタ遺跡

その中で最も有名な、しかもシベリア最古の遺跡とされているのは、バイカル湖から流れるアンガラ川の川岸にあるマルタ遺跡です。この遺跡を見ますと、猿人時代に比べて、長足の進歩をとげていることがよくわかります。数戸の住居跡がありますが、この時代すでにマンモスの大腿骨を支柱にし、その上に鹿の角を組み合わせて屋根にしている。また当時の遺跡から発見された女性は、非常にエロチックで、胸と腰の豊かな線が強調されています。これはいろいろの解釈ができるでしょう。芸術の起源であるともみられるし、宗教の起源であるかもしれない。豊穣あるいは富を願った呪術の起源と考えられないこともないでしょう。いずれにせよ、高尚な情緒を表現するものが、バイカル湖のそばから発見されているのです。また人というものを考えてみますと、死というものは絶対のものである。猿は死というものを恐れない。死を知らない。死の観念を生み出さない。我々の肉体や生活は有限である。人間というものは、有限に終わることなく、無限のなにかを求めている。それがヒトの本性のひとつの姿であると思う。そんなものがすでにマルタ遺跡のなかにみえているのであります。それは何かと申しますと、三歳か四歳とみられる幼児の遺骨が石板を組み合わせた棺の中にはいって見つかっているのです。しかもその中には頭飾り、首飾り、腕飾りなど多くの副葬品があるのです。それは石器時代人の子供が生前、身につけていたものなんです。その子供が死んだとき、すでに死後の生活、死者の国に旅立たせてやるためには、生前身につけていたものを同時に持たせて葬ってやるという観念がすでに生まれていたわけです。

ソビエトの学者は、これをめぐっていろいろの解釈をしています。ある学者は「これは親の子供に対する深い情愛の表れ」と解釈しています。結局、技術的な面、芸術的な出土品、親の子に対する情愛―そういうものの証拠である棺桶、副葬品、これらのものができるようになったのは、北をめざして勇敢にも南方の地を捨てることによって、初めてそこまで進歩をとげることができた。シベリアの場合は、後期旧石器あるいはのちのツングー

スに代表される新石器時代―ツングースは、現在総数わずか二万人くらいで、日本の何十倍もあるあの広いシベリアにまばらな形で存在していた。この連中が、なぜ広大なシベリアを制圧できたか、それはトナカイを飼いならすことができたためなんです。それ以前はトナカイを弓で倒すことはできた。矢に石や骨のヤジリをつけたもので射殺すわけです。ツングースは大体紀元前後あたりに西からやってきたのですが、そのツングースの先祖たちはトナカイを飼いならすことを考えた。

トナカイは、ツンドラの地衣類やコケ類を主食にしており、塩を求めて集団で移動する群生動物である。そんなトナカイを追ってツングースたちも移動した。そのうちトナカイはおとなしい動物で、人間に食いつきそうにもないことを知り、トナカイの飼育が開発された。それまでには数千年の年月がかかったことでしょう。そして集団で飼育することに成功したのです。二頭だて、四頭だてでムチをあてると、百五十㌔程度の荷物を積んで一日三、四十㌔は走ってくれるすばらしい乗物なんです。こうして新石器時代のチャンピオン・ツングースはトナカイの乗物をジープのように乗りまわし、運搬用に使い、自由気ままに広大なシベリアを行き来できたのである。

シベリア、あるいは北米、カナダ、アラスカに住んでいる先住民族の場合は、大体ここらあたりで終わってしまって、それから先へは進まなかった。その後の人類史というのは、新石器革命、食糧革命を経て、古代都市国家が興こるわけです。緯度からみると熱帯、亜熱帯―いずれにしても暑いところ、暖かいところ、こんな所に古代文明が発祥した。それから後の歴史は、大ざっぱにみると、大体北へ北へと移ってきた。例えば、十六世紀から二十世紀の今日まで世界をリードしてきたヨーロッパ文化は北緯五〇度の点にある。ロンドンにしてもパリにしても北緯五〇度にあるのです。そこで、歴史の必然として、人間のこれからの約束された土地は、北にあると思います。しかしなにがなんでも北方である、北方圏であると決めつけるのはいささか荒っぽく我田引水の気味があるのではないか。問題はもう少し深いところにあるように思われる。それはどういうことかと言いますと、そもそも悲劇というのは人間が意識を持って知り、観念を持って知る、ここに根があるわけですが、それにしても、二百万年前の、人類の原点からみてみると、人間の知性と情緒、あるいは意識と潜在意識、これがあまりにもひどい形で分裂してしまう。それというのも、人間が成し遂げた進歩の中で、一番輝かしいものは何かというと技術―テクノロジーです。我々が今享受している輝かしい物質文化、これは人類の長い歴史のなかでは、ごく最近のことなんです。ところが、われわれの観念―たとえば宗教でみてみると、一番新しいのは七世紀のイスラム教なんです。それ以後はそれらしい宗教は出ていない。つまり人間の潜在意識、情緒、心の仕組みというものはそれほど進歩を遂げているとは思えない。なんともグロテスクで異常な矛盾が我々の前に広がっている。

ところが一方ではホモ・ファベルと呼ばれ道具を作る輝かしい人間がいる。また一方の呼称であるホモサピエンス―賢い人間は果たして賢いのだろうか。たしかに我々は寒い北方の地を開拓し開発し、地上や地下の多くの資源を獲得することに成功した。しかし、我々は自分自身に対し、隣人に対して、先進工業国に住んでいる文明人が先住民族に対してどうであったかと考えると「うまくやってきた」と胸を張って言えるだろうか。カナダや、ラップランド人のように例外はあるとしても、ソ連にしても、アメリカにしても、また北海道にしても先住民族とうまくやっていないように思われる。我々は、自分たちの優越性、豊かな物質をもってして、先住民族に対し、実に猛々しく自己だけを主張してきたのではあるまいか。一昨年、ウンデットニーでインディアンの反乱があった。そのリーダーが新聞記者のインタビューで「おれたちはゆっくりしたいんだ。豊かな生活なんかもういい。白人たちのやる工場に行って賃金をもらえば生活も保障されている。それはそれでいいが、工場の就業時間、規則はあまりにも厳しすぎる。我々が欲しいのは静かな環境だ。先祖代々繰り返してきた伝統的な生活様式がある。これを白人といえども破壊する権利はないはずだ」と言っているわけです。

ソ連でも、中国でも報道がないのでわからないが、大体同じことをやってきているようです。一九三〇年の初め、共産党の指導で集団化が急ピッチで行われた。ところが先住の原住民たちはサボタージュをやった。モンゴルで遊牧の集団化が行われた時、モンゴル人は、我々が家畜をいくら増産してもどうせ持っていかれるだけだ、食ってしまった方がいいと、羊の首をはね、みんなで食べてしまった。毎日宴会をやった。先住民族の精神文明に対するリアクション、反応の仕方をみると、心のヒダの深いところにある反感―〝ノン〟という声があるのです。これはなにも先住民族だけでなく、我々先進工業国における若者たちをみてもそういうことが言える。インドやネパールでもヒッピーたちがうろついている。彼らは聖なるものを求めている。「イデオロギーはもう結構。自由主義も共産主義もいらない。生産性、効率性もいい。もうあきあきした」といっている。ネパールやカトマンズの人たちはマリファナを吸って一年中食っちゃ寝、食っちゃ寝で適当にやっている。北米でもトライブと呼ばれるヒッピーみたいなのが二百万人もいて、彼らは週二、三日、近くの工場で働いて給料をもらい、それをもとに新石器時代さながらの生活をしている。森林の中で自ら木を切り家を建て動物の毛皮を敷いて生活をしている。食べ物だけは仕方なく都会に買出しに行きますが…。結局、北方という開かれた地域で、いままで我々が蓄積してきた知識、技術をフルに活かして、住みよい生活空間を作り上げようとするならば、我々以前に住んでいた人間たちの心のヒダの中にかくされている願望、欲求、ユメというものを同時に吸い上げずして我々の未来は考えられない。

## 先住民の文化学べ

私は、文化人類学者として、これだけはぜひやってみたいというプランがあります。ちょっと現実離れしていますが、それは北海道という亜北方圏の将来を活かして、これからの人間のあり方、知性と心情のキ裂を回復する場所として北海道を考えたい。さらには北方圏を考えたい。具体的にはどうするか。我々の内にある潜在意識と、先住民族のモノの考え方は実は似ているのです。一見わけがわからない先住民族の考え方は、よく考えてみればそれほどむずかしくはない。北米に住んでいるナバホ族というのは変わっている。例えば、土器を作るにしても、家を建てるにしても必ずなにか一点抜かす。わざと手を抜くわけです。こういう連中を工場に連れて行って働けと言っても無理な相談です。勤務時間中、数時間、あるいは数分間手を抜くということをやりかねない。だからといって、我々の側から効率性、生産性などを押しつけるわけにはいかない。

逆に我々が先住民族の持っているモノの考え方を学んでいくことによって、失った感受性を復活しなければならない。これをやらない限り、我々の情緒、心情というものは、ますますゆがんでいくに違いない。それができるのは北海道ではないかと思うわけです。それほど人口が過密でなく、人の手の入っていない原野がある。ここに私は林間学校を作ったらおもしろいのではないか。あるいは国際野外学校―インタナショナル・フィールド・スクールを作ってギリヤーク、オロッコ、その他の少数民族、マイノリティーグループの代表、カナダ、アラスカのエスキモー、アメリカインディアンなどの代表を呼ぶ。そして、単に知識の交換、対話という生ぬるいものでなく、原野に鹿を放って、一緒になって石のヤジリで追っかける。大学教授だからといって背広を着てネクタイを締める必要はないわ

けです。人類学者をやっていると、潮騒の音を聞く、鹿の鳴声を聞くと胸がさわぐ、そういうところが心のすみにある。それをすなおに高尚な形で助長していく—捕われようとする野獣のがむしゃらに反抗するエネルギーを、もう少しやんわりと高いレベルで吸い上げていくような、国際的な教育機関、実験の場がほしい。

**（注1）オーストラロピテクス**

南アフリカでは二十世紀の初頭におびただしい化石類人猿が発見され、オーストラロピテクスと名づけられた。彼らは類人猿的な特徴を持っているにもかかわらず、脳容量がかなり大きく、骨盤、大腿骨、脛骨、腓骨、足骨などが人間に似ており、完全に直立して歩いたことが、明白になった。彼らはおそらく百万年、あるいはそれよりもっと古いだろうと推定されている。二十五万年前に絶滅したと考えられているが、彼らが人類の祖先であったかどうかは、まだはっきりしない。人類学者はオーストラロピテクス類は、人類の直接の祖先、あるいは人類への進化の系列に属するためには、あまりにも特殊化した類人猿的な特徴を持っている。しかし同時に、多くの人間に似たものをもっているので、おそらく、人類進化の起源をなした一群の生物と近い関係にあったと推定している。

**（注2）ピテカントロプス**

まっすぐに立って歩いた猿人。オランダの医師ユジェーヌ・デュポアが一八九〇～九七年にジャワのトリニールで発見した頭骨、大腿骨、下顎などからピテカントロプス・エクレトスと名づけられた。シナンスロプス・ペキネンシス（北京原人）なども、この範疇に含められる。

**（注3）ムステリアン文化**

旧石器時代前期（第三間氷期からウュルム第一亜氷期）の文化。フランスのル・ムスティエ遺跡に代表される文化で、ネアンデルタール人を代表とする古代人類が育成した。ヨーロッパを中心として、シリア、パレスチナ、オルドス地水溝遺跡もこれに含まれる。

**（注4）オーリナシアン文化**

フランスのオーリニアック遺跡で発見された石器文化で、美しい骨器を製作した。この文化をつくったのは、クロマニヨン人であり、彼らはまっすぐな顔と隆起した鼻、高い額と強い顎をもっていた。



中野　美代子　氏

## 北の観念に乏しい

中野　美代子

私は宗谷岬から北へ行ったことがないので、シベリアとかスカンジナビアとか通称言われる北方圏の経験はございません。それどころか、ある時九年前にひょんなことで南半球の方に行ってしまった。オーストラリアですが、三年近くいました。その間、日本に帰りたいという気持よりも北半球に帰りたいという気持だったように思います。初めは違和感にとらえられて、例えば、私たち、南の方に窓が向いていて、そこから暖かい太陽の光が入り南風が吹いてくるということに慣れていたが、





オーストラリアに行きますと、南半球ですから北の方に明るい窓があって奇妙な感じがした。昔のギリシャ人は不思議なことを考えた連中のようで、地球が丸いということを知っていた人はいたらしいが、北の方には土地が詰まっていて、南の方は海ばかり。重りが上にあるから地球がひっくり返る。しかし、南の方にもなにか重りになる大陸があるのじゃないか、こういうふうに考えたと思う。果たして南に大陸があるかどうかは、ギリシャ人は知らなかったわけですが、いつか知られざる南の土地を発見してやろうということに、ヨーロッパ人の空間認識というものが発生する根拠になったのではないか。そういうわけで、南半球にいる間になんとなく北が恋しい。北とはなんだろう、北方とはなんだろうということを地図を見ながら考えるようになった。日本人というのは、東と西の観念が非常に発達していると思う。もともと日本の文明というのは関西にあり、鎌倉時代になると源氏と平家がスッタモンダやって関東の方に日本の政権が次第に移ってくる。そういうわけで、東と西の観念が強くなってきたが、南と北の観念が一向に育たなかった。東洋、西洋などという言葉からそうですが、東洋、西洋というだけで今日の世界を割り切ることはできません。日本の国立大学の文学部には西洋史、東洋史という学科がある。それじゃ西洋、東洋以外に国はないのか。

日本人は東洋史、西洋史という考え方から、西洋文学、東洋文学と、なんでも東と西という考え方をする。日本人の、特に北に対する観念というのは非常に遅れていたという気がする。私は北方圏諸国に行ったことともないので、いつか行きたいと思いながら地図を見て暮らすわけですが、私の部屋には、地図が天井まで張ってあります。きちんとした科学的な地図より、昔の地図の方が大変おもしろいと思う。特におもしろいと思うのは、十六世紀ぐらいからヨーロッパ人はしきりに世界地図を作ろうとし始めた。もちろん、十五世紀からコロンブス、ヴァスコ・ダ・ガマなどの探検家、航海家が探検に出かけて行った。いろんな世界中の国がヨーロッパの民衆の中に入ってきた。そういう関係からか、十六世紀の終わりに立派な地図が出来ている。ベルギーの人のメルカトルという人が作ったものですが、ヨーロッパ、アフリカ、南北アメリカは、大体今、我々がみている地図とほとんど同じですが、その中で日本以北—本州は描かれていて、北緯四〇度線の南に、東と西に長く寝そべった形で本州が描かれている。その北の方に北海道が—十六世紀にはわが北海道はあったと思うんですが—全然なくて、本州の北の方は青々とした海になっており、そのまま北極海に続いている。なぜそんな奇妙な地図ができたか。その当時、すでにヨーロッパ人が日本に何人か来ていたわけですが、そのヨーロッパ人に対して、日本人が自分たちの国土についての認識を正確に伝えなかったからだろう。つまり、ヨーロッパ人が日本の北の方について無知だったというより、日本人自身が無知であった。それがヨーロッパ人の作った世界地図に反映したのではないかと思う。それから一世紀ぐらいして出来上がった地図を見ると、これまたおもしろいことに、本州のすぐ北—今の渡島半島あたりですが、あの辺に、シベリアの沿海州あたりからニョキッと巨大な半島が突き出していて、それにはエゾ大陸とか書かれている。それを見ると、日本人が津軽海峡の海の彼方にとてつもない大陸というか島があるということがばく然と分かり始めてきた。それがアジア大陸とくっついた形で、おぼろげながら認識され、ヨーロッパ人の地図に反映したのではないか。

北海道が四方を海に囲まれた島であることがはっきり理解されたのは十八世紀ぐらいのようです。今日、北海道が島であることは誰でも知っていますが、それに反して、リュックを背負って本州からやってくるカニ族と呼ばれる若い人たちに北海道の印象を聞くと、「北海道は大陸的ですばらしい」と言う。北海道は大陸であると認識することが、我々日本人の空間意識の貧弱なところで、私は

常日頃から北海道は狭い狭い島なんだということを、口をすっぱくして申し上げている。なにしろ、日本全体がゴミ箱みたいに小さい。そういうところからみると北海道は広い。しかしいぜんとして狭っ苦しい島なんだということを認識する必要があると思う。その狭い島だが、日本人全体の意識の中では、広々とした北の大陸的イメージを北海道に対して持っている。この北海道、日本の一番北であることは事実ですが、だからと言って世界的に北方圏として位置づけられるかどうか。

札幌は北緯四三度、稚内が四五度をちょっと越えている。それをずっとヨーロッパへ回していくと、四五度というのはベニスとか、あのあたり、フランス南部というのは、ヨーロッパ人にすれば南の国です。われわれはどうしたって、稚内を南の国と思えるわけがありません。だから、南とか北というのは、相対的な観念であるということを思わなければならないのですが、最近、北方圏ということがしきりに言い出されるようになって、その場合の北方圏というのは、相対的な関係でとらえられているか。地球の北の方—動物とか植物などいろいろ分類のしかたもありましょうが、その場合に、ここから北が北方圏なんだと、無理やり、絶対的観念にさからうというには、いささか危惧をもつわけです。

なぜ、線を引くことが危険か—危険というのは言いすぎですが、中国のことを考えてみると、中国人というのは、大昔から自分たちは世界の文明の中心だという考えをもってきた人々です。中華という言葉は、イデオロギーの左右を問わず、中華人民共和国、中華民国と言ってますが、どちらも世界の中心であるという誇らしい意味がある。もともとそういう言葉です。だから、自分たちの領域から一歩はずれると、そこには全部野蛮人しか住んでいないという考えを昔からもっていた。

中国の南の方はネパール、ヒマラヤ山脈があって、そこには昔の中国人の文明も及ばない。西の方も砂漠とか山脈、東の方は海があって海の彼方にちっぽけなヤマトとかなんとか貧弱な国があり、自分たちの作った漢字や文明を輸出してやっているという観念をもっているわけです。ところが、北の方にはモンゴル、フン族という民族が住んでいる。この猛々しい連中は、馬を駆って南へ下りてきては、中国の文明をしばしば脅かすわけです。中国人は南、東、西の方には自然に出来上がったカベがある。そのカベは自分たちの認識を飛び越えさせることはしない。北の方にはカベがないみたいだから、いつでも自分たちの認識を北の方へ発展させようと思えばできるが、逆に北の方から野蛮な民族、暴力が侵入してくる恐れがある。そういうことで万里の長城というとてつもない建造物を作った。これは確かに中国人の文明を守るのに時には役に立ったが、実際にはさほど役に立たなかったことは、十一、二世紀にモンゴル人が侵入して、どんどん占領し、元という国をつくったことで知られるわけです。万里の長城は秦の始皇帝が作ったと言われてますが、それから何回も作り直している。なぜそういうことをしているかというと、境界線を作ることによって、自分たちの認識をそこから外側に発展することを防いだ。自分で「自分の認識はこれだ」といってとじ込めたわけです。ですから、いろいろな自然的な北方圏というもので線を引っぱることは有意義だと思うが、我々の認識の線をいたずらに引くべきではないと思う。そうは言っても、ばく然と考えて、北海道は確かに、東は亜寒帯で、こちらは冷温帯とかシベリア的な性格をいろいろ併せもっているように考えられる。そうなれば、いろいろな意味で、北海道で北方圏環境会議を開くということは有意義なことだと歓迎している。

ただその場合、日本人の外交感覚、国際感覚というのは隣組意識が強すぎる。遠くの親せきより近くの他人などと言う。勿論、隣の国と仲良くすることは非常に結構だし、そうでなければならない。中国には「遠交近攻」という言葉がある。遠くと交わって近くを攻める。今日こんなことを言ったら大変です





が、中国人が、あれほどアメリカ帝国主義とののしっていたニクソン大統領をいち早く中国に招いた。あの政策は、遠くと結んで、まん中にはさまれた日本をジタバタさせようという政策だったに違いない。事実、我々日本人はジタバタした。「遠交近攻」というのは古代人の兵法上の言葉ではありますが、狭い隣組意識だけで北方圏という問題を考えていけないのではなかろうか。なぜそういうことを申し上げるかというと、今度の北方圏環境会議に招へいされていない地域のなかに北海道と似たところ——たとえば、カナダを見ても、大西洋にあるニューファウンドランド州という島がある。勿論行ったことはありませんが、いろいろな条件を考え合わせると、北海道と一番似たところではなかろうか。大きな大陸の東側に位置している。寒さといい、緯度といい—北海道より若干北にあるようですが、雪の降り方、そういう点で北海道とよく似ているらしい。ニューファウンドランド州をこの会議にお呼びしてお話を伺うことは大変有意義ではなかろうかと思う。あるいはアイスランドという島—北緯六五度あたりですが、共和国として独立した国として浮かんでいる。これも北の方に属する一つの島として北海道に近い。先ほど梅棹先生が北海道は北方圏でない、なぜなら大陸でないからとおっしゃったという話でしたが、そういうことを考え合わせると、北の方にある北海道とよく似た気候条件の島、その島の人々と密接に結びつくこと、それが非常に大事ではなかろうか。だからニューファウンドランド州のようなところを除いてしまったというのは、日本人の昔からあった「近くだから仲良くする」というせせこましい、隣組意識の一つの発展した形ではないか。こういう環境会議というのは今年一回だけで終わるわけではないし、将来いろいろな形で第二回、三回と開かれるでしょうから、その時に私ども日本人の外交感覚、国際感覚というか、そういう面で新しい視野を開くべきではないか、そういうふうに考えている。

**中野　美代子**　昭和八年札幌生まれ。同三十一年北大文学部中国文学卒業。同四十六年札幌生まれ。同三十ーストラリア国立大学助手。同四十七年〈北方論〉同文学部助教授。著書に四十七年〈迷宮としての人間〉四十九年〈中国人の思考様式〉。

## 質疑応答

**問**　私たち北海道に住んでいる住民も本州から移住してきた人であるので南方的な資質、精神風土というものから抜け出せないのが現状だと思う。冷温帯というところで、北方的な技術なり情報なりを、日本的に適用し、転換する場合でも、南方的資質自体を、精神革命というか、文化革命ですね、そういうものがなければ、北海道が日本をリードするといっても、徹底しないのではないかという気がするのですが——。

**樋口**　どうしても南方的な性質をもっているということはあります。日本人の場合、例えば住居というものでも夏型に作られている。床を上げて風通しをよくする。夏は過ごしやすい。公卿の生活がどんどん庶民化した形で床を上げたというのは極端ですが、あれは上田さんの解釈によれば、公卿はお金持であったのと、もう一つは夏でも衣冠束帯をちゃんとつけていなければならないような人たちが暮らすには、風通しをよくして涼しくしなければならなかった。その形が残っているのは、現在の御所です。御所へ行ってみると、夏は涼しいが、冬を想像すると、あんなところによく住んでいると思うぐらい、どんどん寒い風が通るような形になっている。そういう形できたけれども、これから見直さなければならないのは、竪穴式の住居—土を掘った形の住居というのは、もともと日本の最初の住居形態にはあったものです。それから床を上げた。結局は、湿気というものがあって、穴を掘ると湿気るというのでダメになったんですが、これを見直さなければならない。森巌さんの「地下室を見直そう」という考えがある。静岡近

くの登呂遺跡、あれは本当に竪穴式で、土を掘って、その上に屋根をふいているだけです。ああいう低い、湿気たところでよく暮らしたなあと思うけれど、実際に暮らしてみて―テストしたわけですが、まん中で火をたくと意外に空気の対流がよくて暖かい。上田さんの表現をもってすれば、今までは木の文化であったが、これから泥の文化に転化しなければならないのではないかと言われていた。これまでは、稲の北上と同じように、木の文化も北上して北海道まできたわけでございます。だから、南方の資質というのは全部木の文化という形でずっときたのではないかと思う。同じ木でも丸太小屋はもともと土を掘った形から始まったそうです。日本で木とともに流れ、片一方でとだえてしまった泥の部分を、ここでいかに復活し得るか。日本の流れの中で、特に住居ぐらい遅れたものはなかったと上田さんは盛んに言っています。皆さんはヨーロッパと北海道は似ているといわれましたが、似ているのは自然で、住居では大変な違いです。その時に、いままでの木の文化でいいのか、レンガや壁の厚い家に住んでいる人間と、木のペラペラの家に住んでいる人間との違い、本当の北方圏というもの、北ヨーロッパの家はなんで作られているか。単に寒さの克服というだけでなく、文化の流れとしてあります。アジアの中で位置づけようとすれば、逆に、だからこそ北海道で行われることが日本人全体の、根元的な問題に迫り得るのじゃないか。

**問**　北方圏というからには、ある程度グローバルな概念でとりあげることになりますが、例えば気候なら気候といったもので線を引きましても、その中には歴史の異なった民族がたくさん住んでいます。そういう民族と歴史が背景にあるわけで、その中で果たしてグローバルな北方圏という概念で北海道の開発、生活を見直すというような問題意識が必要なのかどうか、三人の先生方にハラの中をお話し頂きたい。

**樋口**　ご質問の意味は非常によくわかります。というのは、なぜ北方圏といわなければならないのか、歴然とした北方圏の性格をもっているところは、わざわざ北方圏のシンポジウムを開く必要はないわけです。それなりにちゃんとしたものがあるわけだから。北方圏という概念が出てきたのは、一つの志向目標として設定したのであって、植生的、自然発生的にあるのではない。こうあるべきだという一種の願望みたいな形で北方圏が現れたのではないか。極端に言いますと、国や州という形で招待が行われるのでなくて、これを文化事業だと考えたらいいのではないか。政治的なキャッチフレーズでなく、文化事業だと理解していくべきじゃないか。そうすれば逆に、これから新しい概念をつくっていくということでもあると思う。もう一つは、圏という形をとられるのがいいかどうかということです。「日本一九八〇年」という本の中で、国際的な問題点として捉えられているものに圏という概念は古いのではないかと言っている。中野さんも言われたように、境界をはっきりする必要がないのじゃないか。ということは、圏という概念が今やゆるくなっているのではないか。梅棹、加藤、米山の三氏が提唱しているのは圏でなく極という概念で捉える。これからの世界は七極である。ある都市なら都市が極になり、周りに影響していくという表現をしている。そういう表現でいくと、北方圏という圏を規制するとむずかしくなる。例えば札幌がなんらかの形の北方圏的文化の極になる。そして周りを吸引する。そうすれば周辺はいくら境界がはっきりしなくても、いくら多様になってもいい。そうなると逆に境界線を引くのでなく、及ばないところを限定していくことになる。北はかなり寒いところも含むし、南は本州、沖縄まで含んだっていい。影響範囲にあるわけですから。そういうことでご指摘の圏という行き方がどうなのかという質問に対しては極という考え方があるということを申し上げたい。

**黒田**　文化人類学からみた場合、積極的に北方圏というものを設定できるかどうかというのは、アイヌ民族がいるということです。わずか一万八千の人口で一億の中からみたらとるに足らないと切り捨てるのは簡単ですが、磨滅しつつあるとはいうものの一つの固有の考え方、文化を持っているわけです。そういうものに対して我々は包容し理解してきたかというとやってきていなかった。一つ一つ取り上げると無数に出て来ますが、全体的にアイヌ研究というものをみると、日本の場合、欧米に比べて五十年から百年遅れているわけです。今までの学術研究とは違った意味で、も少しアクションを伴った―先ほど申しました北方圏国際野外学校の発想、例えば冬になって雪が降る。ここでトナカイに一緒に乗ってもいい。まさかピグミーを連れてきて、トナカイのソリに乗ろうと言ってもこれは成り立たないわけです。自然に制約された風土、精神構造、そういうものを軸にしてみた場合、北方圏の先住民族の間にはやはり共通したものがみられるし、それをもとにして、我々はなにかを成し得るのではないかと思うわけです。

**問**　北海道を二分して、北海圏と青函圏とに分けるというお話に大変興味を持った。北海道の歴史の中で、農耕文化の新しい時代―旧石器時代は別にしまして、津軽海峡で文化というものは分かれない。石狩の低湿地帯、東北地方あたりが一つの文化圏なんですね。東





うことだと思います。文化人類学の立場というのは未開と文明という接点、非常に異なったものの間に流れる共通のものを抜き出して、そこに一つのかけ橋をつくる、それが基本的な姿勢です。トインビーが「挑戦と応戦」という本の中で、われわれはいま、実にむずかしい時代にきている。歴史の曲がり角にきていると言っている。十九世紀以来、我々は物質主義、西洋を中心とする文明を謳歌してきた。その結果、西洋的なものからはずれたなにか―原始人の心、未開の心と言ってもいいと思うが、そういうものと我々は全く無縁だったが、逆に言うと、そういうものはとっくの昔に通り越して、いまやなんら実効性がない、なんの足しにもならない。私は文化人類学者だから、未開の心性というものが持つ豊かなイメージ、我々がすでに忘れ去ってしまった感受性というものを、まだまだ汲みとることができる。北海道を北方圏の中に位置づけ、あるいは北方圏というものが成立するかしないかということを考古学的に、文化人類学的にみると、石器時代、特に後期旧石器時代の実に数多くの遺跡群が東西に横切って分布している。最近アメリカのニグロなんかが先祖参りの運動をしている。アフリカに行き、元気をつけて帰ってくるわけですが、これはいいことだと思う。また、一九五三年からラップ人が全北欧ラップ人会議というのを三年に一回開いていろいろなことを話し合う。この人たちというのは、日本より広い土地に、人口わずか三万三千人程度で散らばっている。こういうところに政府あるいは上部機関はタッチしない。地上や地下のあらゆる資源の使用権、あるいは使用を許すか許さないかという決定権はラップ人が握っている。北方圏というものが仮に成り立つとすると、一つは大昔の遺跡、それから文明という衝撃波に洗われ、押し流されてきた先住民族たちが、今西洋的なものの考え方を取り入れ、自己主張、自己の開発を始めつつある。これに手を貸さなければ、文化人類学はなんのためにあるかわからない。そういう意味から言って、ぶち当たったカベを破るためには、とって食うことはできないかもしれないが、人間の本性というものを大きく包み込んでいく発想法、これを成り立たせるためには北方圏というものを設けた方が便利だと考える。温帯とか熱帯の先住民族とはニュアンスが違う。自然環境、モノの考え方、あるいは植民の歴史の過程においてすら違う。住みよいところは白人がどんどん没収していった。それに対して、寒冷の地は白人たちも尻込みして行きたがらない。そういう意味で、先住民族の文化の持つ意味はまだ残されていると思う。北海道が本州と違うのは、アイヌ民族がいるということです。わずか一万八千の人口で一億の中からみたらとるに足らないと切り捨てるのは簡単ですが、磨滅しつつあるとはいうものの一つの固有の考え方、文化を持っているわけです。そういうものに対して我々は包容し理解してきたかというとやってきていなかった。一つ一つ取り上げると無数に出て来ますが、全体的にアイヌ研究というものをみると、日本の場合、欧米に比べて五十年から百年遅れているわけです。今までの学術研究とは違った意味で、も少しアクションを伴った―先ほど申しました北方圏国際野外学校の発想、例えば冬になって雪が降る。ここでトナカイに一緒に乗ってもいい。まさかピグミーを連れてきて、トナカイのソリに乗ろうと言ってもこれは成り立たないわけです。自然に制約された風土、精神構造、そういうものを軸にしてみた場合、北方圏の先住民族の間にはやはり共通したものがみられるし、それをもとにして、我々はなにかを成し得るのではないかと思うわけです。

**問**　北海道を二分して、北海圏と青函圏とに分けるというお話に大変興味を持った。北海道の歴史の中で、農耕文化の新しい時代―旧石器時代は別にしまして、津軽海峡で文化というものは分かれない。石狩の低湿地帯、東北地方あたりが一つの文化圏なんですね。東

北の文化が石狩の低地帯まで押し寄せてきた時代もあり、逆に北海道の文化が東北に南下していった時代がある。自然の中で生活した段階においては文化の上からは津軽海峡というのは問題になっていない。樋口先生のお話の中で、北海道を自然の立場から線を引かれましたが、文化圏として北海道を二つに分けて考えることが、今後北海道の果たす役割という関連から有効と考えておられますか。もう一つは北海道の果たす役割として、住居問題—ロシア人の丸太小屋の例を上げておられました。開拓使の住宅政策が定着しなかったのは受け入れるだけの技術者が北海道にたくさん養成されていなかったこともそうですが、決定的な原因は建築費の差だと思う。開拓使の住居、公立建造物、学校とかはアメリカの新しい建築様式が入ってきて普及したにもかかわらず、一般には普及しなかった。技術があっても普及しなかったのは、経済条件というものが必要になってくるということだと思う。我々が自然環境の中で豊かな生活をしていくためには、そういう点を切り離して考えられないと思いますが——。

**樋口**　農耕とかいろんなものが発達した今の時代に、なおかつ北海道を二つに分けて有効か、意味があるかというご質問だと思いますが、昨年気象庁が異常気象白書を出した。これは要するに気候の変化というものを考えなければならないのではないかということです。農業技術が発達した時代なのに—とおっしゃっても、自然現象はまだまだ厳しい。それが一番顕著にみられてくるのは北の方、つまり北東部ですね。こういうこと が起こった時、周辺部が一番打撃を受けるわけで、例えば旭川とかあの辺では果たして稲作がこれからできるのかどうか。また農業技術研究所などの資料をみると、十九世紀終わりごろの気象条件—冷温が続いたならば、現在の農業技術をもってしても半作はとれないだろうというデータが出ている。農耕という点から考えると、気候の変化ということを考えなければいけないのじゃないかと思っています。もう一つは、経済的な問題があるということですがまさにその通りで、だからこそ私は北海道でしっかりやってほしい。いままで、日本は貧しい貧しいといって住居にお金をかけずになんとかやってきた。火を燃やしてスースー抜けていったらそれだけどんどん燃やせばいいじゃないか、それだけ稼ぐ。稼いでモノを買えばそれでいい。今までは、お金があればいいという思想できたが、これからはそうではない。お金があっても、油を売ってもらえない。それではおしまいです。その時、我々は一体どういうふうに暖かく暮らしよくするか。今までのような暮らしが続くならば、こんな家で石油をたいてもいいが、油がどんどん高くなっていく。その時、一つの方法としては、ちゃんとした家をつくるということ。「暮しの手帖」に、スウェーデンから持ってきたプレハブ住宅を建てた例が載っていて、そこに住んだ人にいわせると、東京だったら石油は要らないという話をしている。本当かどうか知らないけれども、少なくともそういう違う技術なり配慮があるかもしれない。それを見て私が気になるのは、通気の悪さ。窓が小さいので湿気にやられるのではないかということですが、経済的な問題があるから、安くて、暖かくて過ごしよい住宅をつくる。それが開発できるのは、気候条件の変動の激しいところでこそ必要じゃないか。そういう意味で、おっしゃられた経済という問題はまた、日本の住宅の一番の基本だろうと思います。

昨年、ヤクーツクで永久凍土の国際会議というものがあって行きましたが、その時ノーボスチの記者がインタビューに来て、現在シベリア開発を進めている話が出ました。ヤクーツクというのは永久凍土で下が凍っている。家をのせると一部分が溶けて、古い家はゆがんでしまうわけですが、ようやく新しい技術を開発した。大きなコンクリートの橋を永久凍土に打ち込む。その上にどんどんアパートを建てていた。通信社の人はそれを大変自慢して「日本にこういう形のアパートがあるか、集中暖房方式であるか」と聞いた。ないと答えたら、いかにも遅れているという顔つきをされたので、日本はそれほど寒くない。集中暖房はお金がかかる。そんな投資をするほど寒くはないと、その時は答えたんですが、まさか石油事情がこんなになるとは考えなかった。彼は、我々が寒いところで得た技術を日本で活かせないと言っていたが、現に、シベリアで暮らしている人たち、私たちからみるといかにも北方圏らしい人たちも、そういう感じを持っていたんだなと思い出したのでつけ加えておきます。

それからアダムスとニールソンという人が将来のエネルギー節減推計というのを発表してますが、一九七三年のデータをもとにしているが、それによると、エネルギー節減ができる主なものは、エンジン効率の改善によるもの、住宅産業の住宅配置と建築による改善、産業の放出熱をもう一回利用する形、電力は放出熱をできるだけ少なくする—これが主なものです。それぞれ石油にして一日百万㌭の節減が見込まれるという。一九八〇年代では一番大きいのが住宅配置と建築の改善によるもので二・七、その次が産業の放出熱利用で二・二、エンジン効率の改善と電力放出は全く上げられておりません。一九九〇年に至って、エンジン効率の改善が一番大きく六、住宅の方は五・三、放出熱利用四、電力が四・五で、エンジン効率の改善と同じぐらい住宅が大きく上げられている。二〇〇〇年になると、一番大きく出てくるのは、産業放出熱の再利用で一三・九、それと電力の放出熱と原子力ですね。これは一四—一五です。二〇〇〇年になって初めて、産業の放出熱の利用と、電力放熱の減少が大きく効いていて、住宅の改善は九。これはアメリカの例なんです。アメリカのように天然資源をもっている国でさえこういう統計を上げて住宅建築の改善が大事だと言っている。日本のようにエネルギーを海外に依存している国というのは、エネルギー計画を立てるのも大事ですが、もう一つ、省エネルギーといった形を考えていかなければならないのではないでしょうか。

**問**　黒田先生は、文化人類学の立場から、文明論の年代的な段階というか、西洋近代化ということについて批判的なようなことを、西洋近代化というのですが、北方圏を考える場合に、単に気候とかでエリアを決める以外に、世界的な西洋近代化ということについて、日本は日本なりの、日本的な近代化があったのですが、日本的な近代化の反省の場、再検討の場というものを、北海道自体が展開し得るということを北方圏の基本的な構想の一つに入れて考えるのか。それからなにも西洋近代化されたところに限らないで第三世界的な国も入れた方がいいのか。例えば、中国だと距離的な面からみると大阪、長崎と一緒ですからメリットは落ちる。そうすると、なにも北海道でやることはない、東京でやれということにもなりかねない懸念がある。そういう点を含めて、西洋近代化、日本的な近代化について再検討の意義というものを北方圏の中で取り上げることについて、専門の立場からどのようにお考えになっていますか。

**黒田**　日本の近代化は急ぎ足でなされ、あるいは再生産、拡大生産ということもありましょうが、アイヌ民族に関して我々のアイヌ民族を見る目のなさ、考え方の貧弱さというものが露呈しているという感じがある。でも今からでも遅くはないんで、例えば、世界的なヨーロッパの世界侵略、世界的な近代化、西洋化というのは二つの面をもっている。観念のレベルと現実の関係の中でも出てくる。観念と現実において、植民地化あるいは近代化というものは、天使の顔と悪魔の顔をもっていまして、例えば、帝政ロシア下のシベリアというのは、先住民族は天使の顔にあまり接したことはなくて、ひたすら悪魔の顔ばかりみて脅えてしまった。そういうことを含めて、一つの実験と申しますか、他者と自己を結び合わせることによって、自分の姿をもう一度見直してみるという操作、そういう実験は可能ではないかと思うわけです。

**問**　少しロシア語をかじるのでそういう点でロシア語から通してみた北方圏—圏という言

葉は当たらないと思いますが、ロシア語では、南方という言葉を昔からユーク（ЮГ）といいます。これの頭文字は大文字で使う。南の住みよい、人間の健康の回復にいい条件をそなえたところ、そういうところを指して、ユークという字を固有名詞化して使ってきている。それはそれなりに必要があったわけで、北の寒い気象条件の中で健康が損なわれやすいところから、一定期間南の地方へ出かけて行って健康を回復するという目的があった。そういう意味で、南方地域という言葉が使われるようになった。北のことをロシア語で、セーウエル（СЕВЕР）のСという字を大文字にして使っている。しばしば、このセーウエルというロシア語―いわば北方圏というか、北方地域というか、そういう固有名詞化した字にお目にかかる。私の推量ですが、シベリアという北方地域の経済開発を進める中で、問題として大きなトリクションを起こしてきたのは、社会地理学的な、文化地理学的な、それから人間の健康、住まい、そういうもののバランスがとれていなかった。そういう中で、寒いシベリア北部の開発を強引にやらなければならないという問題意識の中からセーウェルという頭文字が、あたかも固有名詞のように使われ出した。私たちのとらえている北方圏という考え方とどこか似ているような気がする。北方圏という言葉を固定化して考えるということに意義がある。住居とか寒さとか社会学的、文化的な視点、あるいは地理学的な観点からみても、経済開発とかいろいろな条件はある。それを克服するために、問題意識がわき上がってセーウェルという言葉が出てきたのではないか。

寒さの中で生活する場合、民族によって能動汗腺が違うわけです。体温を調節するため外気温と、体内で生産される熱のバランスをとるため、全身に散らばっている汗腺―北大の先生のデータを見ますと、ロシア人は平均百八十八万、アイヌの人は百二十二万、日本人は二百四十万ぐらい。つまり、暑い国へ行けば行くほど、風穴というか風通しがいいように、寒い方に行けば、汗をかかないように貴重なエネルギーを外に放出しないで済む、寒冷地住宅の窓を小さくしたような形でできている。ロシア人も、アイヌの人たちも、生活の自立心が低い段階においては、自然にからだが寒さに対応する。そうしなければ生きていけない。食べるものも脂肪分の多いものを食べることによって寒さに対応できる。ところが生活条件が変わってくると、特殊なクマの肉だとか、魚の肉だけ食うというわけにいかない。より安いものを食べる。そうすると、自分の能動汗腺だけで寒さを食いとめるわけに参りませんので、やはり住宅条件を確保せざるを得ない。そうすると、別の手段を考えなければならない。その別の手段の模索が北方圏という名を借りて出てきたのではないか。すると、北方圏というものを、地理的に限定すること自体に問題がある。むしろ北海道の中で生活している私たちは、周囲の環境条件と、いろんな社会的条件のまざり合いの中で時間による生活―そういうような視点から問題をとらえていくべきじゃないか。究極的には、人間の生活という観点に問題を還元してみるのも一つの行き方じゃないか。こんな見方があるというふうに思っています。

**関**　本日のシンポジウムをふり返ってみると、私たちの北方圏とはなにかというテーマで、大変有益な示唆をいただいたわけです。九月に会議が開かれるわけですが、早急な成果、実質的な成果をこの会議ですぐさま期待するわけにいかないかもしれません。第一回目のことですから、北方圏概念をふまえた上でタネをまくということ。今年、まいたタネが何年か、何十年か先に芽生えてくる。そういう雄大な時間的な考え方の下に、この会議が成功されるようにと思うわけでございます。私の考えるところでは、例えば北方圏との実質的な人の交流、若い方々の交流をしたらどうであろうか。そういうことが会議の議題に出たらいいなあと思うわけです。

諸先生方や参加された方からも貴重なご意見を承り、ありがとうございました。



毎日新聞は
あなたの世界を
広くする。



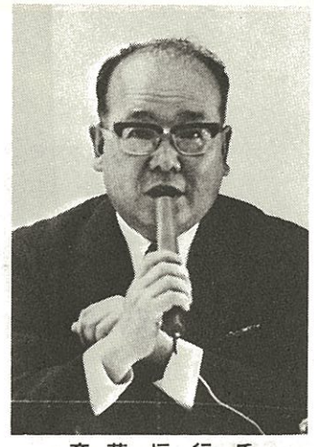
札幌市中央区北四条西六丁目
道庁北☎二二一―四一四一（代）

# II　豊かな生活のために

| | | |
|---|---|---|
| 「寒さとおしゃれ」 | 服飾デザイナー | 石津謙介氏 |
| 「寒さにまけない栄養学」 | 旭川医大教授 | 黒島晨汎氏 |
| 「暖かい冬のすまい」 | 北大助教授 | 飯田勝幸氏 |
| 「北国の自然とレジャー」 | 国立公園協会理事長 | 千家哲麿氏 |

## 北方圏の衣食住とは

斎藤恒行（司会）



斎藤恒行氏

本日のシンポジウムは衣、食、住、そのあとに余暇といいますか、レジャーについてお話し願いたいと思います。最初に石津謙介先生から〝寒さとおしゃれ〟についてお話しいただきます。

**斎藤恒行氏**　明治四十三年群馬県生まれ。昭和十年北海道大学理学部卒。同二十四年同理学部助教授。同二十八年同水産学部教授。同四十六年同水産学部長。四十三年日本水産学会功績賞受賞。理学博士。

著書に〈蛋白質アミノ酸の栄養学〉＝共著ほか。

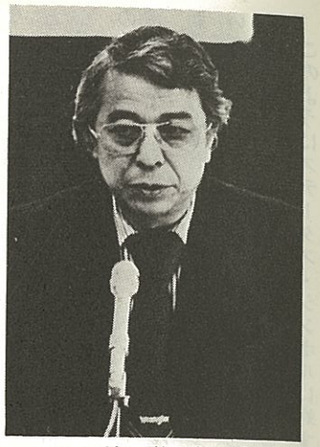
## 簡素こそ〝豊かな衣装〟

石津謙介

豊かな生活のためのシンポジウムですが、豊かな生活とは何であるかというと、一番大切なものが住なんです。環境、それからレジャーとなるのであって、一番豊かでないものが着物だ。衣服は人間の豊かさとはあんまり関係がないと私は思うのです。いい洋服を着ているからといって決して豊かではない。服ごときものに金をかけるということは、最も原始的な金の使い方だ。衣類は手っとり早いし、なんとなく買って着る。みんなの前に出て見せることは、豊かさのなかで最も原始的、後進的のものなんです。豊かさの中で一番大事なことはよい環境、生活環境に住むことなんです。その次が食べること、いいもの、うまいものを食うこと、その次が住むところ、即ち住居ではないだろうか。そんなものが満たされたあと、一番最後が着ることになるのです。今の価値観はそのように変わってきているのではないだろうか。衣食住といいますが、これはゴロがいいので、ただそう並







石津謙介氏

べてあるだけで、ほんとうは食住衣ではなかろうか。

最近感心したことは、帯広の近くの池田町です。生活環境が非常によろしい。〝町長奮戦記〟などを読んですっかり感心し、町営のレストランでビフテキを食べ、ワインを飲み、〝ああ豊かだなあ〟と、実感としてそう思った。町長さんは、うまいものを食うべきだ。トウモロコシやジャガイモばかり食っていたのでは、どうしようもない。それで牛を飼って肉を食うことを考え、さらに肉をうまく食うためにブドウ酒を作ることを考えたというのです。いずれにせよ、住の前にまず食を充実しようという考えが豊かなんです。それから住の方はどうも、新建材を使ったあまり快適でない、当世風の旅館があり、また町の衣料品店に、フランス人のデザイナーによる衣料がぶら下がっているのです。新建材の家に住み、あまりうまいものを食ってない人が、どうして舶来の服を着なければいけないのか、どうしてもそのへんが私にはわからない。

## 見せる時代は終わった

大体品性あまり豊かでない、何かコンプレックスを持っている人が、身分不相応の金をかけて純毛、舶来の洋服を着る。それでコンプレックスをカバーしているのです。衣は自分が着て楽しむより、人に見せるものである。特に女性は、誰か相手に見せる、いや見てもらうために衣料を着ているのであって、自分一人で着て、やに下がっているようなものではない。そこへいくと食は違う。おれはこんなうまいものを食っている。〝みんな、見ろ、見ろ〟というようなものではない。人間はわりかし見えないところには金をかけない。このへんが大変に後進国的である。表通りはきれいだが、裏へ行くと、ひどいところがたくさんある。

私は札幌オリンピックの時、役員、選手のユニホームをデザインしたが、この時、北方圏、いわゆる寒冷、積雪などについて、頭を痛めた。あらゆる場合を想定して、地域と衣装についてしみじみ考えた。余談だが、その時コンパニオンの衣装については、どこの国でも民族衣装を取り入れるのが普通なので、アイヌのアツシをコンパニオンの衣装に取り入れたらどうだろうという意見が出た。だが結局はダメになった。北方圏と衣料を考えてみると、特に北海道は寒さから身を守るための衣装、それと儀礼的、社交的、習慣的、あるいはファッション的なもの、結局この二つになってしまうのではないか。

北方圏と衣料といっても、寒さに対し若干考慮しているというだけであって、カナダもシベリアもノルウェーもほとんど変わらないものを着ている。ただ違っていることは、どれもその土地でとれるものを使っているということである。例えばキツネ、クマ、オオカミなどがとれるところは、衣料の一部にそれを取り入れている。そんなことくらいしかない。最近の衣装は世界的な感覚で着られているのではなかろうか。ただ寒いから厚着をする、暑いから半袖を着るといった程度のもので、北方圏なるがゆえの特別のおしゃれは成りたたないと思う。北方圏ということになればスカンジナビア、ソ連、アラスカ、カナダということになるが、それは防寒が加味すればよいのであって、おしゃれとは直接結びつかない。ただ産業的には毛皮の生産、それを利用国にどうもっていくかということがあるくらいのものである。

今まで豊かな生活が衣料と関係がありそうなのは、暖かいからといったものであったが、もうそんな時代はとっくに過ぎてしまっており、ほとんどの場合がステータス・シンボル（身分の象徴）であって、あの人は立派な着

物を着ているから多分金持なんだろう、家柄がよいのだろう、また部長なのか、社長なのかといったことが、衣料で判断されるというケースが非常に少なくなった。ところで最近の衣料界でブームというか、ファッションとして捉えられているものにジーパンがある。ジーンズというのは、アメリカの開拓民たちがはいた一番安物の木綿で、いわゆる仕事着というか労働着なのだが、いまやそれがトップ・ファッションにおどり出て、ジーンズをはいているのはなんとなく格好がよいということになってきた。

## 行動半径広げよう

街のなかで英国製の洋服をきて幅の広いネクタイを締め、カルチュアーのライターを持ち、すばらしい外国製の時計をしているのなんかは、もう威張れなくなってしまった。むしろ時計なんかしてない方がよいのかもしれない。時計は誰でも持っており、街を歩けばどこでもかかっている。日本のように時計がどこへ行ってもかかっている国は少ない。そのくせ、鏡が非常に少ない。鏡が少ないということは文化が低いという一番の証拠なんです。特に北海道では痛切に感じる。鏡が少ないのは、それだけ後進的なのです。だから鏡をぜひ多くつけるように考えるべきである。

このようにステータス・シンボルに対する価値観が全然変わってきた。そういった次元で衣料を考え、それを豊かな生活に結びつけることが大切だ。

私は最近一番好きな言葉に Do move with less というのがある。with less というのは、…でもって、より少ないもの、金もかけない、エネルギーも使わないで、より豊かな生活をかちとろう、もっと行動半径を広げようということです。それがジーパンなんです。安いし、どこへでもはいて行かれる。汚れてもパラパラと払えばそれでよい。どこへでもしゃがめるということだけで人間の行動半径はぐっと広がるのです。これからの我々の生活は Do move with less でいかんけりゃいかん。それが豊かな生活と結びつくのではないか。よい環境で、よいものを食べるのが一番豊かな生活であり、最近のテレビでもクッキングの番組がブームになっている。それから園芸の時間である。一時の歌謡曲とかドタバタ劇はすっかり影をひそめてしまっている。そんなわけで北方圏と衣料については、私自身、今迷っているというのがいつわらない今の私の気持であります。

**石津謙介氏**　明治四十四年生まれ。昭和七年明大商卒。二十四年ヴァンヂャケット社設立、同社社長。アルフレックス社社長。三十九年帝人顧問、イタリア・シェイナ市名誉市民。三十九年メンズファッション協会理事長。服飾デザイナーとして著名。著書に〝いつ、どこで、なにを着る〟〝男のお酒落と実用学〟。



黒島晨汎氏

# 食べ物への適応力活かそう

黒島晨汎

われわれ人類は熱帯性動物であるといわれ、汗をかくことなどで熱に対する適応能力はあるが、寒さには弱いといわれています。事実ネアンデルタール人以前は北半球の寒いところに広がることができず、温帯圏に閉じこめられていたわけです。人類はその英知でもって火をつくり、暖をとり、衣類を作り、家屋を建てることによって寒さを克服し、約三万数千年前から寒帯地方に進出し、いわゆる北





方民族が形成されたといわれています。人類が北半球に広がり始めたことから進化の新しい段階を迎え、寒さと人間のかかわりあいというものが、これからの人類の生存に大きな意義をもっていると思われます。

それでは熱帯性であるといわれるヒトが、生理的に果たして寒さに弱いものかどうか。現在の人間は被服など技術的な進歩によって、寒さを克服しているので、純粋に寒さに対する生存能力を客観的に評価することは困難になってきております。しかし地球上にはまだ原始的な生活をしている民族が、少数だが残っており、これらを観察することで、若干の情報が得られるのであります。

## 寒冷地に生きる条件

例えばダーウィンにビーグル号による探検のことを書いた本がありますが、一八三四年に南米の南端で、テラ・デル・フェゴという土人の生活や習慣を書いていますが、彼らは肩のまわりに皮のケープのようなものをまとっているほかはほとんど裸体で、みぞれが降り日中は摂氏七度、夜は三度くらいの寒さのなかに、耐えて生きているという事実に強い印象を受けたと書いてあります。また母親が生まれたばかりの赤ン坊を裸のまま抱いて、みぞれの降るなかで乳を与えているということも観察しております。また今世紀の初めオーストラリアの原住民が零度から五度くらいの冬の夜に、衣服もなく生活しており、寝るときは草を積んだ風除けをつくり手前に小さな火を燃やして安眠していることが観察されています。このことは熱帯性であるという人間も人類学的には生理的に寒さに対する適応能力がある。すなわち寒さへの強い抵抗力が潜んでいることの証左といえます。人間は高温動物であり、体温は摂氏三七度に保たれ、そのような条件のなかにわれわれの生命が賦存しているといえます。寒さに曝されますと、体熱の放散が促進され、体温が下がります。したがって寒さに曝されても体温が下がらないようにする、特に重要な臓器の温度が下がらないようにすることが、寒冷環境下で健康に生きているため重要なことであります。（**図1参照**）




私の住んでいる旭川市では冬の温度は氷点下三〇度にもなります。寒さの公式記録では一九〇二年（明治三十五年）一月二十五日の氷点下四一度でありますが、それと体温三七度との格差は実に七八度であります。したがって、このように厳しい寒さに人間がどのように対応するか…。それは体温というものは産熱と放熱のバランスによって形成されていることを認識する必要があります。体温を維持するための産熱は栄養の三大栄養素といわれている糖質、タンパク質、脂質であり、そのほか産熱の因子としてはホルモンの分泌、筋肉の運動、緊張などもあります。また放熱の方は輻射、伝導、対流や皮膚面からの蒸発熱、気温、風、被服などがあります。また皮膚を流れる血液の量、それから暑いところでは発汗など大きな因子をもっております。

さて、人間は実際にどのようにして生理的に寒さに耐えているかの実例をみると、オーストラリアの原住民についてシュランダーという生理学者が人間の生理的耐寒性を示唆する非常に興味ある現象を報告しています。（**図2参照**）気温零度で、裸のまま約八時間夜間睡眠をとらせるという実験をしたのであるが、オーストラリアの原住民が、安眠状態になっておるときの生体反応は、産熱の増加

はほとんどなく、皮膚の温度はだんだん下がっているという状態のなかで安眠しているのであります。これに対し温帯に住む白人の場合は、寒さに慣れていないし、代謝はほとんどなく皮膚温はだんだん下がり不快感で、ほとんど眠ることができなかったのであります。しかし白人でも原住民と同じように、ある期間寒さに対する適応能力をつけますと、産熱をまし、皮膚温もある程度高く保ってなんとか眠ることができるという適応状態が知られたのであります。これは原住民は寒さに対し皮膚の血管を強く収縮させて、その温度を下げて、皮膚の表面に一種の断熱層をつくり、重要臓器がある中心部の温度を下げないようにして、体温を維持していることがわかったのであります。このような方法はエネルギーを全く使わない非常に経済的な方法であります。

また世界で一番寒いところに住んでいるアラスカ・エスキモーの生体反応のデータもありますが、これも白人に対してよりも耐寒性が強く、皮膚面の低下を強くおこして、一種の断熱層を作って寒さに耐えているという結果が報告されています。また北海道でもアイヌの場合の基礎代謝を測定したことがありますが、要するに基礎代謝すなわち生命を維持していくための必要最小限度の産熱は夏の暑いときは低く、冬は高いということが知られています。これは冬の寒さに対する体の適応性の変化と考えられていますが、アイヌではこのような季節変動が全く認められない、すなわち夏と冬での基礎代謝に差がみられない。それはアイヌの耐寒性がわれわれより強く、それが断熱性の状態によるものであろうことを暗示していると考えられます。このように人間が寒さに耐えて体温を維持していくためには、断熱層の形成によって放熱を抑制することが有効に働いているのであります。しかし積極的にはエネルギーを利用することによって体内の産熱を高めることが重要な因子をもっており、エネルギー源としての食物、即ち本日私に与えられた栄養の問題がおきてくるのであります。

**図2.** 寒冷地人と非寒冷地人の比較
（気温0℃で夜間8時間ほぼ裸の状態で睡眠をとらせる実験結果）

| | 産熱状態 | 皮膚温 | 熟睡度 |
|---|---|---|---|
| オーストラリア原住民 | 不変 → | 低下 ↘ | 安眠 → |
| 寒さに慣れていない白人 | 上昇 ↗ | 低下 ↘ | 不眠 ↘ |

## 低温ではよく食べる

そこで食物の摂取カロリーと、食質の面から取り上げてみたいと思います。ここにヤギの餌を食べる摂取量についての実験があります。ヤギが食物を食べる時間―一応それが摂食量に比例していると考えられる―それによると気温が高くなると摂食時間が短くなる。逆に気候が下がると摂食時間は長くなります。気温が四〇度以上になると摂食時間はほとんど零、すなわち食べなくなります。またブタでも気温が三八度、体温が四〇・六度になりますと摂食が三分の一以下になります。ネズミの場合をみても、二四度の部屋にいれておいたのを八度のところに移すと摂食量が急激にふえ二倍になります。これを一日くらいでまた元に戻しますと、徐々に摂食量がふえて直線的に時間の経過とともにある一定の基準になることが知られています。**（図3参照）**

最初の摂食量増加は末梢の皮膚や感覚のうけとる寒冷刺激と関係があると考えられている。その後生体の漸進的な寒さに対する適応が進むにつれ、食物の摂取量が直線的に増加すると考えられています。このような食物の摂取量は寒冷温度、すなわち寒冷の曝露時間が短時間であってもみられる。例えばネズミを二〇度、一〇度、零度の部屋に別々に入れ一





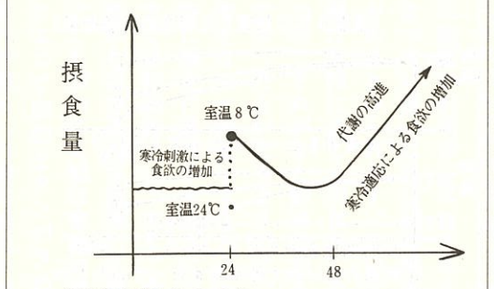
日二十分だけさらしておきましても、摂取量が零度が一番多く、次いで一〇度となり、二〇度が一番小さいのであります。このようにわれわれを含めて高温動物の場合、一般に寒冷に曝されると代謝の高進に伴って摂食量が増加するという現象がみられます。

ところでわれわれ人間の場合どうか。これはジョンソンとカークという学者が一九四七年に北極から熱帯地方に及ぶ、アメリカ、カナダに駐留しておる軍人についての栄養調査をした結果、気温と摂取カロリーの間には逆の相関関係がはっきり認められることが報告されています。すなわち寒くなると摂取量は多く、暑くなると少なくなります。これは非常に変化に富んだ、食べようと思えばいくらでも食べることのできる、量的に豊富な給食をうけている人に対しての調査であります。気温が三三・三度のところでは一日の摂取量が三、一〇〇カロリ、北極の氷点下三四・四度では四、九〇〇カロリの値を示している。北極、寒地などでは作業が多く熱量をたくさん伴うといっても、一日二、〇〇〇カロリに近い差を説明することはできない。これは寒冷地での体温維持のため、より多くの食物を必要とすると考えられるのであります。もちろん、寒地での食欲が高進するということもあります。事実、カナダの北方では、そこへ行くと食欲が盛んになる。新来者でも随分多く食べるようになるとの報告がなされている。

以上のように人間でも動物でも、寒さによって摂食量がふえるのは、寒さに抵抗して、体温を維持し、活動を支えていくための本能的な機能であるといえます。

次に食質も重要な部門を占めております。カロリーだけでなく、食質の面でも、本能的なメカニズムが働いて、寒さに都合のよい食質の食物を選択するという興味深い報告があります。動物が自由に好きな食物を選べるというようにし、高脂肪食、高タンパク食、高糖質食という三種類を作り、マウスに自由に食べさせますと、二九度という気温で食べたものは大部分が高脂肪食であります。これを室温を一〇度にするとカロリーの摂取量は二〇―四〇％ふえるが、その増加分は高糖質食からとっており、そして高脂肪食と高タンパク食からとったカロリーには変わりがなかったと報告されています。ネズミの場合は寒地では脂肪の多い食物をとっていると報告されています。

**図3.** 摂食量に対する寒さの影響




（室温24℃から8℃に移したネズミの実験結果）

また、こんな面白い実験もあります。氷点下三度に保った室内に訓練したネズミをいれ、レバーを押すと赤外線がついて部屋が暖かくなるという装置にしておきます。そして高脂肪食を与えておきますと、レバーを押す回数が減少する。高糖質食を与えますと、標準食よりもレバーを押す回数がやや少ない。ところが高タンパク食では標準食とほとんど変わりがなかったということであります。しかも高脂肪食と高糖質食では摂取カロリーと体重の増加が認められており、これは体脂肪が蓄積されて皮膚の断熱性がよくなったためと思われます。食物を摂取した場合、余分な熱を発生するという現象はタンパク質が最も強いのでありますが、そのタンパク質をたくさんとってもレバーを押す回数が少ないという、一見理解に苦しむ現象がおきているのであります。

このようにみてきますと動物は寒いところでは高糖質、高脂肪を好むという結果が出ているが、実際に高脂肪、高糖質を与え、動物の耐寒性をみることが栄養学上興味のある問

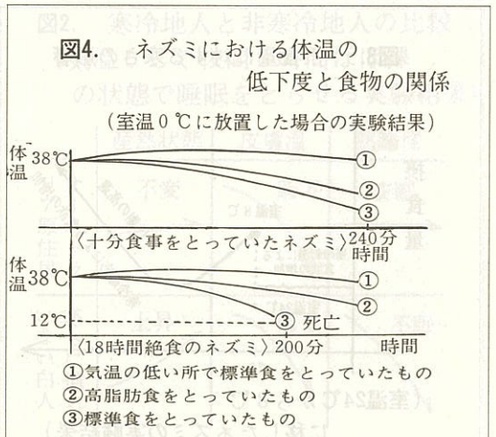
題だと思われる。今摂氏二度の部屋にネズミをいれ高脂肪食と高糖質食を与え、体重の増加率と生存率を調べてみると、高脂肪食が断然すぐれていることがわかります。また低温での体温の低下を調べてみると、高脂肪食のネズミが標準のネズミより体温の下がり方が少ない、すなわち耐寒性が強いという報告がなされています。この理由として恐らく高脂肪食が物質代謝を促進させるように働いたと思われます。

私もネズミに全カロリーのうちの二分の一が脂肪であるという食物を与えて実験したことがありますが、その場合、零度の部屋に約四時間おき、体温の低下を観察しましたが、体温の下がり方は標準食も高脂肪食も大した差はない。しかし寒いところに何カ月も飼われたネズミの場合、体温の下がり方はごく少ないことがわかりました。（**図4参照**）こんどは十八時間くらい食物を全然与えないで寒い部屋にいれると、最初三八度くらい体温があったネズミが、二〇〇分くらいで一二度くらいに下がり死んでしまう。この場合も寒さに慣れたネズミは体温の低下が非常に少なく、高脂肪食のネズミはその中間くらいなところになるのであります。このことから高脂肪食はある程度、寒さに対する抵抗性がある—耐寒性を促進する作用があるといえるが、普通の食物でも、寒さに慣らした者ほどが抵抗力があるといえましょう。

## 肉食には耐寒能力

人間の場合、例えば日本では冬の十一月が夏の八月にくらべてカロリーの摂取量は多い。この場合もタンパクと糖質は冬高く夏低いのであるが、脂肪の摂取量は季節的に変わらないという結果が出て、どうも今の動物実験とは合わないのですが、これは物理的、経済的その他で本能的な防御が働かないのかもしれません。外国の例をとると、寒冷な環境に住んでいる者はグラム当たり高いカロリーのものを選び、その環境と最も適した食習慣を獲得しているといってよさそうであります。

**図4.** ネズミにおける体温の低下度と食物の関係
（室温0℃に放置した場合の実験結果）




そこでエスキモーなど寒地住民の食生活のデータをみますと、彼らはクジラ、アザラシ、セイウチといった動物を冷凍し貯蔵して食べている。このほか魚とかクマとかトナカイなども食べ、穀物はほとんど摂っていない。その食習慣も決まった時に食べるのではなく、すきなときに食べ、一日の一番おしまいのディナーが一番ご馳走となっています。そして大体調理せず、生のまま食べている。これは燃料不足などにもよるだろうが——エスキモーとはインディアン語で生肉を食べる人という意味だが——一日の摂取カロリーは三、〇〇〇（カロリー）程度あります。そのうち五〇%は脂肪から摂っており、あと三〇—三五%がタンパクで糖質はわずか一五—二〇%で、それも雪にふくまれているグリコーゲンから摂っている。このようにエスキモーは高脂肪、高タンパク食を摂っているということであります。日本人の栄養摂取の現状はタンパク、脂肪が各一五%、糖質七〇%程度だからエスキモーの食物がいかに特徴的であるかがわかると思います。このように高脂肪、高タンパク食を食べながら動脈硬化や糖尿等が非常に少ないことはおもしろい現象であります。

食習慣は食物の入手の可能性にも影響されます。最近では西欧化により西洋食を摂取の機会にも恵まれていますが、依然として彼らは伝統的な肉と油の食物に固執しているという報告があります。これは寒冷地での大きな熱損失をカバーする必要性によるものとみられます。それではエスキモーの耐寒性はどうか、このような食餌の効果が、彼らの寒さに対する抵抗にどのように反映されているだろうかを考えてみますと…。

明治大学の祖父江先生の本によると、彼らと一緒に生活していると彼らは恐ろしく寒さに強く、日本人なら寒くてたまらんというような気温でも、日が照って来るとすぐアノラックをぬぎ捨てて、アンダーシャツ一枚で何もかけずにそのままごろりと戸外で昼寝をする。また彼らは肉をたくさん食べないと寒くてかなわぬといっている。最近では西欧人の食事がはいってきてパンやクラッカーを食べる者もあり、そのためか肉を少なく食べ風邪をひくものがふえてきたとも書いてあります。しかし、住居や衣服についても、彼らは独特の工夫をしている。地球上で一番寒いところで住んでいるのだが、われわれ温帯地方に生活するもの以上に耐寒性をもっているとは考えられないと述べている人もあります。また本多氏のカナダ・エスキモーの報告によると衣服、住居については、ニューギニアの高地に住んでいる原住民の方が耐寒性においてすぐれているのではないかと報告しています。

北海道の場合、アイヌはエキスモーほどではないにしても、寒さに適応する民族であると思われます。また今でも雪の中を粗末な小屋と僅かな木と少ない食物で狩をする者もあります。彼らは昔はシカ、クマ、アザラシ、ニシンといった肉を、しかも内臓を生のまま食べていたそうでありますが、今では日本人と同じになっており、カロリーでも——これは経済的な関係があるでしょうが——少ないものもあります。それにもかかわらず彼らの物質的な代謝、特に脂肪の利用が、エスキモーと同じように高まっている。これは耐寒性の強いことに関係があるとみられます。このように寒地、極地圏は食物に乏しく肉食をしなければならなかった。それがまた耐寒能力をつける上で必要であったといえるようです。人間が真の狩猟者となって肉食するようになったのは寒帯、特に極北に進出するようになってからで、南方では狩猟民といっても、食物の主体は植物性のものであって肉類の必要性は少なかった。したがって人類は寒冷の地に進出することによって脂肪とタンパクの食生活となり、それが寒さへの適応能力を増加させるようになったと考えられます。

ところでエスキモーなど寒冷地の原住民の食生活がそのまま、われわれに応用できるかどうかはさらに慎重な検討を要する問題であります。それは栄養学の分野では動物実験のどのような成果があるかということはまだ明らかでありません。また伝統的に特異な食生活によって体のなかでいろんな物質を利用して代謝を高めるというメカニズムが、われわれにも備わっているかどうかは保証できないわけであります。また、食物摂取の時間間隔という問題もあります。時間間隔を縮める、すなわちひんぱんに食事をとることが寒冷地において、体温を維持していくうえに好ましいという証拠もありますので、正規の食事のあいだに軽い食事をとることも寒地の生活上考慮されるべきものと思えます。

最後に強調したいことは、人間は生理学的にみまして非常に適応能力にすぐれた生物でありまして、寒さという外界の変化についても例外でありませんし、食物というその適応能力を十分に発揮させるうえで役立つものであり、いかに工夫した食物を摂取しても、その生理的な適応能力を発揮する機会、すなわち寒さに曝されないと、体にとってその食事はムダになり逆に害になることもありうるのであります。このように考えると、すぐれた、健康な北方圏の人類——民族——厳しい寒さのなかで、その寒さと闘いながら生活するという生活のなかでのみ育っていくと考えられるのであります。

**黒島晨汎氏**　昭和十年生まれ。三十五年北大医学部卒、四十二年北大大学院（医学研究所生理学）卒、医博。四十二年北海道教育大学助教授、四十六年教授。四十八年旭川医

# 住宅文化は失敗から

飯田勝幸



飯田勝幸氏

大教授（生理学第一講座）。日本生理学会評議員、日本生気象学会会員、国際生気象学会会員、日本内分泌学会会員、米国内分泌学会会員。著書に〈人生理学入門〉〈脳のホルモン〉ほか。

私に与えられたテーマは〝暖かい冬のすまい〟ということになってます。現在、豊かになりつつある我々の日常生活の中で最も大きな問題の一つに生活環境にかかわる問題、つまり住まいと、それをとりまく都市空間の問題があります。今日、西欧社会との間の最も大きなハンディもここにあるといえましょう。

暖かいすまいというテーマは、ある意味で北海道のすまいのイメージの目標を象徴的に表したことばということができよう。それは、物理的に戸外の厳しい状況の中に、暖かな心地よい環境を人工的に作り出す、いわば一つの快適な状態のことであり、また心理的にも暖かい家庭団らんの楽しいイメージを象徴することばでありましょう。

暖かい住まいを技術的にとらえると、現在のわれわれの持ち合わせている技術としては何もそうむずかしい問題とはなり得ない。それは北海道よりずっと寒さの厳しい条件のなかで、例えば南極越冬隊や宇宙飛行などにおいても人間が十分に生活し得ることからも明らかであります。

したがって、このテーマはそれを技術的にどう作るかの問題ではなく、それをどう一般化し、住まいの文化水準をどう引き上げ、定着化させるかということであろう。住まいの問題はわれわれの社会全体と相互に密接につながっている。とりわけ生活に対する考え方や態度と最も深くかかわり合っているのではないか。特に北海道の住まいについて考える場合、このことは重要な問題であると思います。

北海道の住まいの歴史をみれば、アイヌを別にすると二つの系統の流れがある。一つは開拓農民がおがみ小屋とか着手小屋などといって仮住まいをした竪穴の上に屋根を建てたような粗末な小屋。これはとりあえず建てておいて、あとでちゃんとした住まいを建てるという意味であった。別の見方をすればここ百年のあいだに竪穴みたいな家の原形から今日までの住居発達の歴史がある。それともう一つは開拓使の黒田清隆が寒いところは耐寒建築が必要だとし、ロシアの丸太式住居を模倣した、外来住宅で、それを耐寒住宅のモデルにしようとしたものだが、これはたちまちにして失敗した。それで結局北海道の住宅は最初に造ったおがみ小屋のような住居に新聞紙を張ったり、板を張りつけたりしてなんとか住み、そして最後には郷里にあったような住宅を建て一度住んでみたいということであった。

## チエの拝借定着せず

このことは、北海道の住まいのあり方を考える上で非常に重要な意味をもっているといえます。真に現実の状況と人々の要求をふまえていないものは、たとえ、それがすばらしい技術であろうと、そこに根を生やし、生きたものとはならないということであります。逆に、黒田長官の試みのように、庶民とかけはなれた高官のステータスのシンボルとして、権威の象徴に変わってしまい、かえって一般化





をはばむ結果となったりします。

もちろんその一般化には大変お金がかかるということもあるが、もし人々が真に求めているものだとすると、人々もお役所も失敗にもめげずよりよい方法を研究し続けていたはずである。細々ではあるが本格的に取り組み始めたのは戦後であった。その原因の第一は、定住意識の欠如による消極的住まい方を指摘しなければならない。そこに住むのだという意識のないところに、住まいについて努力するということはあまり意味のないのは当然であります。

最近、住まいのおくれに気づき、今回の北方圏環境会議を機会に北方諸国の優れた生活のチエをいただこうという期待もあるが、住まいの問題は単なる技術の移入だけでは簡単に解決し得ないものであるということを考えなおす必要があると思う。暖かく快適なすまいを作り出すための根は深いところにあるようであります。

## 暖かさの重要性を

このように考えると、そうすればよいことはわかっているが、それがなかなかできない。そういったことが住の一番大きな悩みであり、それは今日もちっとも変わっていないのであります。

私たちが家の設計を依頼されて図面を引いているうちに、どうしようもない壁にぶつかる。暖かい家を造るため、いろいろ防寒的な設計をする。すると当然余計金がかかる。そのうち依頼者の方から、そんなにまでしなくてもよい、もすこし金のかからないようにしてほしいと逆に注文が来る。そこで防寒にあまり関係のない外装その他を削ろうとすると、それは困るという。結局目に見えるところは削らないで、目に見えないところを抜きたがる。それは、さきほどから諸先生がいわれているように住居はステータス・シンボルになっているからであります。私どもが、折角苦心して、暖かい家を考えたのに、結局は経済的理由から暖かくない家になってしまうのです。そんなとき私たちは依頼者を説得するのに大変苦労するのであります。

家の問題は都市にも延長されるのでありまず。従って都市をつくるということは、そこに住んでいる人たちの考え方、あるいは哲学といいますか、文化のレベルのすべてと等質と考えられるのであります。ですから人のチエをちょっと借りるなどというものは絶対に定着しないのであり、またチエを簡単に求めるという発想もおかしいと思うのであります。

家を建てようとする一般の人々にこうすべきであると説得するのに、非論理的な家相があります。それは、例えば〝この方角出張りたるはその家の娘発狂す〟といったたぐいのもので、病気や死あるいはお金がもうかるといった極めて具体的で極端な暗示をする。

このような強烈な暗示と違い、より暖かであるとか、より快適であるとか、より美しいといった状態は、最近までは経済力の弱い一般人にとってはあまり説得力をもたない。

このようなことで、暖かい快適な住まいの意味を、例えば病気や死といった切実な問題と結びつけて説得でもしない限り理解されないのではないかなどと話していた折、おもしろい研究が紹介された。それは病理地理学、あるいは生気象学の分野に属する研究ですが、人々の死と季節や場所といった環境とのかかわりあいについて調べたものです。

歴史的、統計的に人々の死と季節の関係をみると、古くは夏に多くの人が亡くなる夏型から、しだいに冬型へと移行しています。

夏死ぬ人が多いのは疫病などそういった流行病で死ぬわけですが、それが文化が進むにつれて冬に死ぬ者が多くなる。これは日本もヨーロッパも同じことで、日本がやや遅れてそうした傾向になっており、現在の日本は冬季集中死亡のパターンになっています。冬集中型の死亡はイギリス、フランス、スコットランドその他ポルトガル、スペインなどがあり、日本もこれに含まれている。これに対し、もう一つのパターンはノルウェーとか、スウェーデンとかいった寒い国の例で、夏、冬



盛会だった函館会場

の死亡カーブが平均している。

このように寒さが厳しいところで冬の死亡が少ないことは何を意味しているのか。温度と健康のかかわりあいについてはまだ研究が浅く断定することはできないが、ひとつの見方として暖房が発達して、冬も夏と同じように快適に過ごしているためではなかろうかと思われます。冬零度そこそこで、暖房の必要が絶対的でないところが冬死型、寒いところが平均型というのは、暖房と健康に何らかの関係があることを物語っていると思います。もう一つのデータがある。それは北海道と本州との死亡を比較したものですが、それによると北海道の方がカーブがなだらかで平均していり、このことは北海道が日本のなかで先進地域であることを物語っているといえます。生きる、死ぬ、あるいは長生きすることと、暖房にはこうしたかかわりあいがあるといえるのであります。

もう一つおもしろいデータがあります。それはスウェーデンにおける五十歳以上の老人の全人口に対する構成比を表したものですが、それによると一八六〇年と一九二〇年にその構成比がぐんと伸びているのであります。一八六〇年は石炭ストーブによる暖房が全国的に普及した年であり、一九二〇年は自動車による交通機関がうんと発達した年にあたります。このことは体をいためつけるようなものから解放されることが人間の寿命と関係があることを物語っているといえましょう。これを日本でみますと、一九五〇年がその年にあたり、寿命がぐんと伸びていることはおもしろい現象だと思います。結局私はすまいというものは刹那的なものでなく文化のすべての象徴であり、ある部分だけ、うまくいっているところを取り寄せて、つなぎ合わせてみても、全体としてうまくいかないということをいいたかったのであります。

## 真剣に住まう努力を

ローマクラブが出した〝成長の限界〟の序文に興味ある問題が指摘されています。それは我々の日常の行動や関心が時間的に空間的にどのような次元にあるかということであります。それによりますと、今、現在この部屋の中でといった狭い範囲でのことと、十年後、百年後の日本の将来といった時間的、空間的広がりのなかでの関心事は、短期の狭い空間でのみ考えるという人が圧倒的に多く、長い時間の広い空間のことを考える人が極めて少ないということであります。それは、われわれが短期で狭い範囲で物を考えるときの結論と、ある程度長期に広い範囲で考えるときの結論は非常に違っているということであります。そこで我々は腰かけ的でなく長期の展望に立ってものを考えねばならぬということであります。

最後に私は提案をしたいと思います。第一は〝住もう〟ということです。腰かけでなく、長く住もうということです。第二に〝失敗しよう〟ということです。自分で見て、考え、そして行動して、失敗しようということであ





ります。その失敗を積み重ねた文化を作るべきだと思います。ロシアから丸太住宅をもって来て失敗して、それで終わりになっているのではダメです。その失敗をもちよってお互いに話をし、考え出すことに意義があると思います。失敗のプロセスを持たず、出来たものをただいただくのでは意味がありません。

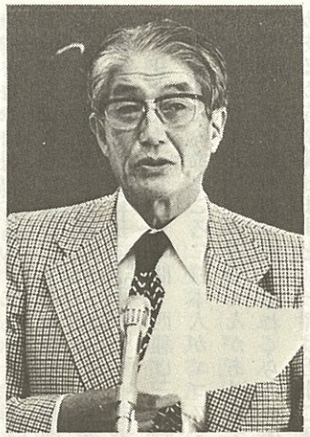
北方圏の環境会議も、北方圏失敗会議であった方がよいかもしれません。わたしは、みなさんが住むということについて真剣に取り組むことが、暖かい住まいをつくることにつながると思うのであります。

**飯田勝幸氏**　昭和十年札幌生まれ。同三十三年北海道大学工学部卒。都市計画専攻。同四十五年北海道大学工学部助教授。日本建築学会、日本都市計画学会員。道開発審議会臨時委員（研究学園都市）、北海道商工振興審議会委員、北海道都市学会理事、札幌市総合企画調査専門委員。

**斎藤**　まず北海道に住むことを覚悟しよう。そして何回も失敗をくりかえすことによって、そこから暖かい住まいが生まれてくる。このような論旨だったと思います。引き続き千家哲麿先生から北国の自然とレジャーについてお願いいたします。

## 冬の余暇を工夫しよう

千家哲麿氏


千家哲麿氏

衣食住が足りると、さて暇をどうするかということになる。ここ数年来レジャーブームになってきたが、それほど私たちはレジャーに恵まれていないように思うのだが、なんとなくそんな時代になって来たような、ホカホカした感じがします。政府でも公務員の週休二日制を考え、昭和五十五年には全企業が二日制になるといった明るい希望がありますが、ほんとうに週休二日制が来たとき、どう対応したらよいかは、むずかしい問題があろうと思います。日本人はまだ慣れておりませんので、今から真剣に二日制を考えておく必要があるのではないでしょうか。

ところで余暇とは一体何であろうか。その内容は豊富でかつ多岐であります。別にちゃんとした定義があるわけでありませんが、代表的な考え方をいいますと、時間的に捉えるのと、内容的に何をするかという捉え方であります。一日二十四時間のうち、寝たり、食べたりする時間、これを生活必需時間といっています。また家族を養うためには主人は外で働かねばならない。奥さんは家事をやらねばならない。通勤の時間も必要です。これを拘束時間といっている。この生活必需時間と拘束時間を二十四時間のなかから差し引いたのが自由時間すなわち余暇であります。

諸外国でレジャーと呼んでいるこの余暇は、その中で人間が何をするかというむしろ積極的な時間をレジャーといっており、それは我々の生活を豊かにするための時間であります。

## 週二日制の是非は…

さてわれわれ日本人に与えられている余暇は何時間くらいあるかを統計的にみますと、一人当たり平均一日五時間四十九分を持っています。日曜日は休みですが、他に働いている人もあるので若干ふえて八時間二十八分であります。しかし日曜日は朝寝をしたり、食事に時間をかけるなどレジャー的要素を多分にもった生活必需時間でありますので、これはレジャーの時間に入れてもよいようなも

のであります。それはともかく日曜日の平均的日本人の余暇は八時間二十八分となっています。それでは余暇の時間をふやすのは引算する方を減らせばよい。すなわち労働時間を少なくすればよいわけです。日本人は大変勤勉で、一週間に四十三時間働いています。アメリカ人は三七・五時間、西独は三九時間であり、こんなところに日本人がエコノミック・アニマルといわれるゆえんがあります。

それでは一年のあいだにどれくらいの休みがあるかを計算しますと、一年は五十二週ですから日曜日を全部休むと五十二日あるわけです。これに祝祭日の十二日をプラスすると六十四日となる。このほか一年に二十日だけは休む権利が与えられており、さらに近年は夏季に連続的に休むところが多くなりました。このようにして休みがふえ昭和四十五年には日本人の平均的休みは九十日となっています。これが週休二日制となると、土曜、日曜だけで百四日となり一挙に五十二日ふえます。これに祝祭日や慣例の二十日の休みなどをいれると大体百五十日くらいになり、近々のうちに一年の半分とまではいかないが五分の二くらいは休めるようになるわけです。現在大企業で二日制をとっていますが中小企業はまだまだですし、二日制をとっているところでも完全実施は少なく、一週、二週制といったところであります。

週休二日制は大企業のそれも家庭電器とか金融とか、人間疎外の企業でやっており、繊維とか木工などの中小企業はまだなかなかです。また全企業がいきなりやっては大変ですから、それ相当の用意が必要です。それには労働時間の按分、すなわち今まで六日かかってやっていたのを五日間でやる。そうした場合過重労働にならないか、また残業をやらねばならないかどうかといった問題があります。

一方、止めては困るサービス業などもあります。マーケットの魚屋さんが二日も休まれては奥さん方は困る。そのためには大きな冷凍蔵庫を各家庭に用意しなければならない。生産者の方も二日分の消費に見合うだけの出荷をしなければならない。そんないろいろの準備が必要なので早急にはいかない。あわてやって失敗した例がニュージーランドにあります。私が同地にいたとき、ある会社が週休二日制にした。労働者はみな喜んで大いに遊んだ。ゴルフが一日二ドルくらいで遊べるので、初めのうちはみんなゴルフを楽しんだのですが、そのうち飽きてきた。休みも結構だが、お金が欲しい。もうすこし働かせてくれというので会社と交渉して前に戻してもらった。またアメリカでは週三日制を考えているということであります。

日本で週休二日制をやっているところの統計をみると、余暇をどうしているかの設問に対し第一はテレビ、ラジオを視聴しているのが五一％、第二の休息が四一％、家族ダンランが二五・六％、つまり上位三つが（一部重複）、ただだらっとゴロ寝しているわけです。それからずっと下の方に日帰り行楽というのが約二〇％ありますが、これには但書があって、一日は休息したいという旦那さんの希望が付記されています。アメリカでは土曜日はたいてい旦那さんは庭の芝かりをさせられる。日曜日は宗教活動の時間で、一家そろって教会に行く。こんなことで旦那さんは休む暇がなく、どうも二日制は都合が悪いということになる。日本で週休二日はどういう意味で欲しいかと聞いてみると、大部分が大体七〇％が休養をあげております。

## 余暇には三つの種類

総理府が世界の十数カ国の青年の余暇の過ごし方を調査いたしましたが、それによると日本の青年は案外遊び方を知らない。一人平均三つの種類しかあげておらず、アメリカの青年の半分でしかない。それでは世界の余暇の利用の上のものをあげてみると、友人、隣人と過ごす、読書や音楽を聞く、スポーツをやったり映画、演劇を見るなどであり、その余暇の過ごし方が社交的、教育的、活動的であります。これに対し日本人は第一がテレビ、





雑誌を読むのが五〇％以上、第二が商店街をぶらつきショッピングをするのが三六％、第三が読書と音楽で、いずれも休養型、ノンビリ型、無計画型となっており、世界の第一位の友人、隣人と過ごすというのは日本の場合僅かに二六・七％にすぎません。週休二日制になると、一日のときとは性質がちがい、すくなくとも一日は自由な時間、きょうのテーマである豊かな生活のために使うといった方面に価値観が変わってくると思うのであります。

余暇と労働はこれは大変重要な時間でありまして、余暇ばかりで労働が嫌いだといっておりますと、社会環境が次第に悪くなるので、やはり労働と余暇はバランスをとらなくちゃいけない。ところがアンケートをとってみますと余暇が目的で労働は手段であると考えているのが大体四分の一あります。それに反対に労働が目的で余暇は手段であるというのが、それよりちょっと多いがやっぱり四分の一、労働も余暇も同じように重要であるというのが、四〇％くらいであります。理想としては労働は手段で余暇が目的といった考え方から次第に第二、第三の方に移っていって、余暇を活用することによって人間疎外の労働に有意義なものを見出すということが、余暇を活かす道であろうと考えます。

さて余暇の利用は次第に変わってきます。一昨年あたりまではボウリングをみんなやっていたのですが、それが次第に下火になった。余暇の使い方もじっとしていて見るといったテレビ型から、自分でやってみる—活動する方向に変わってくる。スポーツ、旅行などや、主婦では住民運動に参加して環境問題を考えるなど次第に社会的な問題に関心をもつようになる。同じテレビを見ていましても語学の番組とか音楽とかいった教養の番組を見るようになります。日本人はまだレジャーの使い方に慣れていないのか、レジャーブームとかコマーシャルにいつの間にか乗せられて、自主性のない余暇を過ごしている。旗を立てて、こちら登別温泉でございますといった団体旅行、〇〇ランドといったところ、ボウリング、競馬といったものに使われていて有意義な使われ方をしていない。アメリカなど先進諸国のように家族全体としての余暇のようにまだ発展していません。日本の場合職場で上役が気に食わない。家へ帰ると2DKで毎日奥さんと子供と鼻をつき合わせている。そんな環境から逃げだそうと、日曜日になると旦那さんは一人でゴルフに出掛けてしまう。折角車を買ったのに自分一人で出掛けるという独りよがりのレジャーです。

そこで週休二日制になったときのことを今から考えておらねばなりませんし、企業に乗せられあちこち行くのでは金がかかりすぎるし、従って長続きしない。そのためには欧米諸国のように公園、運動場、図書館、公民館、プールなどたくさん施設を作る必要があり、日本はまだまだ少ないのであります。日本人の人口の六〇％以上、七〇％近くは都市に住んでおり、空気の汚染、騒音、緑がない、外に出たい欲望が非常に強いのでありまして、こういう問題の解決にも役立つのであります。

日本人がどのくらい旅行をしているかを国立公園協会の調査でみると、一年間に三億人が国立公園を、また二億人が国定公園に行っている。富士山には年間百万人もの人が登っており、最盛期は一日二万五千人も登っている。総理府の統計によると昭和四十八年中に観光、レクリエーションに出掛けた人は四億人近く一人三回も行った計算になっています。目的は自然の観賞とか遺跡を見たいなど自然への親しみを主としている。旅行には金と暇が必要だが、その両方ともだんだんよくなり、また足も航空機の発達のほか、青函トンネルが開通すればもっともっと北海道に来る者がふえるだろう。長期の休暇は大企業など夏の休みを与えるようになり、それにほぼ定着した二十日間の年休を夏休みと組み合わせて利用するようになってきたので北海道に足を伸ばすチャンスは今後次第に多くなってくるでしょう。

長期の休暇を外国では、どのように過ごして

いるかをみると、やはりアメリカは一週間～十日の休みを夏にとるものが多く、トレーラーバスなどで国有林などに出掛けキャンプを一週間くらいするのが盛んになってきている。フランスでは夏になると二千数百万人もの人々が南の方へ大移動をして一年で一番有意義な、時間を過ごしています。アメリカでは国立公園のキャンプ場に長期にキャンプをはられると、ほかの者が利用できないので一週間に限定するということなどもやっています。

最近、ニューファウンドランドに行ってきたが、ここでは今年は寒いのでトレーラーの売れ行きが減るだろうと心配していたところ、逆に非常にふえた。これは国民のレジャーに対する欲求が強くなったことを物語っており、夏だけではなく、春から夏、夏から秋も十分キャンプが楽しめる。またスノーモービルをトレーラーに積み込んで雪を楽しむということも盛んになってきている。そして何カ所へも移動する、何でも見てやろう式なものから、一カ所に長く滞在し、釣りをしたり、ピクニックをするといった自然を楽しむ方向へと進み、それも定着してきた感があります。

## 週末のための施設を

北海道への旅行はどのくらいあるかを日本観光協会で調べたところでは昨年度は全国の旅行者の僅か六％にしか当たらない。また北海道に行った者のうち団体旅行が三六％を示し自分の意思で行ったものは五〇％程度しかない。ところで、どこへ旅行に行きたいかとの問いに対し、これは北海道が断然第一位で、七三％の人が北海道に行きたいと答えています。日程は三泊はしたいというのが多く、五日以上の休みがなければ北海道旅行はできないことになる。北海道のどんなところを望んでいるかは、阿寒や知床といった原始的な自然を見たいというのが第一で、次が、雄大さ、たとえば狩勝平野やサロベツ原野といった草原を希望している。第三はトラピストや牧場、サイロ、羊や山羊といった本州では見られない異国的情緒にひたりたいというものが多い。月寒牧場などの人気も高いし、またスキーも魅力のひとつとなっている。北海道には四つの国立公園と四つの国定公園があるが、いずれもわが国のトップクラスの公園であり、この自然を道民の皆さんは大事に保護していただきたい。ある程度の施設をすることは必要だが、この場合も自然をそこなうことのないような配慮が望ましい。最近本州では大規模な施設は公園の外に作りたいという傾向になりつつあります。

アメリカで最も利用率の高いのはノースカロライナ州にあるウェットストスモービーという公園で年間八百万人くらいが来るが、キャンプ場なんかほとんどなく、旅館は一軒もない。みんなその公園の前にある町（一万五千ベッドくらい）に泊まって、そこから通って自然を楽しむといった状態です。

北海道は支笏洞爺国立公園が年間千五百万人、阿寒が五百万人、大雪が四百万人という数字が出ているが、シーズンが短いのに、これだけの人が利用しているということは、最盛期は大変混雑するということだ。しかも今後もますますふえる可能性があるので、自家用車の制限などを含めて、今から十分配慮する必要があると思います。このほか北海道は十三のすぐれた道立公園を持っている。これらも今後確保、整備する必要がある。国立公園はどこも遠いところにあるので、都市周辺の、週末に利用できるレクリエーションの場を作る必要がある。これはアメリカでも同様で、国立公園のほかに各州がこぞって都市近郊のレクリエーションの場を整備している。

カナダのレジャーの状態をみるとロッキー山脈を中心とした地方はスキーが盛んである。また湖が非常に多く、湖が凍るとすぐスケート、アイスホッケーに熱狂する。また近年スノーモビールが開発された。もともと一人乗りだったものが、二人乗り、三人乗りになり、いまアメリカ、カナダで冬の一番のレクリエーションになっている。それは操縦が簡単で除雪しなくとも、新雪の山を滑れるからである。ただよその土地に入ったとか、鳥やケモノを追い回したとかいったマイナスの面もあるので、各州ともある程度規制はしているが、ともかく老若男女をとわず一番のレクリエーションになっています。

また老人はローンボウリングといって、初めに白い球をほうり、あとで黒い球を白い球の近くへ投げる、という単純な遊びだが、これが老人に非常にうけ、氷の上でその遊びをして、炉端から戸外へ出るようになってきました。アラスカでは冬は夜が大変長い。朝は午前九時くらいに夜が明け、午後二時半にはもう暗くなる。だからアラスカでは毎日のように家族パーティーを行って酒を飲む。一人あたりの酒の消費量は全米第一という好ましくない成績です。そのせいかどうか、春になると離婚が非常にふえる。どうもアラスカの家族パーティーはあまり健康的ではないようです。スキーやスケート、スノーモービルが流行していることはカナダと同じです。

私はこの前カナダの東の方〝赤毛のアン〟で有名なプリンス・エドワード島に行ってきたのですが、この島は砂丘がずっとあって、起伏に富んでおり、大変きれいな島ですが、この島は冬になるとクロスカントリーが出来、それが冬の一番大きな楽しみということでした。

**千家哲麿氏**　明治四十年生まれ。昭和六年東大農学部卒。内務省、栃木県観光課長を経て昭和二十九年厚生省国立公園部計画課長、三十四年国立公園協会常務理事。三十五年自然公園審議会委員。四十年国立公園協会理事長。四十六年海中公園センター理事。四十七年国立公園副会長。四十八年国土総合開発審議会委員、自然保護協会理事、自然環境保全審議会委員、観光政策審議会委員、小笠原諸島復興審議会委員。

## 質疑応答

**問**　毛皮の防寒機能は重要であるが、実際には大衆化していない。北海道に毛皮は普及するであろうか。

**石津**　機関誌「北方圏」に札幌の医師の奥さんが二千万円のミンクを買おうとしたが、それに何百万円の物品税がかかり税務署が恐ろしいので取りやめたとかいった話が出ている。私はこういう現状であるかぎり日本ではミンクのコートは売れないと思う。ミンクのコートに二千万円の値をつけて、金持に売るという発想はどうかと思う。二千万円のコートを着ているからといって、その人が偉くもなく、品性が豊かではないと思う。そういう一部の金持にだけ、高いものを売りつけようとする業者の発想がおかしいと思う。私はミンクをジーパンにつけて着せたらどうかと思う。デニムという木綿の布があるが、それに毛皮をつけて、格好がよいといってみんなが着るようにならなければいつまでたっても大衆のものとはならない。若い人に不断着としてなぜ毛皮を着せないかと思う。王侯貴族や金持にばかり売りつけるような感覚や価値観は全くアナクロであってそれでは毛皮の発展はないと思います。

そんなことから私は一つ提案がある。こんど開かれる北方圏環境会議に国際的な北方圏ファッション・ショーをいれたらどうだろうか。北方圏から出たもので世界を対象とするショーが一つくらいあってもよいと思う。もう一つ、北方圏に住む人々を対象としたファッションも考えたらどうか。それは寒さというものなど実用的な要素のなかに、感覚的な情緒的なものを盛りこんだものです。今や実用的だけでは人は衣服を着なくなっており、ファッション的な要素が必要だ。そのなかに上手に毛皮を織り込んでいくことが大切だ。こととしは毛皮の異常なブームであります。どんな毛皮が喜ばれているかというと、一番安いもの、ネズミでもネコでもいい、そんなわけで一番安いラビットがブームになっているんです。その理由はキンキラキンの金持を象徴するようなミンクなどに対する抵抗というか、反感からトップファッションはミンクでなくラビットであります。そういう感覚と発想のファッション・ショーは、こんどの北方圏環境会議にふさわしく、そのものズバリでは

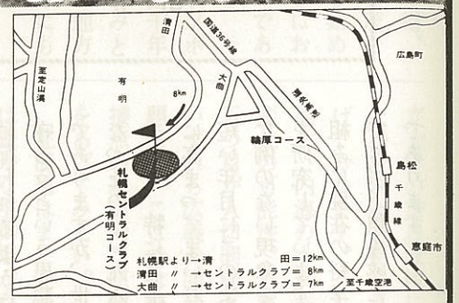
札幌市で最後と言われる！

# 本格的チャンピオンコース

（有明コース）



2番ホールフェアウェイよりグリーンを望む




■姉妹コース
江戸崎カントリー倶楽部
芳賀カントリークラブ

北海道の大自然を生かしたゴルフ場

## SSE 札幌 セントラル クラブ

日本緑化土木の特殊造成（野芝主体）・本州同様フェアウェイウッドの使えるコース!!（ブラッシーも、スプーンも、バッフィーも）

■コース概要
- ◎所　在　地：札幌市豊平区有明地区
- ◎用地面積：1,066,666.5㎡
- ◎コ　ー　ス：18ホール（7,155 ヤード）パー72
- ◎コース設計・監修：山本増二郎（日本プロゴルフ協会名誉会長）
- ◎コース設工：日本緑化土木株式会社 伊藤組土建株式会社 共同企業体
- ◎工事着工：昭和48年9月
- ◎オープン：昭和50年7月予定



第2次会員募集
《300名限定》

■個人正会員…1名…120万円
法人正会員…2名　240万円
最終会員数……1,200名
（定員に達し次第締切らせていただきます）

※ローンの取扱いも致します。

お問合せは——☎（011）261－7049・7993

## 道央産業株式会社

日本緑化土木㈱・江戸崎カントリー倶楽部・芳賀カントリークラブ
理事長 佐藤健二　代表取締役 平山金輝

〒060 札幌事務所／札幌市中央区南2条西1丁目(宮本ビル) ☎（011）261-7049・7993
〒104 本　　社／東京都中央区京橋1市目5（春本ビル） ☎（03）564－1351




ないかと思います。

**問**　エスキモーが高脂肪、高タンパクという偏った栄養を摂っていながらコレステロールの心配もなく、動脈硬化にならないのは不思議に思えますが、その理由はなんでしょう。

**黒島**　寒さに耐えるためには高脂肪が必要です。しかし高脂肪などの偏った栄養を摂っているエスキモーには、コレステロールによる心臓疾患などの危険性が当然考えられるわけでありますが、ここで極地より寒さは柔らかいけど、寒い風土の北海道に生きているアイヌ民族の生理の特性をみますと、その脂肪の使われ方におもしろい現象が知られています。日本人とアイヌ人の代謝特性をグラフで比べてみますと、人間が生きていくうえに必要な最小限度の熱量、すなわち基礎代謝をタテ軸に、ヨコ軸に血液中の脂肪の量、遊離脂肪の量をとりますと、日本人は基礎代謝が高いときには脂肪のレベルも高い。これは文明諸国に住む人間に共通しているものです。

ところがアイヌ人では、これが逆の関係になっており、脂肪の量が少ないほど基礎代謝が高いのであります。これは脂肪がどんどん使われているため、血液中の量が少なくなったということ、彼らの体はわれわれより何倍もの脂肪を燃やすメカニズムになっているため、体の中に脂肪を蓄積することがないのであります。これは寒さに長い年月挑戦してきた民族の生理的反応の過程においてつくられたものであります。エスキモーの場合でも、同様な実験結果が得られています。

**問**　ヨーロッパをまわって気がついたのだが、食事と住宅を対比すると北へ行けば行くほど住宅は良くなるが、食事はまずくなる。南ではその反対である。なぜだろうか。

**黒島**　嗜好的な面の問題となると料理のことはよくわからないが、寒冷地ではまず住居、衣服などが日常生活の中で大きな比重を占めるので食事はあとまわしになるのではないだろうか。また、現在でもエスキモーは肉を生のまま調理しているが、それは燃料の問題など物理的制約があるからだろう。それに寒さの中では摂取量と栄養、食質にまず気をつけなければならないため調理そのものは調味料も少ないこともあって大ざっぱな味つけしかできないのではないか。味覚や感受性についてはよくわからない。

**石津**　北海道には料理がないと思う。それは材料が豊富だからである。京都には料理がある。遠くから材料を運んでくるため味つけに凝るからである。南欧には肉も魚も野菜もない。だからフランス料理が生まれたのである。材料に恵まれないから調味料が発達し、工夫をこらした料理が生まれたのである。材料が豊富なところではいい料理は生まれない。それにもっと北の方へ行くとトナカイの肉しかない。材料も悪いけれど燃料も調味料もなくなってくるのだと思う。

**斎藤**　過去においてわれわれの祖先は、北海道、樺太、千島といった広がりを持つ北方圏のなかで、その規模の雄大さ、資源の豊富さに目をつけて本州から多数の人が集まってきて、この地で原始的な生活を始め、営々として働き、北海道は次第に開発されてきました。第二次大戦で樺太、千島は離されいま残された唯一の北海道が、今日日本民族が北への諸条件を考えるときの最北の基点になったと考えてよいと思います。

過去においてわれわれの祖先や先輩が築いてきた生活のチエ、それは衣食住などそれぞれのチエの積み重ねたもので、それを北海道に住むものが受けついできたのです。ただ今日それを振り返ってみると、その生活態度はずさんなものがあるように思われます。従って、こんな機会に〝北方圏を考えるシンポジウム〟が催されることは、時宜に適したものであると思います。

なお、これらの問題は今回限りで終わるといったものではなく、これを機会にこの種のものに積極的に参加し、また考えることによって、よりよい北海道を築きあげる糧にして行こうではありませんか。

本日はどうもありがとうございました。

# III　豊かな自然の中で

「開発と自然の接点」　帯広畜産大教授　芳賀良一氏
「緑の街づくり」　日本大教授　横山光雄氏
「水と産業」　日本森林科学調査会員　富山和子氏
司会　帯広畜産大教授　天間征氏

## 壊れた自然、取り戻せぬ

芳賀良一



芳賀良一氏

近年生活環境の悪化が進み、危機感が強まってきまして開発の規制、自然保護といった形で自然を破壊から守ろうという運動が世界的に行われるようになってきました。自然を守ろうという思想や運動は古くからあったのでありますが、世界的に強く叫ばれるようになったのは一九六九年～七〇年のことでありまして、特に北半球に位置する工業国で急速に高まってまいりました。わずか数年という短い年月にこのように高まってきたのは、他に例のない現象であります。環境科学の一面を研究していますわれわれも地球の自然の仕組みに現在の科学の知識だけでは十分に対応できず、焦燥感にあるのがいつわらない気持であります。

さて地球上に人間が出現してから自然は大きな変革を遂げていますが、アメリカのエングラー氏や千葉大学の今村教授によると変革の要因は次の五つがあげられます。

第一はオノによる森林の伐採であります。第二は火入れ、焼払いによる畑地の造成、第三はクワやスキによる農耕地づくり、第四が家畜の放牧であり、最後が農薬による環境汚染が自然の破壊を招いたものとされています。

人間生活が緑と水のあるところに始まり、森林や原野に食を求めていたことは古代史をひもどくこともないほどのことで、土や道具をつかって農耕生活を営み、野生動物を狩猟した放浪生活から定住生活に移ってまいりました。そして森林を切りひらき、いわゆる焼畑農業を営んだのであります。

焼畑農業は生産された植物を土壌に返すことなく一方的に収奪を繰り返すので数年で地力が減退し、新たな森林を次々に開いていかねばならなかった。現代農業も収奪の結果生産をあげるが、それには大気や化学肥料や農薬によって生産は高まったが、その結果徐々に環境の汚染が進んだのであります。このような森林の破壊も人口が少なかった時は自





然に回復したのだが、人口が増大し、食糧、木材などの需要が激増すると、豊かな繁茂した森林が伐採され、その結果山が荒廃し始めその荒廃が広がると土壌浸食の繰り返しにおいて極端な場合は砂漠になってしまうのであります。

横浜国立大学の宮脇教授によると、メソポタミアの砂漠を航空写真でよく見ると数千年前に耕地であったことがアゼ道などから読みとれる。またエジプト文明が栄えたサハラ地方も砂漠の面積が現在は四千年前の二倍半にも増大しているといわれます。

こうした現象は日本では想像も及ばないのでありますが、北方圏ではその厳しい気象条件や土壌条件が通常の植物の生育を許さず、その条件に適応した限られた植物だけしか生育できず、しかも、エロージョンがおきて、なかなか元の植生にかえらないのであります。

### 森林破壊は生態系乱す

一方、森林がきり開かれ環境が明るくなるとそれに適した植物や人間環境に適応した帰化植物が侵入し、在来種を圧倒し、それに伴い動物にも強い影響を与え、生態系にかく乱を生ずる結果になるのであります。こうした推移を経て現代社会が形成され、人口増大による巨大都市、工業化などで人間生活の環境が徐々に悪化してきたのであります。大阪市立大学の吉良教授によりますと環境の問題のなかで緊急を要する事項として次の五つをあげております。それは環境毒物汚染、河川、湖水、内海の水質汚染、人間活動による気候変化の可能性、自然破壊に伴うもの、そして五つ目が人口問題と土地問題であり、それはいずれも広義の開発と自然の接点といえる問題だが、ここでは狭義の意味の開発と自然の接点の基礎的な問題を北海道の森林開発の例をあげてみたい。

北海道はまだ立派な原生林を持ち、そこには豊かな生物層が存在していますが、それを伐採するとあとに草本類が生えてきます。そこへ造林し、幼い木を育てるために下草をかり、殺ソ剤や除草剤をまく。そんなことを十年近くやって人工的な造林地を育成するのであるが、それを別な面から見ますと、この生物層が皆伐される、大面積にわたって木をきり大面積にわたってそれを造林地にかえる、あるいは道路開削や土木工事など二次的なものが加わると、当然の結果として植物の群落が破壊され、森林土壌が被害をうけるわけです。たんに森林土壌だけでなく、その中に生息しています微生物まで大きな変化をうけるのであります。このように土壌分団が破壊されると、保水力が低下し、動物層もその種類も変化します。また人間がはいることにより、同時に帰化植物が侵入して在来種を追い出す。

一方、土壌そのものの養分が流出し、土壌崩壊がおき、ハゲ間や洪水を生ずる原因となります。

また、植えた造林木も野ネズミの被害を覚悟しなければならない。北海道純林の場合、ヒメネズミとかエゾアカネズミなど森林性のものが生息しており、エゾヤチネズミのような草原性のものをおさえているのだが、木がきられるとエゾヤチネズミなどが増大しまた野ウサギなどもふえてきます。したがって殺ソ剤を散布して駆除しますと、タヌキとかイタチとかキツネといったネズミを食べている鳥獣が被害をうけるのであります。人工造林等によりそこに森林ができても、それは天然林と異なっており、以上のような環境汚染により徐々に生態系にかく乱を生じてくるのであります。

### "自然のシステム"守れ

さて、地球上には現在百数十万の生物の種類と三十七億人の人間が住んでおり、それは無限に近い膨大なものですが、それらの生物がそれぞれ自活の道を求めようとすると、その生活空間は有限であり、むしろ狭いとすら感じるものであります。こうした中で自然から多くの恩恵をうけて人間は生存しているのでありますが、人間環境の拡大のため自然を簡単に破壊してしまったのであります。自

然界においては、海と陸とを問わず植物という生産者が存在すればこそ、動物という消費者の生命が保たれているのであります。また生物の遺体が微生物や細菌という分解者の力によって無機物にかえられて再び植物に利用されるという大法則があるのであります。この法則のなかで、生産者、消費者、分解者とのあいだに物質の循還、エネルギーの代謝が行われている。ここで大切なことは、こういう単なる自然界の法則だけでなく、多様な生物層がいろんな物的環境と結びついて多様な生物界を形成しているということであります。これは数千年、数万年、数億年という長い時間をかけて生物社会が形成されたわけで複雑なフィード・バックの機構となるわけで、生物活動をささえながらバランスのとれた自然環境をつくる原動力となっているものであります。このような生物界のすべてのかかわりあい、自然のシステム―その生態系は三十億年という長い進化の歴史のなかでつくりあげたものであります。人類はそうした生態系が完成した最後に登場した新参者であるのに、人間を中心とする文明を発達させ、自然の脅威や制約から逃れようとして、脱自然、脱生物の道を歩いてきたのであります。

しかし、人間はその食物を他の生物に依存しており、その生存に必要な水や空気が十分にあっても、物理化学的な状態が人間以外のすべての生物で維持、調和されていることを知るべきであります。それだけに脱自然、脱生物は極めて困難であります。それだけに脱自然、脱の環境問題の多くの原因が人間の英和と脱自然を目指す文明から生じた矛盾から生じたものであるといえそうであります。名古屋大学の島津教授は自然のなかから生物というひとつのシステムが出来、その生物のシステムから人間のシステムが出来ていると考えていますが。いわゆる陸海空の自然はその中でひとつのサイクルが営まれているということ。生物のシステムのなかでは自然の生物の相互関係、同時に農業、漁業、畜産業などのものが自然とのかかわりあいのなかで分解とか、呼吸とかが行われ、生物相互のあいだでは、フード・チェーン（食物連鎖）としてたずさわっているというようなことであります。

また、人間とのかかわりあいにおいては、廃棄があり、また資源とか食糧などを得て、生物のシステムにスペースの圧迫を与えています。その結果経済サイクルがかえられる。つまり開発と自然の接点は、そうした対角線上に存在するものによってそれを滅ぼすことは人類発展ぬことを意味しております。

## 原生林に無限の可能性

以上のようなもののなかに人間が生活してゆかねばならない必然性が開発と自然の接点をなしているといえると思います。つまり環境問題はその根底で価値観の問題があり、人間の意思決定が重要な意味をもっていることを考えなければならない。島津教授は環境汚染の原因とかメカニズムが説明できても仕方がない、必要なことは「何をなすべきかを決定し、実行することだ」といっておりますが、全くそのとおりと思います。

ことしの六月初旬東京で国際植生学会が開かれ、二十一ヵ国から五十一人の植生の専門家が集まって討論した。そのなかでオーストリアのフランク博士は「森を破壊することはその中にある数百万、数千万の生物を死に追いやることであり、そのようなものを再びとりかえすことは不可能である」と視察旅行した時同行の報道関係者に言っています。

また、アメリカのレーベ博士は遺伝子資源について「原生林のなかには将来新しい品種をつくる遺伝子を無尽蔵にもっているのであって、その母体を破壊するのは将来の利用の可能性を放棄することである。その遺伝子の有用さを人類は、まだ十分に知っていないのに皆伐によってそれを滅ぼすことは人類発展のため許されないことである。無限の可能性を秘めた原生林は世界人類のため極めて大事なことである」といっています。その他各学者が開発は規制されなければならないことを述べています。環境保全の機能は、その自然





の状態がよく保たれ、破壊された地域より十分に大きい場合は影響が少ないのでありますが、両者の比率がだんだん小さくなってきて、しかもある限界を越えると加速度的に崩壊することが知られています。本州はこういった限界に近づきつつあるのではないかということが各国の学者が指摘し、懸念しているのであります。アメリカのオウム教授は、陸地の三分の一は自然のまま残し、三分の一は生産緑地すなわち耕地とか植林地とし、残りの三分の一を居住空間にすべきだとの提案があったが、これは最低限の基準と思う。生態系の維持能力は原始的なほど強いものであり、数億年という長い進化の過程で、植物、動物、微生物の相互関係とその時の無機的な環境条件とが織りなす複雑な環境安定作用によるものであり、人間のつくったものでは容易に代用できないのであります。

公園、緑地、ゴルフ場など人工の緑地は緑があることでは似ていますが、その他の要素すなわち微生物その他の動物層、生物層を伴っていないという相違があり、それは疑似自然であり自然の安定作用が十分に備わっていないのである。人工緑地の必要性はいうまでもないが、それで失われた自然が取り戻せたという錯覚をしてはならないのであります。美しい自然だからとか、学術的に価値があるからその自然を残すというのではなく、その存在そのものが人間にとって必要であるから貴重なんだという観点に立たねばならない。東京都立大の北沢教授は地域開発との調和において、開発が必要であるというのは開発側の論理であって、日本のように徹底的に開発された国では自然の絶対的保護こそが調和をとり戻すべき道であることを力説しています。人間が自然を破壊から守る手助けをしてやりますと、再び元のシステムに復活する力をもっております。北方圏の自然は回復力が弱いので、特に不必要な破壊をやめ、本物の自然を復活することが今後の国土開発の柱とすべきであろうと思います。



横山光雄氏

## 緑計画は公共的合意で

横山光雄

私に与えられた課題は緑の街づくりでありますが、芳賀先生のいわれたように緑は単なる形や色の問題ではなく、微生物をも含んだ生物界のシステムということは私も同感であります。そこで私は長年都市計画に取り組んでまいりました関係上、都市計画の面から七つばかりあげてみたいと思います。

第一は緑地計画であります。緑地計画は独立して理解されるものでなく、総合計画のなかでどのように位置づけられるかということであります。それは地域計画から国土計画に及ぶ総合的なものの土地利用計画のなかで考えなければならない。緑のマスタープラン、ほんとうにそれが実現するのは、それを裏づける総合的な都市計画がなければなりません。これが第一点です。次は住民参加の都市計画ということであります。地域社会における自主的な住民の運動こそが緑地計画を決定づけるもので、それとの関連性において公共機

芳賀良一氏　昭和二年札幌生まれ。二十六年北大農学部卒、応用動物学専攻。三十四年南極地方観測隊員。同三十六年帯広畜産大助教授。三十八年同大教授。農学博士。日本哺乳学会員、アメリカ哺乳学会員。日本生態学会員。道自然保護協会理事。

関の役割がはっきりしてくるのであります。

## 環境度の指標つくろう

第三は自然と人間との哲学の問題であります。緑に対する価値評価、そうした問題意識をもつことが開発と保全、それが調和するかどうか、そうしたことは古くからの議論であるが、そうした基本的なものが解決されなければ緑化計画は難しいのであります。住民は自然破壊を体験しており、現在の社会不安、集燥感に捉われている点につき真剣に考えていかなければならない。第四は自然を指標化して、それをゾーニングに大胆に織り込む、自然度の指標化を土地利用にどう織り込むか、そういった緑の計画の可能性であります。第五はそれと関連した緑の質と量の問題であります。最近都市計画でも生態系の論理を導入しているのでありますが、その方法論など未熟であり、計画の基準をつくるところまで達してないが、応用生物社会学による植生図をどのように土地利用計画に使えるかの可能性であります。第六は環境度の指標であります。これはまた自信をもっていうことはできないが、この機会にみなさんにお知らせして研究して頂きたいと思って申し上げるのですが、二年くらい前から私も加わって環境度の指標づくりをしているのであります。まだ発表の段階ではないが、これがないとマスタープランをつくる場合など自然と開発の調整がむずかしい。この環境度は都市計画だけではダメで生態学をはじめエネルギーの専門家、保健医療関係、コミュニティ象学の専門家、生気学の方向にもっていく厚生経済学の研究グループ、それに環境行政の専門家を加えて開発と保全をどのようにトータルで評価するか、そのバランスをどう評価するのか、システム化に乗れるかどうかを研究しております。

それと最近環境アセスメント、開発によって起こってくる環境変化を予測して研究し、行政のなかにいれる—、そんなものを学問的に裏づけができないものかどうか。そういったことがあらゆる点から検討されなければなりません。

しかし、こうした研究があっても根本的なことは分配の論理ができていない、社会的な公正が政策のなかに貫かれておらないと計画はうまく進まない。いかに立派なマスタープランをつくっても挫折してしまうのであります。この点社会科学者、特に経済学者に研究してもらわねばならない。そうしたものを進めていくと体制の変革にも突き当たる問題にもなるが、緑の計画、緑の創造はそうしたもので推進することが必要だと思っています。

都市計画は住民が参加し、公共が責任をもってやるものだけに住民が共通の問題意識をもたねばならない。公共側で膨大な計画を立て、それを住民に押しつけても、そう簡単にはいかず、そこに共通の理念というか共通意識がなければ力は入らないのであります。

緑地計画（plan）と緑化運動（activity）があり、住民参加によるエネルギーが得られ、そこに公共の役割と自主的な住民活動ふりあてがはっきりすると私は思っております。公共と住民のコンセンサス（合意）は最近ほとんど問題がなくなり、住民の側がむしろ関心を持つようになってきている。問題は緑の質と量である。この点われわれ専門家のあいだでも議論が多く、十分な研究がなされていません。

私は緑を生物的環境のシンボルとし、その空間を利用するレクリエーションとをはっきり分けて計画し、総合化すべきと思います。

造園学の点からみると個々の緑はそれなりに役割がある。ゴルフ場でも役割を持っている。だから個々の緑と集団としての緑—いわゆる植物社会—この二つをマストして都市計画の面でもはっきりしておく必要があると思います。

それともう一つ緑の概念が広がり、土地利用と結びついて生産緑地という言葉ができた。これは耕地や林野ですが、いずれにせよ緑地は存在することによって、あるいは利用されることによって、公共的な機能を発揮する。それも一時的ではなく、永続的、持続的であらねばなりません。

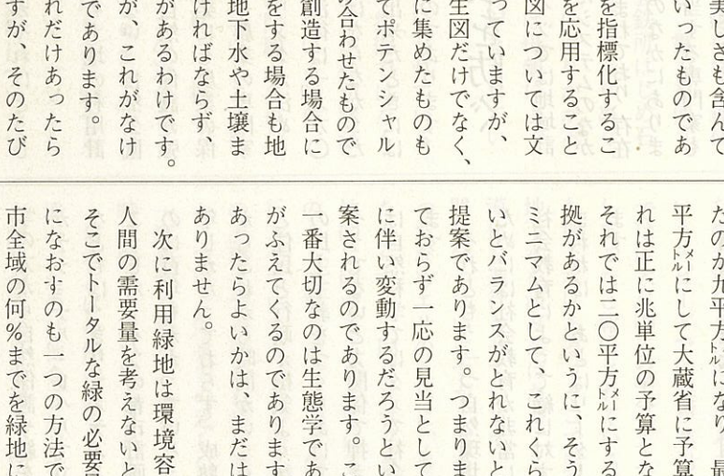
## 緑の管理計画も考えて

そこで存在緑地と利用緑地のあり方を五年ごとに検討し、現在の質と量を調べ、造園から五年後に量もふえ、質も高まっているかどうかをたしかめる管理計画を伴わねば実を結ばないのであります。存在緑地は人間生活といった機能をもったもの、また人間生活は快適であらねばならない。英語にAmenityという言葉があり日本語には適当な言葉がないが、環境要素の快適性—それには美しさも含んでいるものであるが、本来そういったものであろうと思っています。

このような自然環境の問題を指標化することは大切で、それには植生図を応用することです。赤外線撮影による植生図については文部省も相当な予算を出してやっていますが、植生図のなかには現存自然植生図だけでなく、現在になる前のものを経験的に集めたものもあり、また潜在植生図といってポテンシャルを発見してそれを自然度に組み合わせたものでないと、これから新しく緑を創造する場合にも、また大規模な森林の造成をする場合も地所の選択、プロセス、さらに地下水や土壌までも含まれた上で検討されなければならず、そのうえに維持、管理の問題があるわけです。こうした植生図は金はかかるが、これがなければ自然度の評価は難しいのであります。

私はよくトータルの緑がどれだけあったらよいのかという質問を受けますが、そのたびにどうもうまく答えられない。一人当たり何平方㍍という数字、私も昔つくったものがあるのですが、そんなものはもう古い。二十年も前のものを金科玉条としているのではなく、それを再評価し、足りなければふやす、また質の手当てをする、また管理に金をかけることが必要です。今やっている公共緑地、都市公園の五ヵ年計画は最初は六平方㍍であったのが九平方㍍になり、最近ではさらに二〇平方㍍にして大蔵省に予算折衝しており、これは正に兆単位の予算となるのであります。それでは二〇平方㍍にすることに科学的な根拠があるかというに、そうではなく、シビルミニマムとして、これくらいのスペースがないとバランスがとれないという極めて大胆な提案であります。つまりまだ理論公式ができておらず一応の見当として、都市計画の進歩に伴い変動するだろうという条件のもとに提案されるのであります。これから理論公式に一番大切なのは生態学であり、存在緑地の量がふえてくるのであります。それがどれだけあったらよいかは、まだはっきりしたものがありません。

次に利用緑地は環境容量を研究、計画し人間の需要量を考えないと管理ができない。そこでトータルな緑の必要量を人口一人当たりになおすのも一つの方法ですが、もう一つは市全域の何％までを緑地にすべきかパーセンテージで出す方法があります。私の数字では




帯広で開かれた第三回シンポジウム

三%ぐらいで、これは地主が公共の都市計画に協力できる最高限度である。土地利用の原理にしたがうことで、これは都市の再開発、ニュータウンを計画する場合でも起こってきます。それぞれの特性にしたがって環境容量を作らねばなりません。

必要な緑という考え方は公共団体の都市計画に限らず、最近では広域化計画がおこり、それは従来地方計画といってたものだが、それを広げる場合も論理は同じです。自然と人間を対立概念とせず調和概念として、社会的な構成を前提とした管理概念まですすめることです。

## 自然保護を織り込んで

人口度零、自然度一〇〇という原生林は鉄条網を張って人間に利用させないようにすれば自然は保てる。しかし、自然度と人口度が相半ばするようなところは土地利用に計画性をもたせなければならない。農業、林業は自然の方にはいっているのだが、それを民間デベロッパーが豊富な資金を使って買い占めた。このようなことを許せば統一ある計画的な緑地計画はできません。人口度の高い都市と自然度の高い農山村を人間の利用という点から考えると一応の限界を考えておかねば自然は破壊されてしまう。農村などに公共の事業としてレクリエーションの基地などをつくっても、これは公共の事業であれば、計画的にやるのでよいが、デベロッパーがやればどうしてもアンバランスを生じます。

農業開発、林業開発にしても土地の利用計画のなかで考えなければならない。自然公園法や自然環境保護法ができ、自然の保護が強化されてきたが、こうした開発にも農業の保全、林業の保全を考え、農民や農業の専門家を加えて十分に議論し、ゾーリングが決められねばなりません。こうした法律は一九六〇年代の初めに出来ていなければならなかったのに非常に遅れたため法律が出来たときには自然はすでに破壊されていたのであります。

## 力関係の破壊を防ぐ

都市計画の発達しているドイツでは地域計画体系、国土計画体系といったシステムのなかに自然保護が完ぺきに織り込まれており、存在機能と利用機能が十分に計画のなかにあります。だから緑の街づくりを担当する専門家国土保全、自然公園の関係や農業従事者などは全部この系統的なルールを守り、力関係で自然が破壊されるようなことはない。これがどういうふうに政策として決定するかは哲学、価値評価の問題であります。指標は手段でありテクニックである。もちろんみんなが賛成できないようなものでは困るが、いろいろ研究して共通のコンセンサスが得られるようなものでなければなりません。これは社会科学の方から自然保護や緑をつくっていく政策がナショナル・レベルで立てられ、公共団体などもはっきりシステムとしてできている。こうしたドイツの都市計画はこれまでにするのに百年もかかっている。日本はわずか十数年しかたっておらず、成熟しておらない。だからこれから時間がいくらかかっても専門家と住民と行政が根気よく議論して、ほんとうの民主主義をつくりあげていかねばならない。そうでないと力関係で押されてしまう。これは自然科学ではダメで社会科学の問題であります。

それともう一つ自然環境をしっかり捉えるためには社会教育が非常に大切であります。社会教育によって緑に対する共通の基盤が生まれれば、あとはリーダーだけの問題であります。

**横山　光雄氏**　明治四十二年神奈川県生まれ。昭和九年東大農学部卒。同大学院を経て関東州庁で都市計画に従事。二十二年千葉大教授。三十一年東大農学部教授。同大園芸実験所長。学術審議会委員。四十五年日大農学部教授。著書に〈都市計画〉ほか。





# 水と土のバランスとれ

富山和子



富山和子氏

最近、私の友人がインドの首相に会ったところ、インドでも下水道整備を始めつつあるという話でした。そこで友人は考えました。インドの一億の国民がトイレットペーパーを使うようになったらどうなるか。高温な風土は川に流した排せつ物を早く土に返してくれる。そのようにインドの自然とインド人の関係はうまく調和を保ってきたわけですが、トイレットペーパーを使い始めるとどうなるか。友人の計算によると、五年二カ月十五日で東南アジアの森林がなくなってしまう。ヒマラヤのふもとまでなくなってしまうことになるそうです。

まさに豊かさとは何か、福祉とは何かが深刻な形で問われている時代といえます。ドイツのシュミット・パウアーという科学者はこう言ってます。「洗たくをすることは果たして清潔かどうかということから問い直せ。毎日水を使う。その分だけダムが作られ、森林が払われる。洗たく機が稼働する。さらに製鉄所はじめ石油化学コンビナートが活動する。めぐりめぐって汚染物質が白いワイシャツにふりかかるではないか。それなのに一方では母親によって必要以上の潔癖症になる教育がなされている」。

このような問題のとらえ方が行われている時代であるが、これらはすべて技術ではなく考え方の問題であります。ところが私が講演し、思想、考え方について話している時に、あとから出される質問は技術の問題が多い。話の途中はどうでもいいから、早いとこ結果を教えてほしい。塩は茶さじ一杯か二杯か、というのが多くの質問である。この辺のところからもう一度考え直さねばなりません。

私が今日話す水についてであってハウツーものではありません。具体的な技術については基本的な考え方についてはこの土地の条件を知っている土地の方々が取り組むべき問題で、私の考え方がそのための一助として参考になればうれしいと思います。

北海道でも水不足が進行していることを聞き、ふとアフリカで猛烈な勢いで進行しているあの砂漠化の話を思い出しました。数カ国にまたがるサラテルフェニアという広大な平地では保水力の少ない低木地帯や草地であるため五年続きの渇水にみまわれて年間数㍉というスピードで砂漠が進出している。チャドでは広大な国土の半分がすでに砂丘に埋もれてしまったと報告されている。もちろん砂漠にも地下水はある。そこで諸外国の援助をうけ地下水を汲みあげたが、この地下水がまた砂漠化を進行させています。家畜の飲み水には間に合っていますが、家畜の数を制限しなかったためエサのために、さらに沃地が奪われたからです。同じアフリカの別な地域では局地的に雨が多くなっている。けっこうなことのように思うのですが、雨もまた砂漠化を進行させています。せっかく沃化したオリーブの土壌までが雨のために洗い流されてしまうからです。保水力の乏しい土地というものが一度異常な渇水、あるいは降雨にみまわれた時の弱さを思い知らされる。

日本とは条件の異なるアフリカの話を思い浮かべたのは他ならぬ日本で今進行している水問題が実に日本列島、国土の保水力を失うという形で進行しているからであります。に

もかかわらず、それに気づかず見当ちがいの対策をたてて問題を深刻化させています。そのような水問題の論理が水に対しては比較的安定していたはずの北海道にまで波及してきたかと心配になってしまいます。

## 「水資源は豊富」は誤り

今の時代ほど自然が重い意味で問われ、またわからなくなっている時代もないでしょう。体は全部つながっているのに歯科医は歯だけしかみないで治療しようとする。これと同じような発想で私達は自然とかかわってきた。水資源にしても日本は水資源に恵まれた国だとだれが言い始めたのか知らないがいわれている。これは大変な誤りです。なるほど日本の年間平均降水量一、七〇〇㍉は世界の平均降水量七〇〇㍉に比べたら恵まれています。だが人口当たりにすれば諸外国よりはるかに少ないし、季節的にも局地的にも大きな偏りがあります。帯広地方のように一、〇〇〇㍉以下という寡雨地帯もある。加えて日本の川は中流で短い。いうなれば降水量には恵まれても水資源には恵まれているといえません。

にもかかわらず、かつて日本人が比較的水に恵まれた暮らし方をしてこられたのは滝のような急流、その暴れ、氾濫した水を治めて、その水を使って、さらにそれを土に返すという知恵を養ってきたからであり、大河川の周りに水田が開かれたのも日本人の知恵だった。森林や水田が遊水地の役割を果たし、一度引いた水も土に返されて地下水となり、川へもどされ、二度下流で利用されるという実に高度で巧みな水の使い方が行われた。治水史に残る武田信玄や加藤清正の治水は洪水期には上流で氾濫させ下流に鉄砲水が行くのを防ぐ方式で、これも降水を土にもどそうという思想であります。雨はなるべく土の上にとどめ、あるいは土に浸透させ資源が一気に海に捨てられてしまうのを防ぐ思想であります。過去の日本人がいかに水を大事にしたかは各地にまつられている水神さま、下流部の厳重にしかれた水利権の数々、あるいは山間部に苦心して作られた溜池の数々でもわかります。日照りに不作なしという言葉が全国的に存在したのもやはり土壌の保水力がわずかばかりの渇水にはよく耐えて安定して水を供給してくれたからであります。

このように水資源というものは常に安定して供給されねばなりません。去年は多かったとか、季節的に資源の多少にかかわらず、いざ偏りがあるのは水資源といえない。水問題が今年は少ないとか、季節的に資源の多少に





すでに適当なダムサイトは満ばいとなり、開発しつくされています。最後に残された北海道も猛烈なダム建設の音が全道にこだましているのが現状であります。

ダムはどこまで有効なのかということですが、このダムが水を捨ててゆく、食いつぶしてゆく方式に他ならないのです。日本の川にダムを築いても土砂がたまってゆく。日本の場合ダムは平均二十年、大きなダムでも長くて五十年で完全に埋没するといわれます。ダムは刻々と水を減らしてゆく消耗品であり水資源を食べてゆくことに他なりません。ダムが全部土砂で埋まった時、日本列島に水は貯えられなくなります。そして水害列島になってしまいます。

このように砂漠化と水害化は確実に表裏の関係で平行しているのです。ダムをまったく評価しないわけではありませんが、今日の水問題はダムにさえ水がたまらない状態であります。安定して供給してくれていた供給源をつぶしてきたことの大きさを考えねばなりません。単に水の需要の増大が原因であるだけでなく資源そのものを減らしていることに気づかず使用量を増やしてきたことが問題です。水問題とは水に対する考え方の問題であり、大きく言えば自然と人間との基本的関係を問うことであります。

人間の使う水は土地と切り離しては存在しない。土地に密着して存在するものでありますす。したがってその土地の供給する水の量とこりません。人間の土地利用は基本的にはこの水需要のバランスがとれていれば水不足は起バランスを大きく崩してはいけないということが原則でありますす。しかし、このあたりまえな原則を忘れ水を土地から切り離して考えようとし、水という循環する資源の、その循環を断ち切りながら、なおかつ資源は無限のものだと信じているのです。その人間に対する自然の仕返しが水問題です。ダムさえ作ればということで今日の工業化社会、水を大量に使う製紙工場とか石油化学コンビナートが発達し、また都市の集中も可能になった。このような大量水消費型社会、つまりは大量エネルギー消費型社会というのは土地と切り離した水思想の上で初めて可能になったわけで、水に対する考え方がいかに重要なものか思いしらされます。

水問題が深刻化した今、資源が有限であるという認識がようやく広がりつつあるけれども、その原因はやはり水需要増大にあるというふうなとらえ方しかされなくて、あい変わらず河川工事は川を真っ直ぐにするとか堤防を作るとかが行われ、一方では水対策として節水が呼びかけられたり、海水の淡水化（これは海水を煮つめるに等しく大変問題がある）が研究されたりしています。目先の技術だけに解決の方法が求められており、さらに新しい矛盾が出てくるにちがいないと警告せずにはおれません。

大事なことはこの本州で繰り広げられた水問題が北海道にも押し寄せてくること。残された最後の自然、豊かな資源に恵まれていればこそ押し寄せる圧力も大きい。しかもこの土地は一度壊されたら二度と回復しようのない大変敏感な土地であります。かつては水不足も水害もほとんど発生しなかった北海道だが、今や原生林は大雪山南東部にしか残らず、川も年々短縮されています。都市もまたコンクリートで固められ、水といえば水道と下水道、つまりパイプの発想でしか使われず、海岸線もまたコンクリート、テトラポッドで防衛されています。それほど開発が進んだということであり、その上、農地、牧草地など川に近いところは工場地、住宅地としてねらわれやすい。一度つぶされてしまうと二重の資源の食いつぶしが始まる。牧場が上へ上へと追い上げられ森林が破壊されるメカニズムであります。

このような時代、資源や環境が重大な段階にきている時代にもう一度原点にかえって問題を考え直さねばなりません。私はこのように水とか緑を考える時、地球の長い長い歴史を思い起こします。三億五千万年前初めて海から生物が陸地にはい上がって来た時、陸には



んとして資源は豊富だと思って社会の一方では水の論理学を作り、一方では足もとから水を捨てていった。上流でも森林を払って水を捨てていった。これが今日の水問題であります。

直接には日本の治水が方向転換をして伝統的な水を土にかえすという安定に気を配った方式から降った分は一度に捨ててしまう方式に急転換し、ここから物理的にも人間の水に対する考え方にも大きな変化が生じて今日にいたったのです。堤防を築いて降った雨は川へ注ぎ一度に海に捨てる現代の治水方式だと森林、水田など遊水地としての役割を果たしていたものすべてがいらなくなる。そして土地利用が変わる。水を土の上から排除することで土地利用を高める。この工事のおかげで日本の近代化が進み、都市化し、工場が建てられるというふうに開発されたのだが、水が当然不足する。同時に水害が激化するのです。

## ダムは水源にマイナス

明治の終わりにすでに東京では今のような水問題が発生し、ダムを作る計画が出てきた。つまり水資源を捨てながら、なおかつ水を大量にほしがる土地利用を進めました。足もとで水が不足するならばどこからか水を持ってくればいいではないかということで、今度は上流でダムを築くようになる。日本の河川は

雨や風に浸食されたガラガラの岩しかありませんでした。原始生物は岩と岩のすき間に食い込むようにはい上がってきました。それは岩と岩をつなぐ役割を果たし土の始まりとなります。新しい植物が増えさらに丘にはい上がり土になる。浸食が緩和され、土が厚くなる。海から動物もはい上がってくる。このような地球上の森羅万象がくり返しくり返し行われるわけです。その過程でどのような動物も植物も浸食防止に力をかし土壌形成に参加する。今から百万年前に原始人が現れ、それから九十九万年たって文明人が現れる。その文明人の出現によって土壌形成の作業は急速に衰えるわけですが、土壌形成に力をかさなかったものが先に滅びるという法則が人類にあてはまらなかったわけではありません。

## 水は生命、文明の基盤

土壌を守らなかった文明はことごとく滅びてゆく。エジプトやメソポタミアなど過去に栄えた文明の跡を地図でたどれば、いずれも裸の大地か不毛の砂漠に変わりはてています。エジプトの場合、最近までともかくも文明が継続されたが、アスワンハイダム、その先のローダムによって、すべてがめちゃめちゃになってしまいました。沃土と豊かな水がせき止められてしまったのです。

水を守る、土を守る、緑を守る、これはまったく同じことなのです。長い長い地球の土壌形成のメカニズムと人類の文明誕生の歴史を頭に入れて改めて身の周りを眺めた時、私達にとって何が大切であり、どうすることが一番合理的なのか、資源の法則にのっとった方法が、ごく基本的には見えてくるはずではありませんか。水問題は国策であり、国土全体の土地利用のあり方に関係してきます。すでに建設してしまったダムとか堤防、コンクリートで固められた都市、すでに整備されてしまった下水道を元にもどすことは不可能に近いが、それだけに今後しなければならないのは少なくとも水の循環を断ち切るような施設、事業が行われる場合にはどれほど慎重であっても慎重すぎることはない、そういう姿勢であります。下水道の整備一つがほんとうに人間の幸せのためか、真の福祉といえるかどうか、すでに東京あたりで問題になっていますが、その代償として水不足、水害、もろもろの環境破壊がなされてきました。したがって水に対して正しいかかわり方をしてゆけば環境問題とか資源の問題はおのずから望ましい方向に好転するはずです。森林を残し、水の循環を断ち切らないでいれば、今のような都市問題は起こらず、過疎化も防げたし、異常なまでの工業化も制約され、環境問題は起こらなかったでしょう。人間の土地利用というのは水を基本にすえて、その土地の供給する水の量と人間のかかわりようが同じであるべきもの。本来あるべき土地利用はやはり、その地域で基本的なものがまかなえるべきであります。もちろん豊かさ、ぜいたくさのために遠くから持ってくるのはかまわないが、今の日本では最低限のものでもその地域だけではまかなえない。それが今後の課題であります。

もう一つ大事なことは、自然は千差万別であり、それにかかわる人間のかかわり方も千差万別だということです。条件の異なる土地で生まれた技術を、まったくちがう地域へ持ってゆくのもおかしい。その技術もまた条件の異なる外国から直輸入されている。水問題にしても日本は世界まれに見る高度な治水技術をもち、水に対して祖先は巧みなかかわり方をしていたにもかかわらず、突然外国から技術だけを運び込んで日本にあてはめようとしてきたことからおかしくなってきたのです。





北海道には北海道なりの自然条件があります。降水量少なく、森林が残されていて、水田地帯ではなく、広地が広がる、その土地なりの知恵があっていい。あまり画一化された考え方でもって自然にかかわらないでほしいのです。水に対して非常に安定的であった北海道のようなところに水害や水不足が発生することは重大な意味を持っています。北海道が水問題で悩まされるようになった時はもう北海道の自然がとり返しつかなくなった時であり、同時に北海道に水需要を増大させる土地利用が進み、工業化が進み、あともどりができない時ではないでしょうか。

**富山　和子氏**　昭和八年生まれ。三十二年早稲田大学卒。四十二年まで講談社に勤務。交通問題、水問題の評論家。森林科学調査会会員。著書に〈水と緑と土〉〈自動車よ驕るなかれ——日本自動車文明批判〉など。

## 質疑応答

**問**　メソポタミアでは焼畑農業が環境を破壊したという。空から見れば畦道がつぶされていて、水の問題が処理できなかったからであるということですが、実際にはメソポタミアの都市は山間部にあり、海岸地域は市場都市である。自然環境が破壊されたよりはむしろ侵略的破壊の方が大きかったのではないか。

焼畑農業で環境が破壊された実例があるなら教えてほしい。

**芳賀**　メソポタミアが焼畑農業で砂漠化したというわけでなく、いったん砂漠化が起こるととめようがなく続いてゆくという例で話したのであって、ごく一般的な意味です。焼畑農業は現在でも熱帯地方やネパールなどで行われていて、谷地化につながり回復が困難であることが植生学者から述べられている。

**問**　日本人は昔からもっとも自然に親しんで来た民族であり、西欧人よりも自然を大事にする民族であるのに西欧の方が自然と親しむ都市計画を行っているのはなぜでしょうか。

**横山**　西ドイツのある工業地帯の報告書から得た知識であるが、そこにはいろんな市があり、各市町村組合が都市利用計画を作りその計画はすべてコンセンサスをもっている。このような連合都市計画の歴史は古い。非常に激しい工業地帯でありドイツの重要な近代化の基地なので緑地計画を進めるのは困難なのであるが、数年前この古い計画を見直したら、昔よりずっと緑地が増えていることがわかった。見直しによって緑が減るのは日本だけで向こうは増えている。どういう根拠によるかというと、日本人は伝統的に緑を大切にし、自然美に対する感情を持ってきたというが、それを生活に反映してきたとは私は思わない。あくまでも個人的なもので公的なものではない。個人の環境と公的環境が分離している。もとをさかのぼればハンザ同盟時代から形成された自由市の思想、このような自由な思想からしか自分で環境を造る意識は生まれない。自動車の後部に木を積んで来て自分の庭を飾る、このようなことでは都市計画という広がりにまで結びつきません。しかし、これから二十一世紀の文明には日本的な考え方が大きな影響を与えるだろうと予測します。西洋哲学では主体と客体をわける、これが近代科学技術を築いてきたわけだが、日本には自ら、おのずからという言葉があり、自分と自然がいっしょになる、これは日本だけの思想であります。文学でも芸術でもこの発想が特色となっている。二十世紀の近代文明、コンピューター文明では得られないものを追求する二十一世紀には西洋でも、日本的な自然観を見直すだろう。それだからといって日本に緑が増えるわけではないが——。

**問**　北海道の国立公園がある地帯の開発道路工事現場へ行った。海抜七百㍍で北海道のそれは本州の二千㍍以上に匹敵すると思うのだが、そこに張り芝がきれいに植えられていた。現場責任者は高度の地形の中で張り芝が活着するかどうかにのみ気を使い、二百～三百㍍の所で採集された張り芝が活着すれば必然的にこの地域の植相が変わることは明らかなのに、それには何ら気づいていなかった。また環境

庁の指導の中に道路の幅を狭くするようにという指導があるので、両側をコンクリートで固めているのだが、その表面を緑で覆うにはつたをはわせるか、どんな植物をもってくるか技術者の立場で真剣に考えられていた。それが自然に対してどんな影響を与えるかはまったく考えていないのである。自然の植相破壊の危険性は忘れられている。環境会議開催を機に道三期計画の見直しの中に北方圏の環境を守る具体的な方策を取り上げるべきだ。環境問題をテーマとして専門的に取り組む研究機関を設置すべきと思います。

**横山**　私の関係している自然環境保全審議会では一応、千㍍以上の山には新しい道路をつくらないことを基本的方針としている。なぜなら自然の管理ができないからである。社会科学の方に問題を変化すると過疎地域をどうするかということになるが、その千㍍は厳密な基準ではなく地域によって変わる。北海道の自然条件からすると、七百㍍くらいからの禁止が適当かもしれない。

**問**　豊かな自然というが、北海道の場合、今の状態が豊かなのか、それともかなり破壊されているのか、これからどうなるのか、どのようにしてゆけばいいのか。その豊かさの意味づけを知りたい。

**芳賀**　生態学では豊かな自然は豊かな生物相の生産性と学問的には解釈している。豊かな生物相の現存量が一番高いのは原生林であり、動物、植物、微生物も含めて最も生産性が高いといえる。アメリカのミネソタで調べた資料があるが、トウモロコシ、草原、サバンナ、カシワ林で生産量を測定している。大変精密に調べてあるが、一㌶当たりの数字はトウモロコシ九千四百五十二㌔㌧、草原九百三十㌔㌧、サバンナ五千九百六十三㌔㌧、カシワ八千四百九十二㌔㌧となっている。トウモロコシの場合は肥料を加えて豊かな生産量をあげているし、カシワ林の場合は自分の身体、食べさせている昆虫、動物の死体など合わせて八千㌔以上の生産量をあげている。豊かな自然イコール豊かな生物相とおきかえていい。北海道はどの程度かというなら自然としても豊かであるといえよう。

**横山**　環境の主体は人間であり、客体は自然で、環境とは自然と人間の相互関係である。から豊かさをどう認識するかというと比較論が基礎になる。あくまでも相対的なものだし、どうしても指標を求めねばならない。自然そのものの豊かさだけで評価はできず、人間側の、すなわち社会科学の豊かさの評価とどうバランスをとるかということになる。北海道の人がもう少し生活を豊かにしたいから原始林を切りたいとトータルで考えても国立公園の木は切ることができない。なぜ国立公園を作るかはナショナル・レベルで評価しているからだ。北海道の経済性とナショナル・レベルで木を残すこととは国が生活の豊かさを守る施策をしないと矛盾におちいる。トータルで評価することを進めてゆくと地球レベルになる。自然を守るためには投資しなければならずインタナショナル・レベルでいうとユネスコの問題となる。社会科学と自然科学とが調和がとれていなければ力関係の政治問題になってしまう。長期的に行うことだから知事がだれだろうと、総理がだれだろうと変わらないナショナル・プランがあって民間プランがあって住民と学者も参加してゆく道以外に豊かさへの道はないと思います。

**富山**　豊かさとは一つの形容詞であり、客観的な基準はない。私は昨日釧路空港におりたって最初の一時大そう豊かな気持になった。そのように人によって場所によって、またその時の感じ方によって変わってゆく。ゆえに形容詞はまさに形容詞なのである。そして豊かさとは何かが今まさに問われている。豊かさについての市民の国民の人類全部の合意が出て初めてその基準が見つかるのではないか。いったい何が豊かか本気で検討されねばならない。私個人の考え方でいえば自然を食いつぶしてゆく、自然の再生産をさまたげている今、形ばかり森林が残されていても今日より明日という形で動いているのなら、それは豊かと言えない。ただ比較の問題ならば東京や





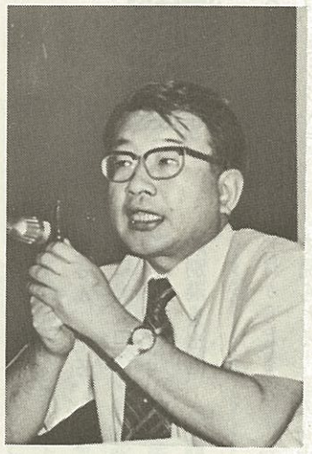
大阪に比べれば北海道はまだ豊かなものが残されているといえる。

**問**　自然を保つには手をこまねいてそっとしておくより、むしろある程度開発しながら積極的な保護をすべきでないか。ナキウサギを大切にするのもけっこうだが、それ以上に地域住民の過疎化を阻止するための生活レベルを発展させるため開発も必要だろう。どこまで開発するか、それ以上やめるかは住んでいる者が判断すべきだろう。

**芳賀**　従来のいわゆる大面積の開発という形で高い地域まで行うと回復不可能なこともありうる。したがって当然、絶対人間の手を加えていけない地域もある。開発されてもさしつかえない小面積にわたっての開発は可能だがその比率は未知数である。条件によって変わる、いわゆるゾーニングという問題がこれから検討されなければならない。次にナキウサギの生息する地域を開発すること、過疎化を食いとめることがなぜいけないかということだが、ナキウサギがどういう所に生息しているかというと真夏の気温が一二～一五度Cのところであり、まったくの高山帯である環境条件をそなえている。そういうところにゾーニングして木が十分育つかどうか、満足な環境保全ができるのかどうか。先ほど指標植物をあげて自然度を測ったが、指標動物もまた重要なものである。そういうことから守るべき地域というものがはっきりあること、守らねばならない破壊されやすい地域があるということを理解してほしい。

## 貴重な意見、十分考えて

**天間**　自然か開発かと今日的なテーマが上にのり、特に人口増大、工業化社会万能から自然を管理するのを忘れてしまったことに対する反省、批判が出された。なにもせずに放置しておくのが自然保護ではなく、積極的な保護に乗り出すのが新しい生きる道だという。開発と自然保護の接点は、守るべき地域をきちんと決めてからかかるべきで、もはや論議の段階から具体的な研究に着手し、実行するときであります。どこからどこまでが開発地域でどこからどこまでが保護地域か、その比率はどうかは一概にいえず、そこに住む人たちのコンセンサスによって決めるべきだ。また開発か自然保護かという二者択一でとらえるべき地域というものがはっきりあること、守らねばならない破壊されやすい地域があるということを理解してほしい。



**天間　征氏**

**天間　征氏**　昭和二十八年北大農業経済学科卒。農林省農業技術研究所を経て帯広畜産大畜産経済学科教授。米コーネル大からマスター・オブ・サイエンスを贈られている。著者に〈七〇年代農業の条件〉〈近代化のための農業経営〉など。

# オホーツクのオットセイ調査

**水産庁のオットセイ調査船「晴昂丸」（船主、紋別市港町渋甲一幸さん、七五㌧）は、ことし七月、オホーツク海のサハリン東海岸にあるロベン島（海豹島）に、オットセイ調査のため向かったが記者（毎日新聞・金子秀松）は、第一回目の調査に同行して七月十日紋別港を出港、六日間の調査を取材した。（グラビア参照）**

## 繁殖の神秘をさぐる

オホーツクのオットセイ――オットセイはアイヌ語が原語、しかも日本海や太平洋の日本列島沿いには数多く回遊している。一九五七年、日、米、ソ、カナダの四カ国で締結されたオットセイ条約によりメス、オスを無差別に捕獲、資源保護上問題のある海上捕獲が禁止され、動物園や水族館からも姿を消してしまったが、かつては三陸沖の漁民たちもさかんにとっていた。また戦前、南サハリンが日本領土だった時代には、オホーツク海で唯一の繁殖地のロベン島には、密猟者たちが暗躍、久生十蘭の小説「海豹島」の舞台にもとり上げられた。

密猟は、海上捕獲が禁止された現在でも後を絶たないという。ねらいは、もちろん高価な毛皮にある。光沢のある毛、防水性にすぐれているものは、ミンクやラッコに次ぐ高級毛皮とされている。

オットセイ条約で、これまで行ってきた海上での捕獲権を失った日本は、水産庁の遠洋水産研究所が、研究用に捕獲するのが認められているだけで、オットセイ捕獲は、いわば非公開の場面。それも繁殖地に近いオホーツク海での調査は、ことしがはじめてで、神秘に包まれている繁殖のメカニズムを明らかにしようというのが今度の調査のねらいだ。

## 〝夫精〟のハレム社会

「夫精」のあて字が書かれるほど精力絶倫の代名詞にもなっているこの動物の、繁殖生理は、なかなか面白い。

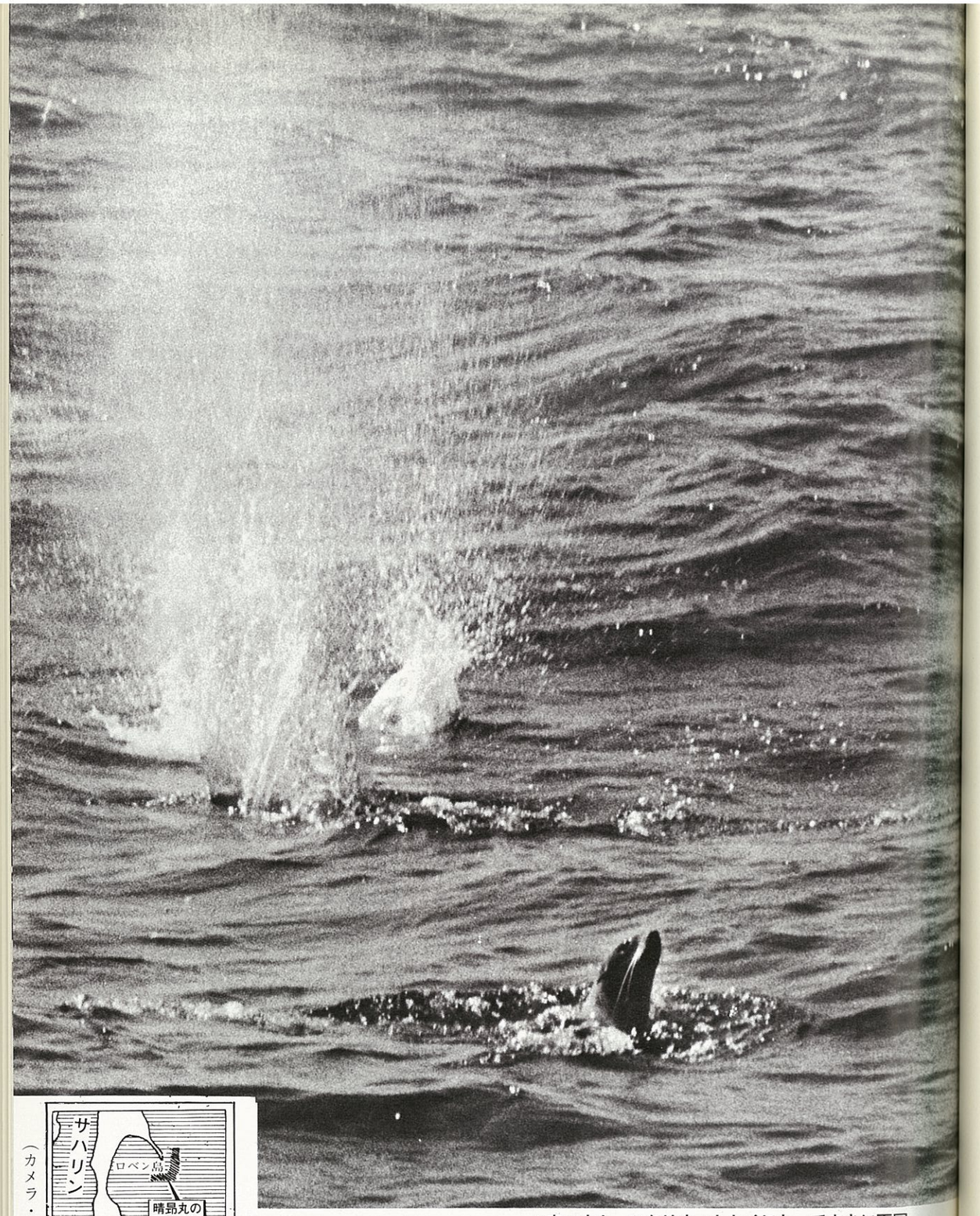
一般に知られているのは、オットセイのハレム社会だが、これは七月から九月ごろにかけて繁殖地で見られる。この間十二、三歳のオスたちは、自分の縄張りとメスの確保のために血みどろの闘いと、獲得したメスとの交尾に明け暮れる。最大のハレム社会はメス百頭にも達するといわれ、これを支配するハレムボスの姿は、世の男性たちの羨望の的にもなりそう。この繁殖期になるとオスのこう丸は、ふだんの三倍以上、こぶし大くらいにも成長するという。

だがメスの方だってオスに負けてはいない。クジラ、イルカなど海棲哺乳類の特徴である二つの子宮の持主で、繁殖地でこどもを産んだ二、三日後にはオスに交尾をせまり、もう一つの子宮で姙娠する。きびしい北の海に種族を保存していくために自然が与えた摂理は神秘としか言いようがない。

## 捕獲権はいつもどる

魚類とちがって一年に一頭しかこどもを産まないオットセイは、乱獲すればすぐ絶滅に瀕してしまうが、オットセイ条約後の十七年間でほとんど完全に近い状態にまで回復したという。調査船「晴昂丸」は一回目の調査期間中、百二十頭を捕獲、解剖した死体から研究用の標本を採集した。水産庁ではこのデータを毎年開かれている国際会議に報告、生態解明に役立てるとともに、刺網による生け捕り方法などを開発、海上捕獲再開の論拠を固めている。北太平洋に約二百万頭生息するといわれ、繁殖地をもつ米、ソだけに捕獲が許されているオットセイ、日本の「失われた動物――オットセイ」が再びもどってくる日はいつのことだろうか。



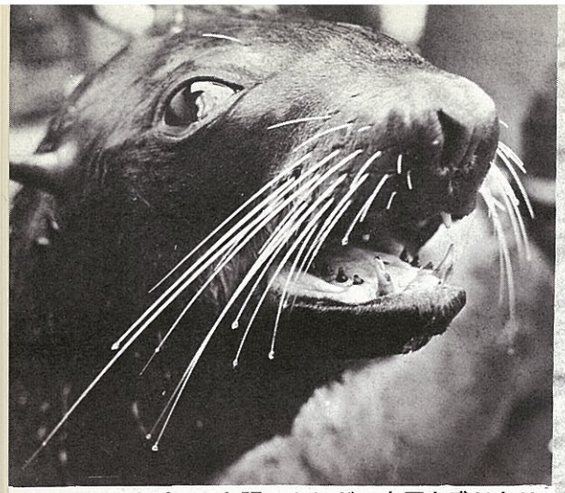


▲広いオホーツクはオットセイにとってまさに天国
一度もぐったらどこに顔を出すかわからない




（カメラ・佐藤正）

オホーツクのオットセイ



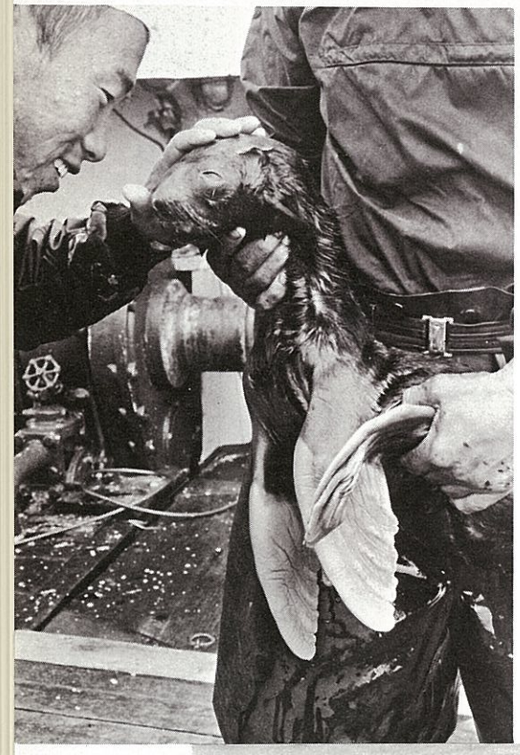
▲ピーンと張ったヒゲ。水圧を感じたり、方向をさぐったり…アンテナの役目だ



▲久しぶりの〝なぎ〟に体を休める。前あしと後あしを海面に出す姿はまさに〝水中バレエ〟



▲後あしと前あしを使って見事にジャンプ。パニック状態のとき多く見られる

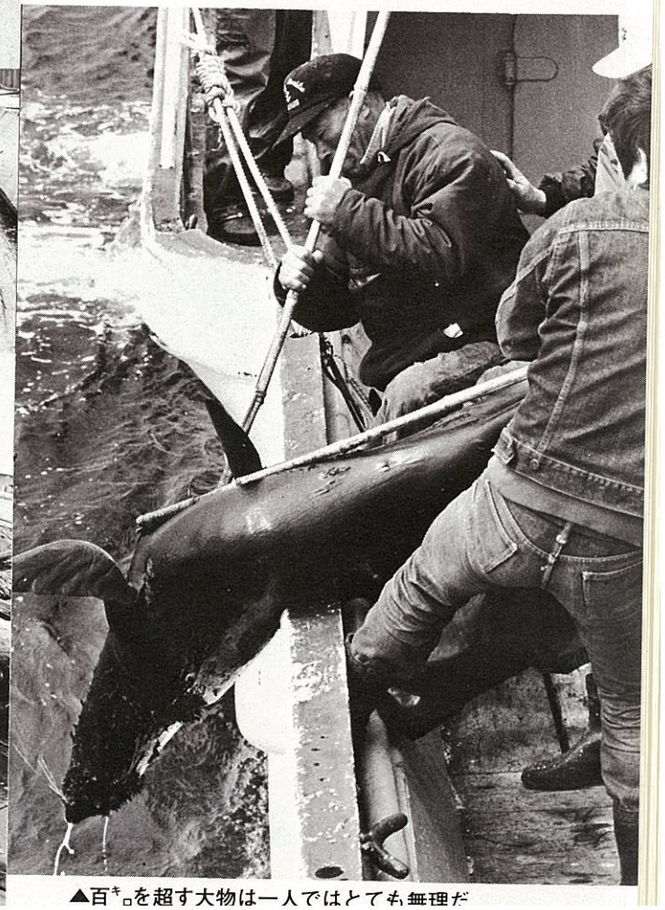


◀かわいらしい腹子のオットセイ

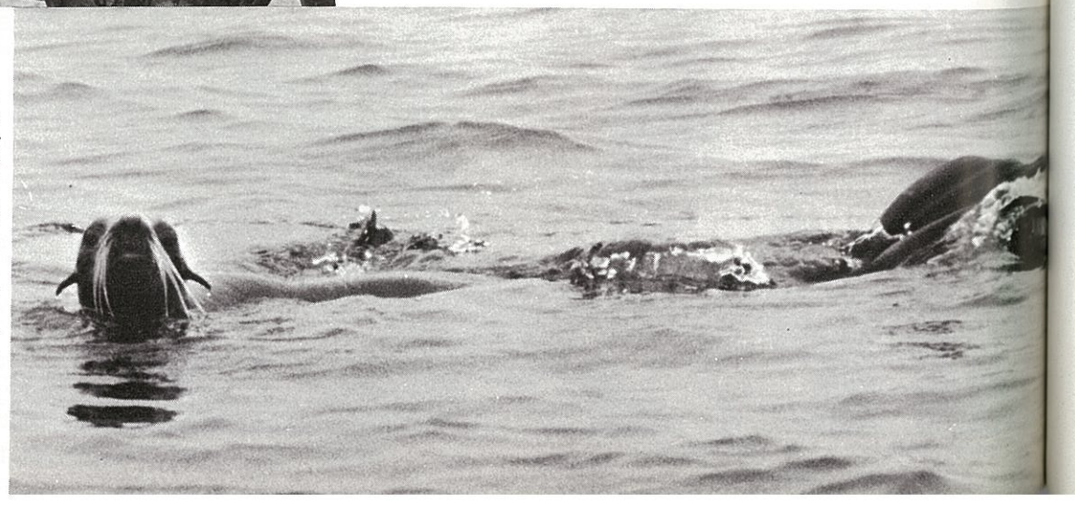




▲特製の身長器で計る調査員。一・七メートルもあった　▶捕獲されたオットセイ。ソ連の標識をつけたものもいた

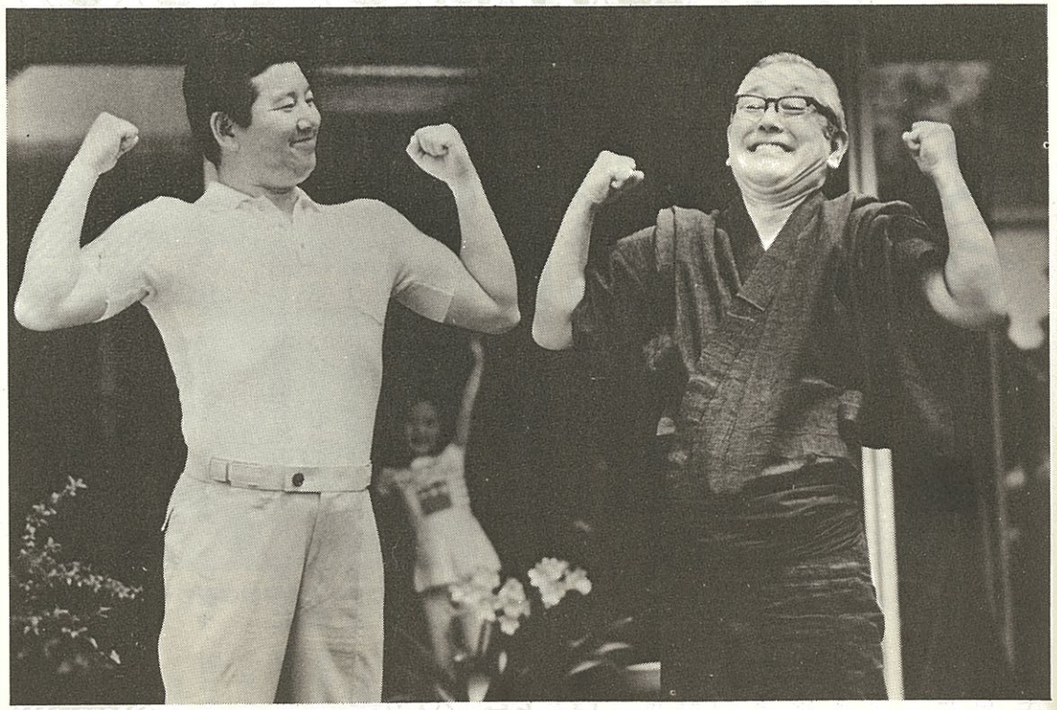


▲百キロを超す大物は一人ではとても無理だ



▶アベックのオットセイ。前あしを出しのんびりムード

# かけがえのない財産《健康》を守る



**1口50万円または100万円の定期預金のお利息で、ホテルでリラックスしながら定期的な総合健診を受けられる新しいシステム——**

●検診は予約制ですから、お仕事のスケジュールにあわせて、お好きなときにご利用いただけます。

●デラックスなホテルの機能を充分に活用できます。
ホテルのロビーや電話などを利用し、お仕事や静養を兼ねたご利用も可能です。

●権威ある医師の診断が受けられます。
このクリニックのために選ばれた専門の医師が診断しますから、安心して受診できます。医師との対話も充分に行なわれ、食事などの生活面での健康管理についてもアドバイスを受けられます。



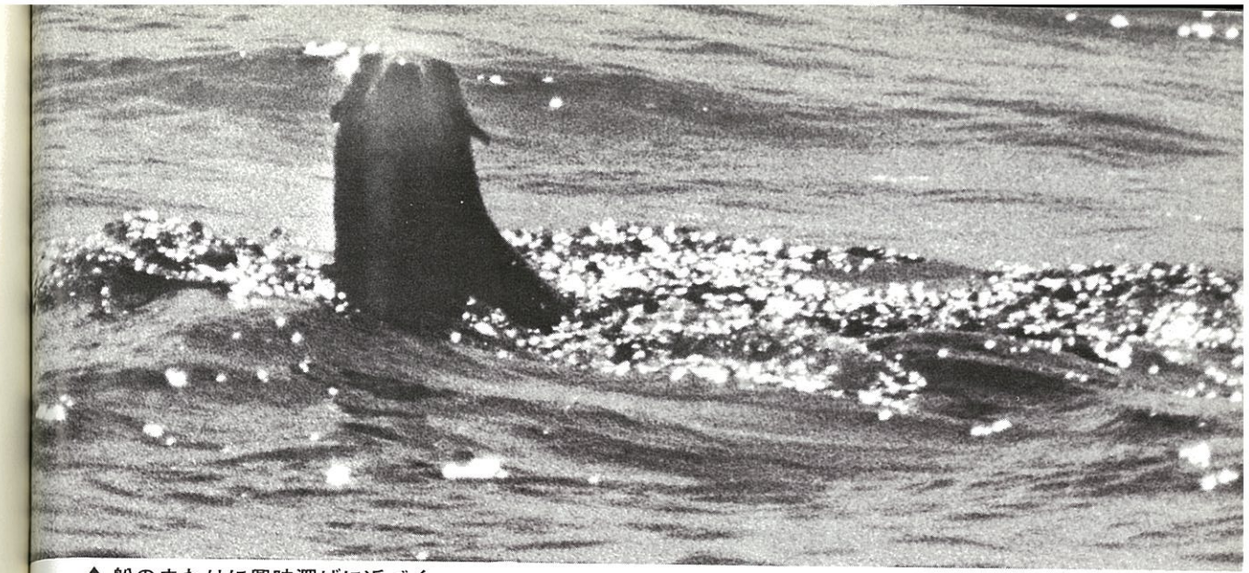
●気軽に定期的な健康チェックができます。
定期預金のお利息を利用することで無理なく毎年定期的に受診できますから、健康の自己管理がしやすく、万一健康に支障が発見された場合には、適切な医師や病院の斡旋が受けられます。

●従業員の方々の福祉対策としてもご利用いただけます。
口数に応じ、何人でも受診できますから、会社やお店の従業員の方々の健康管理にも最適です。

●はつらつ心

# 道銀健康管理定期

北海道銀行

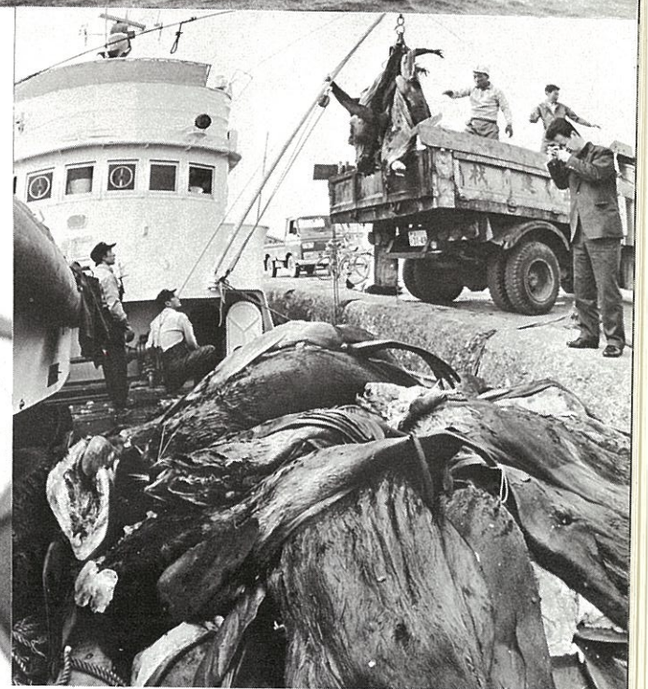
▲船のまわりに興味深げに近づく

調査の1日目は40頭を捕獲した▼





▲精力絶倫のシンボル。陰干しにしてせんじて飲む。効果は…？



▲陸揚げされ、トラックで毛皮屋に運ばれる

# 着てよし 北方圏とくらし

## 心にゆとりファッションモード

**衣、食、住―。そして、スポーツ、レジャーは―。**

**北を志向した北方圏各地の人々は、寒さに対しても、雪についても、生活のチエを働かせて、それぞれオリジナルな文化を築きあげた。われわれも先人たちが歩いた道を考えながら、あるいは軌道を修正しながら、北方圏にふさわしい文化を創造しなければならない。**

**北方圏諸国の人たちが、衣に、食に、住に、どのように取り組んできたか、そして、われわれはどう考えるべきか、どう行動すべきか―。そうしたいくつかの事例や専門家の意見をまとめてみよう。**

## 民族衣装 お手本に

### 衣

トップ・バッターは衣―。おしゃれ、モードである。

「さまざまな文化の中で、服装くらい国際化の波にさらされやすいものはないですね。食べ物もインタナショナルになっているとはいうものの、着る物ほど変わらない。歴史的に見ても、服装が一番先に変わっていく」

西洋服装史の研究をしている東京・文化女子大の石山彰教授は、その最たる例として日本をあげる。江戸から明治に移行した時のあの変わり身の素早さは、たしかに服装文化の持つ一面が象徴的に現れた〝事件〟だといえよう。最近の例では、ミニスカートにジーンズ。ファッションという特殊な要素が加味されているとはいえ、服装の国際的な波及の強さは、目を見張るばかりだ。だが、その半面、民族固有の文化が育てあげた民族衣装を見直そうという動きが各国で高まっているという。民族衣装の宝庫といわれる北方圏諸国。その交流が進めば、そこには当然、新しい服装文化が起こってくるに違いない。

服装の機能を大きく分けると、からだの保護と装飾の二つがある。この両様の間で、過去、さまざまな服装文化が生まれたわけだが、北方諸国の場合、南の地域と比べ、寒冷地という地理的条件から、どうしても護身にウエートがかかってきた。寒さに耐える合理性――それをベースにしながらそれぞれの土地固有の風俗、習慣、柄、染料、素材、テクニックを集約した民族衣装が生まれた。

身近な北海道で言えば、アイヌの民族衣装。毛皮というと高価なイメージがつきまとうが、シベリアやアラスカ、カナダなどの酷寒の地へ行くと、毛皮はもう欠かせない存在となる。ここでは、実用着で、エスキモーなどは毛皮の品質としては劣るが、防寒効果に最もすぐれているトナカイの冬毛の毛皮を愛用している。



北方圏ラップ族の特異な帽子とクツ

フィンランド北部は、トナカイの遊牧生活をしているラップ人が住んでいるが、彼等の防寒着は厚い毛織のフードつき外とうで、赤を主調とする美しい刺しゅうがついている。もともと北欧は民族衣装の豊富なところで、フィンランドを例にとると婦人服だけで五十種類もあるといわれる。中でも海岸線が複雑に山間部に食い込み、地域社会が孤立しているノルウェー南部は、民族衣装の宝庫。カット・ワークをほどこした白木綿のブラウス、足首に達する黒いウールのプリーツ・スカート、ウールの赤チョッキに白のエプロン、それに美しいビーズ刺しゅうのベルトといったところが代表的な衣装である。

だが、こうした色彩豊かで、個性的な民族衣装も、第一次大戦を境にすたれていった。交通の発達、人種の交流、混血、国の分裂、植民地の独立といったさまざまな社会環境の変化が民族衣装と地域の結びつきを希薄にし、現在では、日常生活からほとんど姿を消している。最近、見直しの機運が盛り上がってきたとは言っても、まだ伝統的な祝いや晴れがましい催しの時だけ着るという傾向が強い。もうひとつ注目される動きとしては、国家意識の高揚、あるいは観光客集めや失業対策として民族衣装の着用や製作を奨励する国が出てきたことである。これは東欧諸国に多い。

服装は時代の動きを敏感に反映する。実用性とファッション性。これらが微妙にからみ合うだけに、単純に南と対比しただけでは、北の個性は確立されないに違いない。恐らく、新しい北方圏文化の形成と密接にかかわりあいながら、北海道の衣生活も変化していくだろうが、現在、すでに将来のひとつの方向を暗示しているものに毛皮の動向がある。北海道での需要が急速に伸びているというのだ。

「日本では毛皮というと高級品というイメージが強く、一般市民とは縁のないものという考えが支配的だった。ストール、いわゆる〝えり巻き時代〟の毛皮は、単なる豪華さのシンボルとして使われた。それだけに北海道より本州の人の愛用が目立った。ところが、この数年、コートとしての毛皮が急速にクローズアップされ出し、特に北海道では著しい伸びを見せている」

毛皮の大手メーカー、ロティニー札幌営業所長の吉田昌以氏の話である。

着る側に質的な変化が起こりつつある。耐久性、保温性、それに自然の感触。毛皮の持つ本来の特質に目を向ける女性が、とくに若い層に増えてきたというのである。これはデパート関係者も最近の注

総合リサーチ
# 北方圏調査会

## 保温性が抜群の毛皮

極北の寒地、例えば氷点下五〇度という寒波におおわれるシベリアのタイガ地帯に住む原住民を除くと北方圏諸国に極端な防寒服は残っていない。「衣服の原型はエスキモーである」とする石山彰文化女子大教授の説によっても、北方圏にエスキモーの名残をとどめているのはスカンジナビア半島の北端、ラップランドに住むラップ族くらいだという。だから帽子やクツにしても独特の防寒機能や民族色の強いものは現代の北方圏諸国からうかがい知ることはできない。

ラップ族は約三万五千人。昔ながらにトナカイの主食、コケを求めて遊牧するのは全体の一割前後。その装いも昔はトナカイの毛皮をふんだんに使われている。

北欧は第一次大戦まで、村ごとに民族衣装があったが、ヨーロッパとの文化交流で、あっというまに〝装い〟も普遍化した。しかし、シベリアと北欧、カナダはテン、ミンク、ラッコ、アザラシ、オットセイなど陸海ともに毛皮獣の宝庫。コートやウインタースポーツウエアに限らず、帽子やクツにも毛皮がふんだんに使われている。

シベリアのヤクート地方は生きる限界ともいえる氷点下五〇度の極寒のなかで、ヤクート人は全身を毛皮で包んでいる。トナカイ、ウサギ、リス、イヌ、シカなどの毛皮だが、クツや帽子もすべて毛皮製。トナカイの柔らかい毛皮でつくられた長グツはヤクート語で〝カムスイ〟といい、なかには〝ケエエンチョ〟と呼ばれる毛皮の長クツ下をはく。

本州から北上してきた衣装と、北国独自の衣装がまじり合う北海道で、気候風土に密着した新しい服装づくりへの模索は、さらに続くことだろう。

「二年間で五倍も、そのマーケットは広がった」と豪語している。

日本女性向きのデザインも増え、製品が多様化してきた。需要が増え、量産されるようになると当然コストが下がってくる。業界でもピンからキリまであり、それぞれの層の人が、それぞれの力に応じた着物を買う。また、着物のよしあしを見る目も持っている。外国女性も毛皮に対して同じことが言える」と、吉田氏は言う。

若い女性は、安いラビットの毛皮を着て通勤している。お金ができたら、さらに一段上の毛皮というふうに買っていく。もちろん、シンボル的な見方はあるが、だれでも最初からミンクの毛皮を持とうとするわけではない。

毛皮デザイナーの小野郁代さんは「日本では実用的な用途を抜きにして、いきなりヨーロッパあたりからモードとして入ってきました。それが、やっと最近になって、毛皮本来のよさが、広い層の女性に認識されるようになってきました。値段の点でも高い、高いと言いますが、着物と比べてごらんなさい。着ている時間を考えたら毛皮の方がずっと安いです」と語る。

合わせて着ていたが、いまはヨーロッパから入るウールを毛皮と合わせて使う。夏は毛のついている方を表にし、冬はそれを裏返して着る場合も多い。動きやすく、機能的な民族衣装の伝統と「美しさ」の要素を加え、紺や黒の生地に黄色や赤で帯状の模様を入れるなど非常にカラフルで、雪原では目にしみるように映える。

帽子もブレードの飾りのついたスキー帽のようなもの、クツはアメリカインディアンとよく似たトナカイの革グツで、足の甲をひと革多く包み、クツ下の代わりに乾草をつめ、革ひもでぐるぐる巻きにする。いわば長グツの上からゲートルを巻いた感じだが、クツ自体が二重革になっているので温かさは抜群。

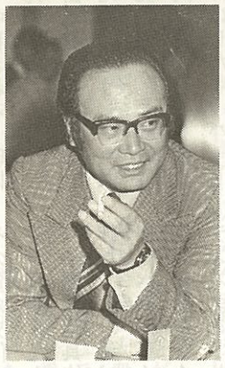




# くらしに活かす北国の風土

## ドライフラワーの色調を

デザイナー
中村乃武夫



◇モードの原点◇

ボクは〝南〟にかぶれた人間だから〝北〟のモードを語れといっても無理な話なんだ。

寒すぎるところや暑すぎるところにモードは育たない。素朴で、がまん強く、働くことを何とも思わないような風土、そこではおしゃれは育ちにくい。おしゃれの感覚は進歩的で、多少あきっぽいところでみがかれる。その点、北海道は何にしても新しがりやで流行に敏感。特に札幌という環境はモードが花開く十分な風土と言えるんじゃないか。同じ北方圏といっても、厳しさに耐えているアラスカと八方に目を見開いている北欧じゃ〝美しく着る〟おしゃれの感覚だって全然違う。しかし、モードが機能や実用から装飾、し好に向かって一段とインターナショナルになっている時点で東も西も、北方圏もないよ。モスクワのご婦人が美しい下着を買うために貯蓄をし、美容院に殺到しているんだ。世界はおしゃれ感覚で一本化しつつある。いいことじゃない？

北と南の比較論などには一切目をつぶる。発祥とか民族衣装の歴史とかを通り越して現代の世界的なファッション文化にどっぷりつかった氏の発言としては当然だが、モードと文化のつながりとなると鋭い洞察を秘める。それがパリのアンサンブルというのを徹底して大事にする。夫婦でマチを歩くとき、お互いにきれいに見せあいながらピタッとマッチしたものを着る。あえていえば北海道のモードにはこれがない。パリモードそのままのシックな装いで、息つくまもなくタバコをくゆらせる。パリ、札幌、どちらも年に一度は訪れるという。

◇パリの〝ある実験〟◇

服装は環境にマッチしなければならないってことを教えられたのはパリなんだ。五、六年前、イタリアやアメリカのファッションがパリをしのぐ勢いにあった。シックにあきてカラフルと美しいものを求めだしたということなんだが、モードが国の産業化しているフランスは防戦のために何をしたか。パリの中の大掃除をしたんだ。薄汚れた石だたみを洗い、壁を塗り替えた。背景を変えることによって死にかけたパリモードに生命をふきかけた。この作戦が見事に成功しパリのファッション界は立ち直ったんだ。パリのアンサンブルというのは、ある〝実験〟として語られた。

◇調味料◇

札幌が東京と違うのは湿度。ベタついた感じがない。これをファッションに生かすべきだ。北欧にせよ、北米にせよ、札幌よりもっと透明なんだ。札幌は東京の〝つけたし〟にすぎない。〝シベリアカラー〟というのがあるが、ドライフラワーのようなカラカラして死んだように透明な色。あれが北海道には面白い。南の色調にフィルターをかけてみる。いわば色の調味料だよ。そしたら新鮮なモードが生まれるんじゃないかな。とにかく、北は北なりに土地の生活文化にマッチしたもので、新しいアンサンブルを作る。その土地でとれたものを、その土地で食う。酒も女も——。モードもよく似ているんだ。新鮮さが一番だよ。

パリ—東京—札幌のタテ糸に結ばれたモード。その線上で稼ぎまくるデザイナー。北方の〝透明な色調〟をどうものにするか。それは彼自身のテーマでもあるようだ。

# お料理も〝技術交流〟で

## うまいものうまいもの吸収しよう

食

道産子にはおなじみのニシン。この寒流性の回遊魚は、アラスカ、カナダ、アメリカ北部、それにサハリン、北欧沿岸と北方圏の国ならどこでもとれる。だが、調理法、食べ方となると北海道とはまるで違う。

ソ連――生ニシンはなく、どこへ行っても市場にヤマと積まれているのは塩づけニシン。甘塩も塩の強いものもあり、これを焼きもしないでそのまま食べる。ロシア料理に詳しい長屋美代さん（東京・〝渋谷ロゴスキー〟経営）の話によると、熱い塩ゆでのジャガイモとよく一緒に出てくるという。「ニシンの酸性とジャガイモのアルカリ性が、これで中和される。理にかなっているんですね」。

北欧――新鮮な食品を得ることが困難であるため、どうしても保存食中心の味覚となり、ニシンは酢づけが代表的。背びらきを軽くいぶして油づけにしたキッパードヘリングもウイスキーのサカナとして有名だ。これらは、いずれも北国の厳しい環境が生み出した生活のチエといえる。四季の新鮮な味覚を尊重する日本人とは対照的に、北極圏に近いスカンジナビア諸国では、長期間貯蔵できる食べ物が喜ばれる。もちろん、酷寒の冬に耐える体力をつくるため、食生活は合理的で、酢づけの食品を多くとるのも、余分のタンパク質や脂肪分、糖質など、うまく燃焼させるためだという。

「食べ物は文化そのものである」――小幡弥太郎・大妻女子大教授（北大名誉教授）は、明快に言う。その国の文化水準が、料理にそっくり反映するというのだ。

小幡氏は具体例として食器をあげた。木の葉、木、粘土の順で、文化水準が高くなる。北欧は木製品の食器が多く、陶器の食器はフランスまで行かないとない。従ってフランスの方が文化水準が高く、料理がいいという論法だ。

では、食物文化論からみたら北海道はどうなるのか。「本州の〝ごった煮文化〟ですね。なんでもひとつのナベに入れて煮てしまう。これは独自の文化とはうらはらの問題といえる。その意味では、カナダも英国の延長にすぎないし、世界的にみて〝北〟は遅れている」。

料理の後進性――これはスカンジナビア料理でも事情は同じだ。料理研究家、二階堂アンナさんによると、主体である貯蔵食品にドイツ料理の合理性、フランス料理の美食性を巧みに取り入れて固有の料理に育てあげているという。

しかし、南の優位性と北の後進性という図式がすべてにあてはまるか、というと必ずしも事情は単純ではない。食料の加工、料理の問題は、衣や住とともに最も基本的な研究分野であるにもかかわらず、ほとんど体系的な研究が行われていないのが実情である。わずかに大阪府立大の中尾佐助教授らが、民衆の基層文化としての料理に学術面からメスを入れはじめたにすぎない。

「食料の加工、料理は生活次元の問題であり、それを基本においてながめると、そこに浮かび上がる世界像、世界観はいままでの権力や高級文化を基本としてながめた世界像、世界観と相当違ったものになってくる」と述べている

食物は、ひとつの文化圏と連動していることも確かだが、人種や文化による味覚の差としては片づけられない面も多い。





例えば好まれる肉の順位。日本では大体ウシ、ブタ、ニワトリ、クジラ、ヒツジ、ヤギ、ウマの順になりそうだが、お隣の中国に行くとブタ、ヒツジ、ニワトリ、ウシの順位となり、ウシは劣等な肉として値段も安い。フランスではウマ、ハト、カエル、ウサギにいたるまで肉なら何でも食べるが、クジラやイルカの肉は見向きもしないという。宗教的なタブーによって順位が決定づけられているところも目だつ。

米、雑穀、魚、野菜、果物、乳と、それぞれの食料について、比較文化論を展開すると、恐らく料理の世界は、えらく複雑なものになってしまうに違いない。しかし、北海道に限ってみた場合、本州から北海道へとタテの関係で北上してきたことは明らかで、アラスカやカナダをはじめ、ソ連、北欧などの北方圏諸国と、ほとんど食べ物や料理の交流はなかったと言っていい。だが、あらゆる分野で急速に国際化している中で、食べ物だけが例外であるわけはない。

「まちがい栄養学」の著者で、寒地食に詳しい川島四郎氏（食糧産業研究所長）は、こんな話をしてくれた。

「最近、ソ連ではコンブを食べるようになった。戦前は見向きもしなかったのだが、コンブはすばらしい栄養食品で、日本人は古来から経験の集積で愛用してきた。ソ連人が、あのコンブの味を覚えたとなると、それだけでも、もう主産地の北方領土返還は望み薄だ」。

川島氏の話によると、海草は海水中のあらゆる希有元素を吸収していて、陸上の食べ物とは違った特殊性があるそうだ。

小幡氏の話でも、日本人以外は、あまり海草は食べない。北欧では食用海草をダルスと呼んでいるが、肉とバターいためして煮る程度で、日本のように広くは利用していない。それがコンブのようなケースも出てきた。

## 独特な風味の蒸留酒

北方圏の酒といっても、北米やカナダは、もともとイギリスやフランス系の集合だから、ビールやウイスキー、ワイン、ブランデー、ジンとヨーロッパで愛される酒は何でもある。

気候、風土とかかわりあいの深い特徴的な酒となると、北欧のアクアビットとソ連のウオツカにとどめをさす。

世界の酒に詳しい「寿屋」（札幌）専務の奥野敏雄さんの〝研究〟によると、アクアビットの生産量はスウェーデン、デンマーク、ノルウェーの順だが、スカンジナビア諸国全般に大衆酒として愛されている。語源はラテン語のアカ・ヴイチ〝生命の泉〟というにふさわしく、澄み切った透明の蒸留酒。「酒事典」によると、スカンジナビア原産の植物にヒメウイキョウやシャウズクの種や実をまぜ、レモンやオレンジで香料をつけてつくるが、奥野さんに言わせると「錬金術を応用した製造法。一度どぶろくのようなものをつくり、カンであたため、先に蒸留するアルコールを取り出して冷やしただけ。きわめて単純な製法」。味の方は「やや独特のにおいがあるので、慣れるまでは親しめないかも」という。

ドイツやフランスのビールやワインが、五千年の歴史があるのに対して、アクアビットがストックホルムに誕生したのは十五世紀。

ソ連といえばウオツカというほど、あまりにもロシア的な酒、ウオツカは無色、無臭の蒸留酒。数年前、工場労働者があんまりウオツカを飲みすぎ、翌日の仕事を休んだり、仕事に身が入らないため、ウオツカの禁止令を出したというニュースが伝えられたほどその味はロシア人に親しまれている。

製造はしごく簡単で、原料を蒸煮して麦芽を加えて糖化し、これを酵母で発酵させたものを蒸留して五〇%内外のアルコール分にしたものにすぎない。面白いのはこのアルコール液をそのまま出さずに、シラカバの炭をつめた小塔を通して念入りにろ過すること。そのために香りの高いフーゼル油や悪臭成分が吸われてあのようなスッキリした味になるという。

北方圏における豊かな生活文化の創造を目指して



心と心のふれあい

ユー&アイマツザカはあなたと私の結びつきを大切にします。

株式会社ユー・アンド・アイマツザカ
の基本理念と５U７I精神……

ユー&アイマツザカは５つのU（友）、７つのI（愛）の精神を基本理念と致します。

◎5Uとは……

(1)友(U)
(2)理解(Understand)
(3)独創性(Unique)
(4)全世界(Universal)
(5)理想郷(Utopia)

“人類社会全て友人”
相手への理解から始まり
ユニークな発想をもって
全世界への広がりの中で
理想郷の建設を目指す

◎7Iとは……

(1)愛(I)
(2)英知(Intelligence)
(3)造性(Imagination)
(4)自主独立(Independent)
(5)進歩(Improvement)
(6)国際性(International)
(7)理想(Ideal)

“全ての人々への愛”
英知と
創造性と
自主独立と
進取の気象と
国際的な視野にたって
理想的な愛を示そう

《新事業の紹介》

★各種新製品販売事業
★ハウジング事業
★都市開発事業
★貿易事業
★緑化事業
★レジャー事業
★文化事業
★貴金属販売事業
★出版事業
★信販事業

株式会社 ユー&アイ マツザカ

東京本社＝東京都新宿区西新宿２の６の１新宿住友ビル ☎(03)347－4600
札幌本社＝札幌市中央区北２条西３丁目敷島ビル ☎(011)251－7151
支　社＝函館・旭川・帯広・釧路・室蘭・北見・滝川　営業所／稚内



# くらしに活かす北国の風土

## 親しみやすいロシア料理



渋谷口ゴスキー調理長
長屋　美代

◇風土と料理◇

十年くらい前になりますか、一ヵ月間くらい北海道の炭鉱地帯を回って、ロシア料理の講習会を開いたことがあるんです。あの時は、ずいぶん喜ばれましてね。ボルシチなんか寒い北海道にはもってこいの料理だと言って大変な人気でした。どうして今までこんな料理が北海道になかったんだろうって――。

私はロシア料理を愛しています。自分の店を持ち、調理場に立って二十年以上になりますが、ロシア料理は、まだ日本では珍しい料理なんですね。ロシア料理は、多分に東洋人の血が通った身近で親しめる料理だと訪れるたびに思うんですが、それがなかなか理解されませんね。

長屋さんが経営するロシア料理店、東京・渋谷駅前の「渋谷ロゴスキー」。料理の話をしているとごきげんなの、と楽しそうに説明する。

◇庶民と料理◇

革命前のロシア料理の豪華けんらんさは、世界的に有名ですが、これはヨーロッパ諸国との文化交流が生んだ西欧風の料理で、庶民とは無縁のものです。〝シチー（キャベツ汁）とカーシャ（かゆ）はわれらのもの〟と昔からのことわざにあるとおり、ロシア人の大部分を占める農民の間に育った料理、これこそが本来のロシア料理だと思うんです。

そう、一口に言って、ロシア料理はボリュームがあり、盛りだくさん。無造作で東洋的、重厚で栄養的、実質的ということになりましょうか。そこにはスケールの大きい大自然が育てあげたロシア人気質――ねばり強さと大国らしい自信、ヌーボーとしたユーモア精神が色濃く反映しているのを強く感じますね。そして、会食の間、みんなで歌い、飲み、踊る。こうした陽気なふん囲気はいかにもロシア的ですね。また、なんだかんだと名目をつけてウオツカの乾杯をするんですが、女性でもずいぶん強い人がいるのは、幼い時から飲む習慣のせいでしょう。

一流ホテルでもあまりありません。メニューにのっていても出来ない料理も多いし、予約なしにレストランに行くと、ずいぶん待たされる。うまい味だけを求めて行くと失望するかもしれませんね。要するにロシア料理は実質的なんです。日本の食生活に取り入れたらいいと思う料理もたくさんあります。

とくに寒冷地の北海道ではロシア料理に目を向けてみることは、ムダではないと思います。魚の調理法にしても、フナやウナギのクリーム煮といった日本とはまったく違った感覚で料理されるものは別として、終戦後、ソ連の収容所で過ごした人の中には黒パンと塩づけニシンの味が忘れられないという人もいるんです。

ジャム入り紅茶などカゼなんかすぐ治ってしまいますよ。ハチミツや果実酒を入れてもいいし、寒冷地の人たちには受けると思いますね。北海道の人たちも、そろそろ北の国々を見回す時期にきているんじゃないですか。

ソ連には何回も行っている。昨年夏も、二十三日間の食べ歩きの旅をした。胸がつかえるような物でも食べてきました、と研究心はおう盛だ。

◇シタと料理◇

たしかにソ連の料理はまずいですね。シタのこえた日本人が、まずまずだと思うのは、モスクワの

# 機能性、経済性を守れ

## 床面積はたっぷり

## 住

の違いをさぐってみた。

上田助教授が北海道の住宅の〝貧しさ〟としてあげるのはやはり暖房。もともと暖房の考え方には空気を暖めるものと、家自体を暖めるふたとおりの方式があり、寒地建築では後者を選ぶ方が効率的。だが、北海道の暖房はいまだに各種ストーブによる空気暖房だ。「家を暖める」には熱伝導で壁、床、天井を暖めることと、そこから熱の放出を防ぐふたつの役割を完ぺきにする必要がある。その意味でオンドルやペチカの優位性に再び目を向けると同時にパネル・ヒーティングやセントラル・ヒーティングの普及に力を入れるべきだという。寒地の建物は「金がかかりすぎる」という考え方、ある意味でイニシアル・コストを安く抑えて、ランニング・コストで補うという日本人特有の考え方とヨーロッパの発想はまるで逆だが「住宅という生活の基盤にこそ金をかけるべきだ」と同助教授は強調する。

住宅づくりから一歩進んで住宅政策となると、そうした考え方の違いは一層はっきりする。

まず北欧。社会政策の一環として北欧の住宅づくりを研究している厚生省・森幹郎老人福祉専門官は現在のデータをもとにこう説明する。北欧五カ国の住宅統計の中で、もっとも注目しなければならないのは〝一人一室主義〟の考え方。「一室当たり二人以上の住宅」の割合はデンマークでわずか一・三%、スウェーデンが四・六%、ノルウェーが六・三%、フィンランドがちょっと悪くて約三五%。一室当たりの平均人員はフィンランドを除いて各国とも一人未満だ。居住密度を畳ではかり「一人当たりの畳数は五・六畳」(四十五年・建設白書)といったわが国の実情に比べてなんともうらやましい限り。北欧諸国では住宅とは単に人間が生理的に生きていくために必要な空間というにとどまらず、人間としての尊厳性が守られるためのプライバシー空間である——(森氏)。だからスウェーデンでは一般に住宅分散主義がとられながら、老人住宅については大規模団地化を避け、小規模(三十戸まで)な団地にして、できるだけ一般住宅の中に分散させるという方向だ。アメリカ、ソ連が〝老人コロニー〟として老人専門の団地化を図っているのと対照的に、老人も市民生活のなかで助け合って——という思想が反映している。北欧の集団住宅は〝オール中間階層化〟の現れでもあり、外からみた限りでは、中にどんな人が住んでいるか見当がつかない。玄関のドアをあけて初めて、そこには大学教授もいれば、バスの運転手、デパートの店員もいるという具合。水洗トイレやシャワー、浴室などの設備も各々そろって都市部の住宅団地では世界的にも最高の水準にあるという。

住宅の質、つまり機能性と生活





環境をマッチさせた理想的な住宅となるとカナダが最高。五年前にカナダのNRC(国立総合研究所)で寒地住宅を研究してきた道立寒地建築研究所の中村裕史施工第一係長のレポートによると、生活の水準が高いように、住宅の水準も非常に高い。住宅法に基づく新住宅の床面積は日本の六三平方㍍に対して一一五平方㍍と二倍近い。一戸当たりの平均室数は日本の三・六室に対して五・三室。一戸建て住宅のほとんどは三室以上の寝室を持っている。

住宅建設は民間建売業者に頼るウエートが高く、現在では全住宅の八〇—九〇%も占めている。業者は普通五十戸から三百戸の新住宅団地のための土地を準備するがモデル住宅の種類は五種類から十種類もある。購入者は規格建築の仕上げ段階で内装の色やダイニング用具を好みに応じて注文する。価格の九五%までは住宅法で貸付けを受けられる。一戸建て住宅の建設費は平均六百五十万円だが、これは平均的サラリーマンの三年分の年収に満たない。だからカナディアンはしょっちゅう、魅力的な住宅を探して引っ越しをする。

一戸建て住宅の大きな特徴の一つは、九〇%以上が地下室を持っていること。凍上を防ぐために基礎の深さが一・五㍍以上もあり、機械で何戸分も一度に掘るので経費は余りかからない。地下室には中央暖房(セントラル・ヒーティング)のための暖房炉、給湯のための湯わかしタンクのほか、物置、洗たく場、子供の遊び場、日曜大工の工作室、ステレオやピアノを置いた音楽室など実にさまざま。暖房は地下室を含めた家全体を暖める方式で、ダクト(導管)で温風を各室に送る。燃料は灯油が一般的だが、資源王国にモノをいわせて天然ガスの利用が増えてきた。北海道では寝るときに暖房を止めるのが普通だが、カナダは連続暖房。燃料費が日本の五分の一、暖房施設が住宅建設費の五%でできるという経済性が幅をきかせる。

最近、北海道にもぐんと普及してきた断熱材の厚さがやっと五〇㍉というのに、あちらは一〇〇㍉。〝寒さ知らず〟は徹底している。

〝恵まれた国〟といってしまえばそれまでだが、カナダの連邦政府、州政府、そして市民全体に「住宅は暮らしの基本」という考えが浸透していることも事実。「北海道の住宅の質の向上はめざましい」と評価する中村さんも、カナダの住宅環境にはすっかり脱帽。「北海道も長い冬を快適に過ごすために、寒地住宅としての目標を高いところに置く必要がある」ことを痛感したという。

ソ連の住宅政策の特徴は、公共交通機関と同じようにソシアル・サービス。従って家賃は収入をもとに算定され、光熱費、水道代などを含めて給料のわずか四—五%に過ぎない。しかし、国家による大量の住宅建設にもかかわらず、現在でも多くの住宅不足や住宅改善への要求をかかえている。モスクワでは2DKを二世帯で使い、台所もトイレも共用という雑居生活がまだ多い。しかし、地域暖房は完ぺき。また住宅と公共施設、職場、生活施設をパッケージにした都市の基本政策が急ピッチで進められている。

## 野鳥草花と同居の団地

緑のカーペットと原色もあざやかな草花の中に埋もれる住宅群に、日本からの視察者は、思わず「すばらしい」と嘆声をあげる。自分たちの住まいの環境との落差があまりにも大きいため、だれもが驚き、ため息さえつく。

一昨年、カナダ、アラスカを訪れた道経済文化視察団のメンバーは、その報告書の中で、だれもが住居環境のすばらしさをあげている。

「住宅敷地が広いうえ、建ぺい率は二〇%くらい。敷地はすべて緑化され、土ハダは見えない。しかも各戸間にへいがないため、公園の中に住宅街がある感じだ」(札幌市助役、平瀬徹也氏)

「カナダのバーナビー市の住宅団地はいかに野鳥が逃げ出さないかに腐心していた。野鳥のえ付けも団地づくりの一方策になっており、芦原や雑木林の続く道路の間近に十数羽の雁や小鳥が群れをな

していた」（浦河町長、浜口光輝氏）と報告しているように、自然と日常生活が切っても切り離せない関係となって生きていることを強調している。

自然と人間が調和した住宅団地といえば、だれもがフィンランドのヘルシンキ郊外にあるタピオラ団地をあげる。ヘルシンキ市街地から西へ約二十分、二七〇㌶の広大な団地に一万五千四百人が生活している。一㌶当たり五十七・二人の人口密度は、わが国の代表的団地の約半分の少なさ。

もともと〝自然が主、住宅が従〟という精神で、人一人いない森に、世界の著名建築家のコンペによるデザインで造られたニュータウン。緑あふれる森林の中に、あるいは中層、あるいは高層の個性的な住宅が四千五百八戸も建っている。「住宅庭園都市」とさえいわれるこの団地を見た日本人は、わが国の住宅政策の遅ればかりでなく、住民の自然環境を守る意識の低さを、改めて痛感させられるという。

ソ連の住宅政策も量産から質の向上へと急速に変わっているし、空間と緑のスペースを考慮したニュータウン計画も活発だ。ことに近年、シベリア地域に続々と造られているニュータウンは、それぞれの都市機能を初めから明確に区分し、空間をたっぷりとった街づくりとなっている。

こと住宅環境づくりに関しては、わが国は学ぶべきことばかりというのが共通の言葉だ。

## 暖房は都市構成の一つ

地域暖房は、日本ではやっと最近実用化されはじめたが、欧米では、水道やガスと同じように公共施設の一つとして考えられ、古くから都市構成の一部となってきた。各国の現状に詳しい北大工学部の斎藤武教授の話によると、単に冬季間の暖房用だけでなく、オフィスや家庭での年間給湯、病院の消毒用、工業用、さらに夏の冷房用と利用範囲は著しく広がっている。

最も古い歴史を持つのはヨーロッパだが、ドイツでは一八七五年から始まっており、戦後も都市の近代化とともに再建や新設が盛んに行われている。寒冷地帯のノルウェー、スウェーデン、デンマーク、フィンランドの北欧諸国では特に地域暖房が普及している。デンマークでの加入率は一九七〇年で二五%、一九八〇年には四〇%に達する見通しだという。スウェーデンでも十年前で早くも都市住宅の七五%が地域暖房に加入していたといわれ、普及率はきわめて高い。原子力利用の地域暖房も出来ている。またフィンランドでは発電併用の地域暖房が増加している。

ソ連も火力発電所のエネルギー総合利用や大気汚染防止という見地から徹底した地域暖房を実施、熱供給施設は年間一〇―一五%の伸びをみせているという。ほとんどが発電との組合せで、火力発電施設の約三分の一が排熱利用の地域暖房と結びついている。

アメリカも一八八七年にニューヨークで実施されたのを皮切りに、大都市はもちろん人口十万人以下の小都市にもかなり普及している。

また、最近の傾向の一つとして冷房との組合せがあり、ボイラー設備の年間利用率アップをねらっている。ニューヨーク市のロックダル団地を例にとると、六九三万平方㍍の敷地に五千九百世帯のアパート、商店、学校などがあるが、暖冷房のほかに住宅団地内の供給電力の発生、給湯、給水などの一切を一カ所のプラントから行っている。

## 電化道路は札幌が一番

ロードヒーティングに関しては、北海道は世界の中でも先進地である。技術関係者も「外国に行っても、あまり参考になるものがない」というほどだ。アメリカ、カナダもほとんど普及しておらず、スウェーデンなど北欧諸国では、機械除雪が発達しているうえ、岩塩が豊富なところから、道路の交通安全対策として岩塩を散布することが多いという。また、地域暖房の蒸気を使ったスノーメルター・ステーションの充実に力を入れている。





日本ほどでないが、ロードヒーティングに最も積極的に取り組んでいるのはイギリス。日本と同じく、昭和三十八年ごろからこの研究が始まり〝霧のロンドン〟を中心に四十三、四十四年ごろから実用化されている。名物の霧が凝結し、ちょうどシモが降りたような状態になり、スリップしやすいため、高速道路の高架部分などに取り付けている。ただ、日本ではコマーシャルベースで普及しているが、ロンドンでは交通政策の上から実施されているのが特色。したがって施設の規模も大きく、最も大きなもので受電量五百㌔㍗、一平方㍍当たりにすると百㍗というものもある。

しかし、全体的にみて北海道、とくに札幌での普及は世界一といってもいいだろう。札幌のような大都市で、これほど雪の多いところはあまりないという事情もあるが、歩道までロードヒーティングしているのは胸を張っていい。

北電の調べによると、三月末現在で契約件数は五千八百五十八件、面積にして三十万六千平方㍍に達している。また、屋根の雪をとかすルーフヒーティングは九百四十八件。省エネルギー政策や電力節減の呼びかけで、今年の敷設は多少ペースが落ちているが、長期的にみた場合、ロードヒーティングの快適さは、北国の冬の生活には、欠かすことのできない要素といえる。

## 緑に囲まれた工場公園

わが国でもなにかと話題になる言葉。ことに苫小牧東部工業基地はわが国では初めての大がかりなインダストリアル・パークの登場となるといわれる。つまり、大気汚染、海洋・河川の汚染の元凶とみられがちな工場が公害をまき散らさぬことはもとより、緑あふれる公園のようになっているというわけだ。生産第一主義だったわが国は、この考えにはほど遠かったが、近年の企業の公害反対の声から急速に理想的な工場立地が叫ばれるようになった。

そのお手本は、さすがに先進工業国にはもう登場している。カナダのバンクーバー市の郊外にあるバーナビー市は、初めからその考えのもとに造られた工業団地だけに、わが国ではみられない緑スペースの広さ、ゆったりした幹線道路、適当な区域での住宅団地の配置が行われている。

公害をまき散らさぬ食料品、紙製品、倉庫などの軽工業を中心にした団地構成なのに、そのグリーンスペースは全体の七〇%にも及び、どの工場も緑の中に息づいている。

カナダの大工業都市、トロントの郊外にあるスカロボロフもニュー工業団地だけに緑につつまれた団地。四十七年秋、この団地に新工場を設けたカナディアン・モーターズの場合は、グリーンスペースが八〇%を超えている。緑のじゅうたんの上に、ちょこんとしょうしゃな工場が建ちならぶ光景は工場公園と呼ぶにふさわしいながめ。これらは、いずれもニュータウンだから出来ることで、わが国の新しい工業団地もこれら先輩団地の実例を見習おうと意欲的だ。

## 理想的な工業都市プラン

この面ではソ連の新都市計画もきわだって明確に理想的プランを掲げている。新都市の工業地区には公害をまき散らさない軽工業以外は全部衛生保護地帯を設けることを義務づけている。軽工業でも工業地区と住居地区の間は必ず五百㍍から一㌔の保護地帯をつくることになっている。

また、工業地区内には休息地帯が必ず設けられ、公園、貯水池、公共センターなどが置かれる。しかも、工場の前庭、各施設の周り、幹線道路には植樹が義務づけられている。

この理想的な新都市はソ連シベリアで続々つくられており、厳寒、流刑の地のイメージを一変しようとしている。

「広さが違う」とはいうもののその考え方は、北海道にもどうしても必要なものである。

# 冬でも人が集まる空間を

京大助教授
上田篤



都市の起源というのか、都市形成は確かに南から始まったが、中世以後に遊牧から集住化と進んで「北」に都市が出来てからは都市問題の解決の仕方でも「南」より「北」の方がすぐれていると思うんです。つまり「南」の都市は〝教会広場〟を中心に都市を発展させたけれど、宗教的な因習から抜け切れない。それに対して「北」は人々の生活を細かくしばるより、もっと政治的に処理して共同化を発展させたのです。元来、北の人種の方が組織力があるといわれていますが、厳しい自然と闘う中で〝個人〟を超えた理想の都市づくりを目ざしてきたといえるのじゃないですか。そうした都市の形成、発展の歴史を日本に移してみると、本州がヨーロッパであるのに対して、北海道はアメリカです。都市の住み良さ、人間関係の気持良さ、因習のない自由――私は全国いろんなところを歩きますが、北海道は人間的にさっぱりしたところという印象が非常に強い。

環境会議を含めた北方圏構想を最初に持ち出したときも「素晴らしいことですねえ。北海道は実験性のあるところだから何をやってもいい。うらやましいです」と身を乗り出す。

**☆ひょっとこ建築☆**

ヨーロッパと北海道を比べてどうみても北海道が貧しいのは住宅です。例えば札幌にしても、地下鉄、デパート、ロードヒーティング――何を比べてもヨーロッパの都市に見劣りはしない。しかし、住宅の壁ひとつとっても極端に薄っぺら、暖房は相変わらず、家を暖房するのではなく、空気をあたためている。建物に金をかけなさすぎる。屋根の角度はメチャメチャだし、色彩も自由すぎる。私はバラバラ屋根の北海道の家並みを〝ひょっとこ建築〟と呼んでいる。肝心のイニシアル・コストに金を惜しんで、ロスの多いランニング・コストに金をかけるというのはヨーロッパとまるで逆です。それから北欧などと比べて、北海道は冬における戸外生活を知らなさすぎる。モスクワでさえ、オペラハウスが完全に大衆のものになっている。冬をいかに過ごすか、これはまちづくりの問題としてとらえていかなければならない。

〝ひょっとこ建築〟といったところで申し訳なさそうに首をすぼめたが、エッセイストクラブ賞を受賞した「日本のすまい」で自由な空間利用をうたった著者には自由すぎるアクロバット建築は気がかりらしい。暖房にしても「技術的には面、床暖房はいくらでも可能。問題は金」という建築家を含めた道産子たちの発想を本末転倒ときめつけた。

**☆世　論☆**

これからの北海道にとって必要なことはまず人口をふやさないこと、人びとのふれあいの広場をどんどんつくることだと思う。札幌は人口空間と割り切っていいが、郊外にまでスプロールしてはダメ。南で生まれた巨大都市や無秩序な発展をいかに抑止するか。また広場というのは石骨やアスファルトのスペースではなく、例えば買物公園のようなものが広場であるということです。冬でも人々が集まる空間をいろいろなパターンで探し求めることです。

人口抑制、極めて政治的なことのようだが、行政以上に世論を強調した。有識者を含め、市民自体がもっと発言する――そういう意味では道民のなかからオピニオン・リーダーがぞくぞく誕生することを「本当に期待しているんです」と結んだ。



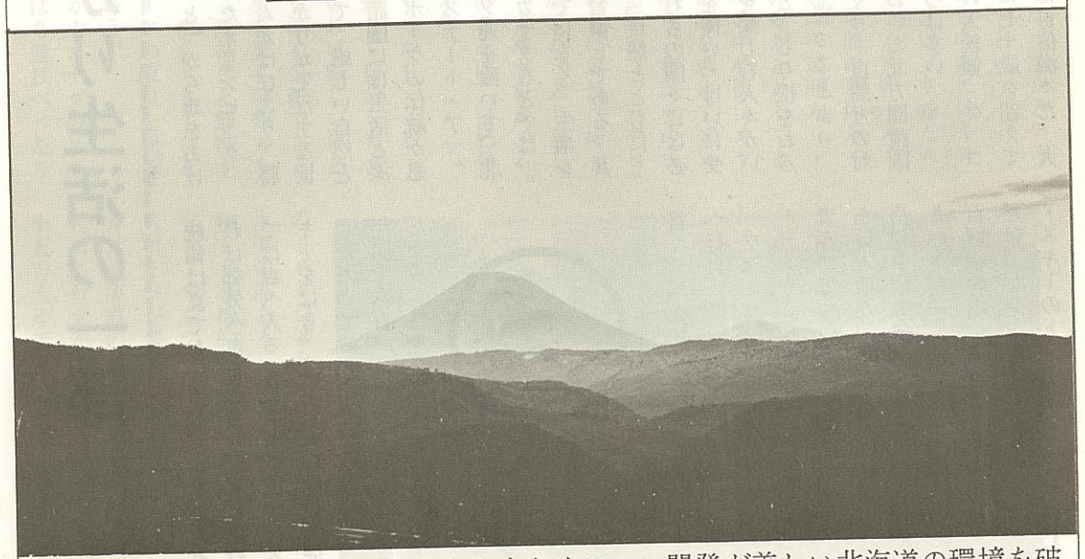
冷やが最高!!

燗と冷や、この2つだけで清酒は2千年も愛されてきましたが、
日本風、西洋風のいりまじった今日の生活では、習慣にとらわれず
自由に楽しまれるようになりました。
《生一本北の誉》は酒蔵の生酒をそのまま
ビン詰にした濃い清酒です。
燗をせずにおもいっきり冷たくして
お飲みください。天然醸造の風味とコクが、
いちばんよくわかります。




天然醸造
生KI本
IPPON
1級500mℓ
北の誉酒造株式会社

# 美しい北海道
# 豊かな日々のくらし



道民にうるおいのある生活をもたらすために…。開発が美しい北海道の環境を破壊したり、公害をひきおこしてはなりません。ＥＣＥＣ（エセック）は新しい地域環境創造のためにお役に立ちたいと願っております。

ECEC エセック

**環境保全に徹した地域開発の計画立案**

— 高福祉社会をめざすECEC（エセック）の業務 —

- 公害未然防止システムの開発
- 産業基盤整備システムの開発
- 福祉社会建設にかかわるシステムの開発
- 北方圏社会建設にかかわるシステムの開発

㈱北海道環境保全エンジニアリングセンター
札幌市中央区大通西３丁目７番地　拓銀本店ビル５階
☎(011)231—3053




## くらしに活かす北国の風土

# 居間中心に北海道らしさ




道立寒地建築研究所
第一研究部長
上野　栄


**◇南方系住居◇**

北海道の住宅は、基本的には南方系といえますね。本州の延長線上にあるわけです。そのことは、戦前の北海道の住宅を考えると一番よく分かる。農村にいくと、それぞれ本州の出身地の家が建っていて、北海道の中に鳥取や新潟や石川があった。家の様式というものは、国民性や生活習慣によって決まってきますからね。だから、本州の人と同じ考え方をし、生活形態を変えなければ、家のつくりも似たものになるのは当然です。それともうひとつ、歴史的にみて、北海道には一旗組が多く、永住する気持の人が少なかったので、家も仮住まいと考える風潮が強かった。これが永い間悪い伝統として残っていたと思います。

しかし、戦後の質的向上は目ざましく、急速に先進国に近づいている。所得水準が上がったこともあるでしょうが、二世、三世の時代になり、永住の地だという意識が強まったのも見逃せない要素ですね。

建築の中でも、熱や湿気など環境学が専門。札幌オリンピックの際には、選手村の建設にタッチ、四十二年夏、ヨーロッパを中心にオリンピック施設を視察した。

**◇北方圏住宅◇**

住宅の様式を決める他の大きな要素として〝機能〟がある。この面からみても、確かに北方諸国の住宅に共通点はあるんです。具体的に言うと、雪と寒さに対する対応策ですが、北欧に三角屋根の住宅が多いのも雪対策だと思いますね。一般的に言って屋根の形が単純にできているし、熱を逃さないよう間取りがコンパクトだという共通点があります。窓なんかには、特徴的に現れていますね。向こうは意外に窓が大きい。ところが開くのはほんの一部、それも押戸で随分がん丈に出来ている。光はふんだんに取り入れるが、内の熱は逃さないという考え方がよく出ていると思うんです。ところが、北海道では引戸が大半で高温多湿からくる本州の開放的な住宅の延長です。そういう意味では、北海道の住宅は温暖圏と、北方圏のちょうど中間、悪く言えば中途半端なところがありますね。

**◇明日の住宅◇**

それでも北海道は、北海道なりにひとつのパターン、いわゆる居間中心の住宅をつくり上げた。これは、ひとつのストーブで、家全体を暖めるという発想から出たものです。現在、北海道で建築している住宅の八〇％は、この変形だと考えていいでしょう。このパターンが完成するまでにやはり十年はかかったんじゃないですか。しかし、これも将来当然変わっていく。ただ、あくまでも生活様式や経済性と密接な関連を持ちながら変化するのであって、これらを無視していっきょに〝理想的な青写真〟を提供しても実際にはあまり意味がない。例えば断熱材にしても、ソ連やカナダなどの寒冷地では黙っていてもみんながたっぷり入れる。寒さがあまりにも厳しいため入れざるを得ないわけです。ところが、北海道は、それほど寒さがひどくなく、何とかしのげるものだから、常識がなかなか普及しない。技術的にはもうあまり外国に学ぶことはないんです。あとは、いかに研究の成果を普及させるかだけですね。

現在、地域暖房と都市計画に取り組んでいる。最近、マンション問題が目立つそうだ。

# すっかり生活の一部

## スポーツ

## 競技よりも自然と対話

「参加すること」から旗をあげることに変質したオリンピック。コマーシャリズムがはびこり、勝つための手段ばかりが先行する世界のスポーツ界で、厳しい自然とたたかう北方圏諸国には生活と深く結びついたスポーツの伝統が息づいている。〝ステート・アマ〟がまかりとおるソ連を除いて、北欧やアラスカ、カナダなどでは、スポーツは競技ではなく、生活を楽しむための〝習慣〟である。共通してあるのは「自然とともに――」の発想。それらの国々には必ず、自然の恵みを体いっぱいに受けて、スポーツを楽しむ人々がいる。生活の中にどっしり根をおろしたスポーツ。勝つことより、健康な体力をつくり、自然との対話にウエートをおいた北方圏諸国から、学ぶところは多い。

フィンランドの大統領、ケッコネン氏は、すでに七十歳を超えているが、体力には自信満々だ。大統領は夏でも冬でも、ヒマさえあれば郊外へ車を走らせ、車を止めては森へ入る。冬は車に積んだスキーをはき、二、三人の随員を従えただけで森の中を駆けめぐる。年間千六百キロはスキーで走破する。だから、ヘルシンキの市民はこう言う。「大統領に会いたければ森へ行け」。

フィンランドに限らず、スウェーデンやノルウェーでも森は単に資源ではない。何ものにもかえがたい友達だ。それらの国には恵庭岳や手稲山のようなスケールの大きいゲレンデはない。あるのは数百メートル級の山にある自然のスロープだけ。ゲレンデはあくまでツアー・スキーのトレーニングにすぎず、スキーといえば〝歩くスキー〟である。フィンランドはジャンプと距離競技の発祥地。競技自体も世界の最高レベルにある。

北欧では三月に行われるホルメンコーレン大会（ノルウェー）とバーサー・ロペット大会（フィンランド）ラハチスキー大会（同）が三大スキー祭りとして人気を集めている。しかし、ホルメンコーレンのジャンプを除くと、それはあくまで国民のお祭りであって競技自体ではない。例えばバーサー・ロペット大会には、毎年八千人が申し込んで何と六千人が出場する。当然、オリンピック選手も出るが、名もなき地方選手、中、高校生からオールドボーイも出る。そして四年前の大会には盲人の年寄りも走った。

日本のように一分おきにスタート、なんてことはしない。六千人が一度にどっと出る。それほどコースは広い。ヘルシンキの市内だけで歩いたり走ったりできるコースは合計二百キロにも達し、各コースが五十キロ、三十キロ、十五キロなどときちんとセットされている。市民は好きなときにコースに出て自分のタイムを記録できる。コースのなかには夜間照明つきの標識があり、必ずヒュッテが何カ所かに設けられている。スキーが折れてもその場で修理できる用具と、危難よけの〝プーマ〟という万能ナイフを腰に、ヒュッテからヒュッテへ、若ものも年寄りもごく気軽に雪原に飛び出して行く。

冬は木陰からトナカイの群れが飛び出してくる。いつのまにかトナカイとアベックで雪原を走っている――「そんなことがたびたびである」とフィンランド在住時代の思い出を語るのは今村源吉道教育大旭川分校教授だ。冬はツアー・スキー、夏は地図と磁石を手に方向を考えながら、定まった時間にゴールインするオリエンテーリング。それがフィンランドやノルウェーの最も一般的なスポーツだ





が、今村さんは「スポーツというより生活そのもの」という。

夏から秋にかけての森にはキノコや木の実がいっぱい。主婦たちはそれをつんでジャムを作ったり、総菜を作る。一カ月間の夏休みや三月のスキー休暇（一週間から十日間はだれでも休みがとれる）となるとヘンシンキの中心街はカラッポになり、森と湖を求めて郊外に出る。汗が出たら、夏はそのまま湖にドブン、冬はヒュッテやセカンドハウス代わりに郊外に持っているサウナ小屋でたっぷり蒸して、湖の氷を割って冷水をかぶる。そんな生活を今村さんは「自己発見の文化」と考える。

自然にどっぷりつかり、スポーツという運動を通して自分を考える。自然が厳しければ厳しいほど自分というものを深く分析できる。とくに戦禍の歴史を重く背負ったフィンランドは「素朴さと野性がマッチした国民、歩くスキーひとつとってもスポーツの原点を見る思いがする」という。

一方、アラスカやカナダのスポーツ事情も、やはり競技べったりのイメージはない。こちらは生活水準の高さと、途方もなく広い面積とが有機的に結びついた大型レジャーやレクリエーションとしてスポーツが普及している。アラスカは北海道の約二十倍の広い土地、人口はわずか三十万人。そのうち十五万人がアンカレジに集中している。北極限に近い自然のハンディはいうまでもないが、春の訪れから短い期間のスポーツは、あくまで自分を中心にしたレクリエーションが主で、サッカー、テニス、野球場などすべて全天候用の施設を利用して、自由な時間に楽しみながら体力づくりに専念している。



なごやかな北海道とソ連極東スポーツ大会

また大自然を相手の狩猟や釣りは盛んだが、家族そろって飛行機やキャンピング・カーを利用して、どんな遠方にも気軽に出かける。昨年、カナダ・アラスカ経済文化視察団の団員として訪れた藤沢伸光道体協理事によると、ゲームを中心としたスポーツはあまり考えられず、わずかにフェアバンクスの大学にアイスホッケー・チームがあるがちまり強くない。唯一のスキー場としてアンカレジから約六十キロにアリエスカ・スキー場がある。リフト二基とロッジがあり、六月いっぱい、滑れる。

いずれにしても、生活水準が高いためか、恵まれた施設をゆうゆう利用してスポーツを楽しんでいる。勝とうが負けようが技術的なことは二の次――というのが藤沢さんの印象だ。

カナダは各州にアマチュアスポーツ連合があり、州政府から補助金を受けて地方のスポーツ振興に当たっているが、日本体協のような中央集権的な機構と違って独自性がある。ブリティッシュ・コロンビア州ではアイスホッケーやアメリカンフットボールが盛んだが、その他のスポーツはレクリエーションとして行われており、勝負に重点をおかず、年一回行われるスポーツ祭に備えた体力づくりの意味あいが強い。アルバータ州でも大自然を利用してのレジャー、レクリエーションが非常に盛んで、ゲームにこだわらず自分の趣味に

応じて、伸び伸びと楽しむといった空気が強い。

ソ連、極東のスポーツについては情報が少ないが、昨年、道とソ連の極東スポーツ交流団の副団長としてハバロフスクを訪れた阿部文男さん（前代議士）は、アイスホッケー以上に普及している面白いゲームを見聞してきた。

〝バンデー〟と呼ばれるゲームで野外の競技場はサッカーと同じ面積にとったアイスリンク。ステイックもアイスホッケーのスティックによく似ているが球をたたくところが両面使えるのが特色。スピードスケートのとがった先端を切って丸みをつけたスケートをはき、スティックで直径五〇㌢の硬質ゴム球を相手ゴールに入れるゲーム。各都市の対抗や学校対抗などがあるが、阿部さんが見た試合では氷点下三〇度の酷寒のさ中、スタンドは一万人の観衆で熱気を呼び、競技もボディーチェックが許されないためアイスホッケーのような激しさはないが、スピーディーで親しみやすかったという。

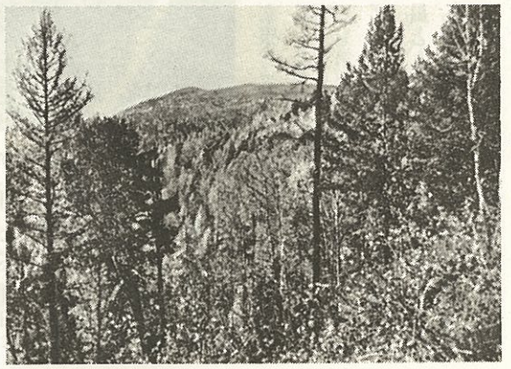
〝バンデー〟は女子の選手権もあり、極東地方の都市ではいたるところにインドア競技場がある。

「モスクワ・スポーツ紙」のハバロフスク駐在員に「このゲームを北海道で普及して、ぜひ親善試合をやろう」と持ちかけられたため、現在、道教育大の原崎正教授らが普及方法を研究している。

植物

## 死者蘇る？薬用植物

最近の漢方薬ブームで、朝鮮ニンジンなどがにわかに珍重されているが、資源の宝庫、シベリアは隠れた薬用植物のメッカである。シベリアと極東の面積は千百三十万平方㌔で、この広大な地域の約四分の三はタイガ（密林）またはツンドラ（凍土）地帯。人間のほとんど住めない激烈な寒さの中で、多くの薬効を秘めた植物が自生している。



うっそうと茂るシベリアのタイガ

中部シベリアのトムスクやノボシビルスクなどでは薬用植物栽培園が作られ、植物学者、薬学者たちが研究と取り組んでいるが、これまでの研究によると、シベリア全域には千種以上の薬用植物があるが、このうち研究の対象になったのはまだ二百種ほどにすぎない。最近、トゥーワ地方で四十五種の新しい植物が発見されたが、そのうち数種は、いままでの科学では未知の珍種だったという。

また、ウクライナやモルダビアの森林ステップ、ドン川やボルガ川沿岸の低地に自生しているある種のレンゲのエキスが、慢性腎臓炎や高血圧にすばらしい薬効が認められたという話もある。

朝鮮ニンジンはソ連でも〝生命の根〟〝魔法の根〟として珍重されているが、野生ニンジン以上にソ連が力を入れているのは人工栽培の朝鮮ニンジンだ。沿海地方のアマチンスキーには「朝鮮ニンジン・ソフホーズ（国営農場）」が設けられ、モスクワやカフカスにも国営の栽培園がつくられている。

このほか、ソ連には〝黄金の根〟と呼ばれる〝幻の植物〟がある。死者をよみがえらせるという伝説の植物だが、第二次大戦後、アルタイ山系やサマン、カムチャツカなどで、黄金色の枝と葉を持つ多年生のベンケイソウ科の植物、明るい黄色の根、バラ油のような芳香を発する〝黄金の根〟がぞくぞく発見された。そのエキスは十分に解明されてはいないが、朝鮮ニンジンよりはるかにすぐれた薬効が立証され、話題を呼んでいる。

〝北方圏の植物〟について北大助教授の辻井達一さんは、まず針葉樹林帯とツンドラを重要なポイントとしてあげている。

スイスや北欧の子供たちに木の絵を描かせると、ほとんど例外なく、三角にとがった針葉樹を描く。日本の子供たちとなると、ほとんどまるい広葉樹を思わせる絵だ。北海道の針葉樹林は、かつて広く豊かであったが、開発が進むにつれて急速に失われていき、子供たちの絵から遠ざかりつつある「針葉樹林伐採のあとにきたのは著しい景観の温暖化であった」と指摘する。

ツンドラの特徴は底土が深いところで二百㍍にわたって永久に凍結していることで、樹木は生えず広ばくとした荒地だが、背の低い低木やコケ類、地衣類、ごく限られたイネ科草本などが生え、トナカイなどの食料になっている。





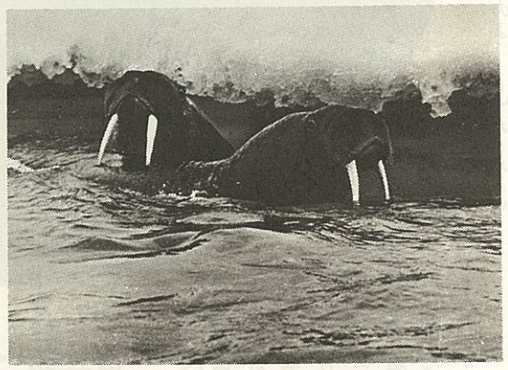
動物

## 無数の珍獣や海獣

「北海道シベリア博」の会場でバイカル湖付近には千八百種もの動植物があり、その四分の三は珍種――と紹介されていた。五万年前の氷河時代から人類れい明期まで、自然が原始のまま残されたシベリア。現代でも雪上車と並んで交通には欠かせないトナカイ、海象という奇妙な名前のセイウチ、それにヤマネコ、イノシシ、リスに似たコロノック、ビシッツイ、シカなどが無数に生息している。

なかでも興味深い動物はセイウチ。もともと陸上の食肉動物だったが、現在はゾウのキバに似た二本のキバで海底を掘って貝のムキ身を食べる。北アメリカで発見された先祖の骨格はオットセイに近かったという。動物園で飼われるセイウチは非常に利口で人なつっこいが、シベリアではアザラシをねらったり、小舟を襲って人間に危害を与えるどう猛なのが多い。

シベリアと並んでアラスカも珍しい野生動物の宝庫である。ムースはおそろしく長く大きなツノを持つシカ族の王者で、アラスカ半島やキナイ半島付近に多く見られ、ハンターには人気がある。

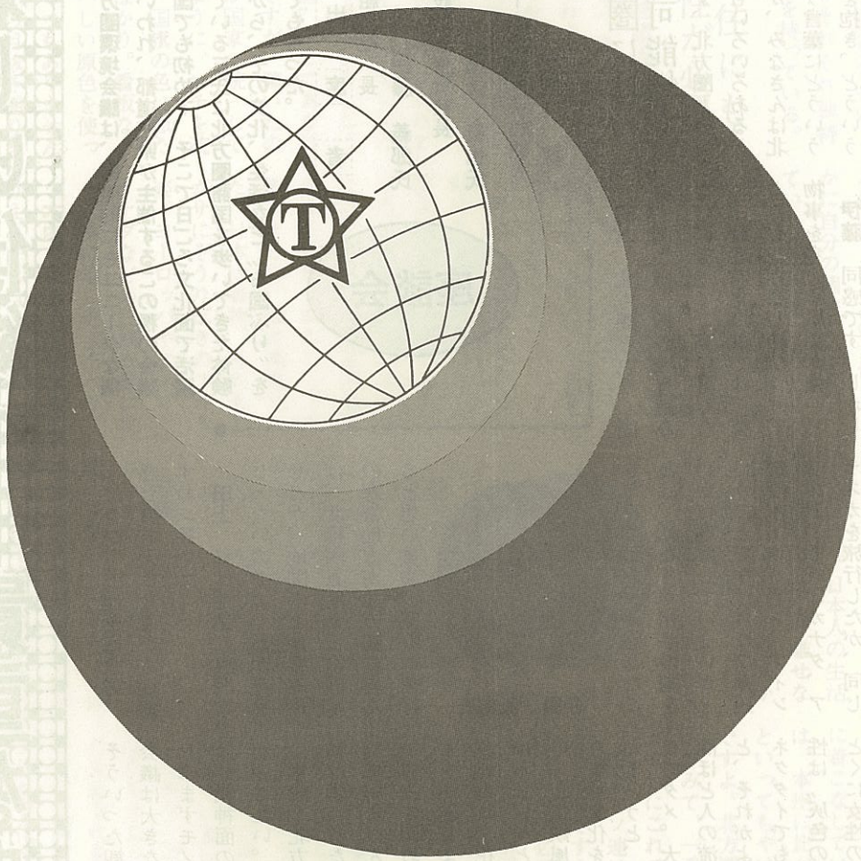


怪獣？セイウチ

クマはアラスカに十三種類もいる。もっとも代表的なのはブラウン・ベア（かっ色グマ）で、巨体と凶暴性で現地人に恐れられている。よく知られた白クマは数は多いが、古くから経験を積んだエスキモー以外には容易に射留められない。このほか、ベーリング海峡以北の北極海には重量級のセイウチをはじめオットセイ、アザラシ、ラッコ、氷河山岳地帯でしばしば見られるマウンテン・ゴート（ヤギの一種）ビッグホーン（ロッキーヒツジ）など実に豊富だ。

カナダには二十七の国立公園があるが、純然たる自然公園と、鳥獣の特別保護地区と抱き合わせになっているケースの二通りに分けられる。バッファロー（野牛）アンテロープ（カモシカ）ムースなどの野生獣を滅亡から守り、雷鳥やペリカン、カナダカモのような鳥類の繁殖を図ろうという趣旨の国立公園にはウッド・バッファロー野獣公園のように九州全体の面積をもつ大自然境もある。

私たちはここから世界をみつめます



道民と共に歩む
北海タイムス

札幌本社 札幌市中央区南1条西10丁目 T(代)231-0131
旭川本社 旭川市1条8丁目 T(代)23-4171
東京支社 東京都中央区銀座5丁目10番2号銀座中央ビル7階 T572-1101～6
大阪支社 大阪市西区江戸堀北通1丁目岡田ビル4階 T 443-4221



## くらしに活か北国の風土

# 運動の中で思考する北欧人



道教育大旭川分校教授
今村　源吉

◇アウリンコだ！◇

札幌オリンピックのとき、距離競技のコースのなかにフィンランド・チームの女性タイピストがアルミニウムの板を顔に向けていました。なぜそんなことを？と聞くと、太陽がほしいからと答えるんです。彼らは盛んに「アウリンコ（太陽）だ！」と叫んでいましたよ。北欧のスポーツは太陽を求めること。それにつきます。

日本では、何かというと施設がない、時間がないだが、北欧各国に日本以上の立派な施設があるかというとそうでもないんです。確かに森があり湖がある。ヘルシンキの市民の大半は郊外にセカンドハウスを持っている。だが、それは原木を組み立てた物置小屋のようなものだ。電気さえない。あるのは岩を囲ったサウナだけ。カマドを炊いて岩を熱し、蒸製みたいに体をいぶして、汗を全部はき出したら、すぐに外へ飛び出して森を走る。真夜中にでも思いたったらどんどん走るんだ。これ以上健康なことはないと思ったネェ。

七年前、フィンランドに留学。〝冬の生活におけるスキーの形態〟の研究テーマをさげて半年間滞在。当時の交流が縁で札幌オリンピックのときフィンランド・チームのアタッシェを務め、大会後再びフィンランドに招かれた。日本でも数少ないフィンランド通である。

北欧で学んだことの第一は「スポーツの原点は、やっぱり自然を相手にすること」だという。

◇「考えられるから」◇

フィンランドの学校には日本のようなクラブ活動はない。そのかわり、まちには大人も子供も一緒の各種のクラブがある。たまにクラブ対抗試合があるが、日本的な負けられません勝つまではの悲壮感は全くありませんよ。ベルコキの体育研究所（日本でいう青年の家）を訪れたとき、若ものたちのリーダーが集まってその日のスケジュールを組み、全く自主的に運営しているのをみて感銘を受けた。村ごとにあるスキー大会には、老人も婦人も背中に村の名前をつけて走る。なぜそんなにまでしてスキーで走るのかと聞いたとき、返ってきた答えはたいてい「静かだ」というのと「一人で考えられるから」だったという。

自然から学ぶことの価値を教えられた今村さんはいま、旭川市で歩くスキーの普及に取り組んでいる。伊の沢山中に作ったスキー科学研究所を基地に、年会費三千円でクラブを作り、冬は毎日躍日、歩くスキーで山をかけ回る。

◇歩くスキーは「鳥」◇

一昨年までワックスを選べなかった人たちが、その日の雪質、温度に合わせて自分でワックスをマッチさせることができるようになった。スキーという運動の中に思考が加わって私は歩くスキーとは鳥である、といっているんです。冒険と創造――、夏は行けない未知の世界へ、スキーをはいてどんどん進める。

受験地獄をスポーツにまで持ち込んだ勝つためのクラブ活動、競技や技術優先のアマチュアスポーツ。そんなことだから日本のスポーツは生活と離れていくんです。

今村さんはなんとかしてフィンランドの自然や生活と結びついたスポーツを普及させたいと思い悩んでいる。

# 新しい伝統へ
# 貴重な自然活かし

**北方圏環境会議は、国際的にもユニークな催しといわれ、都道府県が主催するこの種の会議は全国でも初めて。そこで日ごろ文化面で活躍されている三氏に北方圏諸国を歩いてきた体験などから、その文化、生活など〝お国ぶり〟を語ってもらった。**

出席者

伊藤組社長　伊藤　義郎氏
田上建築設計事務所社長　田上　義也氏
エルムユーカラ織民芸館館長　木内　綾さん

座談会

## 北方圏には希望と可能性が

――まず、北方圏という定義づけもいろいろあると思いますが、みなさんは北方圏という言葉にどういうイメージを抱き、どういう考え方を持っておられますか。

**田上**　北方圏という〝固有名詞〟は一種の流行語みたいになってしまいましたね。最近の北海道では、なんでも北方圏と結びつけて物事を考える風潮が強い。

**伊藤**　同感です。しかし、同じはやりコトバでも、石油ショックを巻き起こした〝アラブ〟とは受取り方、感じ方で大きな差がありますね（笑い）。

**田上**　私は地誌の専門家じゃないのでよくわかりませんが、地図の上からみれば、北緯四五度から六五度の寒帯地方が北方圏に当たると思います。実際に旅行してみてしみじみ感じたことは、私たちが相手の国をいかに理解していないかということです。スラブ系民族のスウェーデン、フィンランド、それにカナダ、アラスカを旅行したが、同じカナダでも地域によって人の対応の仕方がまるで違う。そういった観点から、環境マッチさせて楽しく着る工会議は大きな意義があるが、夫が必要ですね。衣食住すべて同じです。


伊藤　義郎氏

――精神面、ファッションの面からのご指摘ですが、より精神面の交流の必要性を説きたい。

**木内**　北方圏といっても、アラスカに十年近いつながりを持っている伊藤さんはいていませんが、外国に行ってみて初めて北海道のよさを認識しました。空は澄感覚的に何かしら偏った地域のような感じがしますね。北海道もその中に含まれるわけですが、北海道に生まれ育った私には〝これから――〟といったムード、希望がかきたてられます。現実にカナダ、アラスカ、シと、それがよくわかります。ベリア、北欧などはこれから発展する地域なわけですから、将来はこれら北方圏諸国との結びつきはかなり強まると思います。しかし〝これからの国〟といって





も、衣食住関係でさびれているわけでは決してない。どこの国もそれぞれ独特の先進文化を持っている。

## 衣食住にも独創性が必要

――北方圏諸国との交流の〝あり方〟論をお話しいただいたわけですが、木内さんからお話のありました衣食住関係に話を進めたいと思います。

**木内**　北方圏には入りませんが、昨年、フランスに四十日余り滞在しました。〝自由な国〟としてあまりにも有名ですが、驚いたのは車の色が国家で統一しているかのように、マチを流れる車は、国旗の色に似たブルー系ばかり。看板などもケバケバしい原色を使ったものは一つもありません。また、マチの目抜き通りを歩いても流行のスタイルをした女性は本当に一人か二人。服装は実にマチマチ。一人々々が違っています。これはフランスの女性がいかに自分の個性を大切にしているかを物語っていると思うんです。ところが日本人はパンタロンが流行すればネコもシャクシもすぐ飛びつく。自分の個性にマッチする、しないはおかまいなしです（笑い）。あまり感心できません。

**田上**　本当にそうですね。私はライオンズクラブの国際会議でラスベガス（米）に行ったことがありますが、このときちょうど世界各国参加の民族衣装パレードがありました。確か真夏でした。日本は着物。それも日ガサにぞうりばきのユカタ姿。ヨーロッパやアメリカ、カナダなどの民族衣装に比べ、実に涼しそうだった。

**木内**　日本の着物文化のゆえんでしょうね。

**田上**　そう、洋服は人体に合わせて機能的、合理的につくられます。ところが、着物は一枚の布で〝太った人〟〝やせた人〟どちらもきらわない。日本人の生活から着物文化は切り離せないですね。そういう意味から、最近は独創性やローカリティーが無視されている。


木内　綾さん

## 生活と密着した毛皮利用

――確かに、ユカタは北海道の真夏のムシムシした風土に合っていますね。ところで、毛皮の方はどうでしょう。

**伊藤**　毛皮文化といいましょうか、それはもう北方圏の象徴の一つです。北欧のフィンランドからソ連にかけては毛皮のはんらんです。フィンランドの首都・ヘルシンキは、冬の月平均気温が氷点下二六度前後という厳しいものですが、子供も女性もそれは実に見事に着こなしている。北海道は、本州に比べいくら寒いといってもやはり南方民族ですよ。北方圏をかけめぐってみて、一番感じたことはまさにこれです。

**田上**　ソ連は帽子のはてまで毛皮ですよ。新しい伝統の創造が必要ですね。ところで、北海道の気候風土は緯度の点からカナダと一番よく似ている。カナダはヨーロッパ人の混血が多く、しかも適応性を持っている。いろんなものを吸収しようという努力は大変なもの。その点、北海道も本州からの移民が混じって〝道産子〟が生まれた。適応性もかなり強い。北方圏の先進文化をどしどし吸収して、北海道の風土にマッチした文化を形成していく必要性を痛感します。

**伊藤**　私たちの世代がそのレールを敷き、これから育つ子供たちに期待を寄せなければなりませんね。

**木内**　その通りです。私は自分の仕事を通して北海道を考えることは、土着的な郷土愛というか、個性に合わせた郷土愛というか、そういうものが少ないと思います。それがはぐくまれたときこそ、北海道の気候風土に合った独特の文化が生まれるような気がします。

**田上**　私は人間の価値はカルチャー、いわば教養だという気がします。たとえばフランスですが、クツは破れるまではく、ほころびはつくろう、メトロも人が降りなきゃドアは開かない。電力を節約するためですが決してケチじゃない。ムダなことに金を使わず、じっと金をためて、夏になるとパーッとレジャーに行く。何週間も避暑地にいてふんだんに金を使う。そこにフランス人の教養と個性が認

められるんです。カナダにしても車窓からゴミを捨てると十五万円もの罰金をとられる。都市計画全体にきちんとしたルールがありますよ。

## 長い冬をかかえ食物に工夫

――食べものについてはいかがでしょう。

**伊藤** それほど特徴的なものはないのじゃないでしょうか。まあローカリティーのあるところとか、各国の生活の深いところに入り込んだ経験もありませんので、よくは知りませんが、ホテルなどの食事はとおり一遍のものが多いようです。冬にスウェーデンを訪れたときには、何日も塩づけの魚ばかり食べさせられて閉口したことがあります。

**田上** 確かに塩蔵は多いですね。見た目には食欲はわきませんが、しかし食べると結構いけますよ。まあ、長い冬をかかえ、食べる工夫をどうやっているか。今ておりますね。

**田上** そう。工場を造っても周辺には必ず盛り土をして緑を厚く植え込む。工ころも紹介してほしい。

**木内** 文明の及んでいない地域に寒さを克服する食べ物の名残があると思う。シベリアの寒地食など興味がありますね。

**伊藤** うらやましい限りですが、やはり経済力や土地の広さ、自然保護の思想的なバックグラウンドがあるからそれが出来る。

## 庭に必ず芝生ヘイは作らず

――次に住まいの工夫。これはもう学ぶべき点がたくさんあると思いますが。

**田上** 住まいと都市計画は切り離せない問題ですが、その相関性というか、調和というか、実によく均整がとれている。たとえばカナダ。何十という民族が入り込んでいる混合体で、それぞれの民族が伝統を持ち込んでいるのに、違和感がない。古典的なヨーロッパの中に近代を造形した、そんな感じで。

**木内** 工場と住宅街をきちんと分けてマチ造りをしたのも外的条件のせいばかりでない。美意識というか、精神的な文化とかかわりあいが深いと思う。市民の住宅だって、北海道のようなアクロバット的な家並みはみられない。三角屋根あり、片流れあり、千差万別の北海道の家は日本でももっともアクロバット的だ(笑い)。

――それほどローンが徹底しているのですか。

**田上** それはもう、ガチガチに徹底してますね。こんな話までありますよ。日本の領事館が職員の住宅か何かを建てるとき、無造作にヘイを作ろうとしたら、市役所からこっぴどくおこられた。なぜ隔離するのかとね(笑い)。



田上　義也氏

## 欠ける日本の対話マナー

**伊藤** 日本の住宅づくりの場合は、どうしても隣人関係がからむ。隣とのコミ抵の家にはヘイや門がない。家の前は敷地の半分以上を使ってローンがある。そのローンが隣家との境界となる。ローンの手入れは実に行き届いている。休日の日課は、まずローンの手入れだし、会社から帰宅するなり、ご主人は水を差したり、芝を刈ったり。お互いが競争しあうようにローンを美しくする。

**田上** そうそう、必ずしローンの広さ、これはもう島国、ニッポンの比ではありません。郊外にいくと、道路がえているところがヨーロッパいですから。でも、スを存分に使いこなしるのは見事ですね。

**木内** そうですね。自然





ユニケーションがなければ調和はとれない。極端に言えば花ひとつ植えられないのではないか。

**田上** そういう意味では、北海道にはコミュニケーション・マナーがまだ育っていないね。

――機能的にはどうですか。最近、北欧のプレハブ建築が輸入されているようですが。

**伊藤** どんどん入ってきてますね。世界的にみますと、南方へ行くほど住宅は簡便になる。もちろん気候と密接な関係があり、寒地になればなるほど住まいの工夫が必要ですから。北欧は何千年ものヨーロッパ建築の伝統のうえに新しい機能を組み入れる。機能と文化がここでもハーモニーを保っているという感じがします。

**田上** リビングとかハウジングという言葉が一般化したように、日本の建築技術は飛躍的に進歩している。技術的にいえば北欧にだって負けないでしょう。ただ、住むものの意識となると、変わりばえしない。今のアパートやマンション、確かに機能的になってきた。しかしね、便利さの中だけでは創造性は育たない。

**木内** 冷蔵庫や魔法ビンのような家の考え方ではダメということでしょうか。とにかくカナダは十分に生活をエンジョイしながら美しい国を造りあげ、豊かな生活を求めて前進している。多くの文化、伝統が混合しながら、国として平和であるといったところを見直すべきでしょう。

――北方圏との交流を今後、どう進めねばならないか。また環境会議に対するみなさんの提言といったものを。

**伊藤** 性急にどうこうせよという問題じゃないと思う。経済にしても、それぞれ複雑な面がからみ合っているのだから。しかし、交流を深めていかなければならないという認識は大切だ。で、しかも行政色がかなり強いと思うが、参加国と迎える北海道はすべてをさらけ出してほしい。経済的にもベールをぬいで密度の濃い交流になるよう配慮すべきだ。市民の北方圏諸国に対する理解が会議をどう盛り上げるかですね。会議の内と外で市民を含めて血の通ったディスカッションが行われたら素晴らしい。生活環境展にしても、ただアイヌとエスキモーから文化を語るのではなく、それぞれ原点にさかのぼって広く紹介してほしい。

――北海道側が誇っていいものもあるでしょう。各州の知事さんたちが感心して帰るような――。

**伊藤** それはもう、大いにあるでしょう。例えば、木内さんのユーカラ織。北海道の風土が生んだ新しい民芸品ですから。

――そうでしょうね。木内さん、北国の文化を語るためユーカラ織誕生の背景などをちょっとお話し願えませんか。

**木内** 最初は何を織物の目標にするか悩みました。しかし結局、ふるさとの自然をテーマにするしか方法がないと思い立ったのです。染色の工芸技術の面で、京都や各地の織元にご指導を仰いだのですが、終始、異端者として批判を受けました。本州の織物には何百年の伝統があって、それを壊されたくない、ということでしょうけれど、それを模倣していたのでは、北海道の個性を生み出すことはできません。流氷やオホーツクをテーマに、油絵と同じような色あいの織物を作ろうという目標が、このごろやっと北国の民芸として定着させていただくまでになりました。

## 市民レベルの議論が大事

**木内** おっしゃるとおりだと思います。環境会議は人間の会議であって、ものの会議ではない。力を誇示したり、目新しさを競う場であってはいけないと思います。同じような寒さの中で育った文化でも、起源や歴史がまるで違うのだから、お互いに独創性があります。それを知りたい、学びたいという意味は、だれにでもありますから、そこからスタートすればいい。

**田上** 今度の会議は相当ハイクラスの人たちの会議で、しかも行政色がかなり強いと思うが、参加国と迎える北海道はすべてをさらけ出してほしい。経済的にもベールをぬいで密度の濃い交流になるよう配慮すべきだ。市民の北方圏諸国に対する理解が会議をどう盛り上げるかですね。会議の内と外で市民を含めて血の通ったディスカッションが行われたら素晴らしい。生活環境展にしても、ただアイヌとエスキモーから文化を語るのではなく、それぞれ原点にさかのぼって広く紹介してほしい。

――北海道側が誇っていいものもあるでしょう。各州の知事さんたちが感心して帰るような――。

**伊藤** それはもう、大いにあるでしょう。例えば、木内さんのユーカラ織。北海道の風土が生んだ新しい

# 地球上に残された唯一の神仙境

## 私の一番好きなアラスカ

日本自然保護協会評議員
東　良三

私は事情あって前半生の大部分を海外で過ごしたが、元来、山が好きで冒険心から未開地を求め歩き、そのころあまり一般に知られていない原始自然境を探るチャンスに恵まれた。よく「探検したところで、どこが一番好きですか」と聞かれるという、柄にもない光栄に浴したものである。

それほどアラスカの事情が日本に知られていなかったものであるが、近年事情が急変、アンカレジ市からほど遠くないアリエスカ山のスキー場へ毎年一万人に近い日本のスキーヤーが繰り出すという騒ぎ。それに魚類の宝庫という掛声に魅せられた釣りマニアがアラスカにまで遠征、サーモンやツラウトが手軽にとれる海や川をあさっているし、マッキンレー、ローガン、ランゲルなどの名だたる氷河山岳の踏破を志す登山隊が相次いでいる。早稲田、明治、北海道、名古屋、その他の大学に「アラスカ研究会」が結成されて、盛んにアラスカ調査団を派遣している。

一方、世界各国に「エコノミック・アニマル」の名をとどろかせている、わが国事業界のアラスカ進出は目ざましい。いち早くアラスカ南部の原始林に着目して、パルプ材生産に躍起となっているアラスカ・パルプ社を筆頭に、無限と思われている水陸両面の資源を掘り当てんと、現在アンカレジ市その他アラスカ各地に事務所を持つ日本商社はおよそ三十にものぼる。そのため四年前から日本外務省は、アンカレジに領事館を設けたほどだ。

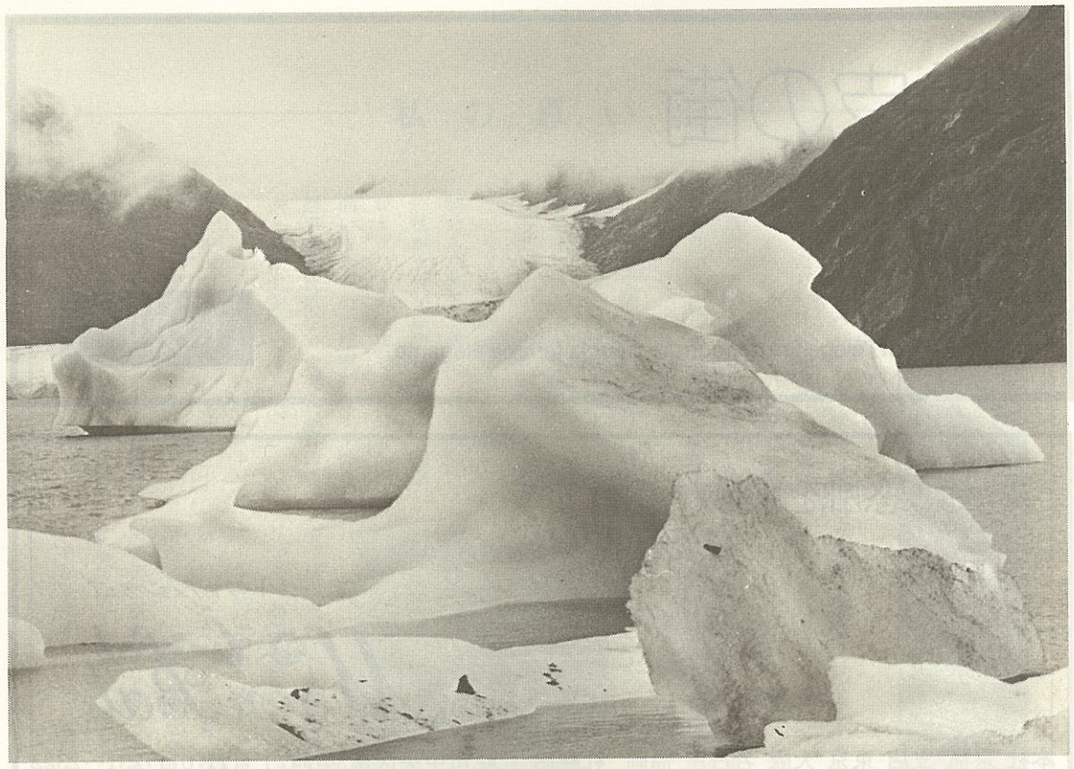
それのみか先年、北氷洋面プルドウ湾で発見された大油田もキナイ半島から湧(ゆう)出する天然ガスもともに、わが国民生活に欠かすことの出来ないエネルギー資源として注目されている。このように、いまでは日本とアラスカとは、切っても切れない「隣組」の間柄になった。ずいぶん変わったものだ。ことに四通八達しているアラスカの立派なハイウエーにしても、一九四三年（昭和十八年）日本軍によるアッツ、キスカ両島の占領に刺激され、アメリカはカナダとの協力で、日本軍の襲撃に備える軍用輸送路として急ぎ完工したという、日米戦争が生んだ遺物であるとは皮肉な話ではあるまいか。




**東　良三**　和歌山県出身。北米ピューゼット・サウンド・カレッジ卒。戦前から探検家として知られ、世界の秘境に足跡を残している。現在、国立公園協会理事、日本鳥類保護連盟評議員、日本カナダ協会理事などを務めている。著書は「北米大陸の探検時代」「アラスカの自然と人と資源」「カナダの山岳と国立公園」「ローマへの道、聖地巡礼の旅」など二十数冊に及ぶ。八十五歳。







息上高山を（一）アすか保だるいがさけく

## 豊かな自然が未来を約束

しかしながら、いかに激しく動く時代の波濤（とう）の浸食を受けようとも、アラスカが依然「残された秘境」であることには変わりがない。一九一七年（大正六年）いち早く国立公園に指定されている巨峰マッキンレー山とて、いまだに幽寂無垢（く）な原始の姿を保っているし、遠からず世界を驚かすに足る大自然公園として登場するはずの氷河の乱舞場グレーシア・ベイ（氷河湾）、一九二一年（大正十年）猛烈な地熱の大爆発を起こして、雄大きわまりない火山式大観を造成したカトマイ火山高原の周辺、さらにベーリング海上に浮かぶ世界最大のアザラシ生息地、プリビロフ諸島、南方アラスカ湾に沿って延々と荒れ狂う大氷圏の凄（せい）涼たる光景。どれ一つとってみても、世界に例のない原始景観であり、地球上に取り残されている唯一の神仙境と言っても過言ではない。

アラスカは一九五九年（昭和三十四年）合衆国の第四十九州に昇格したばかりの、輝かしい未来を約束された青年大陸である。北極地という特異な環境にあるアラスカは、恵まれた天与の驚異的原始境を、いつの世までも栄光の遺産として保ってゆくであろう。実にうらやましい限りだ。

**（写真はアラスカの氷河）**

## 私の思い出

# 雄大で魅力あふれるカナダ



日銀政策委員
島本　融氏

大蔵省の役人のころ（昭和十六年）ドイツのベルリン大使館に勤めていたり、比較的海外の各地は知っていたつもりだが、四十五年十月にカナダを訪れた印象はいまも鮮明である。忘れ得ぬ思い出の地となった。

広大な大地に緑があふれ、自由で明るい伸び伸びした風土。ドイツのあとスイスにも住み、いいところだと思ったが、スケールが違う。カナダの方がはるかに雄大で魅力あふれる土地だ。

私がカナダを訪れたのは、国際ロータリーの仕事でアメリカへ出向いたついでに懸案のカナダの金融事情を視察、カナダ金融界の要人と懇談するためだった。

アメリカのシカゴからモントリオールへ向かったが、ちょうど十月、カエデの満開のころだった。自動車の窓から次から次へと繰り広がる紅葉のながめに、さすがにカエデを国花にしている国だと見とれたものだ。

モントリオールはケベック州の労働長官が殺された騒ぎの真っ盛中。着いた日は、その葬儀の翌日だった。葬儀の行われたモントリオール銀行の前、ノートルダム寺院へ行ったが、マチはまったく平常と変わらず、日本で見なれた学生のデモ風景などを思うとき、信じられぬくらいの静けさだった。

モントリオールから首都・オタワへ向かったが、人口三十万人、緑あふれる落ち着いたマチ。シックなたたずまいの首都の印象だった。オタワからトロントへ。カナダ経済の中心地だけに活気に満ちていた。

しかし、カナダは国土の広さや資源の豊かさに比べ人口が少ないため、国内の消費市場が狭く、地場資本の蓄積が進まず、隣接の大国・アメリカの経済支配を受けやすい体質にある。特に直接投資による経済進出はカナダ企業の主権を侵し、大きな悩みでもあり、トロントでの話も、この種の話が多かった。

トロントのあとレースブリッジを訪れた。銀行の人とばかりの話から一転して農業を見ようということだったが、この地区は戦時中、西海岸から強制移住させられた日本人が多いということで選ばれた。

有名なバンフ国立公園に近いカルガリーから十人乗りくらいの小さな飛行機で四、五十分ぐらい飛んだ。飛行場に着いてみると日本語をしゃべっている人もおり、市内には日カ友好ガーデンという日本式の立派な庭園もあった。

テレビ、新聞のインタビューもあり、大変歓迎されたが、私は「旅行は都会や観光地だけを見ていたのではダメだと聞いている。バンフを選ぶ代わりにここへ来た」と言ったら感激された。このあとバンクーバーに行ったが、この街はほんとうに素晴らしいマチだ。家庭生活を営むのに世界でも珍しく条件の整ったところだという人がいたが、私も同感だった。（談）





毛皮の街

Rotiny, C'est l'élégance de fourrure pour la femme élégante ·····

ROtiny.

毛皮は感触を楽しむ宝石です

アクセント・ファッションウェア
ムーンバット
Moon Bat

本社 京都 支店 東京 大阪 名古屋 福岡 札幌店 札幌市中央区南3条西7丁目☎(011)231－2322

創立以来50余年……
中越グループの中核として
印刷・製紙・建材等18工場の
全国規模に発展致しました。
情報産業の担い手として、
需要増・高級化する印刷部門
に活躍を続けています。

株式会社 チューエツ

札幌工場　札幌市西区八軒453　☎(011)631－3471(代)
本　社　富山県砺波市新富町5－43　☎(07633)2－2033(代)
東京本社　東京都中央区銀座2－10－6　☎(03)541－1521(代)

# ラップランドの旅

北海学園大学学長
**高倉新一郎**






## 民族衣装で美しい歌を…

朝早く出発せねばならなかった。スカンジナビア半島の北端に近い、もう少しで北緯七〇度になろうとするアルタは、夏至を迎えて白夜だった。午後十一時を過ぎても薄暗いのである。その中で、私は明日のスケジュールを決めるのに大汗をかいていた。

「北欧に行くのならアルタに飛んで、それからラップ族の中心であるカウトキーノに行ってごらん。アイヌを知っているあなたにはきっと役に立つから…」といわれて、その気になったものの、旅行日程が他動的であったため、確実にアルタに行けると決まったのがオスロに着く前日。おそく着いてその翌日、オスロ大学のこの道の専門家ネス・ハイム教授との連絡はおろか、十分に準備もすることさえできなかった。しかも飛行機の都合で、アルタ滞在は丸一日しかないのである。

「夜の十一時になったらフロントで相談しましょう」という支配人の言葉に力を得て、その時間に行ってみると若い男がいる。そのショーと役に立つから…」といわれて、その気になったものの、旅行日程が他動的であったため、確実にアルタに行けると決まったのがオスロに着く前日。おそく着いてその翌日、オスロ大学のこの道の専門家ネス・ハイム教授との連絡はおろか、十分に準備もすることさえできなかった。しかも飛行機の都合で、アルタ滞在は丸一日しかないのである。

「夜の十一時になったらフロントで相談しましょう」という支配人の言葉に力を得て、その時間に行ってみると若い男がいる。そのショーを語ると「ラップ人のショーは見せるが、カウトキーノに行くのはとても無理だ」という。そのはとても無理だ」という。そのれは承知して「どこかラップ人の住んでいる村に案内してくれ」というと「駄目だ」という。「なぜ」と聞くと、「今は夏で、部落こぞってトナカイを追って山に上っていて、老人や子供ばかりしかいないから、行っても無駄だ」という。「いや、住んでいる所を見さえすればそれでいいのだから」というと憤然として、「断る」という。「なぜだ」と聞くと、「私はラップ人でポンゴーというものだ。私はラップ協会の書記をしている」という。どうもショーならば見せてもいいが、実態にはふれさせたくないと考えているように察せられた。そこで私は「私は日本の少数民族アイヌの研究をしているものだ。アイヌとラップとは種々の共通問題を持っていると承知している。だからその生活環境だけでも見たいのだ」と、私の乏しい英語の知識の限りを尽くして説いた。「ショーを見せてもらった後、車をやとってくれ、そしてラップの部落につれて行ってくれさえすればいい」とノートの片に書きつけた。すると支配人がこれを見て「あすは引き受けた。カウトキーノまでは無理だが、別の居住地に案内しよう」と引き受けてくれた。夜中の十二時をとっくに回っていた。

安心して翌朝約束の十時にフロントに行くと、ポンゴー君はちょっと姿を見せたきりどこかへ行ってしまった。美しく着飾ったラッ






アルタ市郊外のラップの人たち

プ人の親子づれが来て長いことロビーをうろついていたが、それも去ってしまった。かんじんのポンゴー君は姿を消したきりである。

十一時半、もう駄目かと思った時、現れて「さあ行こう」という。表には僅か五人の一行に対して大型バスが一台やって来た。乗り込んで出発すると町はずれで「ちょっと待ってくれ」といって降りて行ったかと思うと、美しいラップの装束を着けて現れ、それからあとはとても我々には理解出来ない英語ではあったが、バスガイドのように立板に水、とうとうと語り出し、その合間に美しい聲でラップの歌を歌ってくれ、荒れ果てた石ばかりが低い高山植物の中にゴロゴロしていて木一本ない斜面に小さな家を建て、時には道路沿いに遊牧に使う天幕を張り、ラップ固有の服装をした老人がトナカイの角を飾った棚に、細工ものをぶら下げて売っている居住地に案内してくれた。そしてラップ人が生命とする特有のコーヒーを飲ませようと奔走してくれた。

私はこの豹変したポンゴー君の態度に ア然とした。

## 日本語でバンザイ、カンパイ

案内を終わってホテルに帰ると、ポンゴー君は上きげんで、かつて日本の若者から教わったという日本語の「バンザイ」と「カンパイ」を披露し、私には地図を前にしてラップ人の現状、きょうの行程等を語った後、「これで一晩一睡もしなかった。これから帰って寝るから失礼」といって帰っていった。

これで私どものラップ訪問の旅は終わった。ポンゴー君は師範学校出でアルタ唯一のラップ人の一家の人らしい。色白く、亜麻毛で、ノルウェー青年と見たところちっとも変わっていなかった。家も立派で、窓からたくさんの書物が見られた。ホテルにアルバイトしているのではないかと考えた。

ラップ人はラップとは呼んではいけないので、サーミと呼ぶべきなのだそうである。



雪印®
カラートタン
亜鉛鉄板

雪印カラーサイデイング・雪印PCバー（異形PC鋼棒）・軽鋼梁
ＨＫ熔接金網・軽量形鋼・鉄線・異形鉄線・くぎ・針金

北海鋼機株式会社

代表取締役社長 佐藤健二
本　社　札幌市中央区北1条西2丁目（経済センター）　電話231-5641番(代)
工　場　江別市上江別441番地　電話2-3361番(代)
東京営業所　東京都千代田区大手町2丁目6-2（日本ビル）　電話270-3926番(代)



## 私の思い出

# 北・東欧の自然と生活—みたまま



北方文芸代表
澤田誠一氏

森と湖の国とよばれるフィンランドの首都ヘルシンキ郊外にタピオラという新しい街がつくられている。田園都市ともよばれているが、ここの美しさは無類である。日本のどの街をひきあいに出して説明すれば分ってもらえるかうまく見当がつかないが、たとえば堀辰雄などの住んでいた軽井沢あたりの別荘風景を思いうかべてくれるとそれに近いのではないだろうが。—私はその軽井沢というのは写真でしかしらないからまちがっているかもしれない、が、まあ—。白樺や落葉松の林のなかに白亜の家が見えがくれに建っていて、真駒内や大麻の団地などのように建物がむき出しになっていない。白樺のことを〝欺きの乙女〟などとよぶらしいが、その柳のように枝をたらした白樺の林のなかに二階、あるいは三階、あるいは高層の心憎いほどのセンスのゆきとどいた建物が建っていて、これが都市であるということなど信ぜられないほどだ。

七ケ国の街を歩いて来て、このヘルシンキほど感覚の澄んだ美少女の多い街はない。私は七ツの森の古都とよばれるプラハも好きで、あの古寺院の鐘の音を忘れることは出来ないが、同様、この街のみずみずしい六月も忘れることは出来ない。

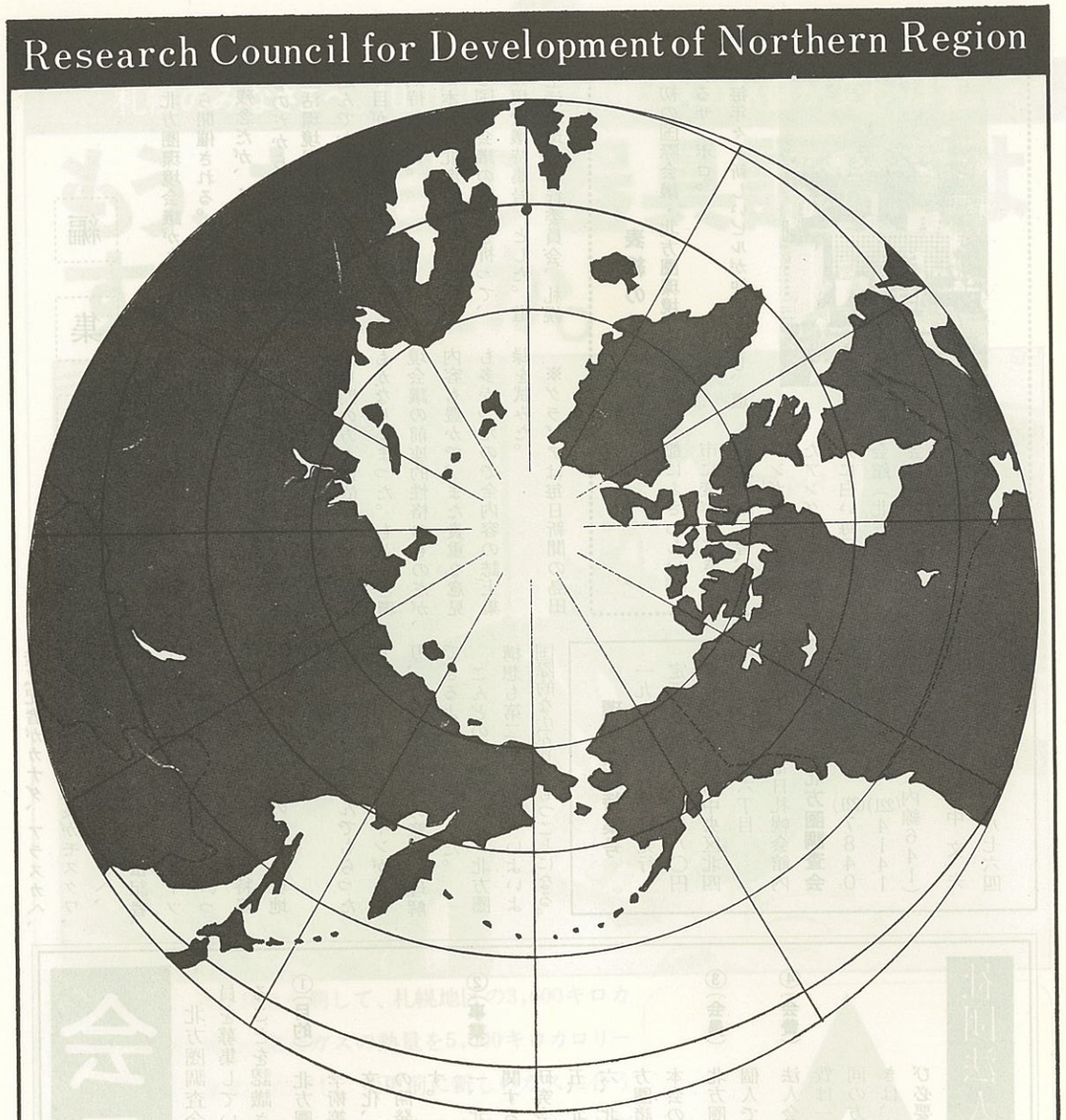
都市づくりもそうだが、北欧（東欧もふくめて）の人達の自然観は私達とはまったく別なのではないかと思う。高層建築や路も石で固めてしまったヨーロッパ諸都市を薬品を塗るかコンクリートで固めるかして腐蝕にそなえている。鹿のいる公園なら鹿にかじられぬように若木の幹には網がかけられ、小鳥の巣箱は日常のようなもの。

プラハの博物館前の小さな池に野鴨がくる。鴨はここで子鴨を育て、やがて行列をつくって公園の芝生を通り道を横切って向うへ渡っていったそうだが、そのとき交通巡査がでてこの鴨の行列を整理した話など童話のように美しい。だから森のなかのリスがみしらぬ私達の肩にまでかけ上ってくる公園がある。（ヘルシンキ・セウラサーリー）

そしてまた一方の公園では長い冬から夏を迎えた男女が、芝生の緑が桃色にみえるほど裸になって陽なたぼっこをしている。それこれ思ってみれば、自然なり公園なりというものの概念というか思想が、根本的なところで私達とは違うのではないかと思った。生皮をはぐようにして列島の緑をブルドーザーではぎとっている日本人とは何なのか。悲しく絶望的にあわれに見える。

子供の頃からみて来て、そこに科学の発達とからめて人工の強さを感じ、わび、さびをふくめて自然主義めいたものが東洋の私達の体質ではなかったか、などと思っていたのだが、どうもそれはみごとに外れたようである。日本人の自然観は自然への甘ったれか、埋没でしかないようである。自然と人間が同時に主体性をもってかかわりあって生きることなど、テンでしらなかったようである。日本でざらにみる風に裂かれて白い木肌をさらした木、折られたままの枯枝をぼろきれのように下げている木などここには見たくともない。

Research Council for Development of Northern Region



北方圏諸地域の総合リサーチ・センター

社団法人 北方圏調査会

会長 堂垣内 尚弘

札幌市中央区北4条西6丁目毎日札幌会館
〒060 TEL(011)221−4141(内641)

Research Council for Development of Northern Region



## 私の思い出

# 森と湖の国〝北欧〟

万国博のスカンジナビア・パビリオンを札幌郊外に誘致したのは同じ北国の先進国の文化や生活を北海道の若者にわかってもらい、強い郷土意識を持ってもらおうと思ったからです。しかし、私は飛行機ぎらいだったため、外国へは一歩も出たことがなかった。

十三年前、乗った飛行機が故障で落ちそうになったときの恐怖が、いつまでたってもさめなかったためで、東京に行くのも列車でした。この間、外国から五回も招待がありましたのに、いまから思うと残念でした。

しかし、多忙なため、そうもいっていられず、おそるおそる飛行機に乗る練習をやり、昨年秋、松坂財団の北方圏旅行の団長として北欧をひとめぐりしました。まさに「案ずるより生むがやすし」で快適な旅でした。

スカンジナビア諸国へは英―仏―西独のルートでスウェーデンのストックホルムに入りました。盛大な歓迎を受けましたが、なかでも元首相のデボ・アオラ氏との晩さん会は楽しい思い出となりました。高齢（八十五歳）の同氏は日本のことはよく知っており、私が一行四十一人を連れてやってきたことに「国をあげても出来ないことをあなた一人がやっている」と大いにほめてくれ、面目をほどこしました。その長老が「あなたは牛を何頭売ってやってきたのか」と問われたのには思わずキョトンとしていたら、私が松坂というから松阪牛とをひっかけたウイットだったのを知って大笑いでした。



フィンランド名誉領事
ユー・アンド・アイ・マツザカ社長
松坂有祐氏

サボライネンという日本・フィンランド会の会長とも親しく懇談しました。牧師さんの息子さんとして四十年以上も前に札幌と旭川で生活したことのある同氏は大の日本、北海道びいき。フィンランドを訪れる日本人はよく世話になっているようです。久しぶりに北海道の話や四十年前の昔話に花が咲きました。

デンマークでは、かつて私のスカンジナビア館に勤めていたコンパニオンとも会い、旧交を温めましたが、口をそろえて「北海道はよかった。日本人との付合いは忘れることは出来ない」と懐かしんでいました。

いたるところで北欧諸国と日本、北海道の距離が縮まっていることを痛感した。この貴重な芽を今後とも大事に育てるべきだし、特にこれから日本を背負う若者たちが、どんどんこれらの国を訪れ交流を深めるべきであることを痛感した。（談）

# 編集後記

※北方圏環境会議が九月十七日から開催される。ソ連の不参加は残念だが、それぞれ事情があるのだからやむをえまい。生活環境展の方も準備が順調に進んでおり、これを機会に道民の目が北方圏に志向することを期待したい。

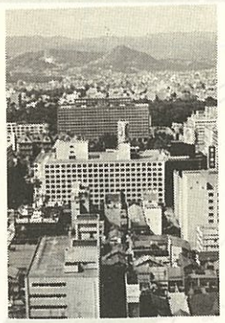
※本号は北海道で初めて開かれる国際会議の成功を祈って、「環境会議特集号」とした。道と生活環境展実行委員会、札幌市、函館市、帯広市と北方圏調査会が主催して開いた「北方圏を考えるシンポジウム」は、この種のものとしては初めての試みであった。講師も道内外の一流専門の方々に依頼し、来聴者もかなり集まった。もともと環境会議の前座的性格のものだが、内容も豊かで、また貴重な意見も多かったので全内容の誌上集録を試みた。

※グラビアは毎日新聞の島田康弘記者がカナダ、アラスカへ、本会の横川寛二次長がモスクワ、レニングラード、ミンスクへ、そして毎日新聞の金子秀松記者、佐藤正カメラマンが、オホーツク海のオットセイの取材にいったのを機会にそれぞれ写真特集した。いずれも生の新しい現地報告である。

※この号だけ読んでもらったら北方圏のアウトラインがわかり、環境会議開催の意義が理解できるようにと編集した。

こんどの会議を境に、北方圏構想も第二期を迎え、いよいよ国際的な広がりをもつことになる。

## 表紙のせつめい



初の国際会議・北方圏環境会議が開かれるサッポロ。

毎年々々新しいビルが仲間入りし、道都にふさわしい都市に変容してきた。

道庁新庁舎、赤レンガを中心としたアングルで、左方に白い毎日札幌会館（北方圏調査会）が見えるが緑の少ないのが気にかかる。


**環境会議特集号**

一九七四年九月十日発行
定価五〇〇円　送料八〇円
発行所　札幌市中央区北四条西六丁目
毎日札幌会館内
**社団法人・北方圏調査会**
電話　(221)7840
(221)4141
(内線641)
編集発行人　山中文夫
振替口座　小樽一八七六四


# 会員募集

## 社団法人・北方圏調査会

北方圏調査会（会長・堂垣内尚弘道知事）は広く会員を募集しています。七〇年代は〝北方圏時代〟であることを認識されている方の入会を希望しています。

**①（目的）** 北方圏調査会は、北方圏諸地域との経済、文化、学術等の交流を積極的に推進し、日本の経済、文化、学術の振興に寄与するとともに、北海道の開発、繁栄に貢献することを目的としています。

**②（事業）** 一、北方圏に関する調査、研究　二、北方圏に関する研究の奨励　三、北方圏に関する講演会研究会の開催　四、北方圏に関する資料の整備　五、北方圏に関する図書、雑誌その他の刊行　六、北方圏に関する意見の交換、具申　七、北方圏諸国への視察団の派遣、交流　八、その他本会の目的達成に必要な事。

**③（会員）** 北方圏調査会の目的および事業に賛同する法人、個人で組織しています。

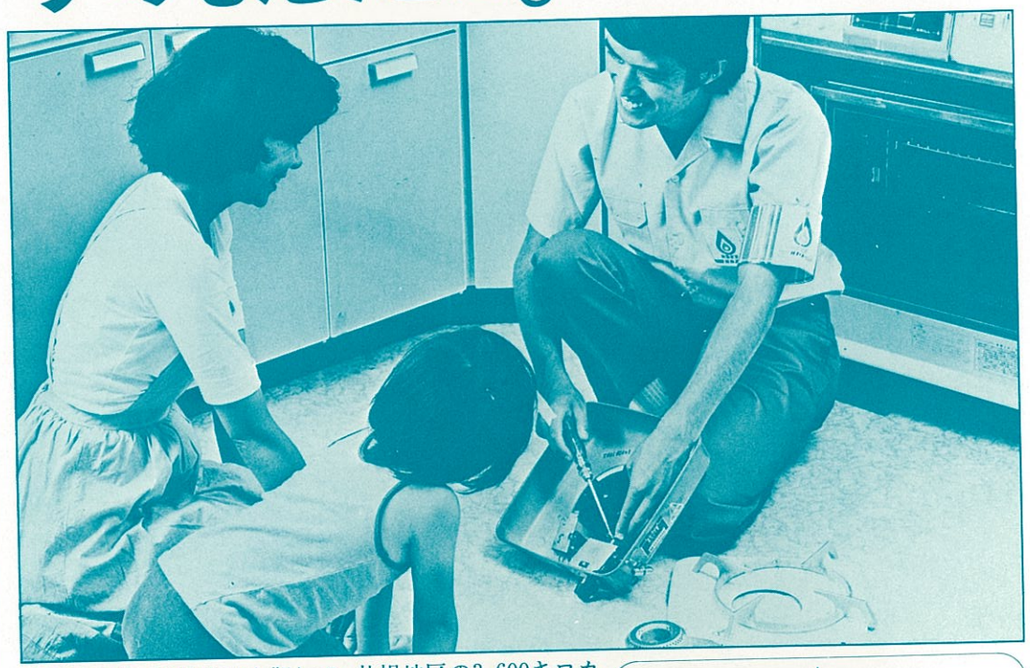
**④（会費）** 法人会費は年会費二口以上（一口一万円）個人会費は一口（五千円）以上です。右の趣旨にご賛同の方の入会を歓迎しております。ご希望の向きは、本会にご連絡いただければ、申込書および必要な書類をお送りいたします。




北方圏

札幌のみなさまへ。10月16日から、都市ガスの熱量が変わります。

# もう、お宅の器具調整はすみましたか。



北ガスでは、10月16日を期して、札幌地区の3,600キロカロリー供給区域の、都市ガスの熱量を5,000キロカロリーに変更いたします。ただし、変更前に新しいガスに合うよう、ガス器具を調整しなければなりません。まだお伺いしていないお宅にも、10月15日までには必ず伺いますので、よろしくご協力ください。

**お願い**

すでに器具調整にお伺いしたお宅で、万一調整漏れのガス器具がございましたら、至急ご連絡ください。調整員がすぐお伺いいたします。

北ガス
札幌市中央区北4東5
〒060 ☎231-9511

熱量変更

熱量変更についてのお問い合わせは—
☎231-9511内線279

ただいま、熱量変更謝恩サービス(器具の下取り・割引き)を実施中です！

北方圏
環境会議特集号
発行人
山中文夫
社団法人・北方圏調査会
札幌市中央区北四条西六丁目
振替口座
小樽一八七六四番
特価五百円

# くらしにいかす北国の風土

## 北方圏環境会議

開催期日＝9月17日(火)▷19日(木)
開催場所＝札幌市・主催＝北海道



**HOPPOKEN'74**

### 北海道で初めて開く国際会議です

気候や風土が似ている北方圏の国から札幌に、知事クラスの人たちが集まって「北方圏環境会議」が開かれます。この会議は、共通の生活環境について意見や情報を交換し、お互いの理解を深め、北方圏のあすをより豊かにするため、堂垣内知事が提唱して開催の運びになったもので、北海道で初めて開く国際会議なのです。

### 北方圏環境会議で話合うこと

①人間居住の環境問題について。
②自然の保護・保全問題について。
③環境と開発の調和問題について。
④環境問題に対する情報活動について。

**北海道**